
ELYSION

悠樹紫遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ELYSION

【Nコード】

N0859M

【作者名】

悠樹紫遠

【あらすじ】

壊れ逝く楽園

美しき理想郷は崩壊し
隠れた冥府が顔を出す。

壊死していく世界

抗うは死を纏いし少女。

冷徹な死に口付けて

死せる神と禁忌の誓約を交わす。

神に選ばれし者達
此れは終焉への叙事詩。

Chapter 1 - Period 1 「運命の齒車」

この世に神が居るならば、それはどんな顔をしているだろう。

―助けて―

闇の中で誰かが泣き叫んでいる。

―どうか、お願いだから・・・―
嘆きの声。

―助けて・・・―

はつきりとは聞き取れない少女の声。
誰かが泣いている。

『あなたは・・・誰・・・？』

暗闇に問いかけても答えは無い。

ただ一方的な言葉だけが
雪のように降ってくる。

―助けて・・・全てが壊れてしまう前に・・・―

『こわ・・・れ・・・る・・・？』

闇の中を白い蝶が通り過ぎる。

―私が・・・消えて亡くなってしまう前に・・・―
蝶は白から紅に染まり

黒い世界を紅く紅く染めていく

『―っ！―！』

悪寒さえ覚える>狂気<

―ソレガ ネガイナラバ カナエマシヨウ？―

おぞましい声が響く。

「>システム〓ミストレス<、シンク口率・・・60、70・・・

89%」

カタカタとキーボードを打つ音が室内に響く

「システムオールグリーン、いつでも>最終試験<開始できます、リヴァイル女史」

少女に名前を呼ばれ

部屋の奥でだるそうに壁に凭れていた女は顔を上げる。

深い緑色の長い髪が揺れ、眼鏡の奥の青く鋭い瞳が

>狂気<にも似た光を宿す。

室内に設置された幾つものモニターに映るのは一人の少女。

栗色の長い髪に新緑の瞳を持つ美しい少女は

容姿に不似合いな漆黒の大鎌を携えている。

「>リーマ<、準備はできているのだろうか？」

女の言葉に、モニターの先の少女がカメラに視線を向ける。

『いつでも。あんたがそんなこと聞いてくるなんて、今日が私の命日かしら』

悪態をつく少女に

女はくつくつと笑う。

「おまえはこんなところで死ぬ女ではなからう？」

なあ・・・？おまえは>神と共に亡ぶ定め<なのだから」

『言われなくても分かっているわ』

ふいつと少女は視線を逸らす。

そして大鎌を担ぎ上げた。

『御託はどうでもいいわ、私は早く>自由<になりたいの』

「・・・そうだな」

くいつと眼鏡を押しやり

女はその場に居る>部下達<に告げる

「>最終試験<を開始する、総員ぬかりはないな？」

「イエス」

その言葉と共に

モニターの先の少女の前に、血色の目をした>天使<が>檻<を破って這い出してくる。

皆一様に金色の長い髪を一つに束ね、白い服を纏い、血色の瞳をしているが

その純白の翼は羽根が落ちて無残な状態になっていた。

およそ三十体の天使に囲まれても、少女は何処吹く風だった。

『>人形<を捕らえて>実験<に利用するなんて、悪趣味よね』

天使

そう見えるが、実際には違う。

彼らは>人形<だ。

殺すために生まれ、殺されるために生まれた。

哀れな>神の玩具<。

「ソレを全て片付けろ、もうなんの役にも立たん>ゴミ共<だ」

女の言葉に、少女の眉がピクリと動く。

彼らは>敵<だ、それは分かっている。

——だが、彼らは>自分<によく似ている。

『あんたらしいわ、・・・最っ高に悪趣味』

少女は大鎌を握り直し

襲い掛かってくる人形達を切り裂く。

少女の大鎌に僅かに触れただけで、>ソレ<は灰になって消えて行く。

言われなくても

あの>悪魔<の呪縛から、今、彼らを解放しよう。

幾重にもロックされた十数の分厚い鋼鉄の扉を越え

血まみれの少女はその部屋に現れた。

栗色の髪も、雪のように白く美しい肌も

今は>返り血<に染まっている。

「よくやった、リーマ。やはりおまえは私が>創った<中で>最高傑作<だ」

この>悪魔<は

自分を>人間<として見ていない。

「あんたの褒め言葉なんて嬉しく無いわ」

「フン、嫌われたものだな」

実際、もう>人間<ではないのかもしれない。

「シャワー浴びたい、部屋に戻るわ」

「ああ、好きにしろ、後で呼ぶ」

——自分は、>人形<と大差ない。

赤い水が排水溝に吸い込まれて行く。

水の滴る栗色の髪を掻き揚げて、少女は鏡を見た。

そこに映る姿は人間と同じだ

流れる血の色も人間と同じ

でも、もう自分は>人間<ではない。

事は十二年前に遡る。

父でありリヴァールヴェール国王であったクロヴィスⅡエルスレッドの>失踪<。

母であり女王であるリイリアⅡエルスレッドは城の奥に幽閉された。それも、全ては>世界<が>危機<を迎えていたからに他ならない。

数十年前、至高神エルが狂気に触れ

世界は>一度目の危機<を迎えた。

それを救ったのが>五英雄<と呼ばれる五人の王族。

リイリアⅡエルスレッド

クロヴィスⅡアースランド

シエルドⅡアーク

メルヴィングⅡロートフォード

フェイルⅡアースランド

うち二人は、リーマの両親

リイリアとクロヴィス。

彼らは一時的にエルを>封印<することに成功した。

エルは一時的に正気を取り戻し

世界は束の間の平穏を迎える。

だが、それもリーマが齡4つになる頃に崩れる。

エルを縛っていた>封印<は解け

再び>人形達<が空から舞い降りるようになった。

少女は鏡に手をついて

新緑の瞳を睨みつける。

大好きだった優しい母の眼差しとは似ても似つかない

憎悪と殺意に染まった鋭い瞳。

過去に刻まれた歴史ほど、人形達の被害は酷くない。

今は、人形に対抗できる>強化人間<が居る。

>死神<と呼ばれる国の守護神と契約していた父のデータから

あの悪魔が生み出した>対人形兵器<。

少女は瞳を閉じて

すでに透明になった水を見下ろして水を止める。

民を守るためには>彼ら<が必要だ。

だがリーマは>彼ら<が好きではない。

孤児院から拾ってきた>被験体<に

>死神のデータ<を埋め込むことで生成される強化人間。

失敗すれば狂気に触れて暴走し、射殺される。

——そしてリーマは、>それ<を>超える存在<

齡4つの時、リーマは人生で>最も重い決断<を迫られた。
臣下達が見守る中、あの悪魔が幼い少女の前に現れたのだ。
悪魔は言った

『父と母、そして国を救いたければ、私と共に来い』

と。

少女に拒否権は無かった。

少女が口を開く前に、臣下達が少女を悪魔に>売った<のだ。
そして連れてこられたのが、>ここ<、だった。

花の都リヴァールヴェールの外れにある、>研究所<。

ここでは日々、>人体実験<が繰り返されている。

そこからの日々は、>地獄<のようだった。

幾度も>実験<と>手術<を繰り返し

気が触れるような日々を送り

——リーマは>死神ミストレス<との契約に成功する

人は>ソレ<を契約者、「異形」を意味する>ヴァリアント<と呼ぶ。

リーマは、>父と同じ<契約者になったのだ。

『リーマ』

ふと、少女の顔の前に黒いドレスに漆黒の長い髪、赤い瞳の
掌サイズのマスコットのような女が現れる。

そう、>コレ<が、死神ミストレス。

『湯冷めをしますわよ？契約者とはいえ元は人間なのですから、風邪をひきますわ』

「分かつてる」

彼女の本来の姿は妖艶な美女だ。

こんな>チンチクリン<ではない。

だが、人間の身に憑依した状態で本来の姿に戻るのは多大な負荷がお互いにかかるため、滅多なことでは元の姿に戻らない。

「はあ・・・」

溜息を吐きながらバスタオルで髪を拭きながらシャワー室のドアを開けると

「あ」

「・・・」

なぜか、よく>見知った男<が部屋に居た。

しかし少女は一糸纏わぬ姿で・・・

「は、ははははは・・・ノックはしたよ？」

金色の髪に水色の瞳を持つ青年は

乾いた笑みを浮かべながら弁解を述べる。

「ノックをしても>返事<がなけりゃ入っていいことにはなんないのよ!!」

「っだ!!」

見られたからといって別に減るものではないが・・・

手早くバスタオルを体に巻くと、少女は青年の顔面に鉄拳制裁を加えた。

「悪かったよりーマ、でも君の場合返事が無いってことは・・・」

「言い訳しないで、>幼馴染<だからって部屋に勝手に入ってこないで!!」

彼はクロス・アーク、双子の兄が居る。

五英雄の一人、シエルド・アークの息子だ。
尤も、本当に彼の実子かどうかは疑わしい

シエルドは結婚していないし、彼の人の目は青いが

クロスは水色、そしてその兄の目は紫紺。

共通点は金髪ということしかない。

>彼らくもまた、リーマと同じ>契約者<だ。

幼い頃、ここに連れてこられてすぐに出逢った。

だが、彼らは少し特殊で

>システム＝ロスト<という>実体の無いシステム<だ。

どうやら死神ではなく>力のある天使<から作り出したシステムの
ようだが

能力はリーマに勝るとも劣らない。

「いつつー・・・まあ、殴られるだけの価値はあったかな」

「・・・あんたってやつは、一度死なないと直らないみたいね」

顔をさすりながらも笑顔の幼馴染に

少女はギリギリと拳を握る。

だが、この幼馴染と口でやり合っても無駄だということはよく分か
っている。

盛大に溜息をついて

リーマは冷蔵庫からペットボトルを取り出してコップに水を注ぐ。

「で？私に何の用？」

一口啜れば

冷たい水が火照った体に染み込む。

「君が>最終試験<を終えたって聞いたから」

「だから？」

コップの水をいっきに飲み干して、テーブルに置く。

そして、爽やかな笑顔の幼馴染が告げた言葉を聞くなり
少女は部屋を飛び出した。

「リヴァイル！！！！」

自動ドアを蹴破らんばかりの勢いで飛び込んできた少女に
コーヒーを啜りながら資料を読んでいた女は
顔も上げずに生返事を返す

「なんだリーマ、騒々しい」

「どうということよ！私は＞自由＜になるんじゃないの！？」
そこでようやく女は顔を上げた。

「おまえ、一応女だろう。バスタオル一枚でこまできたのか？」

「んなこたあどうでもいいのよ！！死にやしないわ！！」

それよりクロスとクロノスが＞お目付け役＜ってどういうこと！？」

少女の言葉に、女は皮肉げな笑みを浮かべる。

「私は＞ここから出してやる＜としか言っていない。

その先までは言及していないはずだ。

それに＞十二年ここで育ったくおまえがいきなり外の世界に出て
本気で一人でやっていけるなどと思っているのか？」

「ーっっ、あんたの言葉を真に受けた私がバカだったわ」

パンツと机に両手をつけて

少女は盛大な溜息を吐く。

「おまえはエルを破壊するための大切な＞最終破壊兵器＜
別の言い方をすれば＞人類の希望＜とでも言ってやろう。
エルのもとまで辿り付けなければ話にならないだろう？」

「別の言い方なんてしないでいいわ、反吐が出る」

くるりと身を翻して

少女は扉に手をかける。

「さっさと着替えて来い、私は>作品<の肌を見せびらかすのは趣味じゃない」

背にかかった言葉に

少女は奥歯を噛み締めて、部屋を後にする。

——本当は、世界なんてどうでもいい。

国だってどうでもいい。

所詮王女だなんだと言っても、臣下も国民も自分を>ここ<に売り飛ばしたのだ。

>兵器<にされると知っていて。

それでもリーマが戦うのは、もう>帰る場所<も>後戻り<もできないから。

最早リーマは人間ではない、>死神<だ。

待つ人も迎える人も居場所もないなら、いつそ>世界のために死ぬ<なんて、>綺麗な散り方<をしようと思った。

それに、>神<を憎んでいたのもある。

自分にこんな運命を架した神を。

母と父を奪い、人間という肉体さえ奪った、神を

この手で、殺せるなら——

>ミストレス<の被験者は、リーマが現れるまでに600人の死者を出したという。

死神は適合>シンクロ<できなければ狂気に触れて>化け物<になる。

その中で、>唯一の適合者<が

>リーマ＝エルスレッド<

死神の中でも最も気難しいとされるミストレスが選んだ>宿主<。
これで、>システム＝ナイトメア<を除く全ての>契約者<が揃っ
たとされている。

ナイトメアはリーマの父、クロヴィスが所有していたが
彼が行方不明になると共に、所在は闇に消えた。

母のことはよく覚えているのだが

父のことはなぜか全くと言っていいほど覚えていない。

その容姿さえ思い出せない。

（あの女が、記憶をいじったのかもしれないけど・・・）

部屋の自動ドアをくぐり

少女は椅子にかけてあった衣服を手取る。

いくら幼かったと言っても

少なくとも時間を共に過ごした父の顔も覚えていないのは不自然だ。
顔の造形や声こそ忘れても

髪が何色だったとか瞳が何色だったくらい覚えていていいだろう。

それさえ覚えていないのは明らかに>不自然<だ。

黒を基調にした服に着替えて

少女は長い髪を腕で払う。

母と同じ栗色の髪。

瞳も母と同じ新緑。

なのに、顔はこうも違ってしまふ。

母は優しい眼差しと温かな笑顔を持った人だった

なのに――

鏡に映る己の顔を見て

母なら絶対に浮かべないだろう嘲笑を浮かべる。

もう、戻れない。

どこにも。

帰る場所も無い。

待つ人も居ない。

もしかしたら、母はまだ自分を待っていてくれるかもしれない
でも

こんな自分を、母には見てほしく無い。

（だって・・・もしも今の私を見て、母様が幻滅したら・・・嫌だ
もの）

そうしたら、本当にリーマには誰も居なくなってしまうから。

無邪気で、愛らしくて、人間だった自分だけを、思い出の中に残して
いてほしい。

血塗れた>リーマ=エルスレッド<は

>神と共に<歴史の中に消えて逝くから。

ぎゅ、と拳を握って瞳を閉じたとき

不意にインターホンが鳴った。

「誰？」

扉の横にある画面に映るのは

先程部屋に不法侵入していた幼馴染。

『リヴァイル女史が>お呼びくだよ』

「・・・分かったわ」

皮肉げに言う青年に、少女は短く返答を返す。

彼も、あの女のことを良く思っていない。

当然だろう、クロスもまた人体実験を繰り返されてきた>作品くな
のだから。

部屋のドアを開けると

画面に映っていた青年が壁に凭れて待っていた。

「本当にいつてくるのね」

「>命令くじゃなくても俺は君から離れないけどね、心配すぎて」

「何よそれ、まるで私が年がら年中あなたに迷惑かけてるみたいじゃない」

「当たらずも遠からず、かな」

不満げに言う少女に、青年は苦笑する。

「・・・ねえ」

青年を追い越して先を歩いていた少女は

ふと立ち止まると、振り返って幼馴染と視線を合わせた。

「本当に、いいの？私・・・>死に行くのよ？」

「君が居なくなるなら、俺も死んで構わないから」

苦笑いでそう言つて、クロスはリーマの隣まで歩みを進める。

「・・・バカみたい」

そう言いながらも、少女の頬は少し赤かった。

彼が自分にずっと昔から好意を向けてくれているのは知っている。だが、自分が彼を異性として好きかと聞かれたら、分からない。そもそも、そんな感情>知らないく。

だから、いつも曖昧に誤魔化す。

・・・今日も。

歩調を速めて再び青年を追い越した。

彼がなぜ自分に好意を寄せてくれたのかは分からない。

・・・理由を聞いたことも無いが。

でも、ここに来たばかりの頃は、ほとんど一緒に居た気がする。

泣いてばかりのリーマの傍に、いつも居てくれた。

同じ歳のくせに、無駄に大人だったと思う。

リーマが齡14の時、ミストレスとの契約に成功し

実験漬けの日々になるまでは、よく一緒に過ごした。

そして、自虐行為に走っては、血まみれで倒れているリーマをクロスはよく介抱してくれた。

だから、ノックをしても返事が無いと不安になるのだろう。

彼には傷や、壊れた物を直す>不思議な力<がある。

「君は、恐くないの？」

幼馴染の言葉に、歩みが止まる。

彼は先程の場所から一步も動いていない。

何が、とは、言わずもがな分かっている。

「死んだほうがマシ」

振り返って

強気な笑顔でそう返す。

残酷な、>本音<。

本当に、そう思っている。

その言葉に、クロスはまた苦笑いを浮かべた。

「君がいいなら、俺もそれでいい」

そう言って、また少女の隣まで歩いてくる。

「>冥土の果てまで<、付き合うよ」

「ほんと、バカね、あんた」

クスクスと笑って、少女は再び歩き出す

並んで青年も少女の隣を歩く。

——このときはまだ

本当に、ずっと一緒なのだと、思っていた——

Chapter 1 - Period 1「運命の歯車」(後書き)

はじまりDEATH

Chapter 2 - Period 1 「死への旅立ち」

神殺しの宿命を背負った少女
悪魔の囁きを受け

今、死への旅路へと羽ばたく

運命は廻る

軋み、歪み、

嘆きの輪舞曲を奏でながら――

「皇国の次期後継者・・・ねえ？」

列車から窓の外を見ながら

リーマはぼそりと呟く。

「頷いてくれればいいけど、首を横に振られたらどうしようね」

それにクロスが付け加えるように言い

そして

「その時は武力行使で「奪っちゃった」「すればいいんじゃない？」

物騒なことを言う男が向かい側に一人。

金色の髪に紫紺の瞳を持つ青年。

顔の造りはクロスとそっくり。

そう、クロスの双子の兄、クロノスⅡアークだ。

クロスは黒を基調にした服を
クロノスは白を基調にした服を着ている。

「それなんか「奪っちゃった」のニュアンスが違うわ
どっちかっていうと強盗よ、強盗」

心底嫌そうな顔で言うリーマに

クロノスはにこにこ感情の読めない笑みを浮かべる。

この男はだから嫌いだ。

いつもにこにこにこにこ、どこぞの動画中毒かと思わせる。

「だってえ、言うこと聞いてくれないなら仕方ないよね？」

「一国を敵に回してどうやって至高神まで辿りつくんだこのすつと
こどっこい。

無駄に敵が増えるだけじゃないか」

弟のツツコミに、クロノスはまた演技がかった困ったような顔をす
る。

「武力行使、いいと思うけどなあ・・・

逆らう者を皆殺しにするリーマ嬢。そそられるけどなあ」

「あんた私をなんだと思ってるの？」

うつとりと気色悪い・・・以前に物騒なことを言っているクロノスに
リーマは「げっ」、と気色悪いと言わんばかりの表情で言う。

この三人で旅をすることになったのは
数刻前。

あの悪魔に命じられ

まずは一人目の契約者である皇国の次期後継者く

ソウル・ロートフォードを懐柔・・・

否、仲間に加えて来いとのことだった。

「ていっても・・・皇国の次期後継者つて言えばまだ子供じゃなか

った？」

リーマはテレビで見た記憶を頼りに二人に問いかける。

リーマの隣にクロス、そしてリーマの向かい側にクロノスが腰掛け
ている。

「まだ十二かそこらだったと思うよう、ワガママじゃなきゃいけ
ど。」

女の子のワガママは大歓迎だけど、野郎のワガママなんて殺したく
なるからね」

「やだあんた、>幼女趣味くまであったの？」

「ただでさえ悪趣味なのにそこまで行くと犯罪の領域だね」

少女と弟の会話に、クロノスの笑みが引き攣る。

「僕に一体どんな>シユミくがあると思つての会話なのかなあ？
それは？」

「日ごろの行いが悪いのよ」

リーマはまた窓の外に視線を移す。

「やだなあリーマ嬢、僕はずっと君一筋・・・ったあ!!」

急に真顔になって少女の手を取る兄の顔面に
弟の鉄拳が炸裂した。

「汚い手でリーマに触るな」

「ちょ・・・汚い手とか、酷くないクロス君、ほかあ至って真面目
だよ!？」

だいたいどうして君がリーマ嬢の隣で僕が向かい側なの、いつ決ま
ったの!？」

鼻血が出たのか、ティッシュで口許を押さえている。

「向かい側に座らせてやつてるだけありがたいと思え」

「えええええええ・・・僕ってそんな扱い？お兄ちゃんなんだよ
一応」

赤いティッシュを丸めている兄に

クロスはいつになく爽やかな笑みを浮かべた。

「うん、だから>特等席<は俺に譲ってよ、>兄さん<」

「・・・うん、僕、君のその顔、すごく嫌い」

「安心しろよ、俺もおまえのウジ虫ヅラは見てて嫌になる」

「え、ちよつと待ったそれ僕のステータスがもう嫌ってことじゃないの!？」

双子がいつもどおりの口喧嘩に入ったところで
列車は駅に到着した。

「あら、着いたみたいよ」

クロノスにしがみ付かれているクロスを素通りして
少女はさつさと列車を降りる。

地上と地下に張り巡らされた線路

今では、国と国の間を行き来するのは容易だし、速い。

唯一、闇の国レフィーリカだけは

>許可を得た者<しか入ることができないが。

全ては闇の国レフィーリカの科学技術の賜物。

皇国との戦いに終止符を打ち

国交を再開したレフィーリカの技術は世界を震撼させた。

彼らが国交を再開するに至ったのも

全てはリーマの母、リイリアがレフィーリカの第二王子だったクロ
ヴィスと

結婚したからに他ならない。

レフィーリカはリーマの祖国リヴァールヴェールに

絶対の忠誠を誓ってくれている。

皇国とは相変わらず仲違いしたままだが。

まあ、それに関しては

皇国レイファリアが一方的に敵視しているのだから、どうしようもない。

駅に降り立った少女は大きく伸びをして

教会の鐘が鳴り響く街を見下ろした。

「・・・綺麗ね」

リヴァールヴェールは「花の都」と呼ばれるほど美しい国だが
それとは違った美しさがある。

荘厳な大聖堂、空を舞う白い鳩、白を基調とされた町並み。

「まあ、街は・・・ね。お上の人間事情は泥沼みたいだよ」

続いて兄を引きずりながら降りてきたクロスが言葉を付け加える。

町並みの最奥には、巨大な王城が見えた。

「まあ、そうでしょうね。どこの国も」

「そうだけど、ここは特に酷いんだよ」

クロスに引きずられてきたクロノスが小声でばやく。

さすがに皇国の住民に聞かれては不味いのだろうか。

「皇国の次期後継者っていうのは、十四姫くの息子だからねえ！
つまりそんなにいっぱい子供が居るわけ。

女癖悪いにもほどがあるよねー」

「結局何人居るの？」

「>三十六姫くまで聞いたことあるよ」

クロスの返答に、頭を抱えなくなった。

兄妹の名前すら覚えられなそうだ。

「まあいいわ、とにかく行くしかないのよ」

そう言つて、少女は駅を後にした。

——その頃

件の王城で、銀髪の少年は己の両肩を抱いて震えていた。

「……>死神くが近くまで来てる」

緑の瞳は悲しげに伏せられて

目尻には涙が浮かんでいる。

「かあさま……ぼくは、ぼくは……」

自室の白いベッドに腰掛けた少年。

白を基調にした司祭のような服を着て

此処へ訪れるだろう。死神くを待つ。

『ソウル・・・』

震える少年の目の高さに合わせて

小さな掌サイズの白い服の青年が現れる。

銀色の髪に緑の瞳は、少年と同じもの。

「わか・・・てる、よ・・・ぼくは・・・。>贖罪くを・・・しなき
や・・・。」

嗚咽交じりに呟いて

少年はベッドから立ち上がる。

裾の長い服を引きずって、窓際まで歩いて行く。

「かあさま・・・ぼく、がんばるから・・・だから・・・。」
空を見上げて

>今は亡き母くを想う。

「ゆるして・・・。」

少年の頬を、一筋の涙が零れ落ちた。

C 2 - P 2 (後書き)

しばらく来ない間に「小説家」さんのシステムが変っててあわわ・
・

いや、俺が忘れただけか・・・？ (記憶力の無さに定評のある悠樹)

王城へ向かう途中、少女はふと足を止めた。

「あれは・・・」

教会で華やかに祝福される男女。

そう、>結婚式<だ。

「あれー？ やっぱリーマ嬢も>オンナノコ<なのかな、興味ある？」

クロノスの冷やかすような言葉に

少女は意外にもこっくりと頷いた。

「そうね、どうしていちいち指輪なんかで束縛するのか興味あるわ」

「・・・ああ、なんか、リーマ嬢らしいよ」

少女の返答に、にやにやしていた青年はげっそりとした表情に変わる。

彼女に>普通の女の子の思考回路<を期待したのが馬鹿だった。

「リヴァールヴェールは>一妻多夫制<だからね、俺としては興味無いほうが嬉しいけど」

クロスの言葉に、リーマは首を傾げる。

「でも母様は父様としか結婚してないわ」

言葉どおり、妻一人に対し夫が複数居る制度のことだ。

だが、リーマの両親は二人だけ。

「リイリア様は特殊だからね、それだけクロヴィス陛下を愛してたってことじゃない？」

「だろうね、今回ばかりは馬鹿兄に同意だよ」

「ふうん・・・」

少女はもう一度、教会へ視線を移す。

「・・・あら？」

そこで気付く。

祝福する人々の中に、嫉妬と憎悪の混じった視線を向ける女達が居

ることに。

「なんか、祝福してない人も居るみたいね」

少女の言葉に、クロノスが補足する。

「皇国は>一夫多妻制くなんだ、まあ、よくある制度だよ」
ちなみに双子の故郷であるヴァルゼドは一妻一夫制だ。

分かっていても

なんとなくクロスを見上げると

「俺はリーマだけだよ」

「べ、別に聞いてないわ」

そう言われて、リーマは僅かに頬を染めながら視線を逸らした。
話はここまでだといわんばかりに
少女は王城目指して歩みを速める。

どうせ、自分には関係ないことだ。

自分は、そう遠くない未来に>死ぬくのだから。

その>事実くが、チクリと胸を刺す。

クロスを、本当にこのまま>道連れくにしてしまっているのか
自分は彼に愛してもらえるような、>綺麗な女くではないのに。

沈鬱な表情のまま、少女は歩を進める――

そして王城の門にたどり着くと

衛兵に銃を向けられる。

「貴様ら何者だ、皇帝陛下のおわすこの城に何用だ」

銃など、リーマにとっては恐くもなんととも無い。

撃たれたところで、そんなものでは>死ねないくのだから。

「私はリーマ＝エルスレッド、次期皇帝陛下ソウル様に謁見願いた
く来ました」

契約者>ヴァリアント<であることを示すパスを見せる。

このパスがあれば、大抵どこにでも入れるのだが

「ハッ、信用ならんな、リヴァールヴェールの王女は>死んだ<と聞いている」

「——なんですって？」

こともあるうに、この衛兵どもは少女の機嫌を損ねた。

ガツと二人居るうちの片方の兵の首を締め上げ

少女はにこりと微笑む

「ーがつ」

「このまま首を飛ばしてあげてもいいのよ？」

それとも、頭を潰されるほうをお望みかしら？」

そんな少女の手に、そつとクロスの手が触れる。

「リーマ、>人間は<殺しちゃ駄目だ」

「・・・チツ」

舌打ちをして、少女は男を地面に叩きつける。

石畳はひび割れ、男は失神した。

「・・・ひ・・・ひい！！」

それを見ていたもう一人の男は

今にも逃げ出さんばかりの勢いで怯えている。

「・・・通るわよ」

少女は殺気の籠った視線を腰を抜かしている兵に向け
城門をくぐった。

確かに、あの衛兵が言ったことは>嘘<ではない。

リーマが研究所に引き渡された後

臣下達はリーマが「死んだ」と世に流したのだ。

実際、死に行くのだから変らないのかもしれないが
リーマにとっては許せないことだった。

「・・・」

苛立ちを露にづかずかと場内を歩いて行く少女に

クロスが声をかける。

「リーマ、気持ちは分からなくも無いけど、少し落ち着いたほうがいい」

「・・・分かってるわよ」

宥めるような口調に、一旦足を止める。

苛立っているのは死神の気配も辿れない。

「僕は怒ったリーマ嬢も好きだけどねえ、

さっきの男を叩きのめしたの、最高に>良かった<よ」

クロスはクロノスで相変わらず底の見えない笑みを浮かべている。
一度深呼吸をして、少女は目的の人物が居る場所を探る。

「・・・こつちね」

「うん」

クロスとクロノスにも死神の気配は分かるはずだが

兎にも角にもリーマを落ち着かせるのを優先したのだろう。

>ミストレス<の力は強大だ

暴走すればこんな国一つ、簡単に滅びてしまうだろう。

突然の闖入者に、メイドも衛兵も茫然としている。

それはそうだろう、>侵入者<にしては堂々としすぎているのだ。

しかも正門から入ってきた。

それなりに>身分ある者<でなければできないはずもない。

そして少女は、一つの扉の前で足を止める。

王城の正面を直線に向かったところにある、>謁見室<。

「正式な手続きはとってないけど、いいわよね。

>あの女<のせいにすれば」

あの女、もといリヴァイル女史。
そう言つて扉を開く。

玉座に座る男の横に、まだ幼い少年が控えている。
恐らく、控えているほうが契約者>ヴァリアント<。

「よく来られました、リーマ嬢、お待ちしておりましたよ
部下が>粗相<をしたようで、申し訳ない」

金色の髪に、紫紺の瞳を持つ男が玉座から立ち上がる。
皇国レイファリア、>現国王ヴァルスⅡロートフォード<。

「こちらこそ、>正規の手続き<をせずに来ていらっしゃるんですから
気になさらないでください」

当たり障り無い言葉を選んで口にする。

なんとなく、>嫌な男<だ。

>女の勘<がそう告げている。

「しかしさすがはリイリア女王のご息女、>闇の血<が混じっても
やはり美しいですな」

闇の血、恐らく父のことを言っているのだろう。

皇国はレフィーリカを目の仇にしているのだから。

「・・・それはどうも」

>嫌な予感<がする。

こういうとき、嫌な予感だけはだいたい当たるものだ。

「ソウルを引き取りに来たのでしょうか？準備はさせてあります、ど
うぞお連れください」

そうすんなり物事が運ぶかと言えば

そうは問屋が卸さない。

確かに少年は旅支度を済ませているようだが

>そこから動く気配が無い<。

「ただし、>条件<がありましてね・・・」

やはり。

少女は嫌々そんな表情を前面に出す。

「私は何度もリイリア様に掛け合っているのですが、未だに>いい返事<が貰えない」

少女と青年二人の周囲を衛兵

いや、>強化人間<が取り囲む。

「この際、娘の貴女で構わない。私の>妻<になっていただきたい」予想通り、だ。

少女は仮面を脱ぎ捨てて、嘲るように晒う。

「>世界の危機<に国の>地位向上<とはいいい性格してるわ、>イカれてる<」

リヴァールヴェールの姫を迎えるということは

王者といって過言ではないリヴァールヴェールと>友好な関係を築ける<ということ

リヴァールヴェールに婿に入るのでも同じだ。

かつてリーマの父、クロヴィスがリヴァールヴェールの婿に入りレフィーリカの地位が飛躍的に向上したのと同じことを

>彼<はしようとしている。

「アーク家の王子は>殺して構わない<、エルスレッドの王女だけ生け捕りにせよ！」

王の言葉に、周囲を囲んでいた強化人間>衛兵<達が襲い掛かってくる。

「へえ、僕は殺しちゃうんだ」

虚空から>闇<を纏った剣を抜き

クロノスは不敵に晒う。

「リーマがあんな性悪の妻になるなんて、冗談じゃないよ」

同じく虚空から>光<を纏った剣を抜き

クロスが呆れたように言う。

「誰が、あんたみたいな>腐れ野郎<の妻になるもんですか。
だいたい私は>死ぬ<のよ、本物の馬鹿ね」

リーマも虚空から大鎌を取り出す。

「ソウル、おまえも行け」

叔父の言葉に、少年は僅かに震えながら一步踏み出す。

「でも・・・叔父上・・・」

それでも、振り返って

>叔父<の考えが変わらないかと期待を込めて見上げる。

「おまえに選択権など無い！」

だが、期待は裏切られる。

少年の肩を銃弾が穿つ。

誰が撃った、など、考える必要も無い。

そう、目の前に居る、>叔父<だ。

「ちょっと・・・！！何すんのよあんた！！」

その光景に、強化人間を斬り捨てていた少女が怒鳴る。

契約者はその程度では死なない。

いくら痛めつけられても、>死ねない<。

だが、>痛みを感じない<わけではない。

「全く忌々しい、強情なところは>あの女くにそっくりだ
所詮は>裏切り者<の息子か」

「・・・っ・・・かあさまを、悪く言わないで・・・ください
なんでも、言うこと聞くから・・・だから・・・かあさまを、悪く
言わないで」

「フン、最初から大人しく従っていればいいのだ、>下衆くめ」
銃創はすでに塞がっている。

少年はゆっくりと玉座から階段を降り
少女の前に立つ。

「ごめんなさい。ばく・・・逆らえない、から」

「次期後継者にしちゃ酷い扱いね」

最後の強化人間を灰に変え

少女は大鎌を担ぎ上げる。

「・・・」

少年は何も応えない。

ただ黙って、俯いている。

「何をしているソウル、早くアーク家の王子を殺してしまえ」
上から降ってくる声に、少年が顔を上げる。

その瞳が、一瞬煌いた。

少年の姿が風のように掻き消え、

クロノスの目の前に現れる。

「おっと」

伸びてきた手を剣で防ごうとしたクロノスだが・・・
ぐにやりと>空間が歪みく、剣を>貫通くして腕が伸びてくる。

「――」

一瞬瞳を見開いた青年だが
心臓目掛けて伸びてきた手を
寸でのところでかわす。

「な、なに今の、恐っ!？」

クロノスの慌てた声に

リーマが瞳を眇める。

「>物質透過く、クルセイドの能力は・・・そうだったわよね？」

クロスに同意を求めると、求めた通りの答えが返ってきた。

「そうだね、俺も初めて見るけど」

「あー・・・面倒臭い」

少女は大鎌を構えて、少年を睨む。

物質透過、名前の通り物質を透過する能力だ。

肉を超えて心臓を抉り出すことだって出来る。

えげつない能力。

『クルセイドは厄介ですわよ』

その時、今まで沈黙を保っていたミストレスが顔を出した。

勿論、掌サイズで。

「エリザ」

彼女の本名は>エリザベス<。

本人がそう呼んで欲しいというので、リーマは>エリザ<と呼んでいる。

『生真面目で、堅物で、正義漢で、面倒で厄介な男ですわ』

「いや、>性格的面倒さ<はどうでもいいのよ」

的外れなことを言い出す女に、少女は溜息を吐いた。

「仕方ないわね・・・クロス、クロノス、気絶させるわよ！
もしくは説得・・・できるかしら・・・」

語尾のほうは小さくなったが、少女の言葉に青年二人も頷く。
「殺しちゃっていいならラクなんだけどねえ」

「殺したらあんたも死ぬわよ」

「冗談だよ」

クロノスの>本気の冗談くに釘を刺しつつ

少女は大鎌を手放して>無手くの体勢を取る。

ミストレスの大鎌は威力が大きすぎる、殺してしまいかねない。

「・・・」

少年は無言のまま、ゆらりと陽炎のように襲い掛かってくる。

その頬を、涙が伝う。

「・・・ごめん・・・なさい」

「謝るくらいなら、言うこと聞かなきゃいいじゃない!」

青年二人の間から飛び出して

少年の腕を掴んで床に叩きつける。

大理石の床に円状のヒビが入り

少年は固く、苦しげに瞳を閉じる。

契約者の体は頑丈だ、たとえ心臓を抉り取られてもすぐには死なない。

追撃が来る前に回復してしまえば、>元通りくだ。

「ぼく、叔父上には・・・逆らえないく、から。そういう・・・風になってるから」

ゆらりと起き上がった少年の唇から、一滴赤い雫が落ちる。

恐らくあの少年は、

リーマがリヴァイルに逆らえないのと>同じ様くになっているのだろつ。

これでは次期後継者だろうと、傀儡と変わりない。

「君さあ、そんな生き方で満足なわけ?」

クロノスの剣が少年の首筋を掠める。

「・・・っ」

少年の顔が痛みに歪む。

クロノスの剣は＞魔剣ダーインスレイヴ＜

―ひとたび抜かれれば必ず誰かを死に追いやる。
その一閃は的をあやまたず、また決して癒えない傷を残すのだ―

そう伝承で伝えられるほどおぞましい剣だ。

その剣でつけられた傷は、普通の傷とは違う。

痛みも、辛さも、重さも。

癒すことができるのは＞聖なる力＜のみ。

そして今度は、クロスの水色の瞳が一瞬煌いた。

「＞母親への贖罪＜のつもりらしいけど、そんなの償いになってないよ」

「！？」

クロスの言葉に、ソウルの表情が一変する。

＞心の中を読まれたくことが、恐ろしいのだろうか。

そう、クロスは相手の心を垣間見る能力がある。

これにはリーマも毎回困らされたものだ。

「だって、かあさまは・・・ぼくのせいで死んだんだ・・・ぼくの・・・せいで・・・」

明らかに動揺、そして混乱している。

気絶させるなら、今が好機・・・

そう、思ったのに。

謁見の間に、立て続けに銃声が響いた。

「何をしているソウル」

撃ったのは、他でもない。

先程と同じだ。

「―あ・・・か、は」

少年の体から、ぼたぼたと血が零れ落ちて行く。

「おまえは私の言うことを聞いていればいいのだ。」

>母のようにく惨めに死にたくなくな
少年の瞳に涙が浮かぶ。
何もかもに絶望した、瞳。

「・・・た」

静寂を破ったのは、少女の呟きだった。
誰にも聞き取れなかった最初の呟き
王でさえ首をかしげている。

「もう・・・あつたまきたッ！！！」

C 2 - P 4 (後書き)

もう一年近く前の文章なのではずかしい・・・。
読んでくださるかたがたには感謝してもし足りないです・・・。

怒鳴ると同時に、玉座への階段を駆け上る。

そしてあるうことか>国王<の襟首を締め上げたのだ。

「あんたね！！私達は>道具<じゃないのよ！！生きてるの！！
撃たれりや痛いのよ！！だいたいあの子まだ子供じゃない！！」

「は、離せ！！>化け物<め！！」

銃口が少女の額を捕らえる。

そして引き金が引かれ

血飛沫が上がる。

「――」

けれど

少女は、晒っていた。

「本音が出たわね」

銃などで、少女が死ぬはずもない。

>死ねない<のだから。

「>化け物<はアンタのほうよ」

額からぼたぼたと血を流しながら

少女は微笑む。

慈愛と、憎悪に満ちた凄絶な笑み。

首を締め上げ、玉座に叩きつける。

男の体は玉座に沈みこみ

口からは血反吐を吐く。

「あんたは一生そこに沈んでるのがお似合いだわ」

気絶した王を放って

少女は優雅に階段を下りて来る。
額の血を拭えば、もうそこに傷は無い。

階下を下りてきた少女に、クロスが咎めるような視線を向ける。
「リーマ、また無茶なことをして・・・」

「仕方ないじゃない、言って分からない馬鹿は殴るしかないわ」
黒い手袋をしたクロスの手が
労わるように少女の額に触れる。

「痛かっただろ」

青年の言葉に、少女は首を横に振る。

「あの程度の痛みなら蚊が止まったようなもんよ」

そう、この少女はもつと

凄惨な痛みをその身に刻んできた。
痛覚が麻痺するほど。

「さて、と・・・邪魔者は居なくなっただし」

少女は床に膝をついている少年に向き直る。

「あんたが誰の下僕だろうとどんな理由があろうと、一緒に来ても
らうわ」

「・・・」

エルの下まで辿りつくには、契約者が全員揃っていなければなら
ない。

>ナイトメアく、以外の、全員が。

答えない少年に代わって

少年の前に白い服に銀髪の掌サイズの青年が現れる。

『リーマ嬢、ソウルを>誓約くから解放してくれたこと・・・感謝
します』

「あんたがクルセイドね、よくもまあだんまり決め込んで」
その言葉に、青年の薄い緑の瞳が困ったように揺れる。

『私が出ると、余計にソウルが痛い思いをしなくてはならなくなるので』

「ま、そーよね。あの>馬鹿くじゃね・・・」

少女は膝をついている少年に歩み寄り大理石の床に片膝をつく。

「私はあなたがどんな経緯で契約者になったのかなんて知らないわ。だけど、一緒に来てもらわなきゃ困るのは・・・分かるわよね？」

「・・・はい」

少年は小さく返事をして、顔を上げる。

「嫌と言ってもいいけど、少しばかり>痛い思いくをすることにはなるわよ」

「いいえ・・・一緒に、行きます」

意外と素直だ。

まだ何か裏があるのではないかと怪訝に思ってしまうのは自分が汚い人間だからだろうか。

「・・・やけに素直ね、まだ何かあるの？」

「・・・かあさまも、>望んでいたことだから。

ばくはずっと、貴女が来てくれるのを待っていました」

ゆっくり立ち上がり、少年は首の傷を抑える。

まだクロノスにつけられた傷が痛むのだろう。

「さつきは・・・叔父上に逆らえなくて、失礼なことをしてしまったけど。

・・・待っていたのは、本当なんです」

少女は黙って一寸少年の瞳を見つめて

クロスを一瞥する。

「・・・分かってる」

クロスは呆れたように少年のもとまで歩みを進め首筋にできた酷い傷に手を当てる。

すると、傷はあっという間に塞がった。

「えー、いいのー？リーマ嬢、信じちゃって」

クロノスの不満そうな言葉に

少女はあっさり立ち上がった言う

「どっちにしても連れて行くしかないんだもの、裏があるうと無かるうと変らないわ。」

裏があつたら、その時は>逆らえなくしてやる<までよ」

そう言つて身を翻す

「さあ、とりあえず衛兵が来る前に退散するとうしましょうか」

そして

ソウルを加えた四人は、皇国レイファリアの王城を後にした。

C 2・C 5（後書き）

いまのところコピペで載せてますが
まだ完結していないのでそのうち途切れます（更新が。

Chapter 3 「茨の乙女」

新たな契約者

>クルセイド<を迎えた一行

次なる目的地を示すのも、また>悪魔<

少女は>死<へと着実に歩みを進める。

十字架の咎を背負いながら――

『>クルセイド<を手に入れるのに成功したようだな』

王城を後にして

城下町にあるカフェで、少女は掌サイズのノートPCを開いていた。
クロスは隣でコーヒーを啜っているし

ソウルは落ち着かないのか向かい側でそわそわと辺りを見回している。

クロノスに至っては机に突っ伏して居眠りをしていた。

・・・>協調性<という言葉をどこかに置き忘れてきた男のようだ。

そしてリーマは、画面に映る悪魔・・・もといリヴァイルに
ふてくされたような表情をする。

「この国王がああも>イカれ<だつて最初に聞いてたら・・・」

『おまえのことだ、最初から>武力行使<に出るだろう?』

少女の言葉を遮って、女は厭味な笑みを浮かべる。

「全部お見通しってわけね・・・」

べ、と舌を出す少女に

女はくつくつと晒う。

『これでおまえも自分が＞どんな立場＜なのか、分かったのではないか？』

「どつという意味よ」

ぶすつとした少女に

女は晒いながら言葉を紡ぐ

『＞おまえの国＜、リヴァールヴェール王国は五つの国の＞要＜、いわば＞王者＜。

その王者の娘であるおまえは、どの国も＞喉から手が出るほど欲しい存在＜』

「・・・母様ならともかく、＞死に行く人間＜に期待されてもねいい迷惑だわ」

少女はだるそうに椅子に背を預ける。

『残念だが、リイリア様はいま誰とも面会を受け付けていない。必然的に的はおまえになるわけだ』

「・・・」

母は、いま何をしているのだろう。

城に＞幽閉＜されているのは変らないのだろうけど。

――12年。

人間では無くなった自分も大概だが、幽閉され続けた母も大概だ。お互い気が触れていても可笑しくない。

本当に、気が触れているかもしれない。

『さて、次の目的地だが・・・』

女はくいつと眼鏡を直しながら、言葉を紡ぐ。

『>王国ネジュラネシス<にて>守護神フィオラーレ<の回収をし
てもらおう』

>ネジュラネシス<。

>友人<に聞いた事がある。

地形が>冥府<に傾いているせいで

いつ行っても>黄昏時<なのだという。

レフィーリカに近いせいもあるかもしれない。

「ネジュラネシスカー、>アリア<に会えるかしら？」

その瞬間、コーヒークップを傾けていたクロスの手が固まり

突っ伏して眠っていたクロノスの体がギクリと動いた。

『会える、ではない。>会う<、だ。』

そのアリア＝レグランドこそ、フィオラーレの契約者だからな』

「あら、そうなの？ならラクそうね」

アリア＝レグランド

リーマのもう一人の幼馴染だ。

クロス、クロノスと違って

14歳の時に離れ離れになっている。

当時は、彼女はまだ>契約者<では無かったはずだ。

「目的地も任務も分かったわ、じゃ、切るから」

余計にこの女の顔を見たいとは思わない、不愉快だ。

『せいぜい頑張ることだな』

画面が黒く染まる瞬間に見えた女の顔は

やはり厭味なものだった。

——足に繋がれた鎖がジャラリと音を立てる。

栗色の長い髪に新緑の瞳を持つ>女<は

ベッドに腰掛けて大窓の外を虚ろな瞳で眺める。

そして、幾重にもロツクされた鋼の扉を開き

深い緑の長い髪を靡かせた女が部屋に入ってきた。

「ご機嫌はいかがでしょうか？>リイリア様<」

青い瞳は狂気にも似た光を宿している。

ベッドに腰掛けた女は、悲しげに闖入者を見つめる。

そう、彼女こそこのリヴァールヴェールの>女王<

リーマの>母<であるリイリア＝エルスレッド。

「リーマは・・・どうしたのです？」

少しやつれた表情で、女に問いかける。

「無事>旅<に出ましたよ、喜ばしいことでしょうか？」

厭味な笑顔を浮かべるリヴァールに

リイリアは眉間に皺を寄せる。

「・・・あの子を、>実の父親<と>殺し合わせる<気ですか？」

「ご心配無く、リーマの記憶には>貴女しか<残っていませんから」

その言葉に

リイリアは悔しげに唇を噛み、瞳を伏せた。

しばしの静寂の後

顔を上げた女王は、毅然とした表情で女を睨む。

「命と想いを弄ぶ・・・あなたにはいずれ、>天罰<が下ることでしょう」

その言葉に、リヴァールは狂気じみた笑みを浮かべる。

「天罰ですか、神自体が狂気に触れたこの世界で

・・・ククク、>可笑しなこと<をおっしゃる。十二年の幽閉で、

貴女も参っているのでは？」

「・・・信じずとも・・・構いません、それは・・・貴女の自由ですから」

それだけ言つて、リイリアは顔を背ける。

彼女には、何を言つても無駄だ。

話はまだ無いと言つように、女王は口を噤んで瞳を閉じた。

「いえいえ、>神に選ばれし乙女<・・・>アルトメイデン<のお言葉。

ゆめゆめ忘れぬようにしておきますよ」

そう言つて、リヴァイルは部屋を出て行く。

鋼の扉が重く閉まる音だけが、部屋に響いた。

「リーマ・・・貴女なら、きつと・・・大丈夫」

胸の前で祈るように指を組んで

母は瞳を閉じる。

「私と>あの人<が、愛した・・・たった一人の、愛娘ですもの」

その頬を、透明な雫が流れる。

無力な己に苛立ち

>過酷すぎる運命<に飲み込まれていく娘の身を想うと

胸が張り裂けそうだった。

代われるものなら、代わつてあげたかった。

だが、リイリアはミストレスと契約する>資格<を失っている。

「・・・っ・・・リーマ・・・」

ぼたぼたと透明な雫が白いドレスを濡らしていく。

「・・・クロウ、さん・・・」

——その時、ふと頬を柔らかい風が撫でた。

「？」

この部屋の窓は開かないはず、なのに

いつの間にか、窓の前に一人の天使が佇んでいた。

C 3 - P 2 「茨の乙女」

「――」

自分を、殺しに来たのだろうか。
最初はそう思った。

だが、天使はぼんやりとした表情のまま首をかしげている。

「・・・>リーマ<・・・じゃない・・・」

しばらくして、天使はぼんやりとそう呟いた。

「リーマ・・・？あなたは、一体・・・？」

王族は成人してから歳をとらない。

リイリアが娘のリーマと間違われてもおかしいことはないが・・・。
ふと、天使の顔を見て

リイリアの表情は固まった。

金色の長い髪を一つに束ね

>水色<の光を失った双眸。

顔の造りは、よく知った>双子<の片割れにそっくりで

「>クロス<・・・王子・・・？」

そう問うと、天使はまた首をかしげた。

まるで幼子のような仕草。

「ああ・・・リーマの、>母親<。そっか・・・あんまり、似てる
から・・・分からなかった」

何かに納得したのか、青年は女のすぐ傍まで歩み寄ると

>剣を抜いたく。

白銀の、光を纏った剣。

殺すのだろうか

そう思ったが

部屋に響いたのは、金属音。

リイリアの足を戒めていた鎖が、木っ端微塵になっていた。

「――」

そして今度は扉に歩み寄り

剣で粉々に切り裂く。

「・・・これで、悲しくない？」

天使の問いに、女は呆然とその姿を見つめた。

今更気付いたが、彼の翼は骨が見えてボロボロになっている。

「泣いてた、自由に、なりたいて・・・」

「あ、あなたは・・・誰く、なのですか？」

>天使くにしてはおかしい。

青年は首を傾げ

やがてまたぼんやりと口を開いた。

「・・・>ユーフォリアく」

そう言つて、リイリアの手を引いてベッドから立ち上がらせる。

「あ、あの・・・？」

「いま、この城、>みんな眠ってるくから、簡単に・・・出られるよ」

それだけ言つと

天使は窓へと身を翻した。

「あなたが泣いてると、リーマが泣いてる、みたいで・・・嫌だから」

そして、女が次の言葉を紡ぐ間も無く

>天使くは窓の外へ風のように消えていった。

——それは、列車に揺られて大分経った頃のことだった。

外の景色が昼間にも関わらず>夕暮れくに変化し始めた頃突然、四人のノートPCが一斉に鳴った。

「何よいきなり、>車内マナー<って言葉を知ってるのかしらあの>クソアマ<は」

「よっぽど大事なんじゃないー？」

のほほんと言うクロノス

「確かにただごとじゃなさそうだけど」

そしてポケットからPCを取り出しているクロス。

ソウルはまだ馴染めないのか

無言のまま怯えたようにPCをバッグから取り出している。

仕方ないかもしれない、全員が少年より年上なのだから。

「なによりヴァイル、いま列車の中なの。>車内マナーにご協力ください<」

定型文を言ったところで

女の怒鳴り声が響いた。

『馬鹿か！！そんなことを言っている場合ではない！！』

珍しく血相変えた女の眼鏡は微妙にずり落ちている。

見るからに>寝起き<というカンジだ。

「はあ？何よ。ついあんだ昼間から寝てたの？」

『話は最初から良く聞け』

苛立ったように眼鏡を直しながら

女が続けた言葉に四人とも瞳を見開いた。

『リイリア様が城から脱走した』

それは、>ありえないこと<、で。

自分を売ったあの城に逃亡を手引きする者が居るとは思えないし
飯に居たとしても城内の半数以上が加担しなければ不可能だ。

まさか、>父<・・・だろうか。

「なによそれ、どういうことよ!!」

『私が聞きたい、ただ、リイリア様が失踪する直前

女王の部屋に強い>天使<の反応があった。

その後は城内の者が全員>眠り<についていてく不明だ、偶然城内に
居た私も含めてな』

「天使が手引きかあ、さすが>アルトメイデン<・・・ってどこ？
クロノスの暢気な言葉を鉄拳で黙らせて

リーマはノートPCに掴みかかる。

「冗談じゃないわ!!こんな世界で、しかも>天使<ですって!?
危なすぎるじゃない!!あんたどう責任取ってくれるのよ!!」

母は>特別で普通<の>人間<だ。

>特別な力<を持っているが

リーマ達のように>戦う力<を持っているわけではない。

こんな、いつ天使が襲ってきてもおかしくない世界に

一人で飛び出して行くなんで、死に行くようなものだ。

「その様子だと、行方は・・・掴めてないんですね」

今まで黙って話を聞いていたクロスが口を開く。

『ああ、その通りだ。だが>予想<はついていて

お前達はネジュラネシスで契約者を回収したら

一度リヴァールヴェールに戻ってもらう』

「何よ、予想って・・・どこなの？」

少女の問いに、女は落ち着きを取り戻したのか

真面目な表情で言葉を紡ぐ。

『>剣舞の国ヴァルゼド<だ』

それは、双子の故郷だ。

「ちよつと・・・まさかシエルド様とごたごたやろうとかじゃないわよね」

シエルド、アーク家の現在の統治者であり
ヴァルゼドの王だ。

『相手が相手だ、武力行使もやむおえない。』

我々では無理だが、>契約者<であるお前達なら>罪には問われな
いく』

彼女の言う事は間違つてはいない。

リーマが皇国で王を叩きのめしても罪状不問なのは>契約者<だからだ。

だがこの女ときたら

アーク家の二人、クロスとクロノスと実の父親と戦わせようという
のか。

そもそもシエルドは>賢王<と名高い。

こんな形での争いは望んでいないだろう。

『リイリア様を匿っているとすれば、レフィーリカの王がヴァルゼ
ドの王かのどちらかだ。

ハズレだった時はレフィーリカに向かつてもらう

だが、短時間で行方を眩ましたところを見ると恐らくヴァルゼドだ』

「っ・・・あんたねえ、>アタマだけは<いいいでしょ？他に方法
思いつかないわけ？」

頭まで悪かったらこの女に取り得など無い。

断じてないと言い切れる。

「父上かぁ・・・まあ確かに、リイリア様を匿うくらいはしそくだ
けどねえ」

クロノスは呆れたような表情でばやいている。

なぜヴァルゼドがこうも疑われるのか

それはシエルドとリイリアが>元婚約者<だからだ。

婚約が破綻した後も、シエルドはリイリアのことを大切に想っていた
・・・そういう噂がある。

「言つとくけど、シエルド様を叩きのめすのは嫌よ」

『・・・おまえは、私の命令が聞けないと言つのか?』

今まで、あの女の命令に逆らえなかったのは

一重に母の命がリヴァイルの手中にあつたからだ。

その母が逃げ出したなら、もう言うことを聞く必要は無い。

「クロス達を実の父親と戦わせるのも嫌、

だから>話を聞くくらいはしてきてあげるわ」

『・・・まあ、いい・・・リイリア様が王城に戻ればいいのだ。

・・・ぬかるなよ』

そうまでして母を、>聖女<と奉つておきたいのか。

そうしなければ、国民の>不安<が爆発してしまうから――

四人のPCは鳴った時と同じように、一斉に画面が真っ暗になった。

「・・・まあ、本当に父上の所に居るなら、ひとまず安心かな」

PCを閉じながら、クロスが呟く。

「あんだね、実の父親と戦わなきゃいけないかもしれないのに、安心つて・・・」

呆れたようなリーマの表情に

クロスは微笑む。

「だって、父上と戦うことは・・・>無い<と思うから」

「そうだねえ、父上がそんな>凡ミス<するとは思えないからねえ」
「?」

首を傾げる少女に

双子は笑って言った。

「俺たちがリヴァールヴェールに戻る頃には、リイリア様は>レフ

「イーリカくだつてこと」

「あの陰険女が考えそうなことくらい、父上にはお見通しつてコトさ」

「そういうこと、まあ・・・シエルド様は賢王と名高いものね」
実際に会ったことは無いが、この双子とは大違いだ。

「でも・・・女王陛下が城から抜け出す手引きをしたのが>天使くなんて・・・」

不思議、ですね」

ふと、ずっと黙っていたソウルが口を開く。

確かにその通りだ。

「まだ>正気くを保ってる天使が居るってことかしら・・・？」

口許に手を当てるリーマに

クロノスがけけらけらと笑う

「まっさかー、>暴走くしてたとかそんなオチじゃないのー？」

「そんな天使がリイリア様を殺さずに>逃がすくか？」

しかも、城中の人間を眠らせたとなると・・・相当強い力を持った天使だ」

クロスも思案顔で俯く。

四人の謎は解けないまま、列車は駅へと到着した。

「まあ、今は考えてても仕方ないわ、とにかくアリアと一緒に来てもらわないと」

立ち上がる少女に続き、四人は列車を降りた。

C 3 - P 2 「茨の乙女」 (後書き)

忘れた頃にやってくる悠樹。

本人もいつも操作を忘れていたのでどうしようもない。

付き合ってくださいているかたがいらっしやいましたら申し訳ない。

C 3 - P 3 「茨の乙女」

「そう・・・リーマが・・・来たの」

幾万の薔薇に囲まれた

むせ返るような花の香りに包まれた部屋で

白いネグリジエの少女はワインを一口含む。

薄い紫色の長い髪。

青い瞳は虚空を見つめている。

「やっと、逢える」

少女はテーブルの上にあったナイフを手にとると

それを左手首に滑らせる。

滴る血に口付けて、少女は微笑んだ。

「リーマ、私の可愛いリーマ・・・私は、貴女だけ居ればいいから・・・」

——紅く染まった唇は、妖艶に笑みを刻む。

ネジユラネシスは>流通都市く。

全ての国の様々な物が集まり流れて行く。

「はあー、すごいわね、見てて飽きないわ」

様々な露天商が店を出す大通りを歩きながら

リーマは呆然と呟いた。

十二年研究所で育ったため、こんな景色を見るのは初めてだ。

「何か買ってあげようか？アクセサリーとか」

クロノスのにこにこした微笑みと言葉に

リーマは嫌そうな顔をする。

「遠慮しとく、あんたに借りを作ると後々恐そうだから」

「借りだなんてー、これは僕の愛・・・げふっ」

またしても弟の鉄拳に沈んだ兄を哀れに見下ろしながら

リーマはソウルに視線を移す。

周囲の人ごみが恐いのか、びくびくと周りを見回している。

「あんたは・・・なんか皇族らしくないわよね」

なんとなく思っていたことを口にする

ソウルはびくりと震えて、怯えたような瞳でリーマを見上げた。

「あ・・・僕は・・・」

皇族というのはどいつもこいつも威張り散していると聞いたことがあるが

この少年は真逆だ。

「僕は・・・クルセイドと契約するまでは、王位継承権が無かった、から・・・」

「へえ、大出世じゃない」

「・・・」

褒めたつもりだが

ソウルは沈鬱な表情で俯いてしまった。

「え、な・・・何よ、私、何か変なこと言った？」

「いえ・・・いいんです、僕の勝手な事情ですから」

それきり、ソウルは黙り込んでしまった。

契約は、彼にとって>いいこと<では無かったのかもしれない。

リーマもそうだが、彼には契約が>嬉しくないこと<でも

>逃げ出せない理由<があるように見える。

まるで、鎖に繋がれた囚人のようだ。

そうこうしている内に、大通りを抜けて王城の門まで辿りついた。

「リーマ!! エルスレッド嬢とお見受けします、

アリア王女がお待ちですので、どうぞ中へ」

皇国の時のように地雷発言をされることもなく
パスを見せる前に門番は道を開けた

（なんか、うまく行き過ぎてない・・・？）

リーマは式典などにも一度も出席したことがない
こんな一般兵が顔を知っているはずもないのに。
そして案の定

「申し訳ありませんが、お通しできるのはリーマ嬢のみです」
リーマが一步踏み出したところで、二人の兵士が槍を交差させて
残りの三人とリーマの間を隔てる。

「えー、ナニソレ、どーいうコト？」

不満げなクロノスと

「僕は彼女を守るのが使命だ、通して貰わないと困る」
正論を突きつけるクロス。

「アリア様のご命令ですので」

だが、二人の兵士のどちらも退く様子は無い。

このままではここで血を流すことになるかもしれない。

「平気よクロス、私一人で行って来るわ」

「でも、リーマ・・・」

まだ不安そうな幼馴染に

少女は強気な笑みを返す。

「何かあったら窓ブチ破って知らせるから」

相手はアリアだ、きっと何も無いだろうが。

まあ何かあったら手加減するつもりはない。

——そして少女は城内に一人、足を踏み入れた。

「遠路遙々ようこそ、リーマ様」

城内に足を踏み入れるなり、リーマの表情が引き攣った。
なぜか、そこに大勢のメイドが控えていたからだ。

メイド長らしき人物がリーマの手を恭しく取り
先へ促す。

「え、ちょ・・・」

突然メイドの一団に服を掴まれて
少女の顔が青ざめる。

「ま、待った！なに、なに、なんなの！？」

言っている間にもサクサク>着替え<は行われる。

まさかメイド相手に暴力を振るうわけにもいかず

少女はあれよあれよという間に黒とピンクを基調としたドレスに着
替えさせられる。

「な、な、なんなの・・・」

げっそりとした表情で

ようやく解放されたのはある部屋の前だった。

扉の先に>死神<の気配を感じる。

「アリア様がお待ちです、どうぞ」

「どうぞって・・・」

改めて自分の姿を見下ろす。

黒とピンクの可愛いドレス。

こんな服、着たことも無い。

とりあえずこれはどういうことか本人に問い詰めよう。

そう思い、少女は扉を開けた。

扉を開けると、むせ返るような薔薇の香りが押し寄せてきた。
部屋にはベッドと、サイドテーブルしかない。

そのベッドに、例の少女は腰掛けていた。

その周囲は紅い薔薇に囲まれて、幻想と現実を錯覚しそうだ。

「・・・久しぶり、リーマ」

「あ・・・アリア」

その面影は、思い出の中の彼女とは大分違っていた。
快活だった面影は消えうせて

どこか妖艶な空気を纏った少女は、緩やかに手招きをする。
外から扉が閉まって、鍵をかける音が聞こえる。

（・・・閉じ込められた・・・？）
まずい、気がする。

「ひ、久しぶりね、アリア」

とりあえず手招きに応じてベッドサイドに歩み寄ると
突然ありえない力で腕を引かれベッドに押し倒された。

「っ！？」

「待ってた、リーマ。私の可愛い、リーマ」
恍惚とした瞳で

薄い白のネグリジェを纏った少女は
リーマの首筋に指を這わせる。

「っ・・・ちよっと、なにす・・・んっ」

耳を緩く撫でられて、自分のものとは思えない声が漏れる。

「ふふ・・・可愛い。相変わらず、耳が弱いよね」

光を映さない、青色の瞳。

「な、ななななにすんのよ！！」

ある意味危機だ・・・貞操の。

「リーマ・・・」

だが、少女の耳には届いて居ないのか
首筋に口付けられる。

「っ！！」

赤い跡が首筋に残った。

「ま、待った！待った待った！私>ソッチのシュミくは無いのって
いうか！！」

その瞬間、アリアの表情が憎悪に染まった。

「リーマ、まだ＞あの男くを愛しているの？」

「は？」

誰かを愛した記憶は無いが

この少女の中にはそんな記憶があるらしい。

「あの男って・・・」

「名を呼ぶのも忌々しい、私からリーマを奪った男」

「あの男って・・・誰？」

「？」

首を傾げるリーマに、アリアは一寸同じように首を傾げた。

だが、すぐにその顔は狂気にも似た笑みを宿す。

「そう・・・。そう・・・。記憶が無いくのね、リーマ？」

リーマの首筋から手を離して

少女は両手で顔を覆う。

「罰よ、そう、私からリーマを奪ったから・・・私はリーマだけ居ればいいのに」

逃げるには好機かと思ったが

すぐに両腕を片手で押さえつけられる。

「でもリーマは違った、私だけじゃ駄目なの」

ギリ、と血が滲むほど強く腕を押さえつけられる。

（っ・・・正気じゃない）

アリアは、＞正気くではない。

そんな気がした。

「アリア、私がどうしてここに着たのかは分かってるわよね？」

痛む腕をなんとか解放しようともがきながら

幼馴染である少女に問いかける

「ええ、分かってるわ。私を迎えに来たのでしょう？ずっと待って
いたわ」

「だったら！この手を離して！！」

だが、アリアは優艶な笑みを浮かべた。

「嫌」

そして次の瞬間、リーマは言葉を失くす。

アリアの手に、血色の槍斧があつたからだ。

「私を、殺す気なの？」

唾を飲み込んで問うと、少女は微笑んだ。

「私だけを見てくれないリーマなら要らないの。」

ねえ、>世界の終わり<まで私と>永遠<を築きましょう？」

「っ！！」

>物理的な力<ではミストレスより

アリアに憑いている>守護神フィオラーレ<のほうが上なのだろう。

訪れるだろう痛みに瞳を閉じた

——クロス

心の中では、ただ一人の名前を>無意識<に呼びながら。

その刹那

窓ガラスを破って、黒い服の青年が部屋に飛び込んできた。

「！？」

音に気を取られ顔を上げたアリアが

状況を理解する前に、その腹部に青年の蹴りが沈む。

「か・・・っは！！」

壁に叩きつけられた少女

幾万の薔薇を切り裂いて現れたのは

「クロス・・・」

ベッドに横たわったままのリーマは

呆然と幼馴染の名前を呼んだ。

「大丈夫？リーマ」

優しい、優しい表情に

何故か安堵が込み上げてくる。

「っ……この……」

だが、平穏などこの場にありはしない。

衝撃から立ち直ったアリアは

憎悪に染まった瞳でクロスを睨みつける。

「>またく、私からリーマを奪うのね……そうなんでしょう？」

その右手に血色の槍斧が現れる。

（また……？）

先程から、リーマには分からない会話ばかり飛び交っている。

「リーマは>物くじやない、おまえのエゴでリーマを殺そうと言うなら、容赦しない」

クロスは先程の面影など全く無い冷徹な瞳でアリアを睨み付けた。

「許さない、おまえだけは……私のリーマを奪ったおまえだけは・

……」

完全に臨戦態勢だ。

戦いは避けられそうに無い。

リーマはベッドから起き上がり、ドレスの裾を裂いて大鎌を取り出す。

「助かったわ、クロス。ありがと。

でもここからは私が一人で片付ける」

きっと、これは自分がやらなければならないことだ。

アリアを歪めてしまったのは、きっと過去の自分だから。

なぜ彼女がああも自分に執着するのか

クロスと過去に何か確執があるのか
その理由はサッパリ分らないが

彼女を止められるのは、たぶん自分だけだ。

「リーマ、またその男を庇うの？なぜ・・・なぜ私では駄目なの？私はこんなにも貴女を愛してるのに、どうして？」

「悪いけど、あんたが言ってることの大半は理解できないわ。さっき自分で言っただでしょ、>記憶を失くしたくんだって。

私が覚えてるのは>昔のあなたくだけよ」

大鎌の切っ先を向けて、真っ直ぐな瞳を向ける。

「クロスとの間に何があったのかも分からない。

私は何も覚えてないの。

でも、私とあなたが>友達だったのはよく覚えてるわ」

「――」

一瞬、アリアの瞳が揺らぐ。

「できればあなたと戦いたくなんて無い。

武器を収めてくれれば、私も退くわ」

「嫌、私は・・・私だけのリーマが欲しいの！リーマの>特別くで居たいの！！」

震える手で

少女は槍斧を振りかぶる

「リーマ！！！」

クロスが叫ぶが、少女は避けようとはしない。

一言だけ、言葉を紡いで。

「じゃあ、>親友くになりましょう？」

そして静寂が部屋を支配した。

「親友・・・？」

槍斧の切っ先はリーマの首筋ギリギリで止まっていた。

「そう、>親友く。あなたは私の>特別な友達く。

>ソッチのシユミくは無いから、恋人は無理だけど、親友ならいい

わ」

「・・・それは、その男より上？」

アリアの言葉に、リーマは頭を抱える。

「わ、分からないわ、でも＞ただの幼馴染＜よりは上なんじゃないかしら。」

クロスはただの＞腐れ縁＜だし」

「・・・」

今、アリアが腕に少しでも力を込めればリーマの首は刎ねられる。そんな状態にあっても、リーマは恐怖の一欠けらも感じさせない。

「私、聞き分けの無いヤツって嫌いなもの。」

これ以上やり合おうって言うなら、あなたのこと、＞嫌い＜になるかもね」

その瞬間

アリアの瞳に確かな＞怯え＜が映った。

そして手に持っていた槍斧が霧散する。

「・・・分かった、親友で我慢する。＞今は＜」

「よかった、大好きよ、アリア」

リーマ自らアリアに抱きつく

抱きつかれた少女は狼狽して、頬を僅かに染め

リーマの背に腕をまわした。

「リーマ・・・私も好き」

たぶん、この二人の＞好き＜は＞同意義ではない＜けれど。

C 3 - P 4 「茨の乙女」

いつもどおりの私服に着替えて

リーマとクロスはアリアの準備が終わるのを待つことになった。

「リーマ、ちよつと・・・いい？」

いつもより真面目な表情の幼馴染に首を傾げつつ

少女は返答を返す

「何よ？」

「こつち」

腕を引かれて連れてこられたのは

人けの無い森の中。

「？、クロス？」

少し歩いたところで突然止まった幼馴染は

ぐいっとリーマを抱き寄せた。

「な、ちよつと！！どうし・・・」

問う間も無く、手袋をした手が器用に服の襟元を肌蹴させる。

そこには、先程アリアに付けられた赤い跡。

「・・・むかつくから、消毒」

「っ！？」

赤い跡の残る胸元に口付けられて、軽く吸われる。

少女の頬はみるみるうちに真っ赤になった。

「ばっ！！なにすんのよ！！」

同姓にされるのと異性にされるのでは恥ずかしさの度合いが違う。

リーマに>ソツチのシュミくは無いのだから。

いつもの鉄拳をお見舞いしようとするれば、手を掴まれて

より一層強く抱きしめられる。

「クロス・・・？」

その手が僅かに震えている気がして、少女は不思議そうに青年の名を呼ぶ。

そして、小さな呟きが耳に届いた。

「・・・覚えて無くても、いいんだ・・・君の傍に居られるなら、それだけで・・・」

それはリーマに対しての言葉と言うより、>独り言<のようだった。一寸の沈黙が降りた後

左耳に冷たい感触が当たって、クロスの体が離れて行く。

「？」

不思議に思っ て耳に手を当てると

十字架のピアスがあつた。

色は、分らない。

それに、なぜか片耳だけ。

首を傾げてクロスを見れば

もういつもどおりの少しおどけた表情で
にっこりと微笑んでいた。

「お揃い」

そう言われて見れば

クロスの右耳には銀色をした十字架のピアスがあつた。

「な・・・あんたねえ・・・いつの間に」

呆れたようにジト目で幼馴染を見上げれば
クロスと笑われた。

「さっき買ったんだ、ペアだったから」

「まったくもう・・・」

呆れながらも、なぜか悪い気はしない。

二人で笑い合っている

「・・・リーマ」

低い少女の声が二人の間に冷気を漂わせた。

「あ・・・アリア」

いつの間に来ていたのか

アリアが凍えた瞳でクロスを睨みつけていた。

二人の間に、心なしか火花が散っているように見える。

「あ、あははは、準備できたのね！じゃあ行きましょつか！あははははははははは・・・」

仲間内で殺し合いなど御免だ。

クロスとアリアの背を無理矢理押して

――歩き出す。

――その頃。

「貴女も苦勞するな、リイリア嬢」

外の雪を眺めていた女に

山積みの執務を片付けている青年が声を掛ける。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません、フェイルさん」

彼は「フェイル」アースランド

五英雄の一人、そしてこのレフリーリカの王だ。

「いや、私の息子のほうが貴女の「ご息女」に「迷惑」をかけるだろう。」

気にしなくていい」

「ゼノン王子は、まだ戻られないのですね」

ゼノン――

最後の「契約者」にして、この国の王子。
だが、もう何年も「行方不明」のままだ。

「あれは頑固だ、>母親<に似たのだろうな、本人に言えば断固否定するだろうが」

「ふふ・・・>メル<さんも頑固でしたからね」

女は懐かしむように瞳を細めた。

「あの頃は、メルさんが居てクロウさんが居て・・・幸せでした」

「・・・過去形なんだな」

「それも、そうです・・・いけませんね、過去に縋っているようでは」

外を眺めるリイリアを一瞥して

フェイルは再び紙にペンを走らせる。

「きつと>クロウ<は帰って来る、おまえを一人残して逝くほどあいつは暢気じゃない」

クロウ——クロヴィスⅡエルスレッド。

リイリアの夫、リーマの父。

「昔よく言っていたらう、おまえは目を離すと危なっかしくて傍に居ないと安心できないと」

「ほ、掘り返さないでください！！私だって、もうクロウさんに迷惑をかけるほ、ど・・・」

と言った傍からドレスの裾を踏んづけて

女は盛大に転んだ。

「ほら、な」

「うう・・・今のは事故です」

クスクスと笑う青年に、女は額を抑えながら座り込む。

「おまえの>天然ドジ<が治ることは無いだろうから、あいつは必ず帰って来る」

「・・・そうですね、きつと、帰って来てくださいますよね」

安堵したように微笑んで

目尻に浮かんだ涙を拭う。

——彼は、きっと帰ってきてくれる。

C 4 「天使」

失踪した女王の行方を追うこととなった一行は
アーク家の故郷であるヴァルゼドへ向かう
だが、女王はすでにそこには居なかった

そして――

そこでリーマは不思議な天使と出遭うのだった。

「リイリアならもう居ない」

謁見の間に入って言われた単刀直入すぎる言葉に
リーマはがくりと肩を落とす。

「シエルド様、私、まだ何も言ってます」

玉座に腰掛けた金髪の青年は、頬杖をつきながら一行を見る。

「なんだ、あの>クソアマ<にけしかけられてリイリアを追いかけ
てきたんじゃないのか？」

相変わらずこの王は口が悪い。

それでも>賢王<と名高いのだ。

実際、ヴァルゼドは治安もいいし活気もある。
先王の時代はとて荒れていたのだと聞くが
それを立て直したのがシエルドだという。

「まあまさにその通りなんですけど」

「だろ？だから居ねえって」

「どこへ行ったかはご存知ですよね」

少女の言葉に、青年は玉座から立ち上がり
すたすたとリーマの前まで歩いてくると

その顔をまじまじと見つめ

ぽすぽすとその頭を撫でた。

「？」

「リーマ、おまえはやっぱり>父親似くだな」

「は・・・？」

優しい表情で頭を撫でる。

その表情が一瞬で、悲しげな、真面目なものになった。

「おまえは・・・このまま戦い続けるのか？」

その場に居た全員が沈黙した。

勿論、リーマも。

仲間達は、それぞれ>リーマの知らないリーマ<を知っている。

「それ・・・は・・・どういう意味ですか？」

リーマは真っ直ぐにシエルドの瞳を見据える。

その青い瞳は、>何か<を思い出させる。

もつと、宝石のようにキレイな蒼い瞳を知っている気がする。

それはとても>大切なヒト<で――

「分からないなら教えてやる。おまえが進む先は・・・」

シエルドの瞳は、>誰か<に似ている。

「暗闇、だ」

その、言葉に

リーマは笑みを浮かべた。
狂ったような、鮮やかな笑みを。

「何を、今更・・・」

そう、今更だ。

これが賢王の言葉とは冗談もいいところだ。
何が>暗闇くだ。

今までずっとそうだった、真っ暗だった。
この先もずっとそうだろう。
だって・・・

「私は、死ぬために生まれてきたんですよ？」

悲しさも苦しさも

何も無い

諦めだけに満たされた笑みを浮かべる。
だが、王は首を横に振った。

「違う、そうじゃない」

何を告げたいのか

なんとなく苛立ちが募る。

「例えば、おまえは記憶を失ったまま>実の父親<と戦う
おまえが死んでも、おまえが勝っても、>泣くやつ<がいることく
らい分かるだろ」

「――」

――母様

答えは、すぐに分かった。

確かにそうだ。

一番哀しんでほしくないヒトに、涙を流させることになる。

自分が死ねばまだマシかもしれない

でもリーマは死ねない。

なら父を殺すしかない

でも母はそれをどう思うだろう

実の父を殺した娘を、どう思うだろう――

軽蔑

その単語が、容易に浮かんできた。

「それだけじゃない、この先、クロスもクロノスも居なくなったらどうする？」

アリアもソウルも・・・最後の契約者も、全員が>死ぬ<ことになったら？」

「それは・・・」

そうだ――

自分が死ぬことは、最初からわかっていた。
でも

他の仲間たちが死ぬことまで

――考えていなかった。

死ぬのは自分だけだと、思い込んでいた。
恐る恐る、隣に立つクロスを見上げる。

水色の瞳と目が合うと、急に恐くなった。

（違う）

彼は生きるのだ。
生きて、>他の女<と>結婚<して、幸せに……なって……。
自分のことなど

忘れて行くのだ――

――走った

口の中に鉄錆の味が広がるほど長く、速く

気付いたときには

リーマは無意識に謁見の間から飛び出して
追いかけてくるクロスを振り払って

王城を飛び出し

街から離れ

木漏れ日の落ちる森の中に踏み入っていた。

「はぁ……はぁ……っ」

なぜ自分が取り乱したのかも、分からない。

ただ、幼馴染が他の女と共に歩むことを、考えたくなかった。

これは、なんだろう――……分からない

分からない、わからない、ワカラナイ・・・

「っ・・・」

悔しくて、ただ、悔しくて、強く唇を噛む。

自分はこんなに弱くなかったはずだ。

なのに。

どうして。

> 彼くのことになると、こんなに苦しいのだろう。

左耳に揺れるピアス

> 何かくが、綻び始めていた。

刹那

ガサリと、茂みが揺れた。

「――」

殺気は感じない、だが、そこに現れたのは

一人の、> 天使くだった。

「ーク・・・ロス？」

それも、顔の造りが幼馴染にそっくりな。

金色の長い髪を一つに束ね

濁った水色の瞳

白い服

羽が落ちて骨の見える翼

「・・・リーマ」

言葉を失って硬直する少女の名を呼んで

その頬に手を伸ばす。

「・・・どうしたの？・・・苦しい？」

クロス――

否、違う

彼の瞳はいつだって強い意志を太陽の光のように映している。
だが目の前の青年の瞳は

まるで太陽を失った蒼穹のよう。

「あなたは、誰・・・？」

少女の問いに一寸首を傾げる。

「僕は・・・>ユーフォリアく、ユーフォリア・・・だよ」

そう言つて、緩やかに少女を抱き寄せる。

体温の無い体に少女の体温が伝わって

まるで人形に抱きしめられているようだった。

だが

相手に殺意があるうとなかろうと

リーマは天使を殺す義務がある、殺さなければならない

「離して!!」

叫んで、暴れても、びくともしない。

迂闊だっただろうか

並みな天使なら一人でもなんとかできると思っていた。

「リーマ・・・あつたかい・・・」

ぎゅ、と

慈しむように青年の手が少女の背を包む。

自分の体温を反射するだけの手なのに

なぜか、反抗する気力も奪われてしまう。

「っ・・・」

肩口に顔を埋められて

くすぐったさから少女が身じろぎする。

「・・・落ち着いた？」

耳元で、囁くように問われる。

「・・・あんだ、一体何者なの？」

「?・・・ユーフォリア」

予想通りの返答に頭を抱えなくなる。

「名前じゃなくて・・・」

だが、青年は不思議そうにリーマの顔を覗き込んでいたが

「ひゃう!!」

突然、ちゅ・・・と青年は少女の頬に口付けた。

突然すぎて、しかもそれはひんやり冷たくて

思わず自分のものとは思えない声が喉について出る。

「・・・リーマ・・・リーマ・・・すき」

ぎゅうぎゅうと苦しくない程度に抱きしめられる。

それなのに振り払えないのはなぜだろう。

大した力が込められているとは思えないのに。

「は、離して!!・・・っ、なんなのあんたは!？」

ワケがわからない。

幼馴染にそっくりで、でも天使で、殺意を感じなくて、あまつさえ

>すき<・・・

「すき・・・?」

「ん、すき」

子供が甘えるような仕草だったが

少女の頬に熱が集まる。

駄目だ、これでは

好意を寄せてくれるなら誰でもいいようではないか。

(?)

ふと、違和感が過ぎる。

（私、クロスのこと、どう思って・・・）

名前のわからない感情が生まれているのは確かだが
その思考は青年によって遮られる。

「・・・リーマ、> 抜け殻のほうが好き？」

「抜け殻？」

小首をかしげて、少女の顔を覗き込んでいた青年は
む、と少しだけ無表情な顔に表情を刻んだ。

少しだけ、不満そうな。

「・・・嫌だ」

その言葉と共に、唇に冷たい感触が触れる。

「っ!？」

口付けられたのだと理解するのに、数秒かった。

重なった唇

呆然と瞳を見開いていると

体温の無い舌が口内に侵入してきて

少女は体を石のように硬直させる。

なんだこの状況は

いくら幼馴染に似ているからといって>天使く>何をしているのだ
いや幼馴染とでもこんなことをしてはいけないだろう

「ふ・・・やん」

抗議しようとしても

甘ったるい個人的に気色の悪い声しか出てこない。

「や・・・め、っ・・・んんっ」

漸く離れる唇

唇と唇の間を、透明な糸が繋ぐ。

荒い息をする少女の顔を、天使は再び覗き込んだ。

「・・・リーマ・・・すき」
「っ!!」

駄目だ、駄目だ駄目だ駄目だ
何を流されているのだ

僅かに腕が緩んだ隙を見逃さずに
少女は青年を突き飛ばす

「なにすんのよ!!!」

同時に大鎌を呼び出そうとする

が

「・・・え？」

手ごたえが無い。

「エリザ・・・？エリザ・・・!!!ミストレス!？」
呼びかけても返事が無い。

「死神・・・きらい、痛いから・・・やだ」

「――」

呆然と目の前の天使を見る。

原因なんて、考えるまでも無い。

この天使は、>死神の力を封じる力<の持ち主なのだ。
クロスも同じ力を持っているが

ここまで完全に抑圧されることはない。

死神の力を持たないリーマなど
ただの>強化人間<。

普通の天使ならともかく、この天使に挑んで勝てるとは思えない。

「リーマ・・・恐がらなくていい。僕は・・・何もしない」

「イロイロやつといて何もしないなんてよく言えたもんだわね!!」
今更だが初対面ではありえないことをたくさんされた気がする。

「いろいろ・・・？僕・・・何かおかしいこと、した？」

「自覚が無いのね、ああそう自覚が無いのね、だったら分からせてやるわ」

勝てないことなど百も承知で殴りかかる。

案の定、拳は天使の片手で受け止められた。

むしろ、そのままの勢いで抱き寄せられる。

「っ！！離しなさいよ！変態！ド変態！！！！」

そうだ、冷静に考える

これはどう考えても変質者だ、変人だ、変態だ。

「リーマ・・・暴れないで、いたい・・・」

きゅう、と子供が甘えるように抱きつかれる。

「あんた天使なんでしょう！？私は契約者よ、殺すなりなんなりすればいいじゃない！！」

こんな辱めを受けるなら殺されたほうがマシだ。
だが、天使は首を傾げる。

「リーマと戦うのは・・・やだ・・・うーん・・・？」

少女を腕の中に収めたまま、天使はなにやら考え込む。
そして、爆弾発言をした

「じゃあ・・・「おもちかえりー」・・・で」

「・・・・・・・・・・・・・・は？」

何を言ったのか理解できないが

何かもしくは誰かの受け売りだというのは口調から分かる。
そして少女が呆けている間に

天使は少女をお姫様だっこして翼を広げた。

「ちょ、ま・・・！！馬鹿じゃないの！？」

正気じゃない。

これで正気だったら＞天使くじゃない。

「ばか・・・僕のこと・・・きらい？」

しょんぼりした顔をする天使に

何故か罪悪感が湧く

なんとなくこう、子供を虐めてしまった気分だ。

「いやそういう問題じゃなく・・・」

再び頭を抱えそうになった瞬間

茂みを切り裂いて白銀の刃が天使の腕を切り裂いた。

「！」

天使の腕が緩んだ瞬間、背後から力強い腕に抱き寄せられる。

「大丈夫？リーマ」

見上げると、そこには見知った幼馴染が居た。

「ークロス」

いま一番会いたくなかった人物

そして一番会ってはいけなかった気がする二人く。

「い・・・たい」

クロスも、相手の顔を認識するなり凍りついた。

だが、ユーフォリアはクロスのことなど気に留めてもいない。

そして「痛い」と言う割に傷はもう塞がっていた。

「な・・・んだ、おまえは・・・」

クロスは動揺していた。

それはそうだろう

自分と同じ顔の人間が目の前に現れたら

誰だって不気味に思う。

「・・・僕は・・・おまえ、おまえは、僕」

意味不明な言葉を紡いで

ユーフォリアも白銀の剣を取る。

「油断してると、死ぬよ？」

だが、その背後から漆黒の剣を構えたクロノスが斬りかかる。

「！、おまえー！！」

無表情なユーフォリアの表情が一変する。

先程より強い感情。

それは、>驚愕<のようだった。

そして、>怒り<

「ずっと>水底で眠っていればよかったのに」

聞こえるか聞こえないかの呟き

クロノスが呟いたその言葉は

風に邪魔されながらもリーマの耳に届いた。

その時のクロノスの顔は

前髪に隠れて見えなかった。

「リーマ・・・」

一瞬、時が止まったように

二人の青年の間をすり抜けて

ユーフォリアはリーマの頬を愛しそうに撫で

「>闇<が近づいている・・・気をつけて・・・」

そう言っ

て少女の唇に軽く口付けると

灰のように風に溶けて消えていった。

C4「天使」(後書き)

お久しぶりすぎる更新。天使サイドから新キャラが一人。

C 4 - P 2 「天使」

——気まずい。

「しっかしアレだねー、リーマ嬢ってば天使にもモテちゃうなんて
やっぱり>アルトメイデン<の血が流れてるってコトだよねえ」

——気まずい。

「・・・」

「・・・」

「・・・はれ？怒らないの？」

この男は・・・

(コイツツ・・・なんで空気読めないのよ！KY！！AKY！！)

AKY↓アルティメットKY

心の中で悪態を吐く。

クロノスはいつもどおりだ。

だが、クロスの様子がおかしい。

リーマと目を合わせようとしない。

しかも先程からずっと黙り込んでいる。

少女は一度深呼吸をして、思い切って幼馴染の名前を呼ぶ

「・・・クロス」

「・・・」

返事が無い。

今までこんなことは一度も無かった。

クロノスならともかくリーマが呼んで返事が無かったことは無い。
どこか上の空といった感じで

「・・・え？」

数秒遅れて青年は少女を見下ろした。

呼ばれたことにも気付かなかったのだろうか。

だが、少女に向けられた瞳はすぐに苦しげに細められふいっと視線を逸らしてしまう。

「ごめん・・・」

ぼそりとそう呟いて、クロスは少女を追い越した。

それはいつか、旅が始まる前の逆の図。

「・・・クロノス、リーマのこと頼んだよ」

「あ・・・クロ・・・!!」

そう言うのと、少女が止める間も無く幼馴染の背が逃げるように遠ざかって行く。

追いかけようとした少女の肩を、その兄が制し

振り返れば、クロノスは首を横に振った。

「・・・放っておいてあげてよリーマ嬢」

「どうして・・・？」

クロスが、今までリーマを置き去りにしたことなど一度も無い。

彼はいつだって傍に居て、リーマの手を離さずに握っていてくれた。まるで、心に空洞が空いたようだ。

あんなに近いと思っていた幼馴染。

今は世界中の誰より遠く感じる、なんて。

「クロノスは、何か知ってるんでしょう？どうして・・・」

だが、青年はもう一度首を横に振った。

「僕の口から語って良いことじゃないんだ、クロス君にとって・・・
>一番辛いことだから」

——心臓を、鷲掴みにされたようだった。

常秋のヴァルゼドの森の中。

兄と、>彼女<と大分離れたと思ったところで
青年は立ち止まった。

そしてずるずると傍に在った木に凭れかかって座り込む。
顔を両手で覆った。

視界を塞いでしまいたくて。
でも

視界を塞いでも鮮明に蘇る
>自分にそっくりな天使<と、>最愛の幼馴染<が

口付けを交わす。

心臓が、止まるかと思った。

殺してやりたかった。

あの天使を。

「・・・はは」

両手を離して

青年は空を仰いで乾いた笑みを浮かべる。

もう自分が>嫉妬<などする資格は無いのに。

だって>彼女<はもう自分のことを憶えていない。

どこまでも高い空。

蒼い蒼い蒼穹。

瞳を閉じれば思い出す、自分の名を呼ぶ・・・>彼女<の声。

——白い花弁が蒼穹に舞い上がる。

>彼女くが>一番好きだと言った白い花。
青年の>誕生花くでもある白い花。

あの頃はなんとも思っていなかった

だが今にしてみれば

なんと>皮肉な花言葉くだろうと思う。

『クロス』

一面の鈴蘭畑。

花言葉は

——幸せを取り戻す——

柔らかい栗色の髪に触れる。

『大好きよ』

ぎゅうつ、と抱きついてくる温かなぬくもり。

『俺も・・・愛してる、>リーマ<』

白い花弁が舞い上がる中抱き合って

>口付けくを交わす。

『ずっと、ずっと大好き・・・』

少女は瞳を閉じて、>少年<の背にまわした腕に少しでも力をこめる。

『俺もだよ』

応えるように、少年も少女を腕の中に閉じ込める。

『クロスは・・・ずっと傍に居てくれる？もしも・・・』

見上げてくる少女の新緑の瞳が不安に揺れる

『私が・・・>ヒト<じゃなくなっても』

>彼女くがミストレスと契約する>前日<のことだった。
『俺はずっとリーマの傍に居るよ、ずっと、いつまでも』
少女の額に口付ければ
安心したように少女は背伸びをして少年の唇に触れるだけのキスをする。

『大好き、ずっとずっと・・・一番大好きよ』

——だが、>悪魔くが少年と少女を引き裂いた。

走った。

無機質な回廊を。
真っ白な空間を。
そして辿りつく

『リーマ!!..!』

視界に入っただのは
培養液の中で眠る少女の姿。

それを眺めていた人影が、厭味な笑みを浮かべて振り返った。
『どうした? クロスII アーク』

深い緑色の髪に、狂ったような光を宿す青い瞳。

白衣を着た女は振り返り、少年を嘲笑うように見下ろした。

『リーマは・・・無事、なんですよね?』

少年は真っ先にそう問うた。

『ああ、無事にミストレスと契約した、肉体にも損傷は無い』
その言葉に、少年は安堵の息を吐く。
だが

『尤も、目覚めてからのほうがお前にとっては、絶望的かもしれない』

その言葉は、確かに、その通りだった。

数日後、自室のベッドに移された少女の傍で
いつものように華奢な手を握っていた時だ
新緑の瞳が薄っすら開いた。

「リーマ！」

嬉しかった

嬉しかった・・・

彼女が無事で居てくれたことが
なのに――

「・・・あなた・・・だれ？」

目覚めた彼女の一番最初の言葉は、
「ソレ」だった。

――白い花弁が、吸い込まれるように蒼穹に舞う。

少年は、一人だった。

虚ろな瞳で、高い高い空を見上げる。

その頬を、透明な雫が零れ落ちた。

水色の双眸が揺れる。

「彼女」は全てを忘れてしまったのだ。

いや

厳密に言えば、>全て<ではない。

彼女が、>死を躊躇う理由となるもの<。

彼女が、>戦うことを畏れる理由となるもの<。

それらが全て、>消去<された。

その中に、>クロス<も含まれていた。

『・・・リーマ』

震える声で

風に掻き消されそうな声で、>彼女<の名を呼ぶ。

もう此処には居ない。

此処に来ることもない。

愛しい、愛しくて仕方ない少女の名。

——そうか

ふと、少年は自虐的な笑みを浮かべた。

『俺はまだ・・・君のことが好きなんだ』

もう自分のことなど思い出してもくれないのに。

二度と、口付けを交わすような関係にも戻れないのに。
いつか

死ぬか、他の男と一緒にになる少女のことを

自分はまだ

>愛<しているのだと。

きつと永遠に消えない想い。

報われないとしても構わない。

瞳に溜まった雫を拭って

少年は白銀の剣を取り出す。

それを空に掲げ
瞳を閉じる。

——何があっても、俺はずっと君の傍に居る——
——君が俺を思い出すことが無くても、俺は君を守る——

14歳の去る日

彼はそう剣に誓った。

これは>エゴくかもしれない。
それでも

>約束く、したから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ」

日が暮れ始めた町並みを眺めながら

ベンチに腰掛けた少女は幾度目か分からない溜息を吐いた。

（ていうか、なんでクロスのことでこんなに悩んでるわけ？私・・・

）

別に彼がよそよしくなろうと関係ないではないか。

どうせ自分は近いうちに死ぬのだ。

他の仲間達が生き残る保証は無い。

だが自分が死ぬことは>確定事項くだ。

>コレくが終れば

（クロスは他の女と結婚して幸せに暮らすんだわ・・・）

・・・・・・・・。。

「はあ・・・」

また溜息を一つ。

なぜか胸糞悪い。

そんなこと想像したくも無い。

なのにあの幼馴染が変な態度を取るから

こちらまで調子を崩されてしまう。

（私のことを好きだなんて言うてくれてるのも今のうちだけ・・・）

クロスは第二と言えど>王子くだ。

身分の高い>高貴な女くと結婚することが決まっているも同然。

そう、例えば>母くのような。

優しくて、あたたかい人。

クロスにはそんな人が似合っている。

殺戮しか出来ない自分など吊り合わない。

（・・・分かってるわよ）

自分の思考に苛立つて、足元に転がっていた石を蹴る。

（ああもう、イライラする！）

自分らしくない。

おかしい。

何か、>おかしいく。

「・・・はあ」

また盛大な溜息を一つ。

なぜこんなに>彼くのが気になるのだろう。

イライラする。

ふと、伏せていた顔を上げると
もう空には月が昇り始めていた。

「満月・・・かあ」

満月は人を不安定にさせるという。

だが、少女は直ぐに違和感に気付く。

あれほど活気に溢れていた街が

まだそんなに遅くも無い時間だと言っのに静まり返っている。

「・・・こいつは・・・なんか>来る<わね」

『リーマ、不味いですわよ』

不意に、ミストレスことエリザが少女を庇うように・・・

いやまあ掌サイズなのだが現れる。

「まずいつてなにか・・・」

『ここは>現実<ではありませんわ、現実を切り取った>異空間<とでもいいいましょうか』

「そりゃ・・・まずいわね」

そんなことが、できるのは・・・

C 4 - P 2 「天使」 (後書き)

水面下でひっそりと噂されていた死神登場。

Chapter 5 - Period 1 「神の血」

切り取られた世界

闇の中から現れた>死神<

少女は相対することになる

己の>宿命<と――

影という影が集まり、>人の形<を作る。

少女はベンチから立ち上がると大鎌を取り出した。

どうやら今度は能力封印などというところでも能力の持ち主では無さそうだ

・・・が

ビリビリと周囲を震わす>殺気<。

――強い

少女は本能的にソレを察した。

そして影から生まれた漆黒の人影は、右手に>少女と同じ大鎌<を取り出す。

「――え」

思わず、声が零れ落ちた。

漆黒の髪、漆黒の服、漆黒の大鎌。

服と髪の間に見え、雪のように白い肌。

男か女か見紛うほど華奢な体格。

光を失った>蒼い瞳<。

一瞬脳裏を過ぎつた＞既視感<。

『＞ナイトメア<ですわ・・・』

エリザの言葉で少女は理解する。

彼が、目の前の彼が、自分の――＞父親<。

＞初めて見た<という感覚しか無いが

間違いなく、リーマの父親・・・＞クロヴィスⅡエルスレッド<。

だが感動の再会などではないし

それより少女は青年の背後に見える＞影<に息を呑んだ。

漆黒の長い髪に蒼い瞳の人影、いや、＞死神<だ。

「嘘でしょ・・・？」

ミストレスが本来の姿に戻れないのはお互いに多大な負荷がかかるため。

なのに、父の死神は＞本来の姿<で具現化していた。

それはシンクロ率が100%の証。

そして、本来、普通の契約者であれば

シンクロ率100%を＞維持する<となると10分が限界だ。

どんなに強化されていても所詮人間の器。

溢れ出す力に耐えかねた肉体は、＞決壊<する。

10分を超えると契約者は＞灰<になってしまう。

論理上それは＞不可能なこと<なのだ。

なのに父はそれを＞実現<している。

リーマとミストレスの最大シンクロ数は89%

相手がシンクロ率100%だと言うなら、＞勝機は薄い<。

まして未だリーマにも出来ない・・・

＞空間を切り取る<などという芸当をすでにしているのだ。

「チツ・・・」

今日は厄日だ。

変な天使には遭うし、幼馴染は様子が変わだし、自分の思考回路も変だし・・・

それに、こんな厄介な>敵<に一人の時に遭遇してしまった。いや、一人になるのを待っていたのかもしれない。

「>各個撃破<なんてあざとい作戦ね」

挑発しても返事は無い。

恐らく、ナイトメアになら全員一斉にかかって勝機があるのかもしれない。

なんせ

>最強、最凶、最狂<

そう言われている>孤高の死神<なのだから。

「・・・」

クロヴィス——クロウは何も答えずに、大鎌を構える。

それが合図だった

大鎌の刃と柄がぶつかって火花を散らす。

受け止めた側の少女の足元

煉瓦畳があまりの衝撃と重さにミシリと沈む。

「——ッ、このっ・・・!!」

強い、強すぎる。

最初の一太刀で>力量差<を思い知らされる。

大鎌を支える腕がガクガクと震える

だがここで力を抜けば肩から腹にかけて>パツクリ<だ。

ギシギシと体中が悲鳴を上げる

それでも少女はなんとか大鎌の刃を弾き飛ばした。

「っ・・・はぁ、はぁっ・・・」

息が切れる。

体が震えている。

> 恐いからくなんてバカな理由ではない。

あまりの物理的衝撃に肉体がついていけなかったのだ。だが、相手は待ってくれないし容赦もしてくれない。

横合いから斬りかかって来た刃を空に跳んで避ける
だが

「!？」

空に跳んだ少女の足を漆黒の手が掴む

そのまま地面に叩きつけられた

「——がつ・・・かは・・・ッ!!!!」

煉瓦畳が10メートルほど円状にひび割れる。

四肢を裂くような激痛が全身に走った。

そうだ、何も攻撃手段は大鎌だけではない。

霞む視界の中で黒い影が大鎌を振りかぶる——

振り下ろされたソレを転がることで避けて

少女はなんとか体勢を立て直す。

「は・・・、っっ・・・ごほっ・・・」

口の端から血が零れる。

腹の底からせり上がって来る熱い塊を吐き出せば

煉瓦がビシヤリと真っ赤に染まった。

「はぁ・・・はぁっ・・・> 実の娘くに対して・・・っ、酷く、ない？」

笑みを浮かべて

少女は再び大鎌を構える。

相手に>意識くが無いことなど分かっている。

> 正気くでもないだろう。

再び振り下ろされる大鎌を柄で受け止める。
これでは防戦一方だ。

そう思ったのだが・・・

一瞬間にかかる負荷が軽くなったかと思うと
腹に強い衝撃が走って吹き飛ばされた。

「がつ・・・！！ッ！！」

煉瓦でできたビルに叩きつけられ、再び全身に痛みが走る。
腹を蹴り飛ばされたのだと気付くまでに二秒はかかった。

自分と大差ない体格から繰り出された蹴りとは到底思えないのに
少女はまた血反吐を吐く。

そして今度は少女が体勢を立て直す間も与えず
漆黒の刃が襲い掛かってくる。

（——ヤバッ！！）

内心で叫んだ時には遅い。

正確に首を刎ねようと迫り来る刃。

——時が、止まったようだった。

瞳を見開いたまま硬直する少女と

その首すれすれで止まっている漆黒の刃。

「——」

間近で見た青年の顔は人形のように美しく

そして光を失っていた蒼い瞳に、僅かに光がさし込んでいたく。
綺麗な、綺麗な、宝石のように蒼い瞳。

絶句している青年と

「——」

少女まで絶句していた。

そうか

シェルドの青い瞳を見たとき、思い出したのは>父の瞳<だったのか。

記憶は消されてしまったはずなのに

相手も、記憶がどうなっているか分からないのに
父は自分を殺さなかった。

「リ・・・リア・・・？」

父が掠れた声で小さく呟く。

その蒼くて綺麗な瞳は見開かれたまま。

「・・・・・・・・・・・・・・・・リ・・・マ・・・？」

しばらくの沈黙の後、恐らく父は自分の名を呼んだ。
最初に呼んだのは母の名前だろう。

父は、自分を母と見間違えて刃を止めたのだろうか。
だとしたら、母に命を救われた。

刹那

>空間<を、切り裂く音がした。

眩い夕日が視界に痛い。

「リーマー!!」

よく知っている声が、少女を呼んだ。

「――クロス」

>もう来ないかもしれない<、なんて、思っていたのに

「ちょっとー、うちのお姫様に何してくれるわ、け!!」
クロノスが父に斬りかかる。

それを避けて、ナイトメアは一行と距離を取った。

「リーマ!!」

「リーマ嬢!!」

その後から、アリアとソウルも走ってくる。

そして少女の血まみれの姿を見た瞬間、アリアの瞳が憎悪に燃えた。

「こいつにやられたの？私のリーマを・・・よくも・・・」

殺気を隠そうともせず溢れさせ、血色の槍斧を取り出す少女も意に介さず

しばし沈黙した漆黒の青年は

出てきた時と同じように影に溶けて消えていった――

Chapter 5 - Period 1「神の血」(後書き)

死神ナイトメア登場です。とりあえず別サイトさまに置いてある分まで全部載せるため更新ラッシュ。

C 5 - P 2 「神の血」

——傷は治った。

契約者なのだ、当然と言えば当然。

ヴァルゼドの王城、その客室のベッドに腰掛けて
少女は瞳を伏せる。

あの時

>死神ナイトメア<に襲われたとき

まだ現実は>夕暮れ<だったのと言う

『ナイトメアは>闇を操る能力<がありますのよ。

それと、夜は>アレ<のテリトリーですわ』

ミストレスとナイトメアは>双子神<。

兄のナイトメアと妹のミストレス。

「・・・エリザ」

俯いていた少女は顔を上げて

目の前に浮いている女を見る。

「何か隠してるわね」

死神と契約者は一心同体。

嘘を吐くことはできない。

『・・・別に隠していたわけではありませんのよ、話す必要が無かつただけで』

エリザはバツが悪そうな顔をした後

リーマを見上げた。

『貴女も、自分の父親のことに興味など無かつたでしょう?』

「そうね・・・でも、エリザはいま父様のことで隠し事をしてるって分かる」

『・・・』

少女の追及に諦めたのか、エリザは溜息を吐く。

『ナイトメアとクロヴィスのシンクロ率が100%かそれ以上だったのは

貴女も見ただから分かるでしょう』

「・・・ええ、>不可能なこと<を実現してたわ」

女は黙り込む。

やがて、瞳を閉じて口を開いた。

『私は、クロヴィスの>母親<ですよ』

「はぁッ!？」

あまりに予想外な言葉に思わずベッドから立ち上がる。

『あの子がシンクロ率100%を超えても肉体を維持できるのは半分は>神の血<が流れているからですわ』

「じよ、冗談キツイわよ」

ベッドに座りなおしながら、少女は引き攣った顔を元に戻そうと必死になる。

いやそれ以前に、オーバーヒートした思考を冷やそうと必死になる。

『貴女は>自分が私に選ばれた理由<も、聞いたことはありませんでしたわね』

女はぽつぽつと>真実<を語りだす。

——私は、>リーマ''エルスレッド以外との契約は受け付けないくと最初から言っていましたのよ、あの>悪魔<に——

なのに、あの女はそうと知っていてミストレスの被験者を次々送り込んだ。

そして600人以上の>子供<が死んだ。

ミストレスは>死神<だ、人が何百人死んだところでどうとも思わない。

今まで何千何万何億という人間が死ぬところを見続けてきたのだから。

何より、仮に自分がリーマ以外の人間を受け入れたとして長続きしないことは分かっていた。

ミストレスの血は猛毒のように契約者の体を蝕み遠くない未来死に追いやってしまう。

結局結末は変わらない。

——元々ナイトメアとミストレスは>特殊<なのだ——

いつか、至高神が>神<として機能しなくなったとき

>破壊するために創られた神<だから。

この双子神と契約するためには

肉体に>神の血<が流れていなければならぬ。

そうでなければ

>劇薬<を飲み干すのと同じだ。

ナイトメアはミストレスの息子であるクロヴィスを契約者を選んだ。

そして十数年前、>神<と戦った。

>破壊<するには至らなかったが一時的に封印することには成功した。

だがミストレスは迷っていた。

いつ自分に>相応しい契約者<が現れてくれるのか・・・。

しかし、その迷いは長くは続かなかった。

クロヴィスは>アルトメイデン<

>元始の神<の血を受け継ぐ>聖女<と恋に落ちて結婚した。
ミストレスは>運命<を確信した。

>死神の血<と、>神の血<を受け継いだ少女――

>リーマ＝エルスレッド<こそ、自分の契約者に相応しいと。

『・・・とまあ、そんな感じですわ』

なんだかんだで軽く語られたが

衝撃的すぎる>事実<だ。

呆然としていると、ミストレスはび、と人差し指を立てて
リーマを睨み付けた。

『さあ、私は全て吐き出しましたわよ。次はリーマ、貴女の番です
わ』

「は？私は何も隠してなんか・・・」

『はあ・・・しばらく貴女の深層心理に潜っていてあげますから・

・・・』

なぜか溜息を吐かれた。

『クロス王子と話していらっしゃいな』

その言葉に、少女の表情が引き攣る。

いま、一番会いたくない人物だ。

「べ、別に・・・話す必要は・・・」

『・・・>弱虫<ですわ!』

「なっ・・・!!」

お互いにプライドの高いリーマとエリザ。

こういうことを言われれば口喧嘩に発展するのがいつもの道理だ。

『気になるんでしょう？ だったら会って話せばいいですわ』

「だ・・・って・・・」

だが、今回はリーマが早くも折れた。

俯く少女に、エリザは腰に手を当ててうんうんと頷く。

『リーマ、いいですこと？ 恋は勝ち取るものなんですわよ

待っていて落ちてきてくれる牡丹餅ほど甘くないですわよ、

例えるならそう、戦争!!』

「恋って、違うわよそんなじゃない。あと>恋<で>戦争<って

怒られるから繋げちゃ駄目」

『他の女と結婚して欲しくないと想う相手が恋じゃなくてなんなん

ですの!？

女性に生まれて良かったですわね! 男だったら>天然タラシ<です

わよ!!』

珍しくやけにエリザが食いついてくる。

「う・・・だって、恋なんてしたことないもの、分かるわけ無いじ

ゃない」

『貴女16歳でしょう!？ ガラスの十代!! 恋する乙女な年頃です

わよ!!?』

「あんたの理屈はなんか明らかに間違ってる気がするわ」

『理屈なんてどうでもいいんですわ!! とにかく会ってらっしゃい

な!!

イライライライライラと悩まれるほうが迷惑ですわ!!

少しはルームメイトに気を配りなさいな!!』

「私の体は>部屋<なわけ?」

『い・い・か・ら!!』

「わぁっ！？ちよっ・・・！？」

体が勝手に動いてドアへと向かう。

「強引すぎでしょう！？」

死神は契約者の体を意のままに動かすこともできる。
多少負荷がかかるが。

そして少女は強制的に部屋の外に追い出されるのだった。

追い出した本人は体の中に居るが、最早うんともすんとも言わない。

（もう・・・）

なるようになれ、だ。

Chapter 6 - Period 1「思い出」

ミストレスに部屋を追い出された少女は
渋々ながらに幼馴染の部屋をノックする。

>全てを忘れた愚かな少女くが――

道行くメイドに道を聞きつつ部屋の前まで来たはいいが
少女は固まっていた。

（うつうつ・・・気まずいんだってば）

言い訳を言ってみても、内側に居るはずの死神は反応しない。

（このさい留守だと信じて・・・！！）

思い切って扉をノックする。

「――っ」

頼む、居ないでくれ。

そう願ったのも虚しく

「・・・・・・リーマ？」

扉が開いて部屋の中から幼馴染が顔を出す。

運命の女神は意地悪だ・・・。

「ごめん、ソファ一つしかないんだ」

二人がけのソファが一つ。

（尚更気まずつつっ！！！！）

「あ・・・嫌なら俺は座らないよ」

少女の感情を汲み取ったのか

青年は苦笑いをしてそう言った。

「え！？いや、そんなことない・・・わ」

いきなり人の部屋に来ておいてそれはない。

「そう？」

クロスは>いつもどおりくに見える。

少女の隣に腰掛けて、青年はいつもの柔らかな微笑みを浮かべる。

「どうしたの？急に俺の部屋に来るなんて」

「うう・・・エリザが・・・」

いや>エリザが言ったから来たくというのも失礼か。

クロスだって貴重な>休養時間くなのだ。

「く・・・クロス・・・は・・・」

頬に熱が集まるのが分かる。

こんなこと、聞くことになるとは思っていなかったのだから。

「すきなひと・・・居る、の？」

その言葉をなんとか吐き出して少女は思い切り顔を伏せる。

とてもではないが幼馴染の顔を見たものではない。

そして返答によっては、自分は>絶望くするのだろう。

「・・・」

「・・・」

沈黙。

気まずい。

「・・・居るよ」

しばらくの沈黙の後、青年はそう言った。

無意識に少女は瞳を見開く。

「ずっと昔から、ずっと大好きな子が」

「——・・・そう」

なんだろうか

悲しいはずなのに、少女の口許は笑みを刻んでいた。

——これでいい

これで、いいはずだ。

もう何も悔いることなどない。

畏れることもない。

少女は笑顔を貼り付けて顔を上げた——

だが、笑顔を貼り付けて上げた顔

その瞳に映ったのは、>悲痛な表情<の幼馴染だった。

そして急に体重をかけられて、押し倒される。

「リーマは残酷だね、どこまでも・・・>残酷くだ」

「——クロス？・・・ッ痛！」

ギリ・・・と掴まれた手首に力を込められる。

クロスがリーマを傷つけるようなことは、今までに一度も無かった。
やはり

リーマの記憶同様、>現実<も何かが綻び始めている。

「君から・・・そんなこと、聞かれるなんてね」

肩口に顔を埋められて、もう表情を伺えない。

「クロス・・・？」

「残酷すぎるよ・・・>忘れる<なら、何もかも、全て忘れてくれ
たら・・・」

——俺への>想い<も——

——俺が君の幼馴染だったということも——

——何もかも、全て、全て全て——

「そうしたら・・・俺は・・・」

いや

きつと彼女が本当に>全て<を忘れたとして
自分はきつと彼女を諦められない。

分かっている。

分かっているから・・・

>全て<を忘れた彼女が

——憎い

顔を上げた幼馴染は、冷えた瞳を少女に向けた。
今まで一度も見ることが無いような

——憎悪。

「クロス・・・」

心なんて読めなくても分かる。

彼は自分を憎んでいる。

でも、それは>ただの憎悪<ではなくて。

>哀しみ<に溢れているように見えた。

「もう、>そんな感情<を俺に向けないでよリーマ」

「——」

以前

ネジユラネシスでの出来事を思い出す。

アリアに捕らわれたリーマを助けに来たクロスと、アリアの>会話

<――

『>また、私からリーマを奪うのね?』

『まだ・・・あの男<を>愛して<いるの?』

失われた点と線が繋がって行く。

自分は>過去<にもクロスを愛していたのだ。

そして自分は>友人<だったアリアよりクロスを選んだ。

「私・・・」

「リーマ・・・もしも・・・」

クロスの声は、僅かに震えていた。

「まだ俺を愛していると言うなら、二度と俺を忘れないでよ」

片手で腕を拘束されて、空いた片手が少女の服にかかる。

――私は、>彼<を忘れた。

――>忘れられた彼<はどんな思いで今まで自分に接してきたのか。

――全て忘れた自分を、それでも守ってくれて。

――手を離さずに握っていてくれた。

「・・・クロス、どうして・・・私を、憎んでいるんじゃないの?」

涙がこぼれそうだった。

でも自分に泣く資格は無い。

泣いていいのは彼の方だ。

もし自分が忘れられる側だったら、彼を>憎んだくだろう。

なのに彼は自分を守り続けた。

>運命<は残酷だ。

残酷すぎるほど。

「憎くないと言えば嘘になるよ、でも・・・」

クロスは、泣きそうな顔で
いつもの優しい微笑みを浮かべた。

「それ以上に、君を愛してる」

その言葉に、少女は瞳を見開いた。
呆然としている少女の唇に己の唇を軽く重ねて
青年はそつと少女の髪を撫でた。

「俺はね、君が思っているよりずっと汚い男なんだよ」
器用に服の胸元を肌蹴させて
少女の首筋に口付ける。

「君に好きな男ができたら、八つ裂きにしてやろうと思ってた
君に気づかれないように、悟られないように・・・殺してやろうと
思ってた」

「クロ・・・っ・・・や!!」

耳を甘噛みされて、甘い声が出る。

「君を俺以外の誰にも渡したくない、あの・・・>天使くにも」

「ふ・・・あ・・・クロ・・・ス」

物騒な言葉を吐かれている。
なのに

どうして>嬉しいくのだろう。

「リーマ・・・」

優しく名前を呼ばれる。

けれどそれは>狂気くを孕んだ声。

「俺だけのものになってよ」

重なる唇。

二人を繋ぐ透明な糸。

少女は青年を>受け入れたく。

繋いだ手を、二度と離さないように。

――その頃

「父上はお優しいんですね」

執務室で書類の山と格闘している父に、クロノスは笑顔で言った。

「何が？」

思いつきり体育会系のわりに書類整理も得意な

文武両道な父は書類から目を離さずに応える。

「>僕のことく、言わないんですか？」

笑顔のままのクロノスを

シエルドは一瞥した。

「なんだ、洗いざらいべらべら喋ってほしかったのか？」

「ま・さ・か

それじゃ僕は>彼女<の傍に居られなくなる。

でも、いいんですか？」

ふと、クロノスの表情から笑みが消える。

「僕はリーマ＝エルスレッドを>殺すくかもしれませんよ？ねえ？

>叔父上？<」

その言葉を聞いた瞬間、シエルドは万年筆を止めた。

「好きにすりゃあいい、おまえがリーマを殺そうとしてもクロスはリーマを守る」

「未来でも視えるんですか？>僕達<とは違う、人間の身で」

「剣・・・」

「？」

> 叔父くは書類から顔を上げて

クロノスを真つ直ぐに見据えた。

「クロスには> 聖剣ブリュンヒルデくを、おまえには> 魔剣ダイ
ンスレイヴくを渡した」

「・・・それがどうかしたんですか？」

アーク家に伝わる二対の剣。

> 双子の男児くが産まれたら渡すよう遥か昔から受け継がれてきたが
実際に継承されたのはこれが初めてだ。

つまり、クロスとクロノスが初めての> 双子くなのだ。

「> 力くだけならダインスレイヴのほうが何百倍も上だ、でも・

・」

シエルドは過去を思い出したのか苦笑した。

「今のおまえにや分からねえだろうけどさ、たぶん勝つのはクロス
だ。

おまえは負ける、> 絶対にく。だから心配してない。」

「気に入らないですねーソレ、僕が負ける要素がどこにあるってい
うんです」

「さあな、それが分からないうちはおまえは勝てねーよ」

それだけ言つて、青年はまた書類整理に戻る。

そう

> 守るものがある者くと、> それが無い者くの間には絶対的な力の
差が生まれる。

殺せる者と殺せない者の間にも致命的な力の差があるが

クロスは> 彼女くのためなら兄さえ殺すだろう。

だから、クロノスは勝てない。

少なくとも、シェルドはそう>確信<していた。

C6-P2「思い出」

クロノスが部屋を出て行ったあと

シールドは平面なキーボードの電源を入れた。

同時に、電子音を立ててシェルドの前に長方形の>映像<が映る。

「ようフェイル、リイリアは元気か？」

明るく手を振る青年に、画面の向こう側の青年は眉を顰めた。

『シエルド……せめて一言入れてから通話にしろといつも言っているだろう』

銀色の髪に紅い瞳、
フェイル・アースランド。

「いいじゃねえか、それとも何か？見られちゃまずいことでもあったか？」

「無いが……。はあ……おまえも口が達者になったな、誰の影響やら……」

こめかみを押さえるフェイルに、シエルドはけたけたと笑った。

「で、まあ、真面目な話があるんだよ」

「>クロウ<のことか？」

「話が早くて助かるぜ。まあその通りでさ、ヴァルゼドでリーマとクロウがぶつかったく」

その言葉に、
フェイルはさらに眉間に皺を刻む。

「……リーマは？無事か？」

「無事だ。あとあんま眉間に皺寄せん、戻らなくなるぞ」

「後半は余計なお世話だ。それよりクロウはどうなった？」

「逃げた。リーマじゃ太刀打ちできなかったっぽいな」

『・・・？、逃げた？リーマでは太刀打ちできなかったのだろうか？
 どういう意味だ』

それなら、リーマは殺されているはずだ。

「それがよく分かんねえ……>もしかしたら、ただだよ」

『？』

シエルドは真面目な表情で

彼……クロウの兄であるフェイルを見据えた。

「まだクロウには、意識があるのかもしれない」

——十二年前。

『ほんとに行くのか？クロウ』

シエルドが呼び止めた。青年は

黒曜石のような短めの艶やかな黒髪。

宝石のように美しい蒼い瞳。

雪のように白い肌。

男か女か初見では定かではない華奢な体格。

精巧に造られた人形のように美しい顔の青年は

その美しい顔で苦笑した。

『今行かなくて、どうするのさ』

彼はそう言った。

『おまえが居なくなったら、あの女が好き勝手しだすぞ』

リイリアも、何よりリーマの身がどうなるか分からない』

その言葉に、クロウは悲しげに表情を歪めた。

『そうだね、分かっている……。でも、これはナイトメアとの契約
約なんだ』

『——クロウ』

『>力<を得る代わりに、僕は自分の>命と運命<を差し出した、後悔はしてない。』

契約を反故にすれば僕は>死ぬ<』

彼は、当時皇国と冷戦状態にあった祖国・・・

レフィーリカを救うためにナイトメアと契約した。

無差別に殺される民を救うために、たった一人で>二千万の皇国兵<と戦った。

そして、>勝利<した。

死体の海にただ一人立った少年を、誰もが>黒の死神<と畏れた。

『>幸せ<、だったよ。君と>親友<で居られて、リイリアに逢えて、リーマが生まれて・・・』

僕なんかの身には余るほど、幸せすぎた』

踵を返して、青年は・・・クロウは歩き出す。

『僕はリイリアを、リーマを愛してる、大切なんだ・・・だから守りたい。』

僕に出来ることがあるなら成し遂げたい』

『・・・>時間稼ぎ<のために、死に行くのか？』

彼は歩みを止めた。

『世界なんて、もう・・・!!』

『シエルド、君は>王<だ、その先は言うてはいけないよ』

『だけど・・・!!』

理不尽だ。

理不尽すぎるのだ。

クロウは何も悪いことはしていない。

ただ理不尽に理不尽が重なって、クロウが>全く<背負わなくてはならなくなった。

今、>世界の全て<が、彼一人の背にかかっている。

『無理』

クロウは笑って、振り返った。

彼の笑顔を見るのは稀だ。

『時間稼ぎでも・・・いいんだ、その後僕が>リーマに殺される<ことになってもいい。』

リーマが、リイリアが、幸せに暮らせる>世界<が欲しい。

>平穏な世界<は・・・それは>ナイトメア<の願いでもある』

『クロウ・・・!!』

『僕は・・・さ、>平和な世界<への礎になれば・・・いいんだ。もうすぐ>契約者<が揃う、>最後の戦争<が始まる』

『クロ・・・』

クロウはび、と人差し指を立てて笑った。

『そう簡単に死なないし言いなりにもならないから、安心してよ。』

僕は>帰ってくる<つもりだ、だってリイリアを一人になんてしておけないだろ？

それに彼女を泣かせたら、君が僕を殺すんだろう？』

『——っ!!』

悔しい。

なぜ自分は無力なのか。

なぜ、自分は>契約者<ではなかったのか。

なぜ>自分達の時代<に契約者が揃わなかったのか。

そうすれば、彼を、クロウを、>助けられる<のに。

『じゃあね、シェルド』

漆黒の青年は、風に掻き消えるように風景に溶けていった——

「クロウはさ・・・もしかしたらまだ、>記憶がある<のかもしれ

ない」

シエルドの言葉に、フェイルは溜息を吐いた。

『はぁ……おまえは本当に、>空気の読めない男くだ』

「あ？」

顔を上げて画面を見ると、涙目のリイリアが居た。

「……」

『……』

「げー！リイリアー！！」

今のは、彼女に聞かれてはまずかった。
なぜなら

『クロウさんには、まだ>意識があるかもしれないくんですね？』

「いや待て！これは俺の憶測で……！！」

『憶測でもなんでもいいです！！クロウさんはリーマを殺さなかった、それだけで！！』

今にも部屋を飛び出して行きそうな女の腕を、フェイルが掴んだ。

『落ち着けリイリア、おまえの>唄くが通じるかどうかはともかく
クロウが弱っていなければ話にならんだろう』

『でも……！！今この時だって、クロウさんは苦しんでいるかもしれないんです！！』

あちゃー……と脳内で呟きながら

シエルドは軽く手を振る。

「まあほんとに落ち着けリイリア、クロウのことは>契約者くが揃
わなきゃどうしようもない」

『……っ』

リイリアの新緑の瞳から、涙がこぼれる。

シエルドは彼女の涙に弱い。

弱いがここで折れたら彼女は>死ぬくかもしれない。

『全員でかかれば、いかなナイトメアでも抑えこめないことはない

だろう

機会があるとすれば、>その時くだな』

画面端にメイド姿の女性が映り、リイリアの手を引いて出て行く。

「・・・フェイル、リイリアが居るなら居ると早く言え」

『言っていないかったか？』

「ねーよ！！相変わらず言葉が抜けすぎだおまえは！！！」

首を傾げる青年に怒鳴るが

『いきなり掛けて来るほうが悪い』

怒鳴られた側の青年は表情を変えるでもなく言い返してきた。

「・・・すいませんでしたー」

口で勝てないことは承知の上なので、ふてくされた表情で返事を返す。

C 6 - P 3 「思い出」

「リーマにも、話したこと無かったと思うけど」

ベッドに二人腰掛けて（服は着ている）

しばしの沈黙のあと、クロスが口を開いた。

まったくもって冷静なクロスと正反対に、リーマの頬はまだ赤い。

「なに？」

それでも繋いだ手を離さないように握ると

クロスは少しだけ苦笑して、>衝撃的な言葉<を紡いだ。

「俺も、>子供の頃の記憶<が>無い<んだ」

瞳を見開く少女に、クロスは苦笑いと言う。

「君と出逢う前の話だよ、俺は両親の顔も知らない

君ももう知っていると思うけど、噂通り>父上<は・・・本当の親じゃない。」

俺の記憶の>始まり<は、君に出逢ったところからなんだ」

「じゃあ・・・本当のご両親は・・・？」

「たぶん・・・とづくに、死んでる」

「――」

>なぜ？<

まず、>疑問<が首をもたげた。

彼の両親はなぜ死ななければならなかった？

そしてなぜクロスにその記憶が無い？

「クロノスは憶えてるらしい、両親の顔も、何が起きたのかも・・・」

でも俺に話す気は無いっぽい」

「……聞かないの？」

兄が全て知っているなら、聞けばいい。
そう思うのだが

「・・・>嫌な予感が、するんだ。記憶を取り戻したら・・・俺は君の傍に居られなくなる・・・」

・ ・ ・ そんな、>予感がする」

?

「クロノスは、普段はああだけど、>過去くに異常に固執している。それこそ、自分の人生の全てを投げ打っていいってくらいに」

「それは……知らなかったわ」

あのクロノスが、そこまで何かに固執しているとは思わなかった。

「子供の頃は俺にもその感情が伝わってきてた。」

でも、最近は全く心を読ませない……。リーマ」

不意に名を呼ばれてクロスを見上げると

いつになく真摯な表情で彼は言った。

「クロノスは……あいつは、>危険くだ」

少女はその言葉の意味をすぐには理解できなかった。

クロノスは、クロスと同じくらいの時間を過ごした>幼馴染くだ。

そんな彼が、
> 危険< . . . ?

「それ……は、どういう意味？」

「俺達は＞死神＜が憑いてない、＞契約者＜には＞分類されない＜って、知ってるよね？」

「うん」

こっくりと頷くと、クロスは言いにくそうに言葉を紡いだ。

「でも、
＞強化人間とも違う、
＞元からこういう体だった。」

もしかしたら、だけど・・・俺達の両親のどちらかが・・・>天使く、だったのかもって

「……それも、相当力の強い」

「――」

それはまた、現実味が無いが最も可能性のある憶測だ。

「・・・天使の子供は＞天使く、ってこと？」

「そうなるね」

クロスもクロノスも強化人間ではない。

だからといって死神と契約しているわけでもない。

だが、彼らは死神と互角に渡り合えるほど強い。

もちろんあの悪魔、ことリヴァイルはその性質に興味を持った。

だがどれだけ調べても彼らの謎は解けないままだったようだ。

クロスの＞心を読む能力くは、特にあの女の目に止まったようだが。

少なくとも＞人間くではない。

それだけは、＞確かなことくだ。

人間に似ていて様々な能力を持つ＞ものく・・・
それに該当するのは＞天使くだけ。

（・・・クロスにそっくりだったあの＞天使く）

少女は思考を巡らせる。

ユーフォリア、と言ったか。

（あいつも、何か関係してるのかしら・・・？）

その時、不意に扉をノックする音が聞こえた。

だが鍵は閉まっている。

そしてガチャガチャとドアを引っ張る音。

「あつれゝ、開かない。なにこれ、どいういイミ？そいういイミなの？」

外からクロノスの声が聞こえる。

「きゃー！クロス君不潔ー！！」

隣に座る幼馴染の雰囲気は絶対零度になっていくのが分かる。

「でもまあ・・・」

ガチツと嫌な音がした。

「お・兄・さん・は・許・し・ま・せうん！！・・・よつと！！」

そしてドアノブごとというかドアごと吹っ飛ばして不法侵入してきた。

「やありーマ嬢、貞操は無事かい？」

「あんたねえ・・・」

弟の部屋をぶち壊しておいて・・・

案の定ベッドから降りたクロスはクロノスに歩み寄ると

「>兄さんく、このドアどうしてくれるの？」

ぎゅうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつと兄の首をしめた。

「ていうか、なんで俺がリーマと一緒に居るのにおまえの許可が必要なんだ

作文用紙3行以内にまとめて言ってみろ、この×××××が
だいたい鍵が閉まってたんだ開けないだろ普通！！」

「ぐ・・・グロスく・・・ぐるし・・・ズトップ！！」

「俺の名前はグロスじゃないよ>兄さんく、ちゃ・ん・と・言っ
て？」

「ぐるし・・・！！すいませんでした・・・！！手、はなじてくだ
さい！！」

「よく聞こえないなあ・・・？」

「ぐ・・・クロスく・・・怒って、る？」

その瞬間、クロスの手に更に力が籠る。

「怒ってないように見えるならおまえの頭は相当おめでたい、よ！
」

凄まじい音を立てて床に叩きつけられた兄を
弟は怜悯な瞳でゴミでも見るように見下ろしていた。

「……………げふあつ……ごめんなさいでしたー」

しかし立ち直るのが早いのはやはり人間ではないからか。

クロスが手加減していたというのはありえない。

……だつてクロスだから。

ふと、クロノスと視線が合う。

と、クロノスは何故か突然青ざめた。

「え！？あ！？リーマ嬢……もしかしてもしかしちゃったりして
た！？」

「は？」

そこで、自分がクロスのベッドに腰掛けていることを思い出す。

「…………」

「うつわーどうしよう危なかった、でもこれアリア嬢とかにバレた
ら殺し合い勃発で……」

ベッドから降りて、なにやらぶつぶつ言っているクロノスに近づき

座ったままのその頭に踵を突き落とす。

「ぐふえ！！！！！！！！」

そのまま前のめりにありえない体勢になり、ゴキリと骨が悲惨な音
を立てた。

「余計な詮索してるとぶつ殺すわよ」

「…………いやあもうすでにぶつ殺されてると言いますか……」

ゴキンとまた変な音を立てて体勢を戻すクロノス。

「てゆーか！！二人とも僕の話も聞いてくれない！？」

つまるどころ

リーマとクロスがPCの電源を落としている間にリヴァイルから通信が入った。

『闇の国レフリーリカにただちに向かえ』と。

恐らく母の居場所がバレたのだろう。

まあ元から二つしか可能性が無かったのだから当然だ。
というわけで

現在一行はレフリーリカに向かうべく、駅へ向かっていた。

Chapter 7 - Period 1「最後の契約者」

死神ナイトメアと一戦を交え

己の無力さを知る少女

だが流れる時は止まらない

最後の契約者のもとへと

悪魔が少女を誘う――

「そいえばさー」

列車に乗ったところで、クロノスが唐突に口を開いた。

今回は一列三人座れるボックスで

リーマの右にクロス、左にアリアが座り視線で冷戦をしている。

その向かい側にクロノスとソウルが間を空けて座っている状態。

「例の最後の契約者だけど、例によってアースランド家の王子らしいよ？」

「らしいよって、どういう意味よ？」

首を傾げるリーマに、クロノスはいにこにこと笑う。

「いやぁ・・・それがさぁ、もう何年も前から行方不明とか」

「え・・・それって、私達が窮地なんじゃないの？」

笑っている場合ではない。

契約者が揃っていないければ、意味が無い。

具体的に、契約者が揃うと何が起こるのかはまだ分かっていないが

それぞれの国に言い伝えられる伝承の通りなら

>楽園エリュシオン<へ繋がる道<が現れるはずなのだ。

神の世界へ、行く道が。

それに戦力的に見ても、ナイトメアでさえあの強さだったのだ
>至高神<というのがどれほど強いのか想像もつかない。

なんせ>この世の全てを管理する神<なのだから。

さらに言うとその至高神のもとまで平和的に行けるとも思えない。
確実に>天使<の妨害が入るはずだ。

だというのに、こちらに一人でも欠員が出ていては本末転倒だ。

「あいつなら>電腦図書館<に引き籠もっている、
なんでも>許可された血縁者<しか入れないらしい、でも、フェイ
ル様は拒絶されている」

意外にもそう言ったのはアリアだった。

「アリア、知り合い？」

「・・・その×××男の次に嫌いな男」

尋ねれば、クロスへの音声＋文字にしてはいけない罵倒と共に答え
が返って来た。

アリアはそもそも>男嫌い<なのだが。

それは昔から変っていない。

「でも・・・リーマの>従兄<だから、仕方なく話してやったこと
があるだけ」

そういえばそういうことになる。

全く記憶に無いが。

会ったことはあるのだろうか？

「血縁者しか入れない、かぁ・・・君はどうなの？>ソウル君<」
急に話が飛び火した少年に

リーマは頭に疑問符を浮かべながら少年に視線を移す。

>血縁者しか入れない<のなら、ソウルはまず無理のはずだ。

視線を彷徨わせ小刻みに震える少年に問う前に

クロスが口を開いた。

「リーマ、ソウル王子はね、皇国の亡くなった>十四姫<のご子息

なんだ」

「知ってるけど・・・」

「じゃあ父親が誰か知ってる？」

クロノスのからかうような問いに、少女はまた首を傾げる。

皇国の十四姫——メルヴィング＝ロートフォード

先の戦いで英雄に数えられた人物。

四年前に>暗殺<されたとされている。

それも先日リーマが叩きのめした

>実の兄<が送り込んだ刺客によって。

英雄となり、王位に最も近づいた彼女を疎んで。

「・・・皇国の貴族じゃないの？」

「それが違うんだなあ　ていうかりーマ嬢、あの>有名な噂<を知らないの？」

クロノスが言葉を紡ぐたび

会話が進むたび

少年の頬に嫌な汗が浮かび

ぎゅ、と服を握り締める。

「皇国の十四姫は、>悪魔<と>狂った恋に落ちてく、>悪魔の子<を>二人<産んだ」

「？」

それは、どういう意味だろう。

初めて聞く話だ。

それを問おうとした時、不意にソウルが口を開いた。

「それは・・・僕が、話します・・・から・・・」

「え、ちよっとソウル、大丈夫・・・？」

顔色が悪い。

だが間を空けて座るクロノスは心底楽しそうだ。

「・・・僕の母は・・・レフィーリカの現国王、フェイル陛下と恋仲くでした」

「――」

それは・・・

なんというか、>禁忌の恋くだ。

「それで・・・生まれたのが・・・僕・・・と、>ゼノン王子く・・・なんです」

と、いうことは、だ。

ゼノンという人物とソウルは血が繋がった>兄弟くで。

その父親はレフィーリカの王であるフェイルだ、と。

「 電脳図書館に入る資格があるかもしれない。」

「でも、ゼノン王子は僕と・・・母を憎んでいます。」

だからきつと、僕は入れない」

少年は泣いていない、だが、まるで泣いているような表情だった。

「母親は悪魔に魂を売った>裏切り者と罵られて、実の兄には疎まれて、

ほんと、>可哀想く・・・だよねぇ？」

クロノスの言葉で、ソウルの境遇は容易に想像がついた。

――裏切り者の子供、悪魔の子。

王位継承権など与えられるわけもない。

なのに、彼は今、>次期王位継承者くとなっている。

それは一重にクルセイドとの契約があるからだ。

「・・・だけど、リーマ嬢ならきつと大丈夫です」

ゼノン王子は>昔から<リーマ嬢を可愛がつておいででしたから
「それが、残念ながら>記憶に無かつたり<するんだけど・・・」
その言葉に、ソウルを含め全員が驚愕の表情を見せた。

「え・・・ゼノン王子のことも忘れたの？リーマ嬢」
まず一声を発したのはクロノスだった。

「・・・いい気味」

次にアリアが楽しそうにそう呟く。

もちろん、リーマではなくその>従兄<に対して。

「まあ入っちゃえばあとは叩きのめしてでも連れてくればいい話だしねー」

暗くなつた雰囲気明るくしようとクロノスが言うが

「私、二回連続で天使と父親に>負けてる<のよ・・・？」

正直言つて、自信が無い。

>模擬戦<では負け知らずだったが

それは所詮ただの下級天使相手に、だ。

能力はあつても>実戦経験<が浅すぎる。

「ゼノン王子は、確か・・・」

ふと、今まで黙っていたクロスが口を開いた。

「五年前に皇国が>不可侵条約<を破つてレフィーリカに攻め入つた時

>一万の皇国兵を殲滅した<、と聞いたよ」

皇国はリヴァールヴェール王であり黒の死神、クロヴィスが居なくなると

ここぞとばかりに再びレフィーリカに侵攻を開始した。

今度こそは>勝ち戦<になると思つたのだろう。

そして、クロヴィスが居なくなつた十二年の間にあつた

最も大きい大戦が>一年戦争<

五年前に起きた悲惨な戦いだ。

無抵抗のレフィーリカの民を皇国の兵が一方的に>虐殺<した。
それはかつてクロヴィスが直面した境遇と>同じ<だった。
今度は>黒の死神<は居ない。

皇国は勝利を確信していた。

だが、レフィーリカに攻め入った一万の兵は、一人残らず>肉塊<になった。

その時の>救世主<が>ゼノン^{II}アースランド<。

リーマの従兄であり、レフィーリカ第一王子だ。

「・・・より一層自信が無くなるんだけど」

少女はげんなりとした表情で呟く。

>自分は強い<などと驕っていたつもりは無い。
だが>弱い<とも思っていなかった。

けれど実際自分と同等の力を持つ者と戦った結果が>二連敗<。

ふと窓の外を見れば、昼間にも関わらず空には月が昇り始めていた。
「ていうか・・・」

少女は一つ>嫌なこと<を思い出した。

「レフィーリカには>母様<が居るのよね？」

「居るだろうねえ」

クロノスの返答に、少女は憂鬱そうに・・・

悲しげに窓の外を見た。

——母には、もう二度と会えないと思っていた。
いや、会わない、が正しいだろうか。

母は>アルトメイデン<と呼ばれる>聖女<だ。

——アルトメイデン

>元始の神<の血の一滴から生まれたと言われる>古の血<を引く
乙女。

至高神エルの＞双子の兄＜、＞創造主ルナグラム＜こそ＞元始の神＜。

この世界を、ひいては管理する＞エル＜さえ創造したとされている。そして人々の導き手、神の声を聞く者として＞アルトメイデン＜を創った。

未来を見通す双眸

いかなる傷をも癒す治癒の能力

神々と彷徨う魂を鎮める鎮魂歌

心を読む力

至高神とさえ対話できる能力。

それが、＞アルトメイデン＜

だが、なぜか代々リヴァールヴェール

エルスレッド家王女に受け継がれてきたその能力が、リーマには＞無い＜。

生まれつき持っていなかった。

リーマを＞亡き者＜にしようと世に死の情報を流したのは、それもあるのだろう。

エルスレッド家としては＞あつてはならないこと＜だ。

リーマを亡き者にし、リイリアが他の男との間に女兒を授かれればきつとその女兒はアルトメイデンの能力を持っている。

臣下達はそれに期待したのだろうが

リイリアは頑なに縁談を断り続けた。

リヴァールヴェールは一妻多夫制だというのに。

「・・・」

母が何を思つて＞出来損ないの自分＜を庇つたのかは分からない。単に父以外の男と交えるのが嫌なのかとも思ったが

母はそういったところでは＞打算的＜な人だと知っている。

血を絶やさないとめならなんだってする人だ。

王族らしいと言えはものすごく、>王族らしいく。

なんせ血を絶やさないとめに至高神と戦ってしまった人だ。

(・・・母様ってどこかネジが飛んでるのよね・・・)

いつもどこか発想が突拍子も無い母を思い出して

少女は苦笑した。

だが、それも全て>昔のことく。

アルトメイデンとしての能力も無く

人ですらなくなった自分。

あまつさえ世間の人々は>死んだくと思っている。

母には、>会いたくなかつた。

自分は父を殺すかもしれないし

血に汚れ、死に染まった自分など、母には見てほしくなかった。

優しい母のことだ、こんな自分にも心を砕くことだろう。

そんなこと、してほしくない。

それでも、無情に列車は終着を告げる。

白銀の世界へ。

C7・P2「最後の契約者」

空は晴れているのに、白い雪がはらはらと舞い落ちてくる。

満月と相俟って、幻想的な光景だ。

レフィーリカには朝も夕も無い、>常闇の世界<だ。

そしていつも雪が降っている。

・・・と、知識にはある。

実際に来るのは初めてだ。

初めて、ではないかもしれないが。

一般の人間からすれば極寒の地だが、リーマはそんなに寒さを感じない。

これも契約者、だからだろうか。

「・・・」

しんと雪の降る中、父の故郷である街を見る。

明かりの灯った家々。

人通りはほとんど無い。

その最奥に、闇に包まれるようにして静かに王城が佇んでいる。
もし

母に会ったら――

――>他人<、として接しよう

少女はそう心に決めて、一步を踏み出した。

母のことも>忘れてしまった<

>薄情な娘だ<と思われればそれでいい。

雪の積もる道を歩きながら、そんなことを考えていた。

すれ違うレフィーリカの人々は皆

少女達を見ると頭を下げた。

恐らく彼らは自分達が＞契約者＜だと分かっているのだろう。
レフィーリカの民は＞人形の血＜が濃いのだと言う。

つまりは、この世界で言う＞天使＜の血だ。

だから王族でもないのに成人してからは老いないし
普通の人間よりは頑丈な体になっている、らしい。

ふと、ソウルを見ると怯えた様子で視線を地面に落とし
まるで責め苦でも受けている囚人のように歩いていた。

「ソウル」

名前を呼ぶと、少年はびくりと顔を上げる。

「そんなに怯えなくてもいいんじゃない？」

「でも・・・リーマ嬢、僕は・・・僕の、国は・・・」

「嬢、つけなくていい」

「え・・・と、その・・・じゃあ・・・リーマさん」

敬語は生来のものらしい。

「確かにあなたの国がこの国にした仕打ちは簡単に赦されるものじゃないわ」

通り過ぎる人々も、ソウルにだけは冷たい視線を向ける。

冷たいというか、警戒と恐怖、だ。

「でもだから、＞世界を救う＜ことで償えばいいでしょ」

「・・・そう、ですね」

そのために旅をしているのだから。

「母様も・・・それを望んでいました」

少年は悲しげに微笑んで、すこしだけ肩の力を抜いた。
そうこうしているうちに大通りを抜けて

王城の前に辿り着く。

「リーマ嬢、ようこそおいでなさいました
フェイル陛下と＞リイリア様＜がお待ちです」

門番は笑顔で門を開けてくれた。
だが、少女の心には鉛のようなものが一つ、また一つと沈んでいった。

城内に入ると

両側一列に並んだメイド達が同時に頭を下げる。

メイド長らしき人物に案内され、謁見室ではなく執務室に通された。
そこには――

「リーマ！！無事だったのですね！！」

一番、>会いたくない人<と一緒にこの国の王が居た。

栗色の長い髪に、新緑の瞳。

自分と同じ色。

なのに纏う空気はこんなにも違う。

優しい母の声。

懐かしさに涙が出そうになるのを堪え、少女は無表情を繕った。

「・・・>初めまして<、>女王陛下<」

存外にも低い声が出た。

涙ぐんだ母の表情が固まる。

そして、周りに居た仲間達も・・・クロス以外は全員が驚いていた。

「ちょ、リーマ嬢・・・！！」

小声で言いつつリーマの肩を掴んだクロノスの手を
いつもとは違う真面目な表情でクロスが引き剥がす。

そして首を横に振った。

「――そ・・・んな・・・」

母の瞳が>絶望<に染まる。

伸ばした手が空を切ってだらりと落ちる。

——そんな顔、しないで。

母だけは、いつまでもあの優しい微笑みをたたえていてほしい。
だから

こんな穢れた自分には、触れないで。

その様子を見守っていたフェイルは溜息を吐き、メイドに指示して
リイリアを部屋から退出させた。

母が居なくなつたところで、リーマは重い息を吐き出す。

「リーマ、おまえにはおまえの考えがあるのだろぅが・・・あれで
はリイリアが気の毒だ」

執務室の椅子に腰掛けた銀髪赤目の青年は
咎めるような視線をリーマに向ける。

「フェイル陛下、>リヴァールヴェールの第一王女<は>死んだ<
のです」

俯いたリーマの言葉に、フェイルはまた溜息を一つ。

「おまえのそういう、>素直じゃないところ<は父親に似たのだろ
うな」

呆れたように言われて、少女は頭を振り顔を上げた。

「私のことはどうでもいいんです、それより、ゼノン王子の>居場
所<はご存知で？」

「あれの自室の>扉<から繋がっているが、すぐに行くのか？
恐らく入れるのはリーマ、おまえだけだぞ」

「覚悟の上です」

「・・・一つ忠告しておく」

フェイルは瞳を閉じて言葉を紡ぐ

「あれは・・・ゼノンは他の契約者ほど容易にはいかないぞ。

戦いにもなるかもしれない、その上、>電脳図書館<はゼノンが創
りだした異空間

相手のテリトリーで、一対一で勝てる自信があるか？」

「それは・・・」

「おまえは先日、クロウに敗れたばかりだろう」

ぎゅ、と拳を握る。

勝てる保証は無い、だが負ける確証も無い。

正直プライドも自信もズタボロだ。

「行ってみなきゃ分からない、ってことで」

「・・・極論だな」

呆れたような溜息を吐かれる。

これで何度目だろう。

「分かった、案内しよう。だが一度入れば出てこれる保証は無いぞ」

「それでも、契約者を揃え戦うのが私の使命ですから」

席を立ち、フェイルは扉へ向かう。

部屋を出て回廊を進み、辿り着いた扉は蒼く僅かに発光していた。

試しにフェイルが触れると、バチツと静電気のようなものが走った。

「私はこの通り拒まれている」

視線で促され、リーマが扉に触れると

「!？」

ぐにやりと扉が歪み、腕が吸い込まれた。

慌てて引っこ抜く、なんて心臓に悪い仕組みだ。

他の面子も試してみるが

「いった!?!?!?!」

クロノスは即座に手を離してぶんぶん手を振った。

よほど痛かったらしい。

クロスも試しにふれてみるが、バチリと弾かれる。

アリアも同じく。

そしてソウルは・・・

触れる>寸前で今までで一番強い電撃が走った。

それだけ>拒絶されている<ということだ。

「・・・仕方ないわね、んじゃあまあ、一人で行ってくる」
不安そうな面々に笑顔を返して
少女はその空間に足を踏み入れた――

「うわぁ・・・こういう仕組みこれ・・・」

>電腦図書館<と称されたその内部は
真つ暗な暗闇の中で

様々なモニターが映し出されては消えてを繰り返し
足元には蒼く発光した文字の羅列が流れては消えて行く。
とりあえず光が向かう方向へ歩みを進める。
足元と半透明のモニター以外は真つ暗で、
空間が広いのか狭いのかも分からない。

『死神の気配が近くにありますわね』

しばらく歩いたところで、エリザが現れた。
それはリーマにも伝わっている。

この空間の気配と同じ、冷えた水のような気配。

「わ・・・」

そしてその空間は突然現れた。

壁(?)を埋め尽くす半透明のモニター

床を埋め尽くす文字。

そんな電腦世界に不似合いな三次元的椅子に腰掛けて

机に頬杖をつき

その>青年<は半透明のモニターと半透明のキーボードと向き合っ
ていた。

銀色のアシンメトリーカットの髪、紅と蒼のオッドアイ。
紅い目が隠れるように若干左側の髪が長い。

雪のように白い肌、整った顔だちの青年。

リーマより幾つか年上だろうか。

「・・・リーマか」

低い声に名前を呼ばれて、体がびくりとはねる。

「不法侵入したことは謝つとくわ、>ゼノン王子<」

その一言で全て察したのか、青年は顔を上げて少女に視線を向けた。

「記憶を、>奪われたか・・・」

冷たい瞳だと、思った。

真冬の湖面を彷彿とさせる。

触れば手はあまりの冷たさに真っ赤になってしまふのだろう。

「ここに来た理由は分かっている、おまえだけにここへ入る許可を与えたのは

今一度おまえに>問いたいこと<があるからだ」

「？」

カタリ、と席を立つ。

青年は思った以上に背が高かった。

クロスやクロノスより高い。

「おまえは神と戦って、どうする？」

リーマのすぐ目の前まで歩いてきた青年は

少女を見下ろしてそう言った。

「それは・・・死ぬ、でしょうね」

「なぜ死ぬ？」

「至高神と相打ちになるから・・・？」

「違う、おまえは>殺される<んだ」

「？」

青年——ゼノンの言うことはよく分からない。

「おまえは人間どもの良い様に使われて捨てられるだけだ」

「それ……は……」

それは……

確かに、そうとも取れる。

「リーマ、なぜ>奴ら<はおまえから記憶を奪ったと思う？

おまえが自分達にとつて>有利な駒<として動くようにするためだ
ハナからおまえを>人間<として見ていない、今のおまえは奴らの
>手駒<だ」

「だって……ミストレスは私としか契約しないって、言うんだもの
……仕方……ないじゃない」

思わず俯いてしまう。

従兄の言葉は心を決るように響く。

それはそれが全て>真実<だと自覚しているから。

「それがおまえの>戦う理由<か？」

その言葉に顔を上げると

従兄は酷く>不機嫌<そうな顔くをしていた。

「おまえは、>その程度の理由<で……>おまえを守るために<
死地に向かった>父<を

その手で殺めるといのか」

「——え」

父が、自分を守るために……？

「そしておまえに心砕く母を突き放し、>最期<におまえは何を得る？」

>世界の平和<、なんて、この口からはとても言えない。

「私は・・・」

何も、残らない。

何もかも失う、全て。

全て失って、死んでいく。

「リーマ」

幾分優しくなった声音で、従兄が名前を呼ぶ。

顔を上げれば、従兄は僅かに微笑みを浮かべて

少女の頭を撫でた。

なぜかその表情が、仕草が、>懐かしい<と思った。

「おまえはもう充分すぎるほど耐えた、

もうここで、>終わり<にしよう。>私達<がおまえを守ってみせる」

「――」
でも

「生きて、ほしい人が居るの」

少女の呟きに、青年は少しだけ瞳を見開いた。

「だからやっぱり私は、最期まで戦うわ」

生きて欲しい・・・>幼馴染<。

もし自分が死ぬとしても、＞その先＜へ行つてほしい。
顔を上げれば、従兄は悲しげに溜息を吐く。

「・・・強情なところは両親から受け継いだのだろうな」
そして、一步、二歩と少女から離れる。

「一緒に来て欲しいって言ったら、来てくれる？」

「断る」

青年の周囲に冷水が集まる、そしてそれは＞二対の剣＜になった。

「どうして！！戦わなかったら、あなたのこの国だって、亡ぶのよ
！？」

「ではおまえは＞神亡き後の世界＜が想像できるのか？」

「っ！！」

それは、＞続く＜ものだと思っていた。

「＞エル＜はもう限界だ、封じてもまた同じことが起こる。

ならば破壊するしかない、だが・・・破壊したあと、世界は＞均衡
＜を保てるのか？」

「ただ」

それでも

「このまま何もしなくなつて世界は滅びるわ、だったらせめてなん
かしてから・・・」

後悔したいの！！！！！！」

少女も大鎌を取り出す。

何もしなかったことを嘆きながら世界の終わりを見届けるなら
何かした後で世界の行く末を見守りたい。
それはきつと、間違っていない。

大鎌を横薙ぎに振る。

相手が戦闘不能になればいい、殺してはいけない。

だが、少女の大鎌は片手で受け止められた。

「>弱いくな、おまえは・・・弱いままだ」

その時の青年の表情は悲しげで、でもどこか遠くを見ているようだった。

「っ！！」

弱い、なんて、認めたくない。

けれど、それも>真実なのだろう。

「なぜ弱いか分かるか？」

青年の周囲に水球が集まる。

「？」

「死神は>心<で扱う力、>記憶が曖昧<なおまえの力は必然的に曖昧なものになる」

青年の周囲に浮いていた水球が少女に襲い掛かる。

何個かは避けたが、当たった幾つかの箇所が>凍傷<のようになってた。

これは、普通の人間が喰らえば凍傷どころか肉が削げて>致命傷<になる。

「死神の意志にどれだけ同調できるかも>力<に繋がる

精神と死神がシンクロしているだけでは>無力<だ」

「っ・・・初耳だわ」

それでは自分は>弱い<わけだ。

記憶は穴だらけ、ミストレスの真意も分からない。

興味が無かったし、向こうも話す気が無いらしいから聞かなかった。

「そうだろうな、リヴァイルと言ったか・・・あの女の研究は

まだそこまで辿りついていない、

だから>記憶を奪う<などという>愚かな行為<ができる」

そこまで知っているなら研究に加担しろ、とは言えなかった。

あの女の狂った研究がこれ以上進んだら、何が起こるか分かったものじゃない。

「あなたの死神は戦いを望んでないの？」

少女の問いに、青年は厭味な笑みを浮かべた。

「>執行神レジェスト<、>シエンツァ<は戦うか否かの判断は私に一任すると言った

自身は>研究<に没頭したいそうだ」

それはなんとやる気の無い……。

いや、自分勝手？な死神だ。

「>どつちでもいい<なら加担してよ!!」
と、言ってみるが

「どちらでもいいと言っているのは>シエン<だ、>私<ではない」
今度は大量の水が青年の周囲に集まる。

「私はここでおまえを止める、>ミストレスを破壊してもくだ」

「破壊……って、そんなこと……!？」

できるのだろうか。

いや>できる<のだろう。

従兄の目に迷いは無いから――

「ミストレスを破壊すれば>記憶<も戻る……

私は、おまえが苦しむ姿など見たくないんだ

……分かってくれ、リーマ」

その瞳は

真に少女を案ずるものだった。

だが

その瞳に反し少女を戦闘不能にしようというのは本気のようにで

滝のような水流が襲い掛かってくる。

あんなものをまともに喰らえば、体中凍り付いてしまうかもしれない

い。

（イチかバチか・・・）

父が>影<を操っていたように
自分にも、できるかもしれない。
この空間は闇に満ちている。

少女は意識を集中して、大鎌をぎゅ、と握る。
瞳を閉じて、闇へ身を委ねる。

水と、>何か<がぶつかる音がした。

少女には冷水の一滴もかかっていない。

さあ・・・と足元を水が流れ、消えて行く。

少女を覆うように、>半透明の影<が壁になっていた。
それも水を凌げたと判断すると霧散していく。

だが、少女の足元には新たな>影<が生まれていた。

それは少女の背後に蜘蛛の巣のように糸を張り巡らせる

「・・・リーマ、なぜおまえはそこまで戦いを望む」

「・・・>愛した人達<が、平和に暮らせる世界が欲しいから」

その言葉、は――

青年は思わず息を呑んだ。

彼女に記憶は無い、それに彼女は何も知らないはずだ。
なのに彼女が吐いた言葉は

そのまま>彼女の父<が吐いた言葉と>同じ<だった。

「なんて綺麗なことは大義名分で、

ほんとは>どこにも戻れないから<、なんだけどね!」

少女の背後にあった影が青年に襲い掛かる。

切り裂いても切り裂いても生まれる影は

青年の腕や足に絡みつき、身動きを封じた。

「悪いけど、無理矢理にでも一緒に来てもらっわよ」
「強情」

影に四肢を拘束された青年は、呆れたような笑みと共に溜息を吐き出した。

「・・・一つ、約束してくれないか」
「？」

青年の両手から水の剣が消える。

「陛下を・・・」

その瞳は、苦痛を堪えるようだった。

「クロヴィス陛下・・・おまえの父を、>絶対に殺さない<と約束してくれ」

「――」

少女は瞳を見開く。

「それを約束できないなら、私は行けない。ここで>自害<するこ
とになっても」

「願っても無いことだけど・・・殺さずに抑えこめる自信が無いわ」
本音を告げた。

ナイトメアは>強い<。

「いま、この城には>リイリア様<が居るだろう・・・」

「居た・・・けど」

思わず、後ろめたさに視線を逸らす。

「おまえが集めた仲間で、一斉にナイトメアに掛かる

そして弱ったところに>アルトメイデン<の>鎮魂歌<が届けば・・・

・

「・・・恐らく、>正気<を取り戻す」

「？」

「今のナイトメアは、>先の戦い<の死神達と>同じ<なんだ。

至高神の狂気に触れて吞まれている、だが陛下はおまえを殺さなかった

まだ>正氣に戻る可能性<があるということだ」

先の戦いの時は、ナイトメア以外の全ての死神が狂気に触れ神の力を以って>無差別な殺戮<をしていたという。

そしてその神と父が真っ向からぶつかって、弱らせ

母が鎮魂歌を謳い、神々を>正氣<に戻した。

荒療治だが、それしか方法が無かった。

そして父と母の功績あってこそ、今リーマ達は死神と契約できているのだ。

「・・・勝算は、あるんでしょうね？」

「無ければ言い出さない」

その言葉に頷いて、少女は影を取り払った。

四肢の自由を確認し、青年は少女に歩み寄ると

その頭を優しく撫でた。

「・・・おまえを>最後<まで守ると誓おう、リイリア様のためにも、陛下のためにも」

——おまえのためにも。

Chapter 8 - Period 1 「死神ナイトメア」

無事ゼノン・アースランドを仲間に加えた少女は

次なる目的のために動き出す

正気を失っている>死神ナイトメア<

彼を、止めるために――

悲しみの連鎖を

断ち切るために――

蒼く発光していた扉が光を失い

ドアの前で待機していた面々はそれぞれ複雑な表情になった。

無事戻ってくるのか

それとも――

ガチャリと扉が開いて、少女が姿を現す

「リーマ!!」

「リーマ嬢!!」

「リーマ!」

「リーマさん!」

「え・・・なに、みんなここで待ってたの!？」

いきなり大勢に名前を呼ばれて、少女は僅かにたじろぐ。

「騒々しい・・・」

その後ろから、ゼノンが少女の背を押して出てくる。

「・・・チツ」

その顔を見るなりアリアが嫌そうな顔をして舌打ちした。

死ななかったか、と顔に書いてある。

「久しいな、ゼノン」

「・・・>愚息くを叱らないんですね、父上。叱る価値も無いということでしょうか？」

それぞれの面々と同じように壁に凭れて待っていたらしい
フェイルの言葉に

ゼノンは若干刺々しい言葉を返す

「ふふ・・・おまえは変らないな、>子供くのままだ」

今の会話のどこから>子供くという単語がでてきたのか、と思わず問いたくなるリーマだったが

「おまえを愚かだと思ったことなど無い、よく戻ってきてくれた」
そう言つて、フェイルは同じくらしいの身長 of ゼノンの頭を撫でた。
こんなことができるのはきつとフェイルくらいだと思う。

「帰ってきて早々なんだけど、皆に話があるの」

少女の言葉に、面々はそれぞれきょとした顔をした。

——場所を移して此処はレフィーリカ城の円卓の間

それぞれが椅子に腰掛けて、少女の話を聞いていたが

「無理、絶対無理それ！！」

クロノスがいの一番にそう言った。

「無理っぽい気がしなくてもないけど成功させないとゼノンは仲間になつてくれないもの」

要は>ナイトメアを正気に戻そう作戦くだ。

「おまえが無理と言うのはおまえの魔剣がナイトメアには>通じないからだろう？」

ばんばん円卓を叩くクロノスに

ゼノンが嘲笑を浮かべて言う。

「え、そうなの？」

「う・・・ゼノン王子の意地悪ー！！いけずー！！！！
なにも女の子の前でそういうこと言わなくてもよくない！？」

まさにその通りらしい。

となると・・・

「クロノスは戦力外つと・・・」

眩く少女にクロノスが慌てて叫ぶ

「ちょー！待っー！別の剣使えばいいでしょ！？」

「人間が作った剣が>死神くに通用すると思うのか」

呆れたようなゼノンの言葉に

クロノスは恨みがましそうに少女の従兄を睨む。

「ナイトメアには>光を宿す力くが有効だ、この中では・・・」

ゼノンは面々を見渡し

「クロス王子と、>皇国の王子くか」

「――」

>実の弟くだというのに、ゼノンがソウルを見る瞳は
リーマに向けられるものとは比にならないほど冷たい。

少年は俯いて、ぎゅ、と服を強く握って耐えるように瞳を閉じた。

「もう一つの問題はどうやってナイトメアを呼び寄せるのか、だけ
ど」

クロスの言葉にゼノンが応える。

「ここには契約者が揃っていて、なおかつナイトメアのテリトリー
である

>夜くが支配する国だ、近いうちに必ず仕掛けてくる

恐らく真っ先にリーマを狙ってくるだろう」

「？、どうして？」

少女が問うと、青年は若干呆れたような顔をした。

「この世で>至高神を破壊するために創られたくのは
ナイトメアとミストレスの二人だけだ

つまり後はリーマさえ居なくなれば、至高神に>脅威<は無い」
そういえば

そんな話を聞いたような聞かなかったような・・・。

とりあえず

>ナイトメアを止める<

ということとで全員の意見は一致し、解散となった。

時刻としてはもう午後11時を廻る頃だ。

待っていた皆も疲れているだろう。

だが、眠る気になれなかった少女は一人

城の庭園へ向かった。

リンリン、と

鈴の音のような音がする。

レフィーリカのみに自生する蒼氷樹>そうひょうじゅ<の葉の音だ。
幹も葉も全て氷で出来ているが、一応>植物<。

そして庭園を埋め尽くすのは>氷の薔薇<。

これもレフィーリカでしか見られないものだ。

そんな庭園の中央にあるなぜか凍らない噴水の脇に腰掛けていた少女は

先程から隠れているつもりであろう人物に溜息を吐いた。

「・・・隠れてるのかもしれませんが、丸見えですよ」

樹の後ろに背を預けていた人物の肩がビクツと跳ねる。

そしておずおずと姿を現したのは、少女にそっくりな>女性<。

「リーマ・・・」

「貴女は>生身の人間<なんですから、こんな雪の中外に出ている風邪を引きます」

申し訳無さそうな、悲しそうな顔の、>母<。

「だいたい護衛もつけずに、頭が悪いんですか？」
まあそれは自分にも言えることだが。

「あの、その・・・リーマと話がしたくて
へにやりと笑う母は昔と変わらない。」

リイリアはリーマと比較すると>愛らしい<という表現が似合う女性だ。

リーマは父に似たのか、>美しい<と表現したほうが合っている。

「言っただしよう、貴女のことは覚えていな——！！」

「フェイルさんに聞きました、あれは>嘘<だと」

少女の言葉を遮って、すぐ目の前まで歩いてきた母は
そっと、少女を抱きしめた。

思わず体が硬直する。

温かい、母の体。

「あなたが私を憎んでいるのなら、それは仕方ありません。

あなたを守りきれなかった、不甲斐ない母だと、罵られても仕方ありません」

優しく、優しく髪を梳いてくれる綺麗な手。

「でも、私はあなたを>愛<しています<、あなたがどれほど私を憎んでも。」

今更虫のいい話だと言われればその通りです、でも・・・」

「っ・・・もう、いいです」

堪えきれずに、涙が頬を伝う。

少女は母の背に手をまわした。

「憎むはず、ないじゃないですか・・・私が、母様のことを・・・」

「リーマ・・・」

「っ・・・」

ぐつと母の肩を押して引き剥がし、目線を合わせる。

「むしろ・・・っ心配していました、一人で城から抜け出すなんて！！！！」

こんな、いつ天使が襲ってくるとも分からない世界で！！

母様は>生身の人間くなんですよ！？自覚があるんですか！？」

「私なら大丈夫・・・」

「ぶ、じゃないですよ！！どこが大丈夫なんですか！？

人より少し運が良くて、なんとか無事にここまでたどり着けただけじゃないですか！！」

もし母様が乗った列車が天使どもに襲撃されたらどうする気だったんですか！？」

へらへらと笑っている母の頬をぎゅううううううとつねる。

「い、いたいれふリーマ」

「これだけで済ませてあげるんだから感謝してください！！」

「ふあい・・・れも、いたいれふ・・・」

ぱつと手を離すと、母の頬は少し赤くなっている

でも母は嬉しそうに笑っていて

リーマの頭を昔のように撫でてくれた。

「リーマが無事でいてくれて、私も嬉しいです。大きくなりましたね」

——十二年。

母は、何も変らなかった。

自分が、>殺人鬼になっただけ。

「母様は、私が恐くないんですか？軽蔑しないんですか？」

「どうしてですか？」

「だって私は、もう人じゃなくて！！人殺しで！！この手は・・・血まみれで・・・」

堪えていた感情が堰を切って溢れ出す。

だが、母は優しく少女の右手を両手で包み込んだ。

「人でも、人ではなくても、私は愛していますよ。リーマも、あなたの＞お父様くも」

そこで少女は顔を上げた。

リーマの新緑の瞳には涙が溜まっている。

母は、優しく微笑んで

ぎゅ、と少女の手を包み込んだ。

「何かを守るために戦うのは、悪いことでしょうか・・・それが、命を奪うことでも」

父は祖国を守るために戦った

二千万の兵を殺して死体の山の上に立った。

だが・・・

「私は、そんな＞綺麗な理由くで戦ってきたわけじゃない！！

どこにも戻れないから・・・もう帰る場所が無いから・・・だから・・・！！

＞自分勝手な理由くで、殺してきた・・・」

本当は、こんなことを言っではいけないのも分かっている。

殺すのが嫌なら、殺されてやればよかったのだ。

殺した後でごめんなさい、なんて、＞偽善者くもいいところだ。

「それも、＞運命くでしょう。あなたを＞そうせざるおえない状況くにしたのは私です。

責め苦を受けると言うのなら、それは私でしょう、あなたが気負うことではありません

＞女王としての責務くを果たせなかった・・・私の責任です。けれど・・・」

母は悲しげに瞳を伏せた。

「もしあなたがミストレスとの契約に失敗していたら、あなたは死んでいたかもしれない。

あなたが生きていてくれて良かったと思う私は、きっとあなたよりずっと・・・>罪深い<」

彼女が殺してきた幾つもの命より

彼女が生きてくれていてよかったと

>聖女<という立場>女王<という立場からすれば

決して言うてはいけない、思うことさえ許されない。

自分は>母<である前に、聖女であり女王なのだから・・・

だが自分はいま>玉座<に居ない。

だから、今だけ・・・今だけ、赦してほしい――

「リーマ、あなたが無事でいてくれて・・・私は本当に、嬉しいのです」

そう言つて、もう一度体温の低い>娘<の体を抱きしめる。

――それを、上の階から見下ろす面々。

それぞれ別の部屋に居たが、中庭はどの部屋からも見える。

「・・・よかったねえ、リーマ嬢」

弟の部屋に押しかけていた兄は微笑ましそうにそう言った。

「ああ・・・」

クロスも、兄の前では珍しく穏やかな表情でそれを見守る。

そして別室のソウルは一人、悲しげに二人を見ていた。

「・・・母親」

小さく、呟く。

四年前、>目の前で殺された<母は・・・微笑んでいた。

>自分の願いくを、ソウルに託すから、と。

——四年前

それは真夜中の大聖堂で起きた。
きつと母は全て知っていた。

知っていて、>死ぬ<と分かっている、自分を連れて大聖堂に向かった。

クルセイドとの契約の対価は、>最も愛する者の命<。

それは、後から知った事実だ。

ソウルには母だけが>味方<で、>家族<だった。

母は、ソウルが一番自分に懐いていると悟っていたのだろう。
だから、>自分が死ぬ<覚悟をした。

『ソウル……いい？あんたは……あんたが思うほど弱くなんてない、だから……』

血まみれで、口の端から血を流しながら、母はぎゅっと自分の手を握った。

『戦って、いつか来る……契約者と一緒に、そして……世界、を……守って』

にこりと笑う母の背後に、クルセイドは現れた。

瞳孔を見開いて愕然とし、座り込んだ少年を悲壮な瞳で見つめて。

『ソウル……あんなの>家族<は……>味方<は……あたしだけじゃない……』

金色の髪も血に汚れて。

それでも母の紫紺の瞳は最期まで強い輝きを宿していた。

『フェイルも・・・ソウルを愛してるわ、ゼノンも・・・きっと、いつか・・・分かつ・・・て・・・』

倒れこむ母の体を、震える手で支えた。

流れて行く血が生暖かい。

でも、すぐに冷えていく。

母の体から、体温が消えて行く。

『いやだ・・・いやだよ！！母様！！ぼくを置いていかないで！！』

泣きじゃくる少年に暗殺者達の矛先が向いたとき
体の中に>膨大な力<が流れ込んでくるのが分かった。

『おまえたちが・・・母様を・・・殺した・・・。僕には・・・母様しか居ないのに・・・』

少年の瞳に憎悪が燃え上がる。

その>力<で、少年は狂ったように、母を殺した者達を文字通り>八つ裂き<にした――

「・・・母様・・・僕は、弱いままです」

少年の瞳を、涙が伝う。

――一方

フェイルとゼノンは執務室から二人を見下ろしていた。

「・・・まったく、強情だな、リーマも・・・おまえも」

「なぜ私まで含まれるのですか？」

不満げに言っと、フェイルはくすくすと笑った。

「リーマに>ゼノン兄様<と呼んでもらえなくて拗ねているくせに」

からかうように言われ、青年の表情がぶすつとしたものになる。

「別に拗ねてなどいませんし気にしてもいません」

「・・・そうか、だが向かったのがリーマでなかったらおまえは出てこなかっただろうな」

「・・・」

「おまえは子供の頃から>クロウに<心酔していたし、もちろんその娘であるリーマも溺愛していたが・・・」

ふと、フェイルは言葉を区切って真剣な表情になった。

「その愛を少しは>ソウル<にも分けてやったらどうだ？」

その瞬間、青年の表情が冷えたものになる。

「五年前のことをお忘れですか？ 皇国は変らない、>陛下<が居なくなったら

好機とばかりに不可侵条約さえ破つて攻め込んだきた

>あの女<も、>あの子供<も、それを止めなかった」

「>実の母<を>あの女<と呼ぶんじゃない、もう>亡き者<まで侮辱するほど

おまえは堕ちていないはずだ。

メルは止めようとしたらう、止めようとした結果兄に疎まれ殺された。

ソウルはそれを目の前で見た>被害者<だ、

それはおまえも分かっているだろう？」

父の言葉が核心を突くからか、青年は怜悯な表情をさらに冷たくさせて踵を返した。

「・・・気分が優れないので失礼します」

そう言つて部屋を出て行く。

「・・・まったく、素直じゃないところも>母親<に似たのか」

フェイルはしばらくぼんやりと外を眺めていたが

やがてペンを手に決済書類にサインする作業を続けた。

ちなみにアリアはとくに眠っていた。
彼女はどこまでもマイペースなお姫様である。

C 8 - P 2 「死神ナイトメア」

「母様、これ以上こんな寒い中に居たらお体に障ります、戻りましょう」

少女が立ち上がって、母の背を押す。

「そうですね、リーマ」

微笑んで、母がそう応えた。

その、刹那

ぱちぱち

「泣かせるわねえ、>親子愛<・・・」

小さな拍手と、少女の声に

リーマとリイリアは瞬時に振り返った。

そこには金色の長く緩くウェーブのかかった髪に、紅い瞳の少女。

>天使<のように優しい微笑みを浮かべていた。

「エル・・・!!」

母がその名呼んだことで

リーマも理解する、あれが、あの少女が・・・至高神、>エル<

「まったく・・・>反吐が出るわ<」

途端、少女は別人のように嘲笑を浮かべ、二人を見下すように見つめた。

(?)

だが、リーマの中では見下されていることより他の疑問が首をもたげていた。

(この声・・・)

昔、よく>夢<を見ていた。

―助けて―

闇の中で誰かが泣き叫んでいる。

―どうか、お願いだから……―

嘆きの声。

―助けて……―

はつきりとは聞き取れない少女の声。

誰かが泣いている。

『あなたは……誰……？』

暗闇に問いかけても答えは無い。

ただ一方的な言葉だけが

雪のように降ってくる。

―助けて……全てが壊れてしまう前に……―

『こわ……れ……る……？』

闇の中を白い蝶が通り過ぎる。

―私が……消えて亡くなってしまふ前に……―

蝶は白から紅に染まり

黒い世界を紅く紅く染めていく

『――っ！――！』

悪寒さえ覚える>狂気<

―ソレガ ネガイナラバ カナエマシヨウ？―

あの夢の中の声と、>同じく。

「クロヴィスはなかなか手綱を握るのが難しくて、言うことを聞いてくれないの。

でも、ねえ……リイリア？あなたと、実の娘を>自分の手<で殺したら

さすがにあの強情なナイトメアも絶望に染まるのではないかしら？」
闇が集まり、エルの隣に父が……>ナイトメア<が現れる。

だがその瞳は何も映さない、>正気ではない。

「母様、下がっててください！」

「でも・・・！リーマ！！」

今は考え事をしている場合ではない

そう判断して母を背後に押しやり、リーマは大鎌を取り出した。

「あら・・・」

完全に臨戦態勢のリーマを見て、エルは口許に手を当てる。

「あなたは>父親似くなのね？可愛いわ」

そして微笑みを浮かべる、不気味なほど綺麗な。

「私ね、>綺麗なものを集めるのが>趣味くなの。

だから・・・あなたも>私のもの<にしてあげてもいいわ」

「お断りだわ！！」

少女の言葉を跳ね除けると

エルは残念そうな顔をした。

「そう？残念・・・じゃあ、>力ずくでも<私のものにするわ」

また天使のように微笑む。

結果は同じではないか。

と内心で悪態を吐く。

だが母を殺す意志が変わらない限り、自分は負けるわけにはいかない。

エルが顎で合図した瞬間――

振りかぶられたナイトメアの刃と、リーマの大鎌の柄がぶつかって
火花を散らす。

これでは、>前<と同じ図だ。

また先手を取られた。

だが、>違うこと<も起きた。

足元の影が蠢いて、幾つもの>刃<となり

少女の体を貫いたのだ。

「か・・・っは！」

その光景に、リイリアは口許に手を当てて悲鳴を堪える。

「こん・・・ちくしょう・・・!!」

だがリーマはそれでも、大鎌を支える力を緩めない。

いま緩めれば自分は斬り殺され、母も殺される。

それだけは、絶対・・・。

ずるりと影の刃が全身から抜けて真っ赤な血が噴出す。

しかし次の瞬間

集まった影は巨大な刃となり、少女の>心臓<を貫いた。

「い・・・!??・・・が!!」

契約者は心臓を貫かれても、>すぐには<、死なない。
だが、それも時間の問題だ。

（私が、守らないと、私が・・・母様を）

そして、父を。

ギリギリと刃が首筋に迫ってくる。

その刹那

パリン！と音を立てて影の刃が粉々になった。

「——クロス!!」

「無事・・・ではないよね、遅れてごめん、リーマ」

白銀の刃が、影を振り払っていた。

そして、ナイトメアの背後から水球が幾つもその背中にぶつかり
わずかにナイトメアがよろめく。

その隙について少女は刃を振り払った。

「まったくおまえは・・・あとで説教が必要だな」

ナイトメアの背後に、双剣を手にした従兄が見える。

「リーマを傷つける奴は・・・みんな私の敵・・・!!」

さらにナイトメアの脇腹を血色の槍斧が抉り

>真っ黒な血<が噴出す。

ぐらりと体勢が揺らいだ、その瞬間

「ごめんなさい・・・陛下!!」

小さな手がナイトメアの心臓を貫き、ずるりと何かくを引きずり出す。

ソウルの手には、真っ黒な心臓く。

契約者は心臓を奪われてもすぐには死なないが
ナイトメアはまた体勢を立て直そうとしていた。
心臓を、奪われたというのに。

「っ!!させない!!」

リーマが大鎌を振りかぶるより速く、その隣を黒い影が通り過ぎて
白銀の刃がナイトメアの腹を貫いた。

そう、クロスだ。

そして大鎌の追撃が来るより速く剣を抜いて後退する。

>黒い血くが地面を染め上げて行く。

「リイリア様!!」

クロスの声に、リイリアはいつものほんわかした表情ではなく
真剣な表情でリーマの前に出た。

女王の威厳さえ漂わせる、その姿は、初めて見る母の顔だった。

『――』

そして、古代語だろうか

母の唇からく唄くが紡がれる。

『月が揺れる湖面に』

『星が流れ零れた』

『夜ごとに踊る』

『血に染まる剣と剣』

『生暖かい闇に溶かして行く』

『神への恐怖を焼き尽くして』

『今』

『恐怖という鎖から解き放たれたり』

『月が滲む湖面に』

『流れた星』

『そつと朝に触れ溶けて消える』

『その恐怖と』

『狂気と共に』

『全て』

『楽園へ還り』

『昇華されよ』

古代語のはずなのに、母が言っていることの意味が何故か理解できた。

ナイトメアは蹲り、大鎌は消えて

ただ必死に耳を塞ぎ苦しんでいる。

それを噴水に腰掛けて眺めていたエルも、眉を顰めていた。

だが、そんなこと気にも留めず

母は父のもとへと歩いて行く

「母様！！」

いくらなんでも危険すぎる。

石畳に膝をついて、母は父をそつと抱きしめた。

「クロウさん、もう・・・いいんです、あなたはもう・・・戦わなくていい」

「——」

ゆつくりと、父が顔を上げる。

その蒼い瞳は、色を変える海底のような輝きを取り戻していた。

「リィ・・・リア・・・？」

「はい、そうですよ、クロウさん」
ぎゅ、と父を抱きしめて。

「——そうか、僕は……」
流れる血が黒から赤に変わって行く。

「つまらない」

二人の前に、エルが歩いて行く。

「つまらないわ、まったくつまらない」

「っ……エル……!!」

母を背後に押しやって、父は大鎌を取り出すが
とてもではないがもう戦えたものではない。

「あなた、もう要らない」

「!」

「愛だのなんだの、>くだらないことにく感化されたあなたなんて、
もう要らないわ」

そして少女は微笑んでリーマに視線を向けた。

「もっと、>面白い玩具くを見つけたしね」

ぞつとするような視線に、知らず冷や汗が頬を伝う。

C 8 - P 3 「死神ナイトメア」

——『また今度迎えに来るわ』

そう言い残して、エルは消えた。

その後、気絶した父をゼノンが元々父の部屋であった場所に運び現在、円卓の間に父以外の契約者全員が揃っている。

「まあ、なんとかあったけど・・・」

「あー・・・全く活躍できなかった・・・」

溜息を吐くリーマと同時に溜息を吐いて、クロノスが机に突っ伏す。だが、そんなクロノスをゼノンが冷たい瞳でじっと見据えていた。

「あれ？なんだいなんだいゼノン王子、僕＞ソツチの趣味＜は無いよ」

「・・・」

茶化すクロノスに対し、それでもゼノンは冷たい瞳を向ける。何か、＜観察＜するような。

「？、ゼノン？」

「・・・なんでもない」

リーマが声をかけると、ゼノンは漸く視線を外した。

「？」

何か気になることでもあったのだろうか。

まあ今は話す気が無いようだ。

「で、まあ全員揃ったわけだけど・・・何も起こらないわね」

話題を変えてみると、クロスがそれに応えた。

「＞神の世界へ続く道＜は、リヴァールヴェールにあるらしいからね」

「え、そうなの？」

「おまえは自国のことも何も知らないのか・・・」

ゼノンの呆れたような声に、う・・・と言葉が詰まる。

「リヴァールヴェールが四つの国の>中心<にあつて、

>他国に攻められ無い<のを不思議に思わないのか？」

「それは・・・え、なんでだろう・・・」

一度くらいは侵略されたことがあるものだと思っていたが記憶が無いのだ。

もちろん歴史関連の記憶も無い。

「『リヴァールヴェールの玉座がエルスレッドの血で穢れることがあれば

世界は腐敗し>冥府<へ姿を変える』、という言い伝えがあるからだ」

「そんなのただの>伝承<でしょう？」

「何百年も前に一度だけ、>皇国<がリヴァールヴェールと戦争をしたことがある」

その言葉に、ソウルがビクリと肩を揺らす。

皇国とは本当に戦争が好きなようだ。

「その時、王女の一人が死んだ。その瞬間

花の都と名高いリヴァールヴェールの大地は漆黒に染まり

空は血の色になり、桜は血飛沫を散らすように散り

攻め入った者達は>亡者<になったという」

「うえ・・・」

それはかなり想像したくない地獄絵図だ。

「・・・でも、今は普通じゃない」

一度そこまで腐敗したら、二度と元に戻らないと思うのだが。

「その時代のアルトメイデンがリヴァールヴェールを守護していた

>ミストレス<の怒りを

その唄で鎮めたのだそうだ、そして花の都は本来の姿に戻ったが以来、どの国もリヴァールヴェールには侵略しようとしな

なるほど。

リヴァールヴェールは軍事力で言えば強いほうではない。

落とすのは簡単だが落とせば冥府に変わって人など住めなくなってしまう。

しかもゾンビを大量生産してしまう。

そんな土地を手に入れても損しかない。

むしろ軍事力で言えば一番はここ、レフィーリカが有している。

ただこの国の国民性というか、>戦う意志<というものが欠落しているのだ。

だから力があっても抵抗しないし攻め入らない。

レフィーリカの民というのは戦うより>本を読むほうが好きく、そんな国民性だ。

だから城下町には本屋が沢山ある。

「そいえば、リヴァールから連絡が無いわね・・・」

また研究にでも没頭しているのだろうか、このときは・・・

まだそんなことを考えていた――

――『命と想いを弄ぶ・・・あなたにはいずれ、>天罰<が下ることでしょっ』

なかなかどうして、>アルトメイデン<の>予言<というのは当たるらしい。

勿論私はそんなもの信じていないし

仮にアルトメイデンの能力が本物だとしても実験対象ではない。

「く・・・ごほっ・・・」

深紅に染まった白衣。

口から吐き出された血が鋼鉄の床を流れて行く。

「ハハッ・・・まさか、本当に>天罰<が、下るとは」

目の前には以前>実験対象<だった青年<にそっくりな天使。

クロスⅡアークに瓜二つな天使が居る。

天使の握る剣は深紅に染まっており

この場で息をしているのはもう自分だけだ。

腹から背中にかけてぽっかり空いた穴。

そこからとめどなく生温い血が流れて行く。

「お前達が居なくなれば・・・リーマは>自由<になる」

そう言つて、天使は踵を返した。

もう用は無いというように、破壊された扉の向こう側へと消えて行く。

蹲った女は、血で染まった床に爪を立てた。

——リヴァイルが生まれた家は、ごくごく平凡な医者の家系だった。

小さな医院を経営しており、両親はいつも優しくかった。

そして幼いリヴァイルに>命の尊さ<を説いたものだ。

リヴァイルには病弱な弟が居た。

いつもベッドで寝ているというか

そつするしかない弟に、絵本を読み聞かせたりもした。

仲の良い姉弟だった。

だが、平穏な日常はある日突然崩れ去る。
学校から帰って、家の扉を開けた瞬間
若い少女は状況が理解できなかった。

赤、赤、赤、赤、赤。

部屋を埋め尽くす血の赤く。
そして部屋の中央に立つ少女。

緩くウェーブのかかった金色の長い髪に
血色の瞳を持つ少女は

>母の生首くを携えて振り返った。

まだ五英雄が>エルくを封じる前の話だ。

そして

あの女は

少女の目の前で

弟の頭、を・・・潰した。

あの日から、少女の日常は>狂気く塗れていった。

大学に入ってから人体実験を繰り返す、功績を上げ
女史の地位まで上り詰めた。

全てはあの女に、>エルくに復讐くするため。

昔よく両親は>命は尊いものだと言っていたが

それはその命と時を重ねた者にとっての話。

リヴァイルの周りにそんな人間は居ない。

全てが＞実験対象＜であり、＞価値の無い命＜だ。

エルに復讐し得る＞最強の殺戮人形＜を生み出すこと――

それだけが、目的だった。

「ハハ・・・私も、これ、まで・・・か・・・」
意識が揺らぐ。

遠くで母の優しい声が聞こえた気がする。

――もう、休みなさい。あなたは＞罪＜を背負いすぎた・・・――

そうかもしれない。

自分は、命を奪いすぎた。

これは、その＞報い＜なのだろう。

女の野望は燃え尽き、呼吸はそこで止まった。

Chapter 9 - Period 1「運命の胎動」

全ての契約者が揃った

神の世界

エリユシオンへ向かうために

選ばれし者達はそれぞれの故郷へ向かう

其れは、終焉へ向かう叙事詩の始まり

月明かりが照らす薄暗い部屋で

リイリアはずっと眠る青年の手を握っていた。

契約者は心臓を奪われても、肉体を潰しでもしなければ死ぬことはない。

人より少し冷たい青年の手を握りながら、女は>過去<へ思いを馳せた。

―― 幾年か前

リイリアはまだ十五だった。

城の奥に幽閉され、そう、>今<とあまり変わらない。

>ただ居ればいい<

そんな思惑が嫌でも伝わってくる日々だった。

>アルトメイデン<さえ居れば救われるのだと信じてやまない人々。
だがそれは違う。

アルトメイデンだからといって何ができたわけでもなかった。

死に逝く民の一人も助けることなどできなかった。

そんなとき、少女は一つの>噂<を聞いた。

冷戦状態にあったレフィーリカに皇国の十字軍二千万が攻め込んだと。

勝敗など明らかだった。

だが少女はその>噂<に希望を見出した。

攻め込んだ二千万の兵を、一人の少年が>一度の戦いくで殲滅したという。

その少年は剣で刺しても銃で撃つても全身を串刺しにしても死なず

そう・・・人々から見れば

――>化け物<

全身黒ずくめで、漆黒の大鎌を操ることから

その少年は>黒の死神<と呼ばれた。

少女は悟った。

きつとその少年は>契約者<だと。

そして少女は機を見て城から脱走した。

その直ぐ後のこと

城下町で天使に襲われ、死さえ覚悟したときに

目の前に現れた>少年<。

黒い髪、蒼い瞳、雪のように白い肌・・・漆黒の大鎌。

軽々と天使を切り伏せた少年。

彼に最初に抱いた感情は>恐怖<だった。

彼は言った、少女の>力<が必要だと。

少女は迷わず頷いた。

その時に出逢った少年こそ
当時十五歳だった

クロヴィスⅡアースランド

後のリイリアの夫。

そしてナイトメアの契約者。

出逢った時はまさか彼と結ばれるとは思っていなかった。
なんせ最初自分は彼にいたく>嫌われていたくのだ。
でも、いつからか彼は自分を守ってくれるようになって
そして優しい微笑みを見せてくれるようになった。

そんな昔のことを思い出して、苦笑する。

その時、ぴくりと青年の手が僅かに動いた

「！」

そして伏せられていた漆黒の長く艶やかな睫毛が震える。
宝石のように綺麗な蒼い瞳が薄っすら開いて
何度か瞬きをした後に女へ視線を移す。

「・・・リイリア？」

「はい、そうですよ、クロウさん」

優しく微笑んで、ぎゅ、と手を握ると

青年も柔らかく微笑んだ。

「長い・・・>悪夢<を見ていた・・・そんな気分だ」

深い溜息を吐いて、青年は上半身を起こす。

もう起きられるまでに回復したのかと、少し驚いてしまう。

「クロウさん、最後までエルの言いなりにはならなかったんですね」
苦笑しながら言うと、青年は首を傾げた。

「だって、いくら契約者が揃っていたからって
あなたがあんなに大人しく防戦一方になるなんて、在り得ませんか
ら」

「・・・少しだけ、>意識<が残ってたからね。

>あいつ<の言いなりになるなんて冗談じゃない」

左胸に手を当てて、>心臓が再生されていること<を確認して
青年は苦虫を噛み潰したような顔をした。

彼の實力はあんなものではない。

リーマなど一瞬で斬り殺せるだろう。

それにこれだけ闇に支配された国だ、闇という闇が刃になって
襲い掛かってきても不思議ではない。

だから、リーマが刃を受け止められた時点で

実はリーリアは>勝利<を確信していた。

とはいえ、愛娘の体に刃が突き刺さるのは見るに耐えなかったが。

クロウが本気でリーマを殺そうとしていたなら

リーマの大鎌を>押し折って<その首を刎ねたことだろう。

彼は>失いたくない<という想いが人より突出している。

だから、その意志一つで神に抗ったのだろう。

「リーリアも、リーマも、無事で良かった」

ぎゅ、とリーリアの手を握り返して

クロウは慈しむような瞳を向けた。

「残念なのは・・・リーマが僕を>忘れてしまった<ことかな」

「ご存知だったんですか・・・」

「うん・・・君も12年も幽閉された・・・完璧に守りきれなくて、
ごめん」

玉座に戻ったら、リーリアを幽閉した者、リーマを研究所に売った者
全員まとめて>処罰<を与えよう考える。

もちろん、>極刑<。

自分だけ生き残ろうなどと考える愚かな輩は、あの国に必要ない。
そんな者が蔓延るのは皇国だけで充分だ。

「あなたは最後まで私達を守ってくださいましたよ、全身全霊をかけて・・・

何より、私はあなたが無事に戻ってきてくださったことが、一番嬉しいです」

そう告げて

女は身を乗り出すと

青年の唇に口付けた。

「――」

早くも>処罰<に関して考えていたため
完全に不意打ちだったのか、青年はぼかんとしている。

それにくすくすと笑いながら、リイリアはまた手を握る。

「リーマの記憶はきつと戻ります。だから、また一緒に・・・帰り
ましょう」

そう言つて、もう一度ぎゅ、と手を握る。

もう二度とこの手を離さないように――

――・・・その頃

リーマ達はゼノンの部屋に集まつてその光景をただただ眺めていた。
半透明のディスプレイが開いては消え

火花でも見えそうな速さでキーボードを打つ従兄。

>エリュシオン<への進入方法を探るため

>この世界<の始まりから終わりまでを管理する

>アカシックレコード<にアクセスしているのだ。

それができるのは、情報処理能力に長けた>執行神レジエスト<を
宿す彼だけ。

『ゼノン・・・本当に>こんな奴らしくに協力するのか?』

青年の隣に、薄い水色の髪に蒼い瞳、右目にモノクルをかけた手の平サイズの

>死神<が居る。

あれが、ゼノンの言っていたシエンツァ、レジエストの本体。

>レジエスト<とは>記録文書<という意味らしく

情報能力に長けている。

「なんだ、シエンは不満か?」

ディスプレイを見ながら、ついでにキーボードを休まず打ちながら言う青年に

シエンと呼ばれた死神はリーマを一瞥した。

なんというか、>侮蔑<、そんな瞳で。

(う・・・なんか、嫌われてる?)

思わず顔が引き攣った。

『記憶を失っているのだろうか?その上>契約者<としての力も大したことは無い。

こんな女ではエルに太刀打ちどころか、その前の>大天使<に敗れてしまう

・・・命は大事にしたほうがいいと思うぞ』

思わずグツと拳を握る。

(悪かったわね弱くて!!記憶が無いのは私のせいじゃないけど!!)

しかし弱いのは事実で、もう認めるしかないレベルだった。

「ん・・・」

その刹那、今まで高速でキーを打っていた青年の手が止まる。

「リヴァイルという女、死んだらしいぞ」

「——は?」

意味が、分からなかった。

あの女が、死んだ？

「いや、正確にはリヴァールヴェールにあった＞研究所＜に居た人間その＞研究＜に関わった人間全員が＞殺されたくらいだな」

「だ、誰に！！」

あの女は嫌いだ。

嫌いだが、死ねとまでは思っていなかった。

しかも殺されたのは彼女だけではない・・・？

「犯人は分からないそうだが・・・研究所の＞正面＜から入って扉を＞破壊＜し

中に居た全員を逃げる前に殺したとなると・・・＞人間＜の所業ではないだろうな」

「ーじゃあ、天使・・・？」

「並みな天使ではないだろう、恐らくは高位の・・・」

「――・・・つ、う」

刹那、クロスが額を抑えて僅かに揺らいだ。

「クロス？」

慌てて駆け寄ると、青年の額には脂汗が浮かんでいた。

「大・・・丈夫」

それでも少女を安心させるように優しく微笑む。

唐突に意識に流れ込んできた＞見知らぬ記憶＜

蹲るリヴァール、血に濡れた剣。

――これは、＞誰＜の記憶だ？

頭痛と耳鳴りが酷い。

少女の声もよく聞こえない。

それでもクロスは平静を装って壁に背を預けた。

「クロス、本当に大丈夫なの・・・？」

「大丈夫だよ、リーマ。心配しなくていい」

それを眺めていたゼノンは、クロスとリーマを交互に見て

（男の趣味が悪いのは記憶を失っても変わらないか・・・）
そんなことを考えながら視線を逸らした。

「>楽園<・・・>ワールズ・エンド・ガーデン<へ続く道を出現させるには、

それぞれの死神を、それが守護する国の>玉座<に連れて行かねばならないようだ」

「へー・・・ってあれ？レフィーリカにはナイトメアとレジエストの二人が居るけど・・・」

ヴァルゼドには居ないのではないか？

と問う前に、シェンツァが口を開いた。

『私は元々ヴァルゼドの守護神だ、先代の王の不甲斐なさに呆れて放浪してここに落ち着いただけで』

自分勝手な上に放浪癖まであるらしい。

契約者と死神は契約者が死なない限り>契約<が無くなることはない。

だから、恐らくゼノンが死なない限りヴァルゼドに守護神は戻らないのだろう。

「じゃあ、ここの守護神は・・・」

「ナイトメアだ」

ゼノンの返答に、やっぱりかと内心頷く。

正直、父には会いたくなかった。

記憶も無いし、致し方ないとはいえ二度も刃を向けた相手なのだから。

「んじゃ、まずは父様をレフィーリカの玉座に連れて行けばいいの？」

「そうでもないらしい、>順番<があるようだ。

最初にリヴァールヴェール、次にヴァルゼド、次にレイファリア、その次にネジュラネシス、最後がレフィーリカ・・・らしい」

椅子に腰掛け、机の上のキーボードに手を置いて
青年は溜息を吐いた。

「ん？そいえばさつきエルの居る場所を>ワールズ・エンド・ガーデン<って言ってたけど」

「>エリユシオン<というのは>この世界自体の名称<。

まあその名自体>天界を意味する<のだが、その天界にあつて>天界<を指す言葉が

ワールズ・エンド・ガーデン、という隔離された世界らしいな」

人々はこの世界をELYSION>エリユシオン<と呼ぶ。

それは英雄や徳のある魂が死後に集う世界を意味する。

だから>天界<という概念があまり無い。

天界も>エリユシオン<と呼ばれている。

そう、ここは>楽園<、>理想郷<なのだ。

そうでなければならない。

——そうでなければならなかった

なのにこの世界は今>冥府<と呼んだ方が相応しい世界になりつつある。

「なるほど・・・じゃあまあ、まずはリヴァールヴェールに戻るのが先決ってことね。

・・・>あいつ<の、墓くらい見てやるべきだろうし」

少女の表情に僅かに影がさす。

あくまで>見てやる<だけだ。

あいつは>作品<に墓参りなどされても嬉しくないだろう。

「>陛下<には、会わなくていいのー？」

クロノスの言葉に、少女の体が僅かに固まる。

陛下、が指すのは父のことだろう。

「いい・・・どうせ、わかんない——」

「会っていい」

少女の言葉を遮ったのは、従兄だった。

「>記憶を取り戻す手がかりになるもの<には進んで接するべきだろう。」

おまえには、今のおまえには・・・記憶を取り戻す>義務<がある私達をワールズ・エンド・ガーデンに連れて行くのは>おまえ<なのだから」

椅子から立ち上がり

少女の前まで歩いてきた従兄は
ぽすぽすと少女の頭を軽く叩いた。

「おまえの背に五人の命がかかっているんだ」

「っ・・・重い、わね」

最初は嫌々だったとはいえ

いや、今も大差ないが

それは事実だ。

契約者を揃えた

あと、少女が生きて成すべきことは一つだけ。

もうそれを強要するものも束縛も無いが、>やらなければならない<と思う。

——心の奥底が、そう悲鳴をあげているから。

綻び始めた>記憶<。

確実に変化を始める>現実<。

少女は頭を振ると

溜息を吐いてドアへと向かった。

「・・・行ってくる」

そう言つて。

C 9 - P 2 「運命の胎動」

――・・・

死神の気配を辿って辿り着いたのは中庭だった。

「会いに来てくれるとは思わなかったよ」

もう歩けるまで回復していることにも驚いたが

振り返ることなく口を開いたことにも驚いた。

気配を消すのはすでに癖のようなもので

そう万人誰にでも悟れるわけではないし

悟れる者のほうが少なくなっただと思っていたのに。

「・・・父様」

そう呼ぶと、氷の薔薇を眺めていた青年は振り返った。

漆黒の髪、蒼い宝石のような瞳、雪のように白い肌、漆黒の服。

少し悲しそうな笑みを浮かべて。

「・・・僕はね、君が>僕<を>忘れてしまう未来<も予想していたよ。」

だから、本来ならずっと傍で守っていてあげなくてはならなかった・

だけど、その道を選ばなかった僕を、君が憎むならそれは仕方ないことだと思う」

「・・・」

「結果的に、リーマには僕よりずっと重い>使命<を負わせることになってしまった」

「>ソレ<なんですけど」

ここに来るまでに考えていたことを少女は口にした。

「父様が契約者を率いて戦うのでは駄目なんですか？」

少女の言葉に、青年は苦笑した。

「それは、>無理くなんだよリーマ」

何故。

父のほうが自分より圧倒的に強い。

他の契約者も加わればエルを破壊することだって出来るかもしれない。

少なくともシエンツアに>弱いくと断言される自分よりはマシだ。

「リーマ、君は幼い頃から繰り返し見る>夢くがあるだろう」

「？」

——夢？

しばらく考えて、>声くのことを思い出す。

雪のように降ってくる、>少女の声く。

白い蝶が紅く染まる。

エルに遭った時、同じ声だと思った、あの・・・>声く。

「リーマ、君はね、エルが正気の時・・・最期に創りだした>己の分身く

いずれ自分に成り代わって>神となる者く、なんだよ」

「は・・・？」

話が壮大すぎてついていけない。

「リーマ以外の契約者がエルを殺せば、この世界は>均衡くを保てなくなつて滅びる。

リーマが・・・君が、>新世界の神くになるんだ」

「なんかそんな台詞を言つてる漫画をどこかで読んだような・・・」
いや冗談を言っている場合ではない。

自分が>神くになる？

聞いてない、そんな話。

「え、じゃあ、私は父様と母様の子供じゃないんですか？」

不意に疑問に思っただけで問うと、それには首を横に振った。

「言い方を間違えたかな、リーマはまだ＞幼体＜になる前

＞魂＜であった頃に、エルが己の力・・・＞血＜の半分を与えた。

元始の神の血と、死神の血と、至高神の血を受け継いで生まれた君はその＞膨大すぎる力＜ゆえに＞アルトメイデン＜としての能力を封じられた。

人の未来どころか、自身の明日さえ見えてしまいそうほど強い力だったから」

「――」

では、聖女としての力は＞最初から無かった＜のではなく

＞封じられている＜だけということ。

「君は世界中の何より＞神に近い存在＜だよ。

でもまだ、リーマにかけた封印を解く気は無い。

記憶も無い今の君には、扱えない力だ」

そこで、青年は、父は一旦言葉を区切った。

「封印がいつ解けるかは分からない。

僕とリイリアでかけた強固な封印だ、すぐには破られないと思うけど」

けれど・・・と父は顔を顰めた。

「リーマ、まだあの＞双子＜と一緒に居たんだね」

クロスとクロノスのことだろうか

「アーク家の二人のことですか？」

「そう」

あっさり肯定されて

その何が悪いのだろうと思った。

「リーマ、あの二人の父親はね・・・＞過去の大天使＜だったんだ」
「――」

思わず頭がついていかなかった。

どれだけ低脳なんだとは言わないでほしい。
父が突拍子も無いことばかり言うのが悪い。
確かにクロスからそんな可能性を示唆されていたけれど。

「母親はシエルドの妹、隠されたアーク家の>王女<だ
アーク家の血を継いでいることに間違いは無い、だけど・・・」
アーク家には今まで女兒が生まれたことが無い、とされている。
だが、その話が本当ならアーク家にもすでに>異端<が存在したこ
とになる。

「つまり・・・何が言いたいんですか？」

「彼らは本質的に>天使<だということだよ」

「？」

首を傾げる少女に、青年は苦々しそうな表情で言葉を紡いだ。

「彼らはエルに>命令<されれば逆らえない。

いつか、君を裏切り、>死に追いやる<かもしれない」

「そんな・・・まさか・・・」

無い――

とは、言い切れないものがあつた。

クロスはともかく、クロスに警告されたクロノスに関しては特に。

「クロス王子は>精神の半分<が失われたままだ
だからまだリーマの傍に居られる。

でも記憶を取り戻したら、>別々になつた存在<が>一つ<に戻っ
たら――」

「っ・・・!!」

>別々になつた存在<

子供の頃のことを覚えていないと言つたクロス。
クロスにそっくりな>天使<。

もしかして、まさか・・・

——彼らは、>同一人物<

その可能性も、否定できない。

「彼らは、あまり信用しないほうがいい・・・」

そこでクロウはまた苦虫を噛み潰したような顔になった。

「リーマが、クロス王子に想いを寄せていることはよく知っているけど」

「え・・・」

なぜ知っている、父。

そんな心中を察したのか、父は丁寧にも説明してくれた。

「リーマは子供の頃から>アイツ<が来ると喜んで飛びついていたからね」

父はあまりクロスをよろしく思っていないらしい。

表情にも口調にもそれが滲み出ている。

「・・・ほんと、二人して>父親<にそっくりだよ

悪い虫がつかないように消毒する前につくような虫なんだから」

もう、芽が出る前からついていたとは思えない虫だ。

「二人の>父親<のこと、ご存知なんですか？」

——過去の大天使。

大天使というのは天使達を統括する者。

天使には自我が無いが、大天使には自我があると言う。

神話の中では四人居て、>四大天使<と呼ばれている。

「知ってるよ、彼らの父親は>最も位の高い大天使<で

唯一>神の隣に立つこと<を赦された者。

とはいっても性格は結構悪くてね、人間観察が趣味らしかった。

リイリアが＞洗礼くを受ける時に降りた天使でもある」

アルトメイデンとして認められるには

齡十四になった時、玉座の間で天に祈りを捧げ

天使が降りなければ認められない。

その時降りた天使の位が高ければ高いほど強い力を持っていることになる。

つまるところ

仮にリーマにアルトメイデンとしての力があつたとしても

このご時世では＞洗礼くを受けられない＝認められないということだ。

それはさておき

なぜそんなに位の高い天使が王族とは言え人間の女との間に子供を授かつたのかは少し謎だ。

＞人間観察が趣味だったかというところに鍵があるのかもしれないが。

「とりあえず、あの二人は＞人間として育つた天使くだ。いつか＞敵くになるかもしれない」

「――・・・っ」

「リーマ、君に＞あの二人くを＞殺す覚悟くはある？」

正直に言えば

自信は無い。

勝てる勝てない以前に。

父の問いは胸を抉るように響いた。

「あの二人が＞覚醒くするしたら間違いなく＞大天使くだ。

それも殺せないようでは、エルなんて到底止めることはできないよ」

分かっている。

そんなことは、分かっている。

でも・・・

> 幼馴染くを、殺せるだろうか。
けれどきつと

これは他の誰かに代わってもらうわけにはいかないことなのだ。
それこそ、幼馴染の> 現実くから目を逸らすことだろう。
それでも・・・

——クロスを殺せる自信は、皆無だった。

自分は一度彼を忘れた。
酷く傷つけた。

そして再び手を取り合うことができたのに
また引き裂かれるのだろうか

いや、> 引き裂くくのだろうか
自分は、今度は忘れるだけでなく刃を向けるのだろうか。
そして、その命さえ、奪うのだろうか——

「リーマ、僕は・・・」

不意に父が口を開いて、沈んだ思考から浮上する。

「> 愛する人くを殺したことは・・・無いんだ。

愛した人を、ものを、国を> 守るためくには戦ったよ。

・・・だから、ね」

青年は悲しげに笑った。

「君が幼馴染である二人を殺せなくても責めないよ。

そして君が仕損じた時は、僕が殺してあげる。

君は・・・僕を憎めばいい」

「母様にも言いましたが、記憶が無くても私は父様を憎んだりしません。

それに・・・クロスとクロノスのことも、私は・・・できるだけ自

分の手でなんとかしたい」

正直な言葉を、口にした。

父が二人を殺したとして、憎むことは無いだろうが、後悔くはするだろう。

後悔するなら、最初から自分の手で全て片を付けたい。

「そう・・・リーマがそれを望むなら、僕は止めない
ただ、>忠告<だけはしておいたよ」

そう言くと、父は少女に歩み寄り

そつと抱き締めた。

「っ・・・」

思わず体が硬直する。

そつ身長の変らない父。

けれど体温は父の方が低いと思った。

それと、少しだけ>懐かしい<。

「・・・大きくなったね、リーマ。

・・・身長的な意味では複雑な気分だけど」

クロウとリーマの身長は2 c mくらいしか変わらない。

ちなみにクロウは170、リーマは168だ。

「父様はあんまり背、高くないですね」

「僕だつて・・・できれば180は欲しかったよ」

クロスやクロノスは180以上はある。

ゼノンに至つては190近いだろう。

でも母は156だ、夫婦で見れば父のほうがだいぶ背が高い。

くすくす笑いながら、父を見上げて告げると

眉間に皺を寄せた不満そうな顔と目が合った。

綺麗な、綺麗な、宝石のように蒼い瞳。

陽光を揺らす海底のように、美しい瞳。

「父様・・・エリザが父様の>母親くつて、本当なんですか？」

ふと、思い出したことを告げる。

父とは逆の、紅玉の瞳を持つ女を思い出して。

「本当だよ、狂気に触れる前のミストレスは人間に>擬態くしていて
僕の父と恋に落ちた、>長生きくはしなかったけどね」

「？」

「民を庇って十字軍に斬り殺された、>人間の肉体くは消滅して
死神に戻ったミストレスはその後すぐ狂気に触れた」

ゆつくりと、父の温もりが離れて行く

それが少し物悲しくて

無意識のうちにその服を掴んでいた。

「――」

それに少し驚いたような顔をして

でもすぐ父は微笑んでリーマの頭を優しく撫でた。

「リーマ、君なら・・・絶対大丈夫だよ」

その言葉を、>ずっと昔くにも聞いたことがあるような気がした。

C 9 - P 3 「運命の胎動」

——少し考え事をしたいから、と

少女は城下町のはずれまで来ていた。

蒼氷樹が音色を奏でる氷の森の中。

自分は>幼馴染の二人<を殺せるのだろうか。

もし、本当に二人が、>天使<だったとしたら——

>その時、自分は、どうする？<

「考え事？」

突然背後から聞こえた>少女<の声に、リーマは瞬時に振り返る。

そこには予想通り、>エル<が居た。

「そうね・・・あなたにも聞いてみたいことがあるわ」

今の自分では敵わない

どうしようもない

だからリーマはエルに質問をすることにした。

「あら、なにかしら？」

嬉々とした表情で心底楽しそうに少女は笑う。

「あなたは本来命を>導き見守る<のが>役目<でしょう？」

なぜ、命を、世界を、>壊そう<と思ったの？」

その言葉に、少女はくすくすと笑った。

「じゃあ逆に聞いわ、幾千幾万という命の声が私には聞こえるねえ、でも一体>何人助ければいいの？」

とりあえず十人？ああ・・・でもそれでは十一人目は泣いてしまうわね

あなたならどうする？全ての命を救いたくても

あなたの手が、腕がそんなに長くなかったら・・・」

「――」
つまり、彼女は>万能<ではないということだ。
全ての命を救えるほど彼女の腕は長くない。

「それにね、仮に導いたとしても人間も他の生き物も
言った通りにしてくれるとは限らないのよ？」

私の言葉を見殺した結果不幸に陥り、そして彼らは>私を責める<
の」

少女は瞳を閉じて

嘲笑うかのような笑みを浮かべた。

「私だって、できることならば全ての命を救いたかった。
けれど私にそれができるほどの力が無かった。
それを人々は責めた、幾千万、幾億の罵詈雑言が私を責め立てるよ
うになった。

だったら・・・」

なんとなくだが、容易に想像できた。

彼女は救いたいと願い手を差し伸べる

だがその手を撥ね退けられ、理不尽な罵声を浴びせられ
彼女が守りたいと思った命は自ら命を絶つ。

「全て壊して、壊しつくして、>魂の救済<をするべきだと思った
のよ」

その考えも、一つとしてはきつと間違っではない。

だが、いま生きている身であるリーマとしては
受け入れがたいものだった。

「全ての>元凶<は>生命が実体を持った<ことだわ、
なら、全て>魂<に戻して、私の元で

永遠の安息という>救済<に導いてあげるのが最善だと思わない？」
それを望む命もあるだろう。

だが今という時を必死に生きている命もあるのだ。

「魂に戻れば、思い出も意識も全て無に帰す・・・全てが>ゼロ<に戻るのよ」

少女は歌うように言う。

「争いも無い、いがみ合うことも無い、悲しみも絶望も無い」

「代わりに、喜びも楽しみも、>自分を知覚する自分<も居なくなるってことね」

全ての魂が一つになってしまふなら

それは、そういうことだろう。

「ねえ、リーマ・・・あなたは綺麗よ、とても綺麗、>血染めのドレス<がきつとよく似合うわ

ねえ・・・私の>もの<にならない？」

少女はリーマに歩み寄ると、背伸びをしてその頬に手を滑らせた。紅い瞳が悪戯っぽく笑って見上げてくる。

「私と血を分けたあなたなら、私の想いも分かるでしょう？」

一緒に世界を>救済<へ導きましよう・・・？」

リーマは自殺行為だと承知で、言葉を返す。

「少し前の私ならあなたに賛同したかもしれないけど・・・

・・・今の私は、>忘れたくないもの<があるのよ」

リーマの返答に

少女はにこりと笑った

その手がリーマの首筋に移動して

力は締められていないが首を絞めるような形になる。

「あなたが望むなら、クロス＝アークとクロノス＝アークを助けてあげてもいいわ」

「でも結局、>最期<には全員殺すんでしょう？」

平静を装いつつ

背筋を嫌な汗が伝う。

エルにとってリーマの首を潰すことなど容易いのだろう。

「魂となつて永遠に一緒に居られるなら、幸せでしょう?。」

「意識も無いんじゃない、話もできない、そんなのは嫌よ」

言いながら、リーマも右手でエルの首を絞めるように手を添える。
細い首。

力を入れれば簡単に折れてしまいそうなのに。

「ふ・・・あははははは!!」

少女は急に笑い出した。

「少し遅すぎたようね、>愚かな人間どもくに感化されてしまつて
!」

「っ・・・う」

そしてグツと手に力を入れてリーマの首を締め上げる。

「ふふふ、でも諦めないわ・・・あなたの>大切なものを全て奪
つて、壊して

絶望に染まつたあなたを私のものにしてあげる!

これは証よ、あなたが>いずれ私のものになる<つていう・・・ね
!」

少女の手から力が抜けて

リーマの首筋から手が離れる。

「っ・・・は、かはっ!」

急激に流れ込んできた酸素に咽ながら首に触れる。

恐らくは痣がくつきりと残っているだろう。

「ふふふ・・・またね、リーマ」

そう笑いながら言つて、少女の姿は灰になつて消えた。

「・・・はあ」

息が整ったところで、氷で出来た冷たい木の幹に手を添えて
体勢を立て直して顔を上げると

そこには、> 幼馴染にそっくりな天使くが立っていた。

今日は本当に、珍しい来客が絶えないようだ。

C 9 - P 4 「運命の胎動」

「いつから居たのよ・・・」

「・・・たった今」

少女の問いに、青年は短く答えて
ゆっくりとした足取りで少女に歩み寄る。

「それ以上、近づかないで」

天使相手ではなんの役にも立たないだろうが、
護身用のサバイバルナイフを右手に握る。

「・・・」

青年は歩みを止めた。

だが、ゆっくりと手を伸ばしてその刃に触れると
軍用のサバイバルナイフを指先で押し折った。

「・・・やっぱ、こうなるわよね」

それをさも当たり前のように受け入れて、少女は溜息を吐く。

「あんたは・・・一体何なの？」

「僕は・・・クロス」アークの>過去<、そして、>核<。

僕が死ねば・・・>アレ<も死ぬ、アレは僕とほとんど>記憶<を
共有していない

でも僕はアレの全ての記憶を共有している。」

リーマの意志を汲み取ったのか、心を読んだのか

青年は少女の疑問とするとところを的確に答えた。

どつりで最初からリーマに「好き」だのなんだの言ってくるわけだ。
クロスは彼の記憶を知らない、だが彼はクロスの記憶を知っている。
ならばクロスがリーマを愛していることも勿論知っているのだろう。

だが今何より一番聞き捨てなら無いのはそんなことではなくて

「あんたが死んだら・・・クロスも、死ぬ？」

「そう」

青年はあっさり肯定するが

それはあまりにも酷な現実だった。

彼は>天使くだ、いつか殺さなければならぬ。

なのに、彼を殺せば幼馴染も死んでしまう。

「でも、アレが死んでも僕は死なない・・・僕が>本体くだから。

・・・>一つくに、還る」

青年はゆっくりとした動きで少女の頬を撫で

悲しげな顔をした。

「でも、リーマはそれを望まない。だから・・・>僕くが死んでもいい・・・」

「・・・？、あなた、いま自分で自分が死んだらクロスも死ぬって・・・」

「>核くを抜け殻に与えれば、死なない。

でも、その後アレがどうするかは分からない

>過去の記憶く<と>今の自分く<との間に生じる<差異く<に、苛まれるかもしれない」

彼は恐らくクロスの>過去そのもの<なのだろう。

過去に何かあつて・・・

恐らくは両親が殺されたという時に何かがあつて

>魂くが二つに裂けてしまった。

「その結果、クロスⅡアークが>過去くを取るか、>未来くを取るかは、分からない」

それは、少女にとってとても恐ろしい未来だった。

もしもクロスも>過去くを選ぶのなら

過去に縋っているというクロノスと同じになつてしまつのではないか――

つまり、敵になつてしまつのではないか

まだクロノスが敵と決まったわけではないが、不安は取り除けない。誰に諭されても、まだ彼を信じたいと願う自分が居る。だがもしも敵ならば、クロスも同じになってしまう。

そんなことを考えていると、ぎゅう、とユーフォリアに抱きしめられた。

「リーマ・・・リーマが僕を選んでくれなくても、僕はリーマを・・・あいしてる」

「それはあなたの記憶じゃないわ、クロスの記憶よ」

「うん、でも・・・あいしてる」

子供のように拙い言葉。

けれどきつと、それは彼の本心なのだろう。

「あなたって、天使で滅茶苦茶な思考回路だけど、憎めないのよね」少女は宥めるように、天使の背を撫でた。

「・・・クロスには生きてほしい、でも、あなたに死んで欲しいとも思わないわ」

我ながら矛盾していると思いながら言葉を紡ぐ。

天使に思いいれを持ってしまっなんて

自分は欠陥品だったのかもしれない。

――・・・

天使と別れて、城に戻ってきたリーマを出迎えたのはクロスだった。突然手を引かれて、少女が借りている部屋まで連れ込まれる。

「ちょ、クロス！何・・・」

「・・・あいつくに会ってた？」

扉を閉めて

背を向けていた幼馴染は不機嫌そうな顔で振り返った。

「・・・分かるの？」

だが、少女は焦るでもなく答える。
この幼馴染に嘘は通用しないのだ。

「気配でね」

そう言い終えるなり

青年は乱暴に少女の唇を塞ぐ。

「ん・・・ふ・・・う・・・」

クロスの背に腕をまわし

ぎゅう、とその黒いコートを握る。

「リーマ、俺は・・・君が居なくなるのが・・・怖い」

暫くして唇を離れた青年はそう言った。

「それ・・・は、こっちの台詞よ」

僅かに頬を蒸気させて、少女が言い返す。

一体誰のせいで足りない脳を使ってこんなに悩んでいると思っているのだ。

クロスは縋るように、閉じ込めるように少女をぎゅうつと抱きしめた。

「私はどこにも行かない、でも・・・あなたはどこかに行ってしまうかもしれない」

青年の胸に顔を埋めて、ぎゅ、と服を先程より強く握る。

「そんなこと・・・俺は、どこにも・・・」

「もし」

青年の言葉を、少女は最後まで言わせなかった。

「もしも、過去の記憶を取り戻して・・・それが>今より大事だったら、どうするの」

「リーマより大事なものなんて何も無い」

その言葉に、少女はバツと顔を上げた。

涙を溜めた瞳で

「それはあなたが>過去<を思い出せないからでしょう!？」

「——リーマ・・・？」

過去を思い出したら、どうなるかは分からない。

ユーフォリアはそう言った。

珍しく本音の感情を露にする少女に、青年は僅かに戸惑ったような顔をする。

——嗚呼・・・汚い。

>彼の過去に嫉妬する<愚かな女。
分かっていて。

少女は青年を突き飛ばすと、蹴破るように扉から飛び出していった。

——こんな醜い自分は嫌だ。

いつからこんなに醜くなったのだろう。

>未来が恐いく、過去に縋りたくなる気持ちも分かる気がする。
そんな少女を呼び止めたのは、従兄だった。

Chapter 10 - Period 1「花の都リヴァールヴェール」

ワールズ・エンド・ガーデンへの道を出現させるため

一行は一度少女の故郷であるリヴァールヴェールへ帰還する。

残酷な運命は廻る

無情な現実少女の息の根を止める日を

淡々と待つのであった――

回廊を全力疾走していた少女の腕を、唐突に強い力が掴んだ。

振り返れば、ゼノンが呆れたような顔で少女の腕を掴んでいた。

「・・・何があった、リーマ」

「・・・別に、何も」

目を逸らす少女に、青年は溜息を吐く。

「まあ、深く追求はするまい」

恐らく、>あの男<関連だろうが。

「それより、おまえに話しておかなければならないことがある」

従兄のその言葉に、少女は従兄の色違いの瞳をきょとんと見た。

腕を離されても、少女は逃げない。

従兄の瞳がそれだけ真剣だったからだ。

それにこの青年がくだらない理由で自分を呼び止めるとも思えない。

「クロノスⅡアークのことだが」

嫌な、予感がした。

「あの男から>強い天使の気配<がする、一人では絶対に会わない方がいい」

「・・・あ、はは・・・笑えない冗談、ね」
喉が貼り付いたように、渴いた声が出る。

「・・・こんな冗談を言うと思うか？」

だが、従兄は>冗談くだと言ってくれない。

「だ・・・って、クロノスも同じ研究所に居たのよ？天使だったら・・・」

もっと早く分かっていたはずじゃない」

希望的観測だ、分かっている。

それが普通の天使ならともかく

もしも>大天使くだったら・・・

「現在の技術では分からないくらいには>人間に擬態できるくのだから」

その言葉は少女の胸を抉るように響いた。

人間ではない。

天使かもしれない。

——>敵くかもしれない。

「あつれ〜？二人して真剣な顔して、ど〜したの〜？」

その時、話題の渦中に居た人物が回廊を歩いてきた。

「——クロノス」

喉が引き攣る。

その名を呼ぶのが酷く重かった。

「ん？なあに、リーマ嬢」

いつもどおりにここにこと笑っている青年を一瞥して、ゼノンはリーマの腕を引いた。

「そろそろ出発しなければならんだろう、行くぞ」

魂が抜けたような少女の手を引きずって、青年は歩く。

少しでもあの青年との距離を取るように。

それを見送って、クロノスは普段見せないようなほの暗い笑みを浮かべた。

「そろそろ・・・限界く、かなあ・・・」

クスクスと笑って、二人が去った後を追うように歩く。
心底楽しそうに、狂気を宿した瞳で。

――・・・駅に着いた一行には、重い空気が漂っていた。

「えー・・・ナニナニこの空気」

それを一人場違いにも程がある声
もといクロノスがブチ破る。

リーマはクロスと視線を合わせないし
ゼノンとソウルの間には主に一方的に絶対零度の空気が漂っているし
アリアはクロスを睨みつけている。

「チームとしてなっていないっていうかすでに破綻してるっていうか
く・・・」

そうクロノスが言う間にも、リーマとゼノンは無言で列車に乗り込み
クロスは悲しげな瞳でリーマを一瞥しながらも列車に乗り込み
ソウルはおずおずと、クロノスはアリアに蹴りを入れられて押し込
められ

最後にアリアが乗った。

一列三人座れる1ボックスにぎっしり詰め込まれた状態で乗り
列車はレフリーリカを発つ。

リーマは右にクロス、左にアリアに挟まれ
向かい側では真ん中にソウル、窓際にゼノン、通路側にクロノスが
座っている。

右側、こと窓際に腰掛けたクロスは
窓の外の銀世界を見ながら昨日の少女の言葉を思い出していた。

——過去が今より大事だったら・・・

それは>今<の青年にとってありえないことだった。

今の彼にはリーマこそ全てで、彼女を守ることが全てだ。

だが、もし記憶を取り戻したらそれが変わるというのだろうか・・・
過去に一体何があったというのか

クロスの記憶の始まりは、叔父に連れられてやってきた花の都で
自分に手を差し伸べる>少女<との出会いからだ。

桜の花弁が美しかったのをよく覚えている。

クロスはその数日前まで>昏睡状態<で眠りについていたと聞いている。

目が醒めた時、彼には一切の記憶が無かった。

だから、リーマとの出会いが彼にとって一番最初の>記憶<なのだ。

だが少女は違うと言う

自分にはもっと前の記憶がある、と。

それは当然だ、だが別に思い出したいとも思わなかった。

けれどその記憶が少女を・・・怯えさせている。

なぜ——

何を怯える必要があるのか

何を恐れる必要があるのか

自分は仮に全てを思い出しても彼女の傍に居ると誓ったのだ。

この剣に。

戦乙女の名を博したこの光の剣——ブリュンヒルデに。

(俺は・・・思い出さなければならぬ)

彼女がその記憶を恐れるのなら

思い出して、>否定<しなくてはならない。

そんな記憶などに左右されずとも、自分はリーマの傍に居るのだと。

空が明るくなっていく。

全てを吸い込むような蒼穹が

先に待ち受ける未来さえ映したようにただ広がっていた。

少女は先ず、リヴァールヴェール首都のはずれにある墓地へ向かった。

そこには間違いなく、あの>悪魔<の墓があった。

―リヴァイル^{II}グリーンミルダ　ここに眠る―

花を手向けるでもなくしばし見下ろした後、少女は身を翻し王城へ向かって歩き出した。

それに関して、誰も何も言わなかった。

誰もが>彼女<に対しては複雑な思いを持っていたから。

「・・・ここに帰ってくるのも久しぶりね」

小さく呟いて、歩みを進める。

桜の花弁が舞う並木道。

王城へと向かう道。

桜色の花弁がひらりひらりと舞う。

誰もが、複雑な思いを抱えたまま

その美しい道を歩いていた。

――神の世界へ繋がる、美しい道。

やがて見え始めた城門で、衛兵二人が顔を見合わせている。

それはそうだろう、各国の王子王女が

列になって供もつけずに歩いてきているのだから。

愕然としている衛兵に少女は>契約者<であるパスを出す。

そこに書かれた名前を見るなり、二人の衛兵は瞳を見開いた。

「リーマ・・・様・・・？」

「いや、>王女<は亡くなったはずだ・・・」

恐らくここを守っているのは何も知らない一般兵なのだろう。

「死んだと思うのも、生きていると思うのも勝手にしてくれていいわ
だけど、通してもらわないと困るのよ」

少女が王女だという判断はつかないようだが

少女の周囲に居るのが各国の王族だというのは分かるらしく
衛兵は道をあけた。

城内に入れば、母、リイリアにそっくりな容姿の少女に
メイドや衛兵にざわめきが走る。

（私は・・・やっぱりこの国ではもう死んだ人間なのね）
故郷の人間に死んだと思われている。

唯一の救いは両親が自分を認めていてくれていることが。
玉座の間まであと少し

——その刹那のことだった

城内に銃声が響き、少女の頬につ・・・と一筋の赤い線が浮かぶ。

「な・・・なぜおまえが生きて居る！！？」

撃った相手に視線を移せば

いかにも三流映画の悪役に出てきそうな男が震える手で銃を握って
いた。

ああ、この男には見覚えがある。

少女をリヴァイルに売った男だ。

いつの間にか、少女達は強化人間に囲まれており

その>人壁<の向こう側には青ざめた>臣下<達が居た。

「・・・生きていたら悪い？」

頬の血を拭い、少女は嘲るように笑った。

「>あの男く、や・・・>約束くが違うではないか!」

誰に言ったのかは分からなかったが

少女達に向かつて男は張り裂けんばかりの声で叫ぶ

「ええい!!殺せ!!その女を殺してしまえ!!!」

その一声で、強化人間達が一斉にマシンガンを構える。

今度は銃、しかもマシンガンときた

多少痛い思いをすることになるかもしれないなどと考えながら

少女は大鎌を取り出そうとして――

「そこまでにしてもらおうか」

低く冷たい声が、凜とその場に響いた。

背後から聞こえた声に振り返れば、父・・・クロヴィスが回廊を歩いてくるのが見える。

つまりは、>王の帰還く。

「な・・・なぜ・・・おまえが・・・生き、て・・・!!」

男は悲鳴にも似た声をあげ

強化人間達は真の主の出現に構えていたマシンガンを一斉に床に投げ捨て

大理石の床に片膝をついた。

「残念だよ、とても残念だ、尤も・・・

卿らのことは十二年前から信用などしていなかったが

けれどまさかここまで愚かだとも思っていなかった」

その後ろから、リイリアも歩いてくる。

「仮にもリヴァールヴェールの貴族でありながら、忠誠を捨て穢れた者に

此処に居る資格はありません」

リイリアの言葉に、男の顔色がどんどん青ざめていく。

「その者達を拘束しろ、牢に入れておけ」

王の言葉に、強化人間達が

己に命令していた相手を今度は拘束する。

「やめろ！離せ！！無礼者どもめ！！」

リヴァールヴェールには王と女王の二人が居る。

互いに同じだけの権力を持ち、国政を行う

傍から見れば不思議な制度だが

この国の＞女性の地位が高く、というお国柄がよく出た結果でもある。

「無礼ではないさ、卿はもう＞貴族くではなくなるのだから」

笑顔で告げる王に、男の顔が絶望に染まっていく

男はまだ何か叫んでいたが、強化人間の力に敵うはずもなく引きずられていく。

「あ・・・りがとうございます、父様」

礼を述べると父は笑顔で手を振った。

「リーマ・・・君は玉座の間に行っておいで

僕らには片付けなければならない仕事があるから」

「リーマ、あなたの未来が明るいものであることを祈っています」

両親に背を押されて、少女はまた玉座へと一步を踏み出す。

やがて見えてきた大扉は、記憶の底に眠っていた姿と同じだった。

少女がドアの前に立つと、触れたでもないのに音もなく扉が開く

「じゃあ・・・行ってくる」

後ろに続く全員にそう言って

少女だけが室内に足を踏み入れた。

C10・P2「花の都リヴァールヴェール」

高い階段の上にある二つの玉座。

まるで少女の帰還を待ちわびていたように
壁に備えられたランプに蒼い光が灯っていく
階段を昇り、玉座の前に立った瞬間

紅い炎が少女の胸元に生まれ

それを両手で包むようにすると

炎が弾けて少女の内側に眠っているはずの>死神くが
本来の姿で具現化した。

宙に浮いたその姿

閉ざされた瞳、黒く背丈より長い髪がふわりと靡く

黒いドレス、紅い妖艶な唇。

黒い睫毛が震えて紅い瞳が覗く

『リーマ、よくぞ・・・ここまで来ましたわね』

女の声に、少女は静かに頷く。

『我が玉座、神への道の最初の鍵を開きましょう』

女は天井近くまで浮上して

その両手を広げる

紅い光が集い、桜の花弁のようにひらひらと落ちてくる。

『Amen・amen・gospel・amen』

―来たれ、来たれ、福音よ、来たれ―

謳うように女は幾度もその言葉を紡ぐ

そして女の胸元に集った光は一瞬瞳を開けていられないほど強く発
光し

パリンと音を立てて砕け散った。

そして次に瞳を開けると

女の背に八枚の紅く半透明の翼が伸びていた。

それは翼というよりはガラスの破片のようだったが。

ゆつくりと、女は少女の目の前まで降りてくると

その体を抱きしめた。

『リーマ、貴女ならば最期までやり遂げられると・・・私は信じていますわ』

ゆつくりと、少女の内側に女の姿が溶けていく。

そして、少女の髪が栗色から漆黒に変わり

その瞳の色も新緑から深紅へと変っていく。

「――」

今までに無い力の脈動を感じて、少女は己の両手を見下ろした。

だがそれは一瞬のことで、ミストレスが体内で同化すると同時に

少女の髪は栗色に戻り、瞳も新緑に戻った。

そして、少女は振り返り階段を下りる。

「・・・終った、みたい」

扉の外まで出てきて、少女は小さく溜息を吐いた。

「・・・一つ目の封印が解けたようだな」

ゼノンの言葉に、少女は安堵する。

安堵の息を吐いた、その瞬間だった

「・・・っ!？」

ぐらりと視界が歪む。

――・・・め・・・し・・・リー・・・マ・・・

「――リーマ!？」

クロスとゼノンとアリアの声が同時に聞こえたが

意識はそこで途切れてしまった――

――深い、深い闇の中に落ちていく感覚。

『あなたが、クロス王子？』

少女は小首を傾げて目の前の少年に問う。

今とは見違えるほど覇気が無いが

金色の髪に水色の瞳。

間違えるはずもない、幼馴染。

『・・・はじめまして、リーマ王女』

淡々とした口調で、定型文のような言葉を述べる少年に

少女はぷう、と頬を膨らませた。

『リーマでいい、あなたのこともクロスって呼んでいい？』

――ああ、これは・・・

失われた、過去の・・・。

夢を見ているような、けれどしつかりとした現実感を持って
少女は第二の思考でそう考える。

『・・・好きに、してください結構です』

光を映さない水色の瞳。

『もう！堅苦しいんだから！』

そう言つて、少女はずいっと右手を差し出す。
『？』

首を傾げる少年に、少女は柔らかに微笑んだ。

『握手、>友達になった証に』

その手をしばらく見つめた後
少年はその手を取った――

白い花弁が蒼穹に吸い込まれるように舞う。

『クロス』

優しい水色の瞳が、慈しむように少女を見つめる。

そして伸ばされた手が、柔らかい栗色の髪に触れた。

『大好きよ』

愛しさを堪え切れなくて、伝えたくて

少女はぎゅうっと少年に抱きついた。

伝わってくる温かなぬくもり。

大好きな、大好きな、彼の温度。

『俺も・・・愛してる、リーマ』

優しく頭を撫でられるのも好きだ。

どちらからともなく、口付けを交わした。

『ずっと、ずっと・・・大好き』

背にまわした腕に少しでも力を入れる。

少しでも、この愛しさが伝わればいいと願って。

『俺もだよ・・・』

優しく、少年の腕の中に閉じ込められて

少女は幸せを感じた。

――でも、明日は手術の日だ。

一抹の不安を感じて、少女は少年を見上げた。

『クロスは・・・ずっと傍に居てくれる？もしも・・・』

彼の答えなんて分かっている

問う自分はするい。

『私が・・・>ヒト<じゃなくなっても・・・』

少女の言葉に、青年は優しく微笑んだ。

『俺はずっとリーマの傍に居るよ、ずっと、いつまでも』
その言葉に安心して

少女は背伸びをすると少年の唇に触れるだけのキスを送る。

『大好き、ずっとずっと・・・一番大好きよ』

白い花弁が蒼穹に吸い込まれていく。

>彼<と過ごした幾千の日々が、走馬灯のように流れていく――

C10・P3「花の都リヴァールヴェール」

深い闇が薄れていく。

栗色の長い睫毛が僅かに揺れて、新緑の瞳がゆっくりと開く。

目に映るのは、懐かしい>自室<の天井。

ふと、右手にぬくもりを感じて視線を移せば

椅子に腰掛けてリーマの手を握ったまま、クロスがうとうとと眠りに落ちていた。

外を見ればもう満月が真上を通り越していた。

（ずっと、傍に居てくれたの・・・？）

今まで以上の愛しさが募る。

これは、>過去<を思い出したが故だろうか。

上半身を起こして、クロスの金色の髪に触れる。

少し硬質な髪を撫でると、金色の睫毛が僅かに揺れて

まだ眠そうな瞳がゆっくりと開いた。

「・・・リー・・・マ？」

「おはよう、クロス。真夜中だけど」

優しく微笑んで、ぎゅ・・・と右手に添えられた左手を握る。

「良かった、目が醒めて・・・突然倒れたから、皆驚いていたよ」

「思い出したの」

「？」

少女はもう一度瞳を閉じて

胸に湧く愛しさをはぐらかすように言葉を紡ぐ

「あなたに出逢った時のこと、あなたと、>約束<をしたこと」

「――」

その言葉に、青年は瞳を見開いて茫然としていた。

その顔が可笑しくて

少女は身を乗り出してクロスに自ら口付けた。

「ほん・・・とに・・・？」

青年の言葉に笑顔で頷くと、ぐいっと体を抱き寄せられた。

「リーマ、リーマ・・・良かった・・・すごく、うれしい」

青年の声は震えていて

少女は苦笑して青年の背に腕をまわした。

「あなたは約束をずっと守ってくれた、ずっと傍に居てくれた・・・私があなたを忘れても、私がヒトじゃなくなっても・・・ずっと」

青年の肩口に顔を埋めて、少女は慈しむように震える青年の背を撫でる。

もしかしたら、いま彼は泣いているのかもしれない。

「だから、今度は私が＞約束くするわ・・・」

恐い。

本当は、とても。

でも彼は、約束を守ってくれたから。

「あなたが記憶を取り戻しても、私はあなたの傍にずっと居るから・・・」

まるで別れの挨拶のようだと思いつながらとも言つと

ぎゅう、と青年は少女を抱きしめた。

「リーマ、俺の＞誓いくはまだ、有効期限切れてないんだよ？」

そして、その言葉とともにゆっくり体を離すと

青年は泣き笑いのような表情で微笑んで言った。

「俺が君の傍に居るっていうのは、君が死んでも・・・永遠に有効だから」

その言葉に、少女は僅かに頬を染めた。

「あんたは・・・その言葉、覚えときなさいよ」

溜息を吐きながらも頬を真っ赤に染めて
少女は青年に抱きついた。

少女と青年は、もう一度＞約束くを交わした。

翌日

さすがに朝まで部屋に居るのは不味いからと

父に殺される的な意味で

クロスは朝方に部屋を出て行った。

時刻は8時。

少女は城内の騒々しさで目を覚ました。

(?、何かあったのかしら・・・)

心なしか部屋の外から無数の＞人間くの気配がする。

ベッドから降りて軽く髪を手櫛で梳きながら

部屋の扉を開けると――

「リーマ様!!」

「ああ・・・!!リーマ様、よくぞご無事で・・・!!」

大勢のメイドや騎士が部屋の前にこった返していた。

「――」

思わず頭がついていかなかった。

(え、なにこの状況)

「まあ・・・!!なんとお美しい!やはりリイリア様のご息女ですわ!!」

「いや陛下と女王のご息女だ、美しくないはずがない!」

「前に見たときはまだ幼い子供でしたのに・・・こんなに美しくなられて!」

あまりの人だかりに少女の思考回路がショートしかけた時

「お前達!王女の御前で騒々しい!散りなさい!!」

一際強い女性の声で、リーマに集っていた集団は慌てて離れていく。人ごみの中から歩いてきたのは

真つ赤な燃えるような長い髪を束ねた、赤い瞳の、メイド服の女性。

「リーマ王女、無事の帰還心より嬉しく思います。」

この者達もそれ故の行動ですので、どうかお叱りにならないで頂きたいと思います」

「え……ええと、叱らないけど状況がつかめないわ」

叱るもへつたくれも状況がつかめない。

「陛下の留守をいいことに

リーマ王女は死んだものとゝ痴れ者どもくがくだらぬ噂を世に流し貴女様はこの国において死人とされました。

あの無礼者どもがでっちあげた葬儀も行われました

貴女に似た子供を贅にして」

]

ということは、自分のためにまた一人知らない命が犠牲になったということだ。

「ですが一部の者達はその虚業を全て存じており

貴女が無事息災のまま帰還なされる日を待ちわびておりました。

そして昨日、国王陛下と女王陛下が玉座にお戻りになり

つい先程、リーマ王女は>生きている<と世の者達に宣言したので
す」

なるほど。

なる
・
・
・

「ええええええええええええええええええ！？」

聞いていない。

そんな話聞いていない。

自分はどうせ死ぬのだ、死んだままにしておいてくれてよかったも

のを。

「申し遅れました、私はメイド長のエクレール「グラナートと申します」

恭しく礼をする女を、少女は愕然と見つめていた。

だが、女が手を軽く振るなりぞろぞろ現れるメイドに意識が現実に戻される。

「え・・・な、なに!？」

「これから式典がございますので、お召し物の取替えを」
「式典!？」

意味が分からない。

ちなみにリーマは生まれてこの方式典というものに出席した記憶が無い。

記憶が無いだけで幼い頃は出ていたのだろうか。

笑顔のメイド達がそれぞれドレスやらなんやらを持って少女に迫ってくる。

「え・・・ちよ、ま・・・」

それはある種、マシンガンを向けられるより恐かった。

C10・P4「花の都リヴァールヴェール」

ピンクを基調に黒をあしらったドレスに着替えさせられて少女は憂鬱な気分で壁際に体育座りをしていた。

（なにがどうしてこうなった・・・）

と、考えずにはいられない。

「メイド長、リーマ様はご気分が優れないのでしょうか・・・？」

その姿に不安げに数人のメイドが顔を見合わせる。

それに一瞥をくれて、エクレールはリーマの元まで歩み寄った。

「リーマ様、そろそろお時間です」

「う・・・ほんとは行くの？」

「貴女こそ今回の式典の主役なのですよ」

そう言われても、彼女にとってまだこの国が故郷くだという実感は無い。

死んだままならそれでもよかった。

思考に耽って完全に力が抜けていたからだろうか

エクレールの手によって軽々と腕を引っ張られ、立ち上がらせられる。

「——あなた、この力・・・」

たとえ油断していたとしても、通常の人間くに

リーマを立ち上がらせるのは不可能だ。

「ええ・・・私は強化人間です、全ては王女殿下をお守りするためでした。」

しかし地位は所詮メイド、家臣の裏切りの時

貴女を謀略からお救いできなかったこと、ずっと後悔して参りました」

「？、どうして私を守るためにわざわざ強化人間にまでなったの？」

「私の母はグレイシア・グラナートと言う女騎士団長で、貴女の母君

リイリア様の護衛長でもありました。

私は幼い頃よりリイリア様にお子ができたら守るように教わってきたのですが……

今や貴女は契約者、私など……最早不要な人間です」

そのためだけに。

彼女は人間という体を>半分<捨てた。

だというのに、今やリーマは>契約者<

彼女の力などリーマには遠く及ばず

地位から救うこともできず、力で救うこともできなくなった。

少し悲しげに微笑んで、女は少女の腕を引く。

「ですが今となっても、貴女を>悪い虫<から守ることや

貴女に礼儀作法、淑女としての嗜みを教えることはできます。

それも終つたら、私はこの職を辞すでしょう」

「うー……スパルタそう……」

4歳で研究所に引き取られたリーマは

勿論作法など知るよしも無い。

「当然です」

足は止めることなく、真つ赤な炎のような瞳が慈しむように少女を見る。

「ですからリーマ様、貴女は>生きて<帰ってきてくださらないのはならないのです」

「……生きて……ね」

待っていてくれる人が居ることが少し嬉しくて

少女は苦笑した。

生きて帰れる保証など無い。

——だが、生きて帰りたいと……思った。

「えー……」

大広間に通されるなり、少女はげんなりとした表情になった。

赤い絨毯の左右に並ぶ王侯貴族。

そして最奥の少し高い位置には玉座がある。

そこで両親は笑顔で手招きしていたが

問題はそこではなくて・・・

「リーマ嬢、おつめでとー」

「・・・なんであんだ、スーツ着てるの？」

一番最初に言葉を発したクロノスに、リーマは怪訝そうな瞳を向ける。

「え？いやだなあ僕ってばこれでも>王子様くだか・・・げふっ！
」

「おめでとう、リーマ」

そんなクロノスに蹴りを入れて、アリアがリーマの両手を握る。

「へ？ああ・・・ええと、ありがとう・・・？」

何がおめでたいのかは分からなかったが、

薄い青のドレスに身を包んだアリアに苦笑を返す。

「リーマさん、無事の帰還おめでとうございます」

そしてアリアよりだいぶ下のほうから少年の声が聞こえた。

「ありがとう、ソウル」

少年もスーツを着ていた、他と違うのは半ズボンというところだろうか。

・・・誰の趣味だ。

思わず突っ込んでしまった。

そんなリーマの頭を、ゼノンは何も言わずにぽすぽすと軽く叩く。

そして、白い手袋をした手が少女に差し伸べられた。

「行こう、リーマ」

優しい微笑みを浮かべたクロスに手を引かれ、少女は赤い絨毯を踏みしめる。

彼の行動には集まっていた王侯貴族それぞれが不満そうな顔をした。

リーマは次期王位継承者であり、何よりリヴァールヴェールの王女。狙っている輩は当然少なくない、むしろ多すぎるほど多い。

男達にとってクロスは邪魔な存在であり

逆に女達にとっては

王族であるクロスを独占しているリーマは邪魔な存在だ。

顔を輝かせるのは何も知らない子供くらいのもの。

子供の瞳から見れば、> 恭しく姫君をエスコートする王子様くだ。

クロスは階段の少し前で手を離し、恭しく一礼して一步下がった。

そして、少女は目の前の短い階段を一步、また一步と昇り

玉座の前で立ち止まるとその場に集まった者達へ振り返った。

一斉に起こる拍手に少々辟易しながらも

両親に挟まれて軽く手を振る。

「さあ、彼女はこれからが一番大変だろうねえ・・・」

それを微笑ましく見上げながら、クロノスが呟く。

「・・・リーマに近づく男なんて、みんな私が追い払ってやる」

ぼそりと呟くアリアに、ソウルが首を傾げる。

「女性ならいいのですか？」

「駄目だ」

即答だった。

「ちよつとアリア嬢、君はアレだ、子供の教育上よろしくないものの権化なんだから

あんまりソウル王子の心にトラウマを残さないであげ・・・」
「ふうっ」

「誰が教育上よろしくないものの権化だ、それはおまえのような男のことを言うんだ」

アリアの蹴りが鳩尾にヒットして、クロノスは蹲る。

「まったく男なんてみんなロクでもない、クズばかりだ」

「ちよ、ギブ！！アリアじょ・・・ストップ！！」

げしげしげしげしとクロノスを蹴り続けるアリアに
ソウルがあわあわと慌てだす。

「だ、大丈夫ですかクロノス王子」

少年が声をかける頃には、クロノスは完全に蹲っていた。

「だいじょうぶ、だいじょー・・・ぶ、

王子たるものご婦人の蹴りくらいで沈んではいけないのさ」

そんなよく分からない自論を言いながら立ち上がり

手袋をした手で、少年の頭をぼすぼすと叩く。

「けれど女性は>恐ろしい生き物<だからね、ソウル王子も気をつけるんだよ」

「え・・・は、はい」

少年にはまだ早い話題だ。

だが彼もいつかは地位や金銭目当ての女共に集まれることだろう。

クロノスやクロスはいいい加減慣れたものだが、

リーマに関しては、今まさにその>標的<に上がったことになる。

だが、クロノスが言った>この先<は

決してそのことではなかった。

その真意を知る者は

——・・・まだ、居ない。

——・・・月が真上に昇る頃

クロスは>己に似た気配<を辿って城外に出た。

一人居なくなつた大通りに一人佇んでいたのは

自分にそっくりな>天使<。

「おまえは・・・何<だ？」

白銀の剣を向けて、クロスは問う。

その瞳を真っ向から受け止めて、天使はぼうつとした表情で

その手に＞同じく白銀の剣を取り、クロスに切っ先を向けた。

「僕は・・・おまえの＞過去く、そして・・・おまえの＞命の源く」

「・・・命の、源？」

「おまえのその体は＞精神が宿った人形くにすぎない、この体こそ、おまえの＞本来在るべき姿く」

では、＞自分くは＞仮初の存在くで

＞彼くこそ＞本来の自分くだと言うのだろうか

「俺の記憶を取り戻すには、どうすればいい」

彼が過去だと言うなら

なんとなく予想はつくが

「・・・僕を殺すしかない」

でも、と天使は言葉を続ける

「僕が＞未来くを手に入れることでも、結末は変わらない・・・

違うのは・・・どちらが＞肉体の主導権くを握るか、ということ」

「充分すぎる＞違いくだ」

クロスは意を決したように、その瞳に確かな殺意を宿らせる。

あの天使にリーマを渡したくない。

彼だけではない、他の誰にも。

それが同じ自分であっても、自分の肉体であっても、赦せない。

「俺は心が狭い男なんだ、だから・・・おまえを殺す」

「・・・」

だが、天使は瞳を閉じると、ぼろぼろの翼を広げた。

「今はまだ・・・＞時くではない」

「！？」

ふわりと、天使の体が宙に浮く。

「＞時期くが来れば・・・おまえが望まなくても、僕はおまえを殺しに来る・・・」

その時まで、殺意を募らせて居ればいい」

そう言つて、天使は夜空へ消えていった。

「・・・」

残された青年は、己の>誓いくの形である剣を見下ろす。
過去を取り戻したら、自分はどうなるだろう。

それ以前に、あの天使に勝てるだろうか。

力量は先程の睨み合いでなんとなく互角くらいだろうと思った。
一寸瞳を閉じて

——たとえ何があつても、俺は・・・

——>彼女くを守ると、誓ったのだ。

次に開いた瞳には、強い陽光のような光が宿っていた。

Chapter 11 - Period 1「剣舞の国ヴァルゼド」

一つ目の封印を解いた少女達は

二つ目の封印を解くために剣舞の国ヴァルゼドへ向かう
だが

そこで待っていたのは残酷な現実

眈々と少女の息の根を止める時を待っていた現実は牙を剥き

少女に喰らいついた――

「・・・もう、寿命が十年は縮まった・・・」

式典をつつがなく終え、駅に辿りついた少女は

ここまで来る途中も民衆の歓声に包まれ

げんわりとしていた。

「ははは、そんなんでへばってたらこの先もたないよりーマ嬢。

だって君は未来の女王様なんだから あ、なんか>女王様くってイ

イ響きだよね”・・・ッ」

そんなことをのたまっているクロノスの背にアリアの蹴りが沈む。

「ちょ、アリア嬢・・・僕踏まれて悦ぶ趣味無いから!!」

「五月蠅い、おまえ気に食わない」

ヒールのついた靴でグリグリと踏まれ、クロノスの顔に脂汗が浮かぶ。

「あー・・・生きて帰ってくる保証なんて無いんだけどなあ・・・」

それを軽くスルーして、少女はそんなことをぼやきながら列車に乗った。

例によって一列三人座れるボックス。

少女の憂鬱など知らない蒼い空。

列車は発車し

——残酷な運命が廻り出す

程なくして、少し肌寒い風が肌を撫でる常秋のヴァルゼドに到着した。

駅から降りて、王城へ続く大通りを歩く

「ここではゼノンが封印を解くことになるのよね」

「・・・そうだな」

ここでもすでに噂が伝わっているのか

リーマの姿を見ると道行く人々が振り返ってまで見ている。

そして教会の前を通りかかった時

孤児だろうか、子供の集団が少女のもとまで走ってきた。

「リーマさま？・・・リーマさまだ！！」

幼い少女がリーマの服の裾を掴んで、はしゃいだように言う。

「え、ええと・・・」

こういうのには当然慣れていない。

「リーマさま！>悪い奴ら<をやっつけにいくんでしょう！？」

別の少年が言う。

>悪い奴ら<

神と天使がこの言われ様では、>楽園<も形無しというものだ。

「こらこらお嬢ちゃん達、リーマ嬢は悪い奴らをやっつけに行かないといけないんだから

引き止めちゃ駄目だよ？」

クロノスがリーマの服を掴んでいた少女の手をやんわりと離させると、興味の対象が移ったのか子供達はまた瞳を輝かせた。

「あ！クロノス王子だ！！」

「久しぶりー！！」

久しぶり。

その言葉に、リーマは違和感を持った。

クロノスはこの少年少女と知り合いなのだろうか。

「あははは、ごめんね、構ってあげたいけど今は時間が無いからまた今度ね」

そう言つてひらひら手を振ると

子供達は嬉しそうに手を振りながら

「絶対だよー！」

そう言つて嵐のように走り去っていく。

「・・・クロノス、あの子達と知り合いなの？」

「ん？僕に興味持ってくれるの？うれしいなあ、あ”！」

でれつと破顔するクロノスの背にアリアの蹴りが

後頭部にクロスの拳が沈んで、不自然な声が漏れた。

「うー・・・たたた、こほん。まあなんていうか、子供とか好きだからね。」

昔からよくお忍びで城下に来て、孤児の子供達と遊んでたんだよ」

ダメージから立ち直り、青年は「似合わないよね」と苦笑しながら言う。

「意外だったけど、懐かれてるあたり>いいお兄さんくなんじゃないの？」

「そうだといいいけどね」

クロノスはまだ苦笑したまま、少し遠い目をしてそう言った。

「ちなみに僕は子供達の人気者、クロス君は>ご婦人方の人気者<だから」

拗ねたように、どことなく刺々しく言うクロノスに
クロスが舌打ちした、余計なことをと言わんばかりに顔に書いてある。

「ふーん・・・」

リーマはわざとジト目でクロスを一瞥する。

「リーマ、こいつの言うことは・・・」

「平気よ」

弁解を述べようとするクロスを制して、リーマは笑う。
彼の気持ちは疑いのような無いものだ、よく知っているから。

そんな雑談に花を咲かせていると、すぐに城門が見えてきた。
クロスとクロノスが居るから、パスを見せるまでもなく顔パスで
通れてしまった。

どこか門番がリーマを見る視線が戸惑っていたような気がするが。
ついでに顔も赤かった気がする。

しかし理由を聞く前にクロスが睨みつけると即刻視線を逸らした。
・・・なんだったのだろうか。

「よー、リーマ。待つてたぜー」

城内に入ると、ふらっふらした足取りで王であるシールドが歩いて
きた。

心なしか濃いクマができている気がする。

「え、大丈夫ですか？シールド様」

「あー・・・大丈夫だ、人間十日徹夜しても死にはしないと科学
者が言つてた

しかしまあ、クロウの野郎も元に戻して、よくがんばったなー」
と、言いながらなぜかゼノンの頭を撫でている。

「シールド様、私はこっちです」

「おー・・・」

必死に苛立ちを堪えているゼノンから、シールドの手を移動させる。

「何日寝てないんですか、あなたは」

呆れたように問うと

「あー？・・・10日くらい？」

まさに人間の限界に挑戦している。

「なんでそんなに仕事が溜まって・・・」

「おまえの国が風邪ひくと他の国は>もっと酷い風邪くひくんだよ」

風邪？国が風邪？

少女が不思議そうにしていると

「強化人間生成の責任者だったリヴァイルが死んで

クロウとリヴァイルが玉座に戻って、おまえが生きてたって事実が発覚してー・・・

こっちも昨日は新聞の号外が飛び交ってたんだぜー

まあ風邪ってのはリヴァイルが死んだことだな、他は喜ばしいことだ」

そう言つてふあ、と欠伸をする。

いまにも意識を手放しそうだ。

「玉座への道はクロスとクロノスに聞きますから、あなたはもう寝てください」

「んー・・・じゃあそうするわー、さすがに十一日目に突入したら死ぬ気がする」

「現時点でレッドゾーンです、一刻も早く寝室に行ってください」
そう言つて背を押すと

シエルドは「悪いな」と言つてふらふらしながら城の奥へ消えていった。

C11 - P2「剣舞の国ヴァルゼド」

――・・・

大扉を開けると、二つの玉座が見えた。

まあ、現在王妃の席は空席なのだが。

「では、行くか・・・」

ゼノンが一人、部屋奥へと入っていく。

他国の王子が他国の玉座の元へ向かうとは、とても不思議な光景だ。
少し高い位置にある玉座の前まで辿りつく

青年の目線より少し高い位置

宙に薄い水色の長い髪に青い瞳の青年が現れる。

執行神レジエストだ。

『本当に解くのか？』

まだ不満なのか、またリーマに侮蔑するような視線を向ける。

（うう・・・苦手だわ）

何度見ても執行神は好きになれそうにない。

向こうも好きになる気がないだろう。

「くどいぞ、シェン」

ゼノンの言葉に、シェンツァは仕方ないな、と呟いて

瞳を閉じるとミストレスの時と同じく天井近くまで浮上した。

そして両手を広げて>唄くを紡ぐ

『qui tollis peccata mundi』

―世の罪を、除きたもう主よ―

幾度もその言葉を繰り返す

広げた腕の真ん中に薄い水色の光が集い

一瞬目を開けていられないほど強く発光したかと思うと
ガラスが割れるような音とともに光が弾け飛ぶ。

そして、舞い降りるシェンツァの背には八枚の水色の翼があった。
それはミストレスと同じで、ガラスの破片のような。

『この先、おまえにどんな運命が待つのか私は知らんが、せいぜい
長生きすることだ』

そう言残して、レジエストもゼノンの体内に消えた。

これで二つ目の封印が解けた

そう思った刹那、少女は頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた
それは物理的に誰かが殴ったとかではなくて

>記憶くが、溢れ出す衝撃――

「リーマ!？」

また、遠くで声が聞こえる。

(ああ・・・またなの・・・?)

ゼノンが振り返るのが、最後に見た>現実の景色くだった。

――深い深い闇の中へ落ちていく。

けれど今度は、胸を締め付けるような苦しさは無かった。

ただ、>懐かしいく。

夢を見ているのに現実感があるというのは、不思議な感覚だ。

『リーマ、もう文字を読めるようになったの?』

黒曜石のように美しい黒い髪。

宝石のように綺麗な蒼い瞳。

『うん!父様がおしえてくれたから!』

ぎゅゅつと黒い服の父に抱きつく。

雪のように白くて、少し冷たい手が頭を優しく撫でてくれる。

『そっか・・・>傍に居られる間くに、僕に教えられることは全部

教えてあげたいけど

それはまだリーマには酷だね、こんなに小さいんだから
愛しさがいっぱいに詰まったような蒼い瞳。

『?、父様・・・どこかにいつちやうの?』

その瞳が、少し悲しそうに揺れる。

『どこにも行かないよ、どこにも・・・』

それは>優しい嘘だった。

子供というのは聡い、どこかでそれを察していたのかもしれない。

『やー!!』

涙を浮かべて、ぎゅうつと父にしがみつく。

『リーマ?』

『どこにもいつちやいや!父様、ずっといつしよにいて!!』

『あ・・・はは、大丈夫だよ、どこにも行かない。』

『・・・もし離れることになっても、>必ず帰ってくるから』

『ほんとう?どこにもいかない?』

『うん、どこにも行かないよ。』

リーマとリイリアを残してほっつき歩けるほど、僕は能天気じゃないからな

いからね』

それは>本当の約束く。

黒髪の青年は少女を宥めるようにその背を撫でた。
少女は安心したのか、甘えるようにその体に擦り寄る。

『父様、だいすき』

『ん、僕もリーマが大好きだよ』

父と過ごした温かな日々が

以前と同じように、走馬灯のように流れていく――

けれど、>過去<はそこで終らなかった――

金色の緩くウェーブのかかった長い髪。

白いロリータ服。

>新緑の瞳く。

蹲った少女は、両手で包み込むように>光くを抱いていた。

『・・・私はきつともう、元には戻れない』

愛しそうに、その光へ頬をすり寄せる。

『いつかまた>狂気くに吞まれる日が来るわ・・・』

新緑の瞳に涙が浮かぶ。

『だから、>あなたくは私の代わりに未来を紡いで、

私の愛したこの世界を護って・・・

私のワガママだって分かっているわ、でも・・・それでも・・・』

淡い光をそつと撫でる。

『・・・私がこの世界を創造した神であるのなら、

私を創造した神が>兄様く、兄様を創造した神も居るとしたら

その神を創造した神がまた居るのでしょね・・・』

独り言のように呟いて

けれど瞳には優しい光が宿っている。

此処には何も無い。

ただどこまでも広がる白い空間。

その中に、白い服の少女は蹲って居た。

——あなたは・・・

緩い意識の中でその面影に似た人物を思い出す。

——エル・・・？

瞳の色が違う。

雰囲気も何もかも違うけれど

顔の造りも声もエルと全く同じだった。

『・・・私は生まれた時から>神くだったから、
>人間くとして生まれる>あなたくがどんな未来を紡ぐのか分らない』

少女の瞳から一滴、涙が零れ落ちる。

『さよなら、私の愛した、私と血を分けた唯一の子よ。
またいずれ逢いましょう、その時はきつと・・・』

腕の中に閉じ込めていた光を
ゆつくりと外に放す

『殺し合う宿命だけど』

——気を失っていた時間は前回と違い短かったのか
クロスに体を支えられた状態で目が醒めた。

「・・・」

「リーマ？良かった、目が醒めた？」

少女の瞳が開いたのを確認して、クロスの表情が安堵に変わる。
だが、少女の表情は虚ろだった。

夢を見た、そうだ、>過去くの夢。

父の夢は分かる、父と過ごした記憶はあって当たり前なのだから。
だがエルは？

あれはいつの記憶だろう。

自分の視界からはエルの悲しそうな顔しか見えなかった。

「・・・生まれる、前・・・？」

唯一可能性があるとするれば、それしかない。

小さく呟いて、少女の意識は徐々に覚醒していく。

「？、リーマ？」

幼馴染が不思議そうな顔で少女を見下ろしている。

それに気付いて、少女は慌てて自分の足で体を支えた。

「ごめんなさい、なんか・・・夢を見てたみたい」

「封印が解かれる度、みたいだね。前もそうだったし」

クロスの言葉に、少女は頷く。

「少し休むかい？」

クロスの言葉に、少女はしばし思案した後頷いた。

「そうね、ここまで強行軍だったし・・・少し休ませてもらいましよう」

本当はリヴァールヴェールで休息を取る予定だったが

突然のサプライズでむしろ疲れ切ってしまった。

「ゼノンは大丈夫？」

「問題ない」

少女の問いに、問われた青年はいつもどおりの無表情で短く応えた。

「じゃ、解散つてことで」

部屋はクロスとクロノスがメイドに手配してくれている。

それぞれ部屋へ行くなり城下に行くなりで解散していく中

珍しくクロノスがリーマの隣に歩み寄った。

「ねえリーマ嬢、後で街のはずれにある墓地に来てくれないかい？」

「墓地？・・・いいけど・・・」

この時のクロノスがあまりに自然だったから

少女もいつもどおりの会話だと思って

>場所く少し違和感を感じつつも承諾してしまった。

後々思えば、油断していたとしか言えない。

「そう、良かった！じゃあ僕は先に行ってるから！」

そう言つて、もう一人の幼馴染は走り去つて行つた。
いつもの明るい笑みを浮かべて。

——クロスにも、ゼノンにも、>警告<されていたのに。

Chapter 11・5 - Period 1「裏切りの刻」

クロノスに墓地へ呼び出されたリーマ

彼はそこで二つ並んだ墓に鈴蘭の花を手向けていた
そして振り返った彼は――

――漆黒の剣を手に握っていた。

――一人で来てほしい――

PCにそうクロノスからメールが入っていたから
疑いもせず少女は町外れの墓地へ向かっていた。
そう、疑いもせず。

クロスに、ゼノンに、あれほど警告されていたのに
リーマはクロノスを信じきっていた。

やがて見えてきた墓地の最奥に

金色の髪に白い服の青年の背が見えた。

しゃがんで、どうやら花を手向けているようだ。

「クロノス・・・？」

いつも騒がしい彼に似合わず静かな雰囲気。

まあ墓地なのだから当たり前かと納得して近づく。

「ほんとに来てくれたんだ、一人で・・・」

立ち上がった青年は、いつもどこか雰囲気違った。

「だって、一人で来いって言ったのはあなたじゃない」

それも墓地という場所の影響だろうと思い

深く考えなかった。

そう、もっと疑っていれば・・・と、後々彼女は悔いることになる。

「そこは、誰のお墓なの？」

なんととはなしに聞いた質問だった。

だが、一寸俯いた青年は――>嘲笑くを浮かべて顔を上げた。

「僕の>両親<の墓だよ、尤も死体は埋まってない……形だけの墓だけだね」

「――クロ……ノス……？」

手向けられているのは>彼ら<の誕生花である鈴蘭。

「ねえリーマ嬢、君はとても愚かだよ……愚か過ぎるほど……」
くつくつと笑いながら、左手で顔を覆って

クロノスは

――右手に漆黒の剣を取り出した。

「……僕は君を、殺す」

指の隙間から覗いた紫紺の瞳には、深い憎悪が滲んでいた。

「――冗談……よね？」

引き攣った笑みを浮かべてみても

彼は剣を少女に向けたまま。

「それでも、>冗談<だと君は言えるの？」

バサリと、青年の背に>純白の翼<が伸び

短かったはずの髪は足元くらいまで伸びて漆黒のリボンで束ねられる。

それは今まで嫌というほど見て来た>天使<の姿だった。

「っ……クロノス……そんな……あなたは――!!」

「五月蠅いなあ、いい加減>馬鹿な君<にも分かるだろ？僕は>天使<なんだよ」

心底面倒くさそうな声音で青年は、天使は言葉を紡ぐ。

「ああ……まああんなクズどもと一緒にされたくないけど、訂正するよ、僕は>大天使<」

いつもどおりの笑顔。

剣さえ向けられていなければ、彼の容姿が変化していなければ全て、>いつもどおりくの・・・。

天使。

クロノスが。

「リーマ嬢、>マスター<は君をご所望なんだ

>殺すなくとは言われたけど傷つけるなとは言われていないし手段は問わないとも言われている」

笑顔。

>いつもどおりくの。

何も変らない笑顔で、クロノスは歌うように言葉を紡ぐ。

「だから、ごめんね？」

その瞬間、クロノスの姿が掻き消えた

少女は瞬時に大鎌を取り出し

まだ混乱した頭で

それでも背後から斬りかかって来た青年の剣を受け止める。

鈍い金属音が周囲に響き渡った。

「どうして！！エルに従属するのはあなたの意志なの！？」

「そうだよ、僕は>目的<のためなら手段を選ばないと誓った」
ギリギリと力のせめぎ合いになるが

少女はなんとか青年の剣を弾いた。

「目的・・・？」

荒れた息を整えながら、再度大鎌を構える。

一方クロノスは息一つ乱れて居ない。

「そ、目的」

息が乱れていないどころか、笑みさえ浮かべている。

クロノスは過去に異常に執着していた。

それと何か関係があるのだろうか。

「それは・・・あなたの過去と関係のあることなの？」

「クロスから聞いたのかな？まあ、そうだね、すごく関係のあることだよ」

いつも>君<をつけていたのに

今は呼び捨てなのだから、嫌でも彼は＜敵＞だったのだと認識させられる。

「僕は両親を>救い出さくんだ、

「そのためにはこの世界を壊さなければならない」

「な……!!？」

彼は歌うように言う。

罪悪感などカケラも感じていない様子で、
 > 世界を壊すのだと。

「あははははは！ ははははははははははッッ！」

彼は狂ったように、左手で顔を覆って空を仰ぎ笑い出した。

「楽しみだなあ……！！楽しみだなあ！！！！楽しみだなあ！！！！」

そして少女へ視線を移し、狂気に満ちた瞳で笑いながら剣を構える。

「知ってるかいリーマ嬢？」

笑みを浮かべたまま、剣を向けたまま

青年はにこにこ言葉を紡ぐ

彼の笑顔に抱いていた不快感は、本能からの警鐘だったのかもしれない。

「天使……人形くっついていうのはね、命を喰って強くなるんだ」

その紫紺の瞳が僅かに赤みがかっている気がした。

赤は、紅は、血の色、エルの色。

「>神の幼体く、>エンブリオくを殺したら僕はどれくらい強くなれるんだろう!!」

再び青年の姿が風景に掻き消えるように消える

(何処・・・?)

気配が掴めない。

「まあ命令があるから殺すことはできないけれど

君を殺してみたいと思うよ、これはきつと>愛くだね、愛情だよ!!

僕は君を>愛してるくんだ!!」

「あんた、頭は大丈夫?ネジが全部ぶっ飛んでるんじゃないの!？」

姿の見えない相手に向かって叫ぶ。

その時、脇腹を何かが挟る感触がした。

「!？」

追って痛みがやってくる

「っ・・・痛う・・・!!」

左手で触れると、深く挟られた脇腹。

そこからとめどなく鮮血が溢れてくる。

「あははははははは!!弱い、弱いよねえ、君は!!」

また、どこからともなく声が聞こえる。

痛みによるめいた刹那、背後から伸びてきた冷たい手が顎を掴む。

「――」

「すごく可愛いよ、可愛い・・・」

耳元で囁かれる甘い言葉。

しかし少女の血の気は増すどころか退いていた。

左の背筋に当たる、冷たい剣の感触に。

「>最期くに、一つ聞いわ」

少女は張り付いてしまいそうな喉でなんとか言葉を紡ぐ。

「どうして、両親を救うためにこの世界を壊さなきゃいけないの・・・?」

その問いに対する答えは

「リーマ嬢、ここが>楽園<だと言っのなら・・・>冥府<があるのは当たり前だろう?」

その声もいつも通りで。

錯覚してしまいそうになる。

「両親は>冥府<に居る、だからこの世界を壊して、冥府も壊し全て・・・>一つになるくんだ、いや・・・>一つに戻るく、かな」
「戻る?」

「そう、月神が・・・マスターの兄である月神ルナグラムが二つに分けた世界を

今一度一つに戻すのさ」

「でもエルは、あなたも最期には・・・殺すんでしょう?」

肝心なことを忘れていないかと問うたつもりだが

クロノスはくすくすと笑った。

「そうだよ、僕も世界に還る・・・全ての魂が一つに還る。

>そこで僕は、両親と>再会<できるんだ」

「――」

それが

彼が悩んで、考えて、出した答えなのだろうか。

会話もできない、触れることもできない、己を己と認知する己も居ない。

けれど確かに彼の魂は両親と一つになるだろう。

それが、クロノスの>望み<なのだろうか。

――そうまでして、彼は・・・

「チェックメイトだ、リーマ嬢」

服を破って冷たい剣が薄皮一枚を破る。

その、時――

クロノスの剣を第三者の剣が弾いた。
そしてぐいっと体を抱き寄せられる。

「リーマ、俺はこいつを>危険人物<だと警告しておいたよね？」
その声はよく知った声。

「——クロス」

嗚呼

一番来て欲しくなかった人物。
だって

彼らは双子なのだから。

唯一世界で血を分けた二人なのだから。
どうしてそんな二人が——

剣を向け合っているのか——

少女の脇腹を抉った傷はまだ生々しく鮮血を滴らせている。

ダーインスレイヴでつけられた傷は

自然治癒では契約者であつてもすぐには治らない。

傷口にクロスの黒い手袋が触れた。

その瞬間に、傷口が塞がっていく。

「あーあ、空気読んでよクロス……いま>イイトコロ<なんだよ」
大袈裟に溜息を吐く>兄<に
クロスは殺気を向ける。

「いつか、こんな日が来る気はしてた……

だから、おまえが裏切るのは百歩譲って構わない。

けど、リーマに剣を向けた代償は高くつく」

クロスは右手に握った白銀の剣を>兄<に向けた。

「おやぁ……クロス？ 僕らは双子の兄弟だよ？ この世で唯一血を
分けた兄弟だ。」

なのに君は彼女を庇うつていうのかい？」

言い聞かせるように、けれど嘲るように言うクロノスに

クロスはさらに眼光を鋭くさせた。

「リーマを傷つけるのなら、たとえ実の兄でも容赦しないし

リーマの敵になるなら、おまえは俺にとつても敵だ」

「>妄信的くだねえ・・・ま、嫌いじゃないよ。キミのそーいうト
コロ

だからこそ・・・」

クロノスの笑みが狂気に染まる。

「だからこそ！君が>過去くを思い出してどうなるのが楽しみで
仕方ないよ！！

苦しんでもがいて最後は誰に助けを請うだろうね！！

それでも君はその>無力な女の子くを愛してられるかな！！」

「・・・黙れ！！！」

クロスの剣が兄の>魔剣くとぶつかる。

「知ってるかいクロス！この二対の剣は・・・

君の聖剣ブリュンヒルデが>忠誠の剣く、

僕の魔剣ダーインスレヴが>裏切りの剣くなんだよ！！」

彼は晒いながら言う

「僕らの>運命くは最初から決まっていたのさ！！」

クロノスがクロスの剣を弾いて、その肩口を切り裂く
けれどその傷はすぐに塞がっていく。

クロスには、ダーインスレヴの力を相殺する力があるのだろう。

クロスになら、勝機があるかもしれない

そう、思ったのに

「なあクロス、君はよく知っていると思うけれど

君が>人形くの中ではこの魔剣の力を相殺できる唯一の能力者だと
しても

ブリュンヒルデではダーインスレイヴに攻撃的な面で天地の差があることを

・・・君は分かっているよねえ!？」

再びクロノスが剣を振り上げ、クロスの剣がそれを受け止める。

「ああ知っているさ、だけど俺はおまえに負けるわけにはいかないんだ!！」

加勢しなくては

そう思ったが、これも魔剣の力なのか
体に力が入らない。

(なんで・・・こんな時に・・・!!)

何もできないの――

契約者は>この世<で>最強の存在<では無かったのか
悔しさから血が滲むほど強く唇を噛む。

その間にも、双子の戦いは熾烈を極める。

クロスの服はボロボロになって、所々治癒が間に合わない傷が出来ていた。

だがクロノスは無傷で服もまったく変化が無い。

二人の実力差は明らかだった。

それはそうだ

クロスは>半身<を無くした状態の>人形<

クロノスは過去の記憶も何もかも全て完璧に整った>大天使<

言うまでも無く、後者のほうが圧倒的に有利だ。

「ねえクロス、もう無駄なことはやめよう。

リーマ嬢もこちらに来る、君もこちら側に来ればいい

そうすれば君の願いも叶うだろ?」

「リーマはおまえらなんかに渡さない、彼女もそれを望んでない。

だから俺はリーマを守る、そっち側に行っても>俺の願い<は叶わない、絶対だ」

荒い息を吐きながら、クロスは再度剣を握る。

声をあげたいのに

> もういいく、と

なのに、声さえ出てこない。

だが、少女の強い想いが伝わったのか

クロスがリーマに振り返った。

けれど彼は、いつものように柔らかに微笑んで

「大丈夫だよ、リーマ」

そう、言った。

そして彼は無謀にも兄に斬りかかる

「・・・君は賢いのが美德だと思っていたんだけれどね」

クロノスは嘲るようにそう言って、片手で聖剣を受け止めた。
が・・・

「――」

肉を貫く嫌な音。

血が噴出す音。

クロノスの左胸を貫いた>聖剣<。

クロスの剣は受け止められている、では・・・

背後へ視線を向けたクロノスは、晒った。

C11・5-P2「裏切りの刻」

「・・・これは、反逆罪だよ？>ユーフォリア<」

そこには、金色の長い髪を黒いリボンで束ねた

水色の瞳に白い服、ボロボロの双翼を持った>天使<が居た。

「……おまえには＞借りくがある……返しに来た」

そうやって、ユーフォリアはクロノスの左胸を貫いた剣を抜く。

「どうして君達は揃いも揃って愚かなのだろっね！！」

全て一つに還れば全てのものに幸福が訪れるのに！！

憎しみも悲しみも無い、>完璧な世界<が誕生するのに!!」

クロノスが翼を広げると

空間が歪んで何十人もの天使が現れた。

そうだ、大天使は>天使を統括する者<。

呼び出すこともできるのだ。

「君達は後できっと後悔するよ!! クロス、特に君はね!!」

>過去を忘れ>今くというまどろみを選ぶ君は！！

誰が自分を守ってくれたのか、なぜ今君がここに居られるのか！！

「その全てを忘れた君は！！」

ふらりとクロノスの体が宙に浮く。

「はははははは！ ははははははッ！！！」

楽しみだなあ……楽しみだなあ……楽しみだなあッ……！」

バサリと羽ばたいて

クロノスは優しく微笑んだ。

「……ばいばいリーマ嬢、また今度ね」

そう言い残して、クロノスの姿は大量の羽と共に掻き消えた。残された三人は、数十人の天使に囲まれた状態

クロスもユーフォリアもすでに臨戦態勢に入っている。
クロノスが居なくなっただけで魔剣の力も薄らいだのか
なんとか指先から順に体の自由が戻ってくる。
少女も立ち上がり、右手に大鎌を取り出した。
まだ本調子には程遠いが、戦えないことはない。
「リーマ、俺の後ろに」
「平気、戦えないことはないわ」
庇ってくれるクロスに拒否の言葉を投げかけて
少女は大鎌を構える。

そこで気付いたが、いままで見てきた>天使<というのは
>剣<しか使っていなかったのに
ここに居る天使達はそれぞれ全く違う武器を手をしている。
ある者は剣、ある者は槍、ある者は大鎌、ある者は杖。
持っている物がそれぞれ違う。

「・・・コレは、リーマが知っている天使より>階級<が高い天使・
・

大天使・・・>バルディエル<直属の天使達だから」
言葉にしていけないのに心の中の言葉に返事をするユーフォリア。
「バルディエル？」

誰のことかと思っ問うと

「あいつ・・・クロノス・・・？の、天使名」

「――」

彼は本当に、>大天使<、だったのだ。

――白が世界を支配する。

回廊を流れる美しい水。

溢れた水は真つ白な世界へ落ちて消えていく。

「おかえりなさい、>バルディエル<」

「遅くなりました、>マイ・ロード<」

広い世界の東屋で椅子に腰掛けた少女の手を恭しく取り
クロノスはその甲に口付ける。

「私の>可愛い赤ちゃん<の様子はどうだった？」

少女は楽しそうに、談笑するかのように青年に問う。

「リーマ」エルスレッドは未だ>覚醒<に至っていません

>ぬるま湯<に浸かっている現在では、覚醒に至るのは難しいでしょう」

青年はにこりと笑って、その紫紺の双眸を細め

「>第二級神罰執行<を提案します」

そう言った。

それを聞いた少女は楽しそうにクスクスと笑って、片手で口許を覆う。

「そうね、いいわ・・・そうしましょう?」

血色の瞳に映るのは、>狂喜<。

「あなたも傷が癒え次第・・・出撃して、それまで休んでいいわ」

「イエス・マイロード」

手を払う少女を見て、青年は一礼すると一歩下がった。

そして少女の居る東屋に背を向けて歩き出す。

真っ白な世界。

どこまでも真っ白な、>ワールズエンドガーデン<。

水が床一面を満たす大広間に辿りついたところで

青年は足を止めた。

「・・・父さん、母さん・・・」

貫かれた胸に手を当てて、小さく呟く。

「これで・・・良かったんだよね・・・？」

誰にも聞こえないほど、小さな呟き。

仮にこれが間違った選択でも

もう、戻れない。

透明な水が青年の罪を洗い流すように流れていく――

C 1 1 . 5 - P 3 「裏切りの刻」

剣戟の音が、静かな墓地に木霊する。

「っの!!」

大剣を振りかぶってきた天使の体を横薙ぎに切り裂いて
リーマは灰になっていくソレに目もくれず

大鎌による次の攻撃を受け止める。

大鎌同士というのは分が悪い。

そう思ったのも束の間、クロスの剣が大鎌を振りかぶった天使の体
を貫く。

そしてクロスの背後からレイピアを構え向かってくる天使を切り裂
く。

「はぁ・・・は・・・終わ・・・り？」

もうこの場に立っているのは少女と青年と大天使が一人。

激戦だったにも関わらず、周囲には血の跡一つ無い。

天使は全て、須らく灰になって大地へ還って逝った。

「・・・終わり、もう、居ない・・・」

ユーフォリアが呟いて、剣を虚空に投げ出す。

同時に、クロスが大地に片膝を着いた。

「クロス！」

「大丈夫・・・だよ」

思わず声を上げると、青年は剣に体重をかけたまま
それでも笑顔で顔を上げた。

けれど

その身には生々しい傷跡がまだ残っていた。

魔剣の猛毒をまだ中和しきれていないのだろう
それはそうだ、リーマのように一箇所ではない

クロスは何箇所も、何度もあの魔剣の傷を受けたのだ。
刹那

ふらりとクロスの体が傾いて
どさりと大地に倒れた。

「クロス・・・？クロス・・・！！」

悲鳴にも似た声を上げ、慌てて大地に膝をついて青年の体を揺する
少女の肩に

ユーフォリアが落ち着かせるように手を置いた。

「気を失っているだけ・・・」

「でも・・・！！」

落ち着かせるような声音も、少女の動揺には届かない。
自分がクロノスを信じすぎていたから。

こんな場所に一人で来なければ

クロスは怪我などしなかったのだ。

分かっている。

全ては自分が無力であつたがためだ。

（私は、守られるしか能が無いの・・・？）

悔しさから血が滲むほど強く唇を噛む。

「・・・そうだね・・・でも、このままでは死ぬかもしれない」

ユーフォリアの言葉に、少女の思考が一瞬停止する。

死ぬ？

誰が？

クロス・・・が・・・？

「いやッ！！どうすればいいの！？あなたは知っているんでしょう
！？ねえ！！」

考えるより先に敵であるはずの天使に縋りつく。

「なんでもするから・・・！！なんでも・・・だから・・・！！」

「リーマ・・・」

ユーフォリアの外套を強く握って俯く少女に

天使はしばし沈黙し

大地に片膝を着くと

少女に顔を寄せ少女の唇に滲んだ血を舐めた。

それだけで、血と一緒に傷口も塞がる。

錯乱している彼女は気付いていないが・・・。

「リーマ・・・泣かなくていい・・・」

天使は少女の頭を優しく撫でて、その額に口付けた。

「・・・リーマが望むなら、そいつを助けてあげるから」

「!」

そう言つて、天使は倒れた青年の心臓に手を当てた。

「・・・我は天啓を受け導く者、汝に聖なる加護を与えよう」

天使が小さくそう呟くと、青年の体が淡い光に包まれ
残っていた傷が全て、あっという間に癒えていった。

「——ユーフォリア・・・ありが・・・と・・・」

涙で声が詰まる。

けれど伝えると、この天使にしては珍しく感情を表に出し

苦しそうな、苦笑を浮かべた。

「・・・リーマは、やっぱり・・・僕じゃ駄目なんだね・・・」

「？」

「・・・うつん、なんでもない」

いつもの無表情に戻った天使は立ち上がり

翼を広げた。

「リーマ、また今度・・・逢いたい」

「え、あ・・・!」

少女が止める間も無く、天使は真つ赤な夕暮れの空へ羽ばたいてい

った。

舞い落ちる羽に瞳を奪われていると

少女の手を黒い手袋をした手が握った。

「・・・リーマ」

「!・・・クロス!!」

頭を振って起き上がる青年の体を、慌てて支える。

「だ、大丈夫・・・なの？」

「ん・・・大丈夫」

どこかぼうつとした様子のクロスの瞳は光が薄らいで
どこことなくユーフォリアと似た空気を纏っていた。

「っ・・・ごめんなさい!!」

涙ぐみながら頭を下げる少女を見て

クロスはきよとした。

「私が・・・もつと気をつけてれば、クロスは怪我なんてなくて
済んだのに・・・

私をもつと、強かったら・・・もつと・・・!!」

唇を噛み、服を血が滲むほど強く握る少女を見て

クロスは苦笑してその頭を優しく撫でた。

「俺は、リーマのために傷を負うのは平気だよ

リーマが怪我をするよりずっといい・・・君を置いて死ぬのは嫌だ
けど

それにね、リーマがあんまり強くなっちゃうと・・・俺の出番が無
いだろう？」

「だけど・・・!!」

顔を上げた瞬間、ぐいっと体を引き寄せられて抱きしめられる。

「リーマ、覚えてる？」

「？」

青年の肩口に顔を埋める形になり

その表情は伺えないが、優しく髪を梳かれ少女はゆっくり体の力を抜いた。

「まだ君が契約者になったばかりの頃、>実験くがあっただろう?」
「ああ・・・ガトリングガンでどれだけ撃たれて立ってられるかっていうやつ?」

「そう・・・あの時、俺はね・・・
窓から君を見ながら自分の無力さを呪ったよ」

彼女は最終的に、五十機のガトリングガンの弾が無くなるまで立ち続けた。

思い出すだけで吐き気がしそうなほど苦しい。

血まみれになって、服もほとんど役割を果たさないほどボロボロになっ

それでも大鎌を手に立ち続けたリーマ。

その身を幾千もの弾丸が貫通する、その様子を見守るしかできなかった自分を

彼は呪った。

「だから、もう君が怪我をするのを見るのは嫌なんだ」

――・・・

「?」

しばらく抱き合っていた二人を、外の喧騒が引き離れた。

悲鳴が聞こえた。

それも一つではない。

「いま、悲鳴が・・・」

「リーマにも聞こえた?」

幻聴ではないようだ。

二人は立ち上がり、墓地の外へ出て

悲鳴が聞こえた大通りを目指して走る。

そこで待っていた、光景は・・・

「な、なによこれ!？」

思わず少女は悲鳴を上げた。

血に染まった大通り

そして剣を携えた何十もの>天使<。

「リーマさん!!」

その時、王城の方角からソウルが走ってきた。

「ソウル!これはなに!?!?どういうこと!?!」

「分からないんです・・・突然天使がたくさん降りてきて・・・これじゃ、まるで・・・」

>過去<と、同じ。

クロスは空を見上げ

「第二級・・・神罰・・・」

ぼうつとした様子で小さく言葉を紡いだ。

今までも天使が突然降りてきて人間を襲うことはあった。

だがこれほど大勢の天使が一斉に舞い降りるのは

>過去の大戦<以来だ。

神と人間の戦い。

リイリア「エルスレッド

クロヴィス「アースランドを筆頭に戦った五英雄の戦いと同じ。

「クロス?」

どこか虚ろな幼馴染を見て、首を傾げるリーマの声に

クロスは現実を引き戻される。

>第二級神罰<

その言葉がどこから湧いたものか、自分でも分からないが
>知っている<気がするのだ。

何か、
を
・
・
・
。

Chapter 12 「第二級神罰執行」

突然空から舞い降りた天使達

戸惑う少女の前に再び至高神が現れる

そして

逃げ惑う人々に救いの手を差し伸べたのは

意外な人々だった――

――事はリヴァールヴェールでも起こっていた。

「>第二級神罰<が執行されたか」

テラスから空を見上げ、黒髪の青年は忌々しげに呟く。

真っ白に見えるほどの天使が空から舞い降りてくる。

クロウは大鎌を取り出すと、それを空に掲げ

その瞬間に、影という影が集まって国全体をドームのように覆う。

真っ暗な闇の外で、天使達が>結界<を破ろうとしているのが見える。

突然の襲撃、そして突然の暗闇に、人々の混乱はピークに達していたが

クロウの隣に立っていたリイリアが光の槍を取り出し

それを同じように空に掲げると

黒い結界の下に光の結界が生まれて世界が明るさを取り戻す。

「・・・シエルドさんは大丈夫でしょうか？それに・・・リーマ達は・・・」

大鎌と槍を消し去り

クロウは思案顔で口許に手を当てる。

「シエルドは人望も厚い、たぶん大丈夫だと思うけど・・・
皇国とネジユラネスは心配かな

それに僕らの力も>無限<じゃない、いつまで持ちこたえられるか・
・・」

「・・・そう、ですね・・・」

契約者、そしてアルトメイデンと言えどもリヴァールヴェールを>
閉鎖<するだけで

精一杯といったところだ。

けれどそれも>有限<。

いつか、壊れる。

それまでに――・・・

鮮血が宙に舞う。

少女は大鎌を肩に担ぎ、溜息を吐き出した。

「キリが無いわね・・・!!」

そして背後から斬りかかって来た天使を切り裂く。

キリが無いのだが、ここで攻勢をやめてしまえば無力な>人間<が
犠牲になる。

「リーマ・・・大丈夫？」

槍斧を手に尋ねてくるアリアに笑みを返し

少女はまた切りかかってくる天使を切り裂く。

「私は平気よ、不幸中の幸いを言うなら・・・

>こいつら<は>私達<を真っ先に狙ってくるのかしら」
戦っていて気付いたことだが

天使達は人間より契約者を優先して襲ってくる。

つまり自分達がここに居る限り、この人間達は安全だ。

だが、いつまでも戦い続けることはできない。

それに、被害がヴァルゼドだけとは限らないのだ。

王城に待機していた強化人間達は住民の非難に奮闘している。

(どうする・・・)

そう考えた時だった。

「苦戦しているようね？リーマ」

聞き覚えのある、最も聞きたくない声がすぐ後ろから聞こえた。

「リーマー!!」

クロスやアリア、ソウルやゼノンの声が聞こえる。

振り返れば、そこには微笑みを浮かべた金髪の少女が居た。

紅い瞳は、狂喜に揺れて。

「あんだ・・・これはどういうことよ」

少女・・・エルくを睨みつけて

低い声で問うと

「ふふふ、恐い恐い・・・でも怒った顔も好きよ？」

少女は心底嬉しそうにクスクスと笑った。

「これはね、>神罰くなのよ驕った人間達への>罰くなの」

胸に手を当てて、瞳を閉じて言う少女に

リーマは大鎌を握る手に力を籠めた。

「そう・・・じゃああんだを殺せば終わるわけね!!」

無茶なんて承知している。

だけれどこれ以上犠牲を出さないためには・・・

肉を裂く確かな感触、ごとりと落ちる>頭く、崩れ落ちる体。

それはあまりにもあっさりと終わってしまったかのように思えた。

エルは胴と頭がバラバラになった状態で大地に倒れている

一瞬の静寂

けれど

「あはははははははッッッ！！」

「――」

頭だけになった少女は、頭だけで笑い出した。

そして首の無い体がゆっくりと起き上がり

両手で包むように己の頭を>拾う<

それはあまりにも不気味で、吐き気さえするような光景だった。

エルは頭を拾い上げ、首をくつつける

そうすれば、もう>元通り<だった。

「悪い子ね、リーマ」

「・・・やっぱり神ともなると頭落としたくらいじゃ死なないのね」
髪を払うエルに、リーマは舌打ちして言葉を吐き捨てる。

だが、エルは首を横に振った。

「あなたが>覚醒<していれば死んでいたわ」

「覚醒・・・？」

「そう・・・覚醒、>リスクオテルスイ<・・・あなた達に与えられた>最強の切り札<よ」

にこりと微笑む少女。

なんとかこの状況を打開させたくても

リーマも、仲間も、迂闊に動けない状態。

「でも、そうね・・・あなた以外は覚醒状態で永続的な戦闘はできないわ

せいぜい10分ね。それ以上は体がもたなくて灰になってしまふ」

「どうしてそんなあんたにとって不利になるようなことを教えるのよ、信じられないわ」

その情報はエルにとって脅威となる。

そんな情報をこんなに簡単に言うのだろうか。

信じることなど到底できない。

だが、エルは予想外の言葉を吐いてきた。

「だってその方が>楽しい<じゃない！」

私にとってこの世界を亡ぼすこともあなた達を葬ることも>容易いこと<なのよ

ならせめて>リスク<があつたほうがいいと思わない？」

少女は歌うように言う。

「私を殺せるのはあなただけ、そして覚醒したあなたに致命傷を負わされれば

私は確実に死ぬけれど、私があなたに致命傷を負わせればあなたが死ぬ

これは>賭け<よ、一瞬で吉にも凶にもなる賭け」

「・・・あなたにとって>コレ<は>楽しい<か楽しくないか、だねのね」

怒りがふつつと湧いてくる。

人類は須らく罪を背負っていると謂う。

それはあながち間違っていないとは思う。

だがだからといって、>神<だったら、>天使<だったら、無差別に生物を殺していいのか。

神だったら、天使だったら、>人の人生<一つ捻じ曲げてても<いいのか。

例えばエルの決断が別のものだったら

例えばリーマは両親と共に幸せに暮らしていただろう。

例えばクロスとクロノスは両親を失うことなく殺し合うことなく幸せに暮らせただろう。

——例えば、ここに>契約者<は居なかっただろう。

「あんだ、私よりずっと長生きなのよね？ずっと大人なのよね？
なのにまるで>ガキくだわ、私より最低なヤツなんて居ないと思っ
てたけど、反吐が出る」

震えるほど拳を握り締めて

殺気と憎悪を籠めてエルを睨みつける。

「ふふふつ、神に>年齢くなど説いても無駄よ

神は歳を取るのか取らないのか、貴女に分かる？私はもしかしたら
0歳かもしれないし

もしかしたら何億歳かもしれない」

「そんなのは屁理屈よ！！>遊びく程度の感覚なら今すぐこの天使
どもを退かせて！」

少女の怒号にも神は微笑むだけ。

「貴女の怒った顔は本当に素敵、可愛い・・・だから>イイコトく
を教えてあげるわ」

ゆっくりリリーマに歩み寄り、エルはその頬に手を添える。

「この第二級神罰執行を提案したのはね」
神の笑みが歪む。

「クロノスⅡアークよ」

新緑の瞳が驚きに見開かれる。

そんな・・・馬鹿な、嘘だ。

だって彼は・・・

『また>今度くね』

孤児の子供達にそう言ったではないか。

自国でこんな理不尽な>虐殺<が行われていると知っていて？
彼は、彼は・・・

彼にとって自分達は、この国の人々は、彼を育てた父は・・・

「そん・・・な・・・」

ガランと音を立てて、力の抜けた手から大鎌が落ち
ソレは漆黒の灰になって霧散した。

膝に力が入らない。

ガクリと大地に膝を着く少女に、神は優しく微笑み
慈愛に満ちたその顔で残酷な言葉を紡ぐ。

「貴女が悪いのよ？リーマ、貴女が早く覚醒しないから、だから無
実の人々が死ぬの

貴女は殺してばかりね？リーマ、>殺すことしかできない<のよ・・・
・私と>同じ<で

だって>私と血を分けた親子<なのだもの！」

それは洗脳のような言葉だった。

殺すことしかできない。

事実だ、それは、事実で・・・

自分をもつと強ければとつい先刻思った。

（私が弱いから・・・？）

だからいま、世界はこんな事態に陥っているのだろうか。

自分が生まれてきたことがそもそも全ての間違いで、全てを狂わせ
たのだろうか。

もし自分が居なければ神の神罰執行は速やかに行われ
この世界はすでに無くなっていたのかもしれない。

もしくは自分が神をも殺せるだけの力を手に入れて
神を殺していれば別の世界が広がっていたのかもしれない。

（私が、私が・・・居なければ、強ければ）

思考が混乱し始める。

「ねえリーマ、私と一緒に>逝きましようく？」

顔を上げると、神が誘惑の微笑みと共に手を差し伸べていた。

今、自分に彼女を殺せるだけの力はない。

こんな状況が何時までも続いて、罪無き人々が殺されていくなら・

——全ての魂が一つに還る、そこで僕は両親と再会するんだ——

>彼くの言葉が蘇る。

そのほうが良いのかもしれない。

これ以上、無駄な犠牲を払うなら。

だってそうしたら、クロスとクロノスも戦う必要が無くなって——
伸ばされた手に手を伸ばしかけた瞬間
ドツとエルの心臓を白銀の剣が貫いた。

「リーマ、その手を取ったら・・・それこそ今まで君が殺してきた者達や

俺への>裏切りくだよ」

エルの背後を取り、その心臓を貫いたのは

他でもないクロスだった。

「・・・邪魔、しないでくれる？>欠陥品くのクセに」
「クロス！！」

光を纏った腕で振り払うエルの腕を、クロスは寸でのところで避ける。

そうだ、何を弱気になっているのだ。

今自分が死んだら、自分が造られるまでに死んでいった命はどうな

る。

今まで殺してきた者達はどうなる。

リーマ達の時代を守るために戦った母や父は、
シエルドは、ソウルのために死んだメルヴィングは、ゼノンの父で
あるフェイルは。

刹那

一体の天使が血飛沫を上げて倒れた。

「!？」

振り返れば、そこには剣を携えたエクレール。
その後ろに続く>雪のように白い肌<の人々。

「エクレール!？」

「リーマ様!ご無事ですか!？」

「エクレール!彼らは・・・」

次々に天使を切り裂いていく色白の人々。

強化人間でも無ければ天使は殺せない。

なのに易々と灰に変えていく。

リーマの問いに答えたのはエルだった。

「・・・>闇の民<、ほんと人間って・・・浅ましいわ」

忌々しげに呟く神。

>闇の民<、それに当てはまるのは一つしかない。

レフィーリカの民だ。

あれほど争いを嫌う彼らが何故、ヴァルゼドのために戦っているの
かは分からないが

加勢しにきたのは確かなようだ。

「・・・興醒めだわ」

神は瞳を閉じて鬱陶しそうに金色の髪を払ってそう呟き

「じゃあねリーマ、また今度逢いに来るわ」

そう言った瞬間、エルの体は薔薇の花弁になって散った。
神が去り、辺りに静寂が訪れる。
ヴァルゼドの民を襲った天使達は全て灰へと変っていた。

C12・P2「第二級神罰執行」

「初めまして、リーマ様」

座り込んだままのリーマに手を差し伸べる真つ白な肌の女性。薄い水色、氷を彷彿とさせるような長い髪を高い位置で束ね黒曜石のような瞳と雪の様に白い肌の、剣を携えた女性。

「?・・・あなたは・・・」

「私はレフィーリカ第一師団騎士団長ネーロ」ヴィオーラと申しますネロとお呼びください」

レフィーリカの騎士団長・・・。

やはり彼らはレフィーリカの民で間違いないようだ。

「なんで・・・レフィーリカに属しているあなたたちが・・・」

「我らが王の命令です」

リーマの問いへ、ネロは表情を少しも崩さずに答える。

「レフィーリカは地形が冥府に傾いているため

神気を纏っている並な天使達は侵入できません、

ヴァルゼドの民も当面はレフィーリカの地に避難させるのが得策かと」

「そうじゃなくて・・・レフィーリカほど争いを嫌う地は無いわなのに、なんで・・・」

少女の言葉にネロは首を傾げ

「同盟国を救うのは何かおかしいですか?」

そう言った。

ヴァルゼドとレフィーリカが同盟関係だなんて聞いたことはない。

リーマが納得いかない、という顔をしていたからだろう

ネロは丁寧に再び説明を再開した。

「第二王子であられたクロヴィス様がリヴァールヴェールに婿に入り我らとリヴァールヴェールは同盟関係にあります

そのリヴァールヴェールの同盟国を救うのは、おかしいですか？

盟友の友もまた、我らの友です」

「・・・父上らしい考え方だ」

呆然としているリーマに代わり、ゼノンが呆れたように呟いた。

「だが、反対した者も少なくないだろう」

ゼノンの言葉にネロは首を縦に振った。

「殿下のおっしゃる通り、反対した者も少なくありません

反対を貫く者達はレフィーリカの守りに徹しています」

「賢明な判断だな」

では、ネジュラネシスと皇国は完全に>放置くというわけだ。

本来なら、自分の国でなんとかするのが筋なのだから

当然と言えば当然だが。

そこで自国のことを思い出しリーマはエクレールへ視線を移して叫んだ。

「・・・っ！！・・・リヴァールヴェールは！？」

「あれを」

エクレールが見た方角へ視線を移すと

そこには黒いドーム状の>巨大な何かくの一部が見えた。

「陛下と女王陛下の力で結界を張っています

普通の天使達に突破することは、まずできないでしょう」

国一つに丸ごと結界を張ってしまうとは・・・。

安心からの脱力感と同時に、両親の偉大さを思い知る。

（あれが、本当の死神の力・・・）

父にできるなら、自分にもできておかしくない。

（なのに・・・）

脱線した思考、だが悔しさから歯噛みする。

クロノスに、全く手も足も出なかった。

（私は、まだ死神を完全にコントロールできてない・・・）

弱い、あまりにも自分は弱い。

力が・・・

力が、欲しい。

全てを圧倒する、神をも圧倒するような――

――力を求めるかい？――

（！？）

聞き覚えの無い誰かの声が聞こえた。

だが、周りを見回しても会話していたり部下に指示を出していたり・

・・

気のせいだろうか

――君にしか聞こえていないよ――

しかし声は再び聞こえた

しかも思考を読み取ったように。

低めだが、心地いい青年の声。

（誰？）

こんな手段を用いる存在は、大方予想がつくがあえて問う。

――君は分かっているんじゃないかな？――

くすくすと笑って

――私の名を言えば君は信じるかい？――

（知らないよりはマシね）

突然

>時間が止まったく

ありきたりな表現だが、こうとしか言えない。

本当に時間が止まったのだ。

周囲はセピア色に染まり、音も何もかも全てが止まった
そんな空間に舞い降りる、>自分<と>同じ姿の人物<。

『私は>ルナグラム<だよ、リーマ＝エルスレッド』

栗色の長い髪、新緑の瞳、全てが同じだった。

「ルナグラム？」

その名には聞き覚えがあった。

たしか、そう・・・あの時<、墓地で>クロノス<が言っていた。

「エルの兄？」

>月神<ルナグラム、>創造主<とも呼ばれている。

『よく知っているね、嬉しいよ』

もう一人の自分、ルナグラムは微笑んだ。

それは非常に胡散臭くて、>自分<ではない<、とよく理解できた。
自分には到底こんな胡散臭い笑みはできそうにない。

「どうして私の姿なのよ、ほんとの格好で出てきなさいよ」

不満げに言うリーマに、ルナグラムはまた微笑む。

『私には>姿<が無いんだ、すまないね』

「？」

『私はどこにでも居て、誰でもあり、つまり>確かな存在<は無い
んだよ』

いきなり会話が超次元だ、これだから>神<というやつは。

つまり彼（今はリーマの姿と声だが）は

リーマの傍にも、誰の傍にも居て

そしてリーマ自身でもあり、その周囲の人物全てに該当する。
と、いうことだろうか。

『正解、少し賢くなったじゃないか』

「失礼ねあんた」

『君はイジメ甲斐がありそうだと思ったんだ、ごめんよ』

「許せない発言があつたから許せないわね」

イジメ甲斐ってなんだ、と思わず口を尖らせる。

神という奴はどいつもこいつもこいつもこうなのだろうか。

『それで？君は力を求めるのかい？』

こほん、とわざとらしい咳払いをして

ルナグラムは意味深な笑みを浮かべた。

「・・・求めるって答えたら、くれるの？」

『その＞手段くをね』

睨みつけるリーマの視線を受け、ルナグラムは笑みを消した。

『この先は＞君達くの前で語ろう、

でもリーマ、君に一つ問いたいことがある』

「？」

射抜くような視線と共に、ルナグラムは冷たい声で言った

『＞力の代償くに＞愛する者を失う覚悟くはあるか？』

それは・・・

「誰の、こと・・・？」

『君の心に一番に浮かぶ人間のことだよ』

月神の視線が時間が止まったままの＞クロスくに向く。

『彼は＞試練くを乗り越えるかもしれないし、乗り越えられないかもしれない
もしねない

後者だったとき、君は彼を失うだろう・・・永遠に』

「――」

それが、意味するのは・・・つまり、

『ではね、リーマ・・・君なら私の妹を＞救ってくくれると信じて

いるよ』

「待つて……!!」

呼び止めようと思った時には
時間はすでに動き出して——

「リーマ？」

「どうしたんだ？」

クロスとゼノンに名前を呼ばれ、慌てて口を噤む。

「な、なんでもない……あはは……」

我ながら残念な演技だったと思う。

一度ヴァルゼドの王城に戻り、クロノスの>離脱<と

皇国へ向かう意向をシエルドに伝えようと、リーマは一人執務室に
来ていた。

アリアやクロスも一緒に来ると言ったが、あえて一人で来たのは

>確かめたいこと<があつたからだ。

いや、>聞きたいこと<、だろうか。

扉をノックすると中から相変わらずいい加減な返事が聞こえてきた。
どうせ扉の前に居るのがリーマだというのも分かっているのだろう。

「失礼します」

中に入ると、シエルドは机に頬杖をついていた。

「……第二級神罰が執行されたな、

いよいよこっちも暢気にしてられなくなったわけだ」

シエルドがその単語と意味を知っていても、おかしいことは無い。

彼は過去に>神と戦った人間<の一人だ。

「……クロノスが……」

俯きながら呟いた単語、名前に

シエルドがリーマへ視線を移した。

「>裏切られたくか？」

「！・・・やっぱり、あなたは知っていたんですか？」

掴みかかれるものなら掴みかかりたい。

そんな衝動を抑えながら、リーマはシエルドを睨み付けた。

「・・・>あいつく、さ」

だがシエルドはリーマから視線を逸らし、窓の外を眺める

「一人で何もかもしよいいこんじまうんだ、全部一人で解決しようとして・・・」

おまえと、おまえの父親にそっくりだと思わねえ？」

「どういう意味ですか」

クロノスが一人で何もかも背負い込んでいる？

>何くを？

彼は全て>裏切ってく、ゴミのように>捨てたくではないか。

父のように>守るためにエルについたわけではない。

>壊すために、エルについたのだ。

「・・・」

「答えてください！！」

怒鳴る少女に、シエルドは苦笑した。

「あいつが耐えてるのに、俺が言っていないわけないだろ。聞きたきゃ本人に聞け」

そんなことができればどんなにいいだろう。

>以前くのように、姿を探して話しかけることができれば。それができないから。

「信じてたんです・・・」

リーマの頬を透明な雫が伝い落ちる。

それを見たシエルドは瞳を見開いた。

「・・・でも、クロノスは・・・」

声が震える、情けないと思うのに涙が止まらない。

気付けば、目の前に居たシエルドがその涙を拭った。

「泣くなよ、おまえに泣かれるのも苦手なんだ」

「シエルド様は知ってるんじゃないですか？>二人くに、何があったのか」

ゴシゴシと袖で涙を拭い、キツとシエルドを見上げる。

これが、>聞きたかったことくだ。

シエルドは僅かに瞳を見開いた後、苦々しい表情になった。

「・・・それは・・・俺の口からは話せない」
分かっていた。

こう言われることくらい。

「・・・そう、です・・・か」

それでも食い下がるつもりでいたが

シエルドの表情があまりに辛そうで、>泣きそづくで
言葉が引っ込んでしまった。

俯いたリーマの頭を、シエルドの大きな手が撫でる。

「・・・それは、嫌でもそのうち分かることだ。

だからリーマ、その時は・・・どうか>あいつらくを>信じてくや
って欲しい、おまえだけでも」

「――」

その時見たシエルドの笑顔は
まるで泣いているようだった。

C12・P3「第二級神罰執行」

次は皇国へ向かうと告げ、執務室を出た少女は重い溜息を吐いた。
>信じてやって欲しい<

クロスはともかく、クロノスは・・・。

そこまで考えて頭を振る。

アーク家の二人だけではない

自分達の>今<は、>過去<によって酷く捻じ曲げられてしまった。
でも、それは両親やシェルドも同じだ。

今分かつている中で、最も人生を狂わされたのはロートフォード家
ではないだろうか。

ソウルは幼くして契約者になった。

だがその代償に母であるメルヴィングを失った。

クロノスが居なくなつた今だからこそ

ソウルの苦しみを少しは想像することができる。

しかし>想像の痛み<と>現実の痛み<は全く違う。

(・・・考えても仕方ない、か)

もう一度溜息を吐いて、用意された客室へと向かう。

ここを出る前は、クロノスが居て

笑顔で「客室を用意するから」、と言っていたか。

——信じてやって欲しい

シェルドの言葉がまた脳裏を掠める。

ここまできて、何を信じろというのか。

クロノスは間違いなく、>殺戮<を>愉しみ<としている。
それは>エル<と何が違うのか。

クロスのことも少しは予想ができてきている。

ユーフォリア、クロスによく似た天使

彼は自分をクロスの>過去くだと言った。

そしてクロスの双子の兄であるクロノスは大天使

意志を持つところからユーフォリアも>大天使くではないかと思う。
なら、導き出されるのは

クロスも大天使であるという確率。

だが不可解なのは、クロスとユーフォリアの存在が>別々くなことだ。

(これこそ考えても仕方ない、のかしら・・・)

足りない脳みそには重労働だ。

あと少しで点と線が繋がりそうなのに、何か足りない。
けれど考えたところで答えも出ない。

そんなことを考えながら歩いている間に客室に着き
扉を開けたところで

『悩んでますわね』

久しぶりにミストレスことエリザがぼすんと姿を現した。

「あんた今までどこ散歩してたのよ」

扉を閉めながら言うと、エリザはフンと無駄に偉そうに鼻で笑った。

『散歩なんてしてませんわよ、貴女の中にずっと居てよ?』

まあ確かに、戦っているときも寝ているときもいつでもエリザはリ
ーマの中に居るが。

居なければ大鎌を具現化することすらできない。

「・・・」

『ナイトメアが羨ましい、って顔ですわね』

ぼすん、とベッドに沈んだリーマにエリザが問う。

「・・・だって、私、父様ほどあなたを使いこなせてないわ」
こればかりはエリザが悪いわけではない。

『>使おうく、というのが間違いだとは考えませんか?』

「?」

これは刷り込み教育のようなものだ。

リーマはずつと死神を最も効率よく>使えるくよう教育されてきた。そもそも、その研究自体間違っていたのだから全て無意味どころか、逆効果だったりしたが。

『以前に、貴女の母が私に言いましたよ?』

私達も>心くがあり、>生きているく、ゆえに>狂気に触れるくのだと』

エリザの言葉に、リーマはしばしばちと瞬きをしていたがむくりと起き上がってエリザの頭をつついた。

「・・・>神くも人間と同じ測りで測れるの?」

『貴女、自分でエルに反対の言葉をぶつけていたでしょう』
そういえばそうだった。

『>上手く使って欲しいく、なんてシエン以外は思っていないせんわ、たぶん』

彼の場合は、ありえる気がしてならない。

だが彼の契約者であるゼノンはリーマよりずっと要領がいい、問題ないだろう。

『私が貴女と契約したのは、>一緒にく戦って欲しかったからですのよ?』

小首を傾げて悪戯っぽく笑うエリザに

リーマは一寸呆然としたあと

「・・・そっか」

嬉しそうに笑った。

>上手く使うく必要なんて無い。

暗にそう言ってくれたエリザの心遣いに感謝しつつ

でも、と

また少女の表情は沈む。

「でも、今のままじゃ・・・勝てない」

『・・・ナイトメアは』

拳を握るリーマを見て、エリザはしょんぼりとした表情で言葉を紡いだ。

『ナイトメアとクロヴィスは完全に>同化<していますわ・・・

それが、あの子が呑んだ>契約条件<だったそうなんですから、使いこなせるのは当然ですわ

私と貴女は同じ体に宿っているだけで>別の存在<ですもの』

「どうして、同化を選ばなかったの？」

これは若干ミストレスに非がある気がしたのだが
エリザは首を横に振った。

『私と>運命<まで共同することはありませんわ

貴女が背負う宿命だけでも重いというのに、これ以上何を背負うと
いいいますの?』

「運命?」

その問いには、エリザは答えなかった。

ただ苦笑を浮かべて、くるりとリーマに背を向ける。

(・・・貴女には>生きるべき資格<がありますのよ
私は最期まで、塵の一つになろうと貴女を守りますわ)

リーマには聞こえないように心の内で呟いて

エリザは黒い髪を翻して振り返った。

『さあさ、少し休みたいですわ』

「ちょ、質問に答えなさいよ」

『五月蠅いですわねー、私は休みたいときに休みますのよ』

「俺様すぎでしょ!?!」

『>俺様<ではありませんわ!>女王<と言いなさいな!?!』

いつもの口喧嘩に発展し
その日は結局そのまま眠ることになった。

――その頃

クロスは一人、城の外へと出ていた。
それは自分と似た、いや

>同じ気配くを感じたからだ。

案の定、城から少し離れた広場に>ソイツくは居た。
いつも虚ろな表情だが、今はいつも以上に虚ろに見える。

「僕は・・・おまえを殺すつもりでいた・・・」

天使、ユーフォリアはそう呟いた。

クロスからは横顔しか見えない。

「最後に残った方しか・・・>生きられないく、から」

「・・・俺とおまえは>同じくだから？」

そう問えば、ユーフォリアはクロスのほうへ顔を向けた。

「そうだよ・・・僕とおまえは>同じ存在く・・・本来>ひとつく
であるべき存在・・・」

そこで言葉を区切って

ユーフォリアはまた顔を背けた。

「・・・僕は・・・死ぬのは恐くない」

「・・・」

「リーマに会えなくなるのも、>それくをリーマが望むなら我慢で
きる」

僅かに俯いたその頬を、透明な雫が伝い落ちる。

同時に、頬に違和感を感じて触れると

クロスの左目からも同じように>涙くが零れていた。

「僕じゃ・・・だめなんだ・・・リーマが、求めているのは・・・>僕くじゃない・・・」

そしてユーフォリアはクロスへ視線を移した。

「>俺く、だから」

「・・・」

ふわりと真つ白な外套を風に靡かせて

天使はクロスに背を向けた。

「・・・次会った時は、僕が・・・>死ぬく、よ・・・」

そう言つて、ユーフォリアの姿は灰になって消えた。

正直に言えば、迷いが生まれていた。

あの天使を殺して自分だけ生き残つていいものか。

リーマが怖れる>過去くに自分は打ち勝てるのか。

「・・・俺は・・・生きたい」

なんてワガママで浅ましい人間だろうと、心の中で自嘲した。

けれど、>彼女くを一人で放つておくこともできない。

彼女が求めるのが>自分くならば・・・

青年の水色の瞳には、丸い丸い満月が映っていた。

Chapter 13 「聖なる都レイファリア」

それぞれ悩みを抱えたまま

箱庭への道を開くために一行は皇国レイファリアへ向かう。

そこで封印を解かねばならない少年は

複雑な思いを抱いたまま……。

「すみません……他のかたがたのような待遇をできなくて」

>宿屋くに着き一室に集まったあと、ソウルは申し訳無さそうに呟いた。

「いいわよ、私の件もあるし」

リーマはそう言って、俯くソウルの頭を撫でた。

ここの国の王を叩きのめしたのは記憶に新しい。

だが後悔はしていないし、あれでよかったと思っている。

しかし……一見すると、

いや一見しなくても>怪しい集団くだ。

全員フードのついた外套を纏い、目深にフードを被っている。

「こんな状態で一体どうやって王城の、しかも玉座まで行くと言うんだ」

呆れたように呟くゼノン。

特にこの国で注意しなければならないのは彼だ。

さすがのレフィーリカでも、>世継ぎの王子を殺されたら<黙ってはいないだろう。

……簡単に殺せる相手でもないが。

「確かにね、何か案はある？」

クロスが問うと、ソウルはしょんぼりと俯いた。

「僕が一人で・・・行こうかと・・・」

「おまえ、>王の傀儡<だという噂を聞いたぞ・・・信用できない」
すかさずアリアがそう返す。

彼女がこういう話題に入ってくるとは珍しい。

そしてその噂はあながち間違ってもいない。

「・・・人数を分散するしかないかしら？」

この大勢で城に忍び込むのは無理だろう。

王も執務や雑務がある、常に玉座に居るわけではない。

その隙について封印さえ解ければいいのだ。

「それだと、圧倒的におまえのほうにつく奴らが増えるぞ」

ゼノンの言葉を受け、すでにしつかり右手と左手の両方を掴んでいる二人を見て

リーマは溜息を吐いた。

「クロス、アリア・・・嬉しいけど、複雑だわ」

・・・>彼<が居れば、ちょうど三人ずつだったのに。

今はもう居ない、明るい青年を思い出す。

あの>胡散臭い笑顔<に安心して自分が居たことに、心の中で自嘲した。

それが>聞こえてく<しまったのか

右手を握るクロスの手が少しだけ強くなった。

「まさか、ゼノンを王城に行かせるわけにはいかないでしょう」

頭を振って思考を切り替え

ここの城にまさかまさか、ゼノンを行かせるわけにはいかないと声を上げる。

「別に私は構わない」

「え？」

「へ？」

ソウルとリーマの言葉が被った。

ゼノンはいま、なんと言った？

「私は構わないと言っている、

> その王子くが、この国を如何ほど制御できているのかも気になるからな」

その言葉に、ソウルは俯いた。

母を認めてくれたのかと、少し希望を持ったのが馬鹿だったと僅かに悔いる。

そして自分がこの国にとって、> なんの価値も無いく

> 飾りだけの王子だということを分かっていて彼は言っているのだらうと思う。

「ゼノンは駄目よ、捕まったらどうするの」

そんな暗い感情に相変わらず鈍感なリーマが気づくはずもなく

二人の間に漂う絶対零度の空気も無視して会話を続ける。

さすがリーマ、と、両サイドの二人こと

クロスとアリアは改めて自分の想い人に感心した、ここまで鈍感だと清々しい。

「・・・仕方ない、情報を集めるか」

リーマの言葉に毒気を抜かれたのか

ゼノンが盛大な溜息を吐く。

「確かレイファリアには隠し通路があったはずだ」

「なんでゼノンがそれを知ってるのか気になるね」

そうクロスが問う。

> 王子く、などつけて会話していたのではすぐに正体がバレてしまつたため

全員名前呼びになっている。

それ以前に一応これでも打倒至高神の> チームくなのだ
いつまでも余所余所しいのでは士気に関わる、

と、リーマが提案した。

「・・・別に、大したことではないだろう
私の契約神は情報処理に優れているのだから」
ゼノンは僅かに表情を曇らせて、そう呟いた。
彼が感情を表に出すのは珍しい。

「情報っていうのは>知らないという意味が無い<と思うけどね」
軽く肩をすくめて言うクロスをゼノンが睨む。

>これ以上余計なことを言うなく、と。

「情報収集をする、しばらく一人にしてくれ」

そう言つて、ゼノンは部屋を出て行つた。

自分に割り当てられた部屋へと向かつたのだろう。

――その頃

「やあ、陛下」

「――ひー！で、天使がなぜ!？」

執務もほとんど臣下に任せきりの王の前に

一人の天使が舞い降りた。

金色の長い髪、そして紫紺の瞳。

「だ、誰か!!」

悲鳴にも似た声で呼んでも、誰も応えない。

天使・・・>クロノス<は微笑んだ。

「無駄無駄、この部屋の警備兵ならみんな僕が殺しちゃった」

あはは、と笑い

クロノスは両手を軽く挙げた。

「殺しに来たんじゃないんだ、あなたに>良い話<を持ってきたんだよ？」

尤もあなたに選択肢は無いけどねえ、逆らうなら・・・」

同じようではない色をした紫紺の瞳が蛇のように細められる。

「殺しちゃう」

にっこり

微笑んでクロノスは魔剣を取り出した。

「そ、その剣・・・まさか、まさか・・・貴様・・・!!」

「あつは、黙つてよ。その先を言ったら生かしておいてあげないねえ？ 僕には>おまえくを殺すのなんて簡単なんだよ？」

剣の切っ先で床に尻餅をついた王の顔を上げさせる。

「でもさあ、利用価値があるものは何でも使おうと思って

ねえ、>聖なる都くなんて言われているんだからさあ

おまえらは>僕らくに跪くべきだよねえ？」

優しげで胡散臭い微笑みを浮かべたまま

こてん、と首を傾げる。

「僕らに忠誠を誓うなら、おまえらだけ助けてやるよ」

それは>天使くからの>救いの言葉くだった。

――結局。

ゼノンが部屋から出てこない限り話は始まらないので
リーマはアリアを誘って街へ出ていた。

クロスも誘おうかと思ったが、ソウルと何か話したいことがあった
ようだった。

街へ出るのは迂闊ではないかと

ゼノンには言われてしまいそうだが

宿屋でぐでんとしていても何も始まらないわけで。

じっとしているのが苦手なリーマは外へ繰り出した。

さすがに一人で出て行くのはいろいろ学習したのでアリアを誘って。

「・・・しかし、さつきはちょっと驚いた」

「？」

白い外套を風に靡かせながら歩くリーマの隣でアリアが首を傾げる。

「アリアって、ああいう会話嫌いそうだったから」

「・・・リーマが、傷ついたから」

「？」

返ってきたアリアの言葉に、今度はリーマが首を傾げる。

「私もあいつ・・・クロノスのこと、胡散臭いと思ってた

でも何も言わなかった、そのせいで・・・リーマが傷ついた

私はリーマの>親友くなのに、守りたいのに・・・何もできなかった」

「アリア・・・」

それは、アリアが悪いのではない。

「アリアのせいじゃないわ、あれは私が悪いのよ」

「・・・リーマが>悪くになれば、何も言わなかった私は>善くになつていいのか？」

そんなのおかしい」

「――」

正直、驚いた。

昔のアリアは明るかった

だが今のアリアはお世辞にも明るいとは言えないし

彼女がメンバーのことを考えているなんて思っていなかった

何より、そんなに自分のことを想ってくれていたなんて、知らなかった。

「私は、>あいつくを赦せない・・・でも、それ以上にもっと自分が赦せないんだ」

「アリア・・・」

もう一度名前を呼ぶと

ぎゅ、と左手をアリアの右手が握った。

「ごめん、リーマ・・・私はいつも・・・リーマの力になりたいのに、なれない」

「そんなことないわ、絶対ない！」

少し大きめのリーマの声に、アリアがきよとした顔でリーマの顔を見る。

「だって、こんなに心配してくれる友達・・・ずっと居なかったものの」

くしゃりと泣きそうに笑うリーマに

胸が熱くなった、嬉しいのに涙がこぼれそうで。

（なんだ？）

アリアは首を傾げる。

この感情の名前はなんだろう？

アリアは>感情<というものに疎い。

リーマに言つべきか、言わざるべきか悩んでいたが・・・

「リーマ、話しておかないと・・・いけないことがある」

「？」

真剣な表情のアリアに、リーマはまた首を傾げた。

「リーマの>記憶の中の私<と、>本当の私<は>違う<んだ」

その言葉を、リーマはすぐには理解できなかった。

「リーマの記憶は>改ざん<されている、

本当の・・・>本当の私<は、明るくなってるし・・・ずっとリーマを>傷つけて<いた

でもリーマは最後までずっと、私の傍に居てくれた」

「どういう・・・意味？」

脳裏ではすでに設計図が出来上がっているが
認めたくなかった。

「リーマは、一部の＞記憶自体＜を改造されているんだ」

「――」

今ばかりは、＞死んだあの女＜が憎い。

「私は、それは＞好都合＜だと思ってた

リーマが＞嫌な私＜を忘れて、＞実在しない私＜だけ覚えていく
れるなら・・・

それなら、そのほうが・・・いって・・・」

語尾はだいぶ声が小さくなってしまった。

罵られるだろうか

騙していたのかと

アリアがそんな想像を膨らませて俯くと
右手を握るリーマの手に少し力が入った。

「でも、私はきつと最後までアリアが＞好き＜だったわ」

「――」

――ああ

「だって、そうじゃなかったら最初からあなたを＞信じる＜ことな
んてできなかったはず」

――そうだった。

アリアが好きになったリーマは、いつだってそうだった。

罵るなんてしない、彼女は自分の理不尽な暴言を投げつけられても
笑ってくれていた。

柔らかな微笑みに
アリアも少しだけ、不器用な微笑みで応えた。
が

「へえ、アリア嬢がそんなに饒舌だとは知らなかったなあ！」

背後から聞こえた声に、二人は瞬時に振り返る。

そこに居たのは・・・

「——クロノス——！」

金色の長い髪に紫紺の瞳を持つ青年。

「リーマ嬢、僕のこと忘れちゃったの？」

そんな>役立たずのゴミくと一緒に外に出るなんて迂闊すぎるんじゃない？」

「な・・・！！！」

>アリア<のことを言ったのか、>ゴミ<と。

そう気付いたら怒りが込み上げてきた。

「あんた、前回みたいにくと思わないでよ、今回は私だって本気でキレてるから」

「だってさあ？そうだよねえ？アリア嬢？」

据わった目で睨みつけると、ケラケラと笑ってクロノスはアリアへ視線を移した。

「——・・・」

「アリア・・・？」

そしてリーマも隣へ視線を移すと

アリアは瞳孔を見開き小刻みに震えていた。

「役立たずなゴミ、人間にさえなれなかったゴミ！！君に存在価値なんて無いのさ——！」

「ちが・・・う・・・わた、しは・・・」

「アリア!!」

震える体、その頬を冷や汗が伝う。

「わたしは!!!>ゴミくなんかじゃない!!!」

彼女がこうして怒鳴る姿なんて、久しぶりに見たかもしれない。

「へえ? 違うの? じゃあ>人間くでも>ゴミくでもない君は一体>何くなんだい?」

嘲るように言うクロノスに、アリアは唇を噛み締めた。

「わたしは・・・わたし、は・・・」

事情なんて分かるわけがない。

自分の記憶は偽りだった。

でもただ一つ分かることがある。

クロノスはアリアの>心の傷くを抉っているのだと。

「アリアは>アリアくよ! 存在で言ったら>契約者くでしょ
あんたの理論で言ったら私だって>何くになるのか分からないわ!
!」

我ながら頭の悪い回答だなんてことは分かっているが怒鳴る。
そうしなければならぬ、と思った。

「——リ・・・マ・・・」

震えるアリアの、自分より少し背の高い体を抱きしめる。

「だいたい何よ! 出てきて早々人のトラウマ抉るなんて

あんたこそ>人間の基準くで見たら>ゴミくよ! 立派な>三流悪役
くぶりね!!」

「ハハッ、相変わらずだなあリーマ嬢は・・・」

くすくすと晒って、クロノスは魔剣を手を取った。

「ねえ、前とは違うんでしょ? 少し相手になってあげるよ」

「上から視線が気に入らないから受けてたってやるわよ」

そして二人の戦いの火蓋が再び切って落とされる——

C13・P2「聖なる都」

——その少し前のこと

時刻で言えばリーマとアリアが散策していた頃。

「ソウル、>メルヴィング様の件<は有名だから俺も知ってるけど・
・

君は母への贖罪のために、本当に・・・>戦っているのかい？」

宿屋の、ソウルに割り当てられた部屋で

壁に寄りかかったクロスに問いかけられ

椅子に腰掛けた少年は俯いた。

「どういう・・・意味、ですか？」

「君は、>逃げてるだけ<なんじゃないかって意味」

クロスは、この後続く言葉を全て予想した上でその言葉を言った
「ツ・・・！！あなたに・・・！！クロスさんに何が分かるんです
か！！」

そして予想通りの反応に、クロスはソウルをじっと見据える。

ガタンと音を立てて椅子から立ち上がり、ソウルはクロスを睨みつ
けて叫ぶ

「目の前で母を殺された！・・・>僕が母を愛していた<がために
！！

母は・・・僕が居なければ、死なずにすんだんだ・・・」

「だから？」

冷たい言葉と、怜悯な水色の瞳に見据えられ、ソウルは言葉をなく
した。

「俺はリーマを守るために居る、役に立たないなら

あまつさえ裏切るなら、君も・・・殺すよ」

「そうですね・・・あなたにはリーマさんが居る、あなたには・・・
まだ>大切な人<が居る

僕の気持ちなんて理解できないでしょう、>最も愛した人が契約の対価くだったなんて」

ソウルはぐつと唇を噛んで再び俯いた。

だが、クロスは冷たい声音は変えないまま言葉を紡ぐ

「君にはもう>居ないくつて？笑わせるなよ」

顔を上げた少年の瞳に映るのは

今まで一度も見たことが無いほど冷たい表情のクロス。

「自分ばかり不幸に遭ったような顔をして、そんなだから>ゼノンに嫌がられるくんだ」

「――な」

「さつき、『僕の気持ちなんて理解できないでしょう』って言ったよね？

そんな君は>一体誰の気持ちを理解してるくの？」

その言葉は、ソウルの心を抉るには充分だった。

それは・・・

「それは・・・それは・・・」

「リーマは優しいから君にこんなこと絶対に言わないだろう

でも俺は、>おまえくを見てるとイライラする・・・いや、>反吐が出るくかな？」

につこりと微笑んで告げられた言葉に

ソウルは瞳を見開いた。

「・・・なら、殺せば・・・いいじゃないですか」

力なく俯いた少年に、クロスは笑みを消した。

「ほら、>逃げてるだけくだ」

「ッー!!」

「君が死んだら、君のために死んだメルヴィング様はどうなるわけ？

>無駄死にく、かな？>可哀想だなあ、ああ可哀想だ」
あえて>兄<の真似をして言ってる。

そうすれば、この少年は・・・

「黙れ！！母様の死を・・・母様を侮辱するなッッ！！」

案の定殴りかかってきた少年の手を

クロスは右手で受け止めた。

「>その顔くを見たかったんだよ」

「！？」

やんわり手を放して、クロスは苦笑した。

「君は逃げてちゃ駄目だ、母を認めて欲しいと本当に思っているなら。」

ゼノンは>行動<でしか信じない、言葉でいくら言い募っても信じない

言うだけなら誰にだってできるんだ」

「あ・・・」

我に返ったソウルは、己の手を呆然と見つめる。

「本当にもう>誰も君のことを想ってない<なら、

フェイル様は君を招き入れなかっただろう、リーマだって君に優しくなんてしないだろう

これでもまだ、分らない？」

そうだった、クロスは心を見透かす能力があるのだと
今更になって思い出した。

「すいま・・・せん・・・」

瞳に涙を溜めて俯いた少年の頭を、クロスはぼすぼすと軽く叩いた。

「僕のために・・・>汚れ役<を、してくださったんです・・・か」
嗚咽で途切れる声に、クロスは溜息を吐く。

「俺はリーマ以外の人間がどうなるうが知ったことじゃない
だけど君がいつまでもそんなだとリーマが心配するだろ
それに、イライラしてたのは本当だしね」

軽く肩を竦めてみせると、ソウルは袖でごしごしと涙を拭ってからクロスに頭を下げた。

「・・・ありがとう、ございます

僕は弱いから・・・すぐには変わらないと思います、でも・・・でも・・・

僕が弱いままじゃあ、母様が悪く言われてしまう
母様の死が、無駄になってしまう」

グツと顔を上げて

「それは、絶対に嫌です」

そう、ハッキリと告げた。

そんな部屋の前。

扉の横に背を預けた銀髪の青年は

中から聞こえた言葉に僅かに瞳を伏せた。

自分だって分かっている、>母<のことくらい。

分かっている、それでも・・・。

「——クロス」

不意にクロスが呟いた言葉に、ソウルも

部屋の前に居たゼノンも顔を上げた。

「クロノスの気配がする・・・!!」

言うなり部屋を飛び出したクロスは

部屋の前に居たゼノンと一瞬だけ目を合わせたが

僅かに頷いた後すぐに走って宿を出て行った。

「ま、待ってくださいクロスさん！一人では危険です!!」

追ってソウルも部屋を飛び出し

兄を見て僅かに瞳を見開き、足を止めた。

「・・・」

一寸の沈黙のあと、ソウルはキツと兄を見上げて言った。

「>兄様く、何か分かりましたか？」

「――」

その言葉には、さすがのゼノンも面食らった。
あの弱いだけだった少年が・・・。

クロスの言葉だけで変わったとは思えない。

以前から彼の中で何か考えがあり、クロスはそれを見抜いて
>きっかけくを与えたのかもしれない、と思う。

「・・・>大聖堂くから玉座に向かえる、とにかく今はリーマ達が
心配だ、行くぞ」

弟の横をすり抜けて、ゼノンも宿屋を飛び出していった。

「・・・」

残ったソウルは、拒否されなかったことに少しだけ安心しつつ
顔を上げた。

（母様、僕に・・・力を貸してください）

そう天に願いながら。

C13・P3「聖なる都」

「はあああああ!!!」

大鎌を振りかぶって、>以前の仲間<に斬りかかる。

「ハハッ、確かに前よりは威力が上がったみたいだ!」

だが、大鎌の刃を受け止めた天使は余裕の笑みを浮かべて晒う。

「ッ」

ギンツと鈍い金属音を立てて、魔剣に刃を弾かれる。

「でも全然だあゝめ!そんなんじゃ、僕は殺せないよ?」

「馬鹿にすんじゃないわよ!!!」

大鎌では剣に対して不利だ。

ならば――

両手で横に大鎌を持ち、意識を集中させる。

できるはずだ。

>自分<ではない、>ミストレスとしての記憶<が出来ると肯定している。

「!」

その光景にクロノスは僅かに瞳を見開いた。

大鎌は一度黒い灰となり、少女の両手に集う

そして、>大鎌だったもの<は>双剣<へと姿を変えていた。

「あんたには、絶対負けない」

まだはつきりと気持ちが決まったわけではない。

リーマの知っているクロノスはもうどこにも居ないのかもしれない
クロスのように心が読めたらどんなに良いだろう

――それでも

彼に>負けてはいけない<と思う。

それはまだどこかでクロノスを信じているからかもしれないし
ただの意地なのかもしれない

今は、心がぐちゃぐちゃに散かってまだ判断がつかない。

『一人で何もかもしよいいんじゃないんだ、全部一人で解決しようとして・・・』

おまえと、おまえの父親にそっくりだと思わねえ？』

シエルドの言う意味もまだ分らない

クロノスが何を考えているのか、リーマは何も知らない
両親と再会すること、この世界の崩壊が彼の望みだと彼は言った
でも、それすら>嘘くかもしれない

けれどももしリーマが負けてしまったら、その時は・・・

世界が崩壊するかもしれないし、クロノスが背負う>何かくが崩れ
去るのかもしれない。

どちらにしろ良い結末ではない。

（それなら私は最期まで戦う、相手が神でも・・・クロノスでも）

死ぬことが、今は、恐くないといえは嘘になる

だから誰かのためなんて良い子の代名詞のようなことは言えない
自分のために戦っているのかもしれない。

それがエゴでも、もう後戻りはできないのだ。

「ほんと・・・君って興味が尽きないよ、見てると・・・殺したい
くらいイライラする」

クロノスは右手で顔を覆う

次に覗いたその紫紺の瞳には>狂気くが宿っていた。

「じゃあさぁリーマ嬢、僕を殺してごらんよ」

「な・・・!？」

両手を広げて青年は晒す。

剣も手放して、無防備な状態でも彼は平然と微笑んでいた。

「馬鹿にしているの？」

奥歯を噛み締めて唸るように呟けば、クロノスはくすくすと笑った。
「本気だよ」

意地悪く晒ったクロノスのその意図を、リーマはすぐに理解することになる。

「っ・・・なによ、これ・・・!？」

リーマとアリアとクロノスの三人を取り囲む――>人間<

「さあ、殺せるものなら殺してごらんよ!!」

狂気を孕んだ笑みを浮かべてクロノスは言う

「なんで・・・人間が・・・!!」

手に銃や剣、槍を構えた人々、それは紛れもなく>人間<だった。

怯えているのは見れば分かる、それでも彼らは退こうとしない。

「ここさ、>聖なる都<じゃない? だからさあ、こいつらは>僕ら<に従属するべきなんだよ

僕はそれを>教えてやっただけ」

もしも

もしも人間に神と天使が居ることが分かったら

その時人間はどうするだろう?

願い事を全て叶えてくれる万能の存在が現れたら

ましてそれを崇拜している人間だったら――

「卑怯者・・・ッ!!」

答えは簡単で、リーマは唇を噛み締めた。

なんとかここを突破しなければならぬ

人間を殺してしまうのは簡単だ、だがそれではクロノスの思う壺

リーマ自身もまたそんなことは望んでいない、当然できる限り殺し

たくななどない。

恐慌状態のアリアを連れて、一人で殺さずに突破口を開けるだろうか
決して良いとは言えない頭をフル稼働させていた時

「来い！」

人垣を津波のような水が押し流し、震えるアリアを一瞬で抱きかか
えた闖入者

「ゼノ・・・！」

「時間が無い！早くしろ！！」

従兄の姿を目に留め、しかし名前を呼ぶ間も無くゼノンは倒れた人
々を飛び越えていく
腕にアリアを連れて

助け舟を無駄にしてしまうわけにはいかない、リーマも身を翻して
走り出す。

最後に見たクロノスは、やはり>晒つてくいた。

「なんで助けに——」

走りながら問うと、少し前を走るゼノンはリーマを一瞥し

「馬鹿かおまえは！？>奴らくはおまえを一番に狙つてくると言っ
ておいたはずだ！」

それはもう怒っているのだとよく分かる声音で質問には答えずそう
言った。

「それは悪かったと思って・・・」

「いまこの国は完全に天使どもの手中にある、周りの人間は全て敵
だと思え！」

二人は>契約者く、走る速度も人間のソレとは違う
風のように過ぎていく景色の中で、銃声が聞こえる
恐らくはリーマ達に向かって発砲しているのだろう。

「どうということ！？一体何が起こつて・・・！！」

「説明は後だ！大聖堂から玉座に向かう！」

——同時刻

大聖堂に籠っていた人間たちを片っ端から気絶させていく少年と青年。

「リーマは大丈夫かな・・・やっぱ俺が行けばよかった」

銃弾を素手で>掴み取って<は投げ捨てて、撃った人間を地面に叩きつける

・・・殺さない程度に。

「クロスさんは本当にリーマさんのことばかりですよね・・・」

もう一方、ソウルは幾つもの銃弾が体を>すり抜けて<背後の壁や椅子を破壊していく

そして小柄、まだ12歳という年齢にも関わらず

大の大人を担ぎ上げては地面に叩きつけるという

人間から見たら>化け物<以外の何者でもない行為を繰り返し少し呆れたようにクロスの呟きにツツコミを入れる。

「そういえば、ここだったよね・・・メルヴィング様が>暗殺<されたところ」

不意にクロスがぼやいた言葉に、ソウルは僅かに瞳を細めた。

そう、ここで母は殺された。

けれど、王族の一人が死んだというのに国葬など行われなかった

メルヴィングという>存在<そのものが無かったことにされた

そんなこと、>普通<ならば許されない。

つまりここは>普通<ではない<のだ、今日の前に広がる光景がそうであるように。

妄信的に>神<を信じる人々は、母を裏切り者と罵った

悪魔に魅入られた者など最早この国の人間でさえ無い

母を殺したのが叔父であることは、この国の子供でも知っているこ

とかもしれない

けれど>狂信的な正義<は、母という存在を消し去るには充分だったのだ。

けれどソウルだけ、その思考から外れていた

ソウルから見て、この国の人々は>狂っている<。

今もまさにそうだ、>神<が自分達だけ救ってくれるという甘言を吐けば

暗闇でみつけた一縷の光りに縋るように誰一人違わず縋りつく。

——本当は、神などどうでもいいと思っているのだろう

自分が助ければ、幸せならそれでいいのだ

それがこの国の人々が翳す>正義<

もしもメルヴィングを庇えば、同じように>悪魔<と罵られる

それが分かっているから、誰もメルヴィングを庇わない。

それを綺麗に言いくるめるために、>神<というものを崇拜しているだけのこと

>神<が言っている<、と言えば聞こえはいいのではないか

とりあえずは自分のせいではなく神という存在のせいでできる。

それは人間の本能であると言えば仕方のないことだが

ソウルからすれば、正直>理解しがたい未知の存在<だった。

だからこそソウルは、クルセイドに選ばれたのだ。

この国において、未だ>正気<を保っている人間

神という>毒<に穢されていない存在。

もしかしたら、昔は本当に神を崇拜していたのかもしれない

時代が狂わせた歯車なのかもしれない

神さえ狂ってしまったのだから。

「ソウル！クロス！」

最後の人間が気を失った中、バンツと音を立てて大聖堂の扉が開いた
飛び込んできたのはリーマと、アリアを抱えたゼノン。

追ってくる人間達を振り払うように、ゼノンは大聖堂の扉を閉めると
氷で全体を固めた。

「石造の下に道があるはずだ」

ダンダンと扉を叩く音がする。

少しくらいは保つだろうが、時間の問題。

ゼノンはアリアをリーマに任せ、最奥に飾られた女神像を見上げる。

「Gloria in Excelsis deo
Et in terra pax hominibus
bonae voluntatis」

―いと高き場所では神に栄光

地には善意の人に平和がありますように―

その言葉を紡いだ瞬間、重い音が響いて石造を奉る台座が開き
地下へと続く階段が姿を現した。

「行くぞ」

そう言つて階段を下りていくゼノンに続き、リーマ達も薄暗い階段
を下りていく。

C13・P4「聖なる都」

「暗い・・・」

ほぼ何も見えないほど暗い。

闇には慣れているが、足元がおぼつかない。

不意に周囲が明るくなったと思えば、

ゼノンが右手に宿した青く発光する水球で周囲を照らしていた。

「——え」

「これで少しは見えるだろう」

「いや、そうじゃなくて・・・」

全く無関心なゼノンとは反対に、リーマは一直線の道に広がる>惨状<に目を瞠った。

折り重なった>人間<の死体。

「ゼノン、ここは何があったところなんだい？」

クロスの問いに、背中しか見えないゼノンは淡々と言葉を紡ぐ

「昔、母と父と共にこの通路を通った。

あの時も、追ってきたのは人間だった」

一番その単語に愕然としたのはソウルだった。

「え、ゼノン・・・子供の頃はレイファリアに居たの？」

「・・・王城の、母の部屋でずっと過ごしていた、4つになるまでつまりそれは二十年前のこと。」

「しかし今の王が玉座につき、私には当然死刑が命じられただから、私はレフィーリカまで向かうことになった

母もいずれは私を故郷に帰すつもりでいただろう、時が赦さなかったんだ」

淡々としたその言葉にも声にも感情は感じられないけれど彼はいま、一体どんな表情をしているのか。

「だが追手も並な数ではなかった、アースランドの血を継ぐ者だ殺してしまえば、後に脅威は無い・・・」

「この死体は、その時のものなんですか？」

「ああ」

「でも、あなたの両親は二人とも人間だったでしょう？」

「こんな数、相手にできるわけないわ」

ソウルの問いに答えるなんて珍しいと思いつつ

リーマはゼノンに問う

「おまえの父君、クロヴィス陛下が救ってくださったんだ

万が一にも正体が知れば、リイリア様との縁談も破談になったろうに危険を冒して

もしあの時、陛下が救ってくださなければ、私はもうこの世に居ない」

「なるほど、ゼノンが肉親であるフェイル陛下より

クロヴィス陛下に心酔してる理由が分かる気がするよ」

つまりクロウはゼノンにとって命の、両親の、そして祖国の恩人なのだ。

しかしつまり、ここで起きた事象の証拠を握る者はこの世に居ない。

父は、クロウは人間を殺すことを躊躇わなかったのだ。

けれどそれは納得できる気がする

父がナイトメアと契約したのは、十字軍二千万の兵を>殲滅<するためだ。

「父様は平気なのに・・・なぜ>人間<は殺してはいけないと思うのかしら」

父との差を思い知らされるようで、なんだか腑に落ちない。

「それは神としての、>ミストレス<としての>本能<だろう」

「本能？」

ようやく振り返ったゼノンの言葉に、リーマは首を傾げる。

「神の力で人間を殺すことは>禁忌<だ、たとえ死神でもな・・・」
「でも、ゼノンだって・・・」

ゼノンもまた五年前に一万の人間を殺したはずだ。

「・・・神であろうと、それを宿した者であろうと、>誓い<を違えれば罰が下る

人間を殺せば殺すほど、何かしら失っていく、私はそれが>感情<だった」

ああ、だから彼からは微かな感情しか感じられないのかと納得する。
しかしでは、父に与えられた罰はなんだったのだろうか？

「父様は？」

「クロヴィス陛下に与えられた罰は・・・>運命<だ」

「運命？」

「契約してから死までの全ての運命をナイトメアに捧げること、
それが>契約条件<にして>罰<だ」

「――」

それは、あんまりではないだろうか

それでも、命を奪う、>思い出を奪う<ということは、そういうことなのだろうか？

「だからクロヴィス陛下はエルにたった一人で挑むなんて命知らずなことをしたのか」

クロスの言葉に納得した。

なるほど、だから父はリーマと母を残して

「勝敗など分かっていただろう、だがそれをナイトメアが求めたのなら応じねばならない」

ナイトメアも勝とうなどと思っていなかっただろう

クロウの幸福を奪うことだというのも分かっていたはずだ

――それでも、リーマ達の時代まで世界を繋ぐために。
死が分かっている立ち向かうのはどれほど辛く恐ろしかったことだろう

仮に死ななかつたとして愛する人々に刃を向けるかもしれない
想像のうちはまだ平気だ、だがそれを目の前にして
逃走本能が働かない平常な人間が居るだろうか？

無意識に拳を握る。

そんな父のことさえ忘れていた自分が、情けなくて悔しくて。

「お喋りが過ぎたようだな、どうやら＞歓迎＜の準備ができてい
ようだ」

ゼノンの言葉に思考を現実に戻すと

出口と思しき光を遮る＞人影＜

「最悪なお出迎えね」

ふと、支えながら歩いていたアリアの体が僅かに動いた。

「！・・・アリア」

「・・・ごめん、リーマ」

ゆっくりと体が離れる。

「大丈夫？これからちよつと強行軍になりそうだから休んでも・
・」

「駄目だ、足手まといになんて・・・なりたくない」

「アリア・・・」

震える手を握り締めるアリア

リーマはその手に自分の手を重ねた。

「よつし、じゃあ一暴れしましょ、殺さない程度に」

「・・・うん」

漸く微笑んでくれたアリアにリーマも笑みを返す、お互い長くは無
い微笑みだったが。

「強行突破だ、行くぞ！！」

「おっけー！ソウル、後ろは任せときなさいよ！」

ゼノンは双剣を、リーマは大鎌を、アリアは槍斧を、クロスは白銀
の剣を取り

目の前の人垣に突破口を開くため臨戦態勢に入る。

「——はい!!」

ソウルは拳を握って返事を返し、走り出す。

この先にあるのは玉座。

そこで封印さえ解けばこんな狂信国家に用は無い。

目の前に立ちふさがるのは全員が>人間<。

先ほどゼノンから聞いた知識だが、殺せば何かしら代償を奪われる。

先陣を斬ったゼノンが水流で一端をいつきに倒れさせて道を開く

「行け!」

そして言われるまま、ソウルはその一旦を飛び越えて玉座へ向かったけれど

「所詮はやはりあの女の子供か」

立ちふさがったのはこの国の>王<。

「叔父上・・・」

「全く忌々しい、あの>裏切り者<さえ居なければレフィーリカは
殲滅されていたのだ」

金色の髪と紫色の瞳は

裏切った>あの人<に似ているけれど、でも何か違うと感じた。

そして母とは似ても似つかない、僅かとはいえ本当に血の繋がった
兄妹なのか。

「通してください、と言えば通していただけますか?」

「言うようになったな、益々あの女にそっくりだ

しかしおまえもそこまで馬鹿ではなからう」

「そうそう、そこまで馬鹿じゃ困っちゃうよね」

ぱちぱちと手を叩いて叔父の背後から歩いてくる青年。

「クロノスさん・・・」

叔父がなんの後ろ盾も無く自分に恐怖を抱かないはずがない
何かが来ることは分かっていたが、まさか>彼<とは。

「僕と勝負してみる？ソウル君」

「遠慮します」

「あれえ？なんか本当に言うようになったねえ、一体何があったのかな？」

「まあいいや、ここを通りたいなら僕を殺すしかないよ、できるかい？」

正直、自分に勝てる相手だとは思えない。

リーマでさえ苦戦する相手だ。

「クロノス！！」

後ろでリーマが叫んでいるのが分かる。

けれど人間というあまりに弱い存在を殺さずに気絶させるのは彼女にはなかなか難しいだろう。

（僕がやるしかない・・・）

臨戦態勢に入ろうとした瞬間だった

「その必要は無い」

ソウルの目の前を塞ぐ真っ白な外套。

「——え？」

その姿にソウルは目を瞠った。

「クロス・・・さん？」

いや、彼はいま後方で人間相手に戦っているしクロスというには違和感がありすぎる。

「ユーフォリア、またおまえか・・・」

クロノスが心底嫌そうに名を呼ぶ。

「ソウル」ロートフォード、自らの心くを代償にする覚悟があるならば

叔父を殺し玉座まで走れ、その覚悟が無いならば、おまえ達の抵抗はここで終わりだ」

「・・・選択肢、無いじゃないですか」

事情はよく分らないが、ユーフォリアという天使は自分の代わりにクロノスの相手をしてくれるようだ。ならば、道は一つしかなくろう。

ゆつくりと叔父のもとへと足を進める。

「わ、私を殺せばおまえは代償を奪われるのだろう!?
神の力を使って人殺しなどしていいのか!? この聖都に生まれた者が!」

その言葉に歩みを止めた少年はにっこりと微笑んだ。

「僕の払う代償なんて、母の死に比べたら大したものではないですよ」

そう、あなたが僕に与えた母の死以上の代償なんて・・・無い」
走り出すソウルを止めようとクロノスが剣を構えるがそれはユーフォリアによって阻まれた。

「邪魔だユーフォリア!」

「・・・邪魔なのは、おまえだ!」

剣と剣がぶつかりあう音が響く

その間にも白銀の少年は叔父との距離を詰めていく

「や、やめろ! ソウル!! 親族を殺すというのか!」

「母を殺したあなたに・・・!! あなたにそんなことを言われる筋合いは無い!!」

ドツと音を立てて、王の左胸を少年の腕が貫通する。

「さよなら、叔父上」

「裏切り・・・もの、め・・・」

そう呟いて>心臓くを引きずり出す

途端に力を失って倒れる叔父を、ソウルは冷たい瞳で見下ろしたその瞳が一瞬紅く染まる。

「は・・・ハハッ、ハハハハッ!! もっと早くこうしておけば良かった」

人間を殺した罰は>心<を奪われていくこと。
血に染まった右手を愉しそうに見つめた後、ソウルは玉座への階段を登る。

『ソウル・・・殺したのか』

本来の姿で具現化したクルセイドを、ソウルはいつもどおりの緑色の瞳で見上げる。

「仕方ないよ、あいつも母様を殺してるんだから因果応報でしょう？」

『私が言っているのはそのことではない、これ以上おまえの心が蝕まれていくのは見るに耐えない』

「ロー・・・」

クルセイドの真名はローレントリンド、ソウルは昔からローと呼んでいる。

『二度と人間を殺さないと約束してくれ
メルもきつとこんなことは望んでいない、おまえの不幸など、望んでいない』

「・・・母様が」

ソウルの心は幼い頃からたくさんの棘に痛めつけられてきたこのままでは>エル<と同じ状態になってしまいかねない。

『・・・私が言えた口ではないのは分かっているんだ

おまえを戦いに投じさせたのは私なのだから、だが・・・メルの死を不幸にしたくない』

「・・・わかった、約束はできないけど、できるだけ頑張るよ」
確約はできない。

母の願いはエルの破壊、ならば自分はどんなに心を蝕まれようと命の灯火が消えようと歩み続ける。

「ロー、封印の解除を」

『ああ・・・』

天井近くまでふわりと浮き上がったクルセイドは解放の言葉を紡ぐ。

『qui tollis peccata mundi: miserere nobis』

―世の罪を除きたもう主よ、我らを哀れみたまえ―

幾度かその言葉を紡ぐと、今までと同じようにクルセイドのもとに光が集い

光が弾けた後には、背に八枚の翼を持ったクルセイド。

『ソウル、すまない』

そう言つて、クルセイドはソウルの内側へ消えていった。

「あーあ、ここも破られちゃったかあ」

ユーフォリアの剣を弾いて、クロノスが晒う。

「まあいいさ、至高神に勝る存在なんてこの世には居ないんだからそう・・・元始の神でもない限り」

心臓を奪われ冷えていくだけの王を一瞥して、クロノスは晒う
そして

漆黒の剣を掲げると、幾つもの雷が>人間<達を焼き払った。

「な・・・!？」

あつという間にリーマ達が苦戦を強いられていた人間は>焼死体<。

「甘いよ」

歪な笑みを浮かべたクロノスはくすくすと笑い

生き残った人間達は呆然とした表情でクロノスを見ていた。

「おまえ達人間ごとき、何故僕ら天界の民が守らなければならない?
おまえ達はせいぜい地べたに這い蹲つて

天に届かぬ祈りでも無様に捧げているのがお似合いさ」

「・・・嘘、だったんですね、僕らだけ守るというのは」

ソウルの冷えた声が大広間に響き

その言葉に、現実絶望が染み込み始める人間達。

「当たり前じゃないか、僕らは世界の>全て<を破壊するんだ

騙されるのは、信じた方が悪いって教わらなかった？

ああ、騙してなんていないか、無能な君達が悪いんだよ」

ハハハと晒って、クロノスは身を翻す。

純白の羽を幾つも残して、彼は消えた。

「あいつ・・・ッ!!」

歯噛みするリーマを横目に、ゼノンは彼の一連の行動を思い返して瞳を細めた。

(・・・妙だ)

一見すれば彼のやっていることはエルに従った行動だが

それにしては最終的に>こちらに有益な終り方<をしていないだろうか？

全ての歯車が噛みあっている気がするのは考えすぎだろうか？

ゼノンが考え込んでいる横で、クロスとアリアに挟まれたリーマの前まで

天使が歩いてくる。

「・・・リーマ」

「ユーフォリア？」

「>お別れくだ・・・できることなら、もっと話したかった・・・この想い全てがニセモノだったとしても・・・僕は君がすきだったよ」

「何、言って・・・」

リーマからクロスに視線を移し、ユーフォリアは剣を取る。

「クロス!!アーク、二つに分かれた魂を今一度・・・一つに戻そう」

Chapter 14 - Period 1「僕らは同じ罪を背負っていく」

レイファリアの封印も解いた一行

残るはネジュラネシスとレフィーリカのみになった

だというのに、なぜ彼が――

向けられた剣を見つめて、クロスも剣を取る。

「ちよつと……！！クロス！！」

「リーマ、止めないで」

一旦剣を下げたユーフォリアとクロスの足元に白銀の魔方阵が現れる

「嫌だ！！待つて！！」

「さよなら、リーマ……」

魔方阵に足を踏み入れるクロス、そして>最期くに見たユーフォリ

アの微笑みは

まるで泣いているようで、けれどとても幸せそうだった。

そしてユーフォリアが最期に見たリーマの表情は酷く悲しげで

けれどそれを抱いて彼は転移魔法を発動させた。

――雪が降りしきる平原。

そこは、遠くまで見つめれば王城と街が見えるが

それ以外何も無い真つ暗な闇に包まれた世界だった

「……ここから、>全てくが始まった」

「クロヴィス陛下が戦ったところか」

レフィーリカの平原、ここで何十年か前に大戦があった

たった一人の人間と、二千万の軍が戦った場所。

「始まりの場所で、僕らの>全て<を・・・終わりにしよう」

ユーフォリアは無表情に剣を取り、クロスも同様に剣を取る。
全てが始まった場所で
今、二人の全てが終る――

――待つて

声を出そうとしたときにはもう間に合わず
クロスもユーフォリアも光の先に消えてしまつて
そして毎度ながら脳に激痛が走つて少女は氣を失つた

夢ではない、夢。

これは現実が起こつたことで
全く知らない>過去<を映画のように観ているのと同じだ。
いつもどおりならば、そのはずだった・・・。

『初めまして、リーマ嬢』

「あなた・・・は・・・？」

足元は暗く、頭上は明るい
少女とその人物が立っているのは真つ黒な巨大な十字架の上で
遠くに巨大な砂時計が見える。

不思議な空間で出会つたのは>不思議な青年<だった。

金色の髪、水色と紫紺の色の違う双眸、漆黒の神父服。

まるで幼馴染の二人が一つになったような人物だと>思つたく

『私はレイス・アーク、貴女の頭に浮かぶ二人の父ですよ』

「――え」

『こんな偏狭にお連れしてしまつて申し訳ない』

彼らの父は、両親は死んだのではないのか？

少なくともクロノスはそう言っていた、形だけの墓標もあった。

『ここは>スヴァルトアルツヘイム<、エリュシオンとニブルヘイムを繋ぐ境界』

「あなた、が・・・二人の・・・父親？」

嘘だと思えないくらいに彼は二人に似ていた。

「でも、クロノスは・・・死んだって・・・」

『死んでいますよ、>貴女の世界の住人が否かくで言えば。』

私は二度とエリュシオンには戻れない、だから貴女を>境界<に連れてきたんです』

つまり>ここ<でなら、まだ>生きている人間<でも彼に会えるのだろうか？

「だったら、私なんかよりクロノスに会ってあげて！そうしたら――

――

リーマの言葉は青年の手によって遮られた。

『クロノスにはここには来れません、あの子にはここに来れるほど強い力は無い』

貴女がいまこの十字架に足をついていられるのは

元始の神ルナグラムの血と至高神エルの血ゆえにです』

「だって・・・クロノスはあなた達にもう一度会ったために・・・」

その言葉に、レイスと名乗った青年は瞳を閉じて笑った。

『リーマ』エルスレッド、>神の寵愛を一身に受けた子<よ、

あの子達はきつと貴女を守り抜くでしょう、だから貴女は>世界<を守ってほしい

私には出来なかった、もうこの先永遠に達することのできないことを』

「私には・・・」

言いかけた言葉は再び遮られる

『出来ない、なんて言わないでくださいね。』

私はこれから>エリュシオンにおいて、最後の仕事を済ませてください」

「最後の仕事？」

少女が問う間にも、十字架がギシギシと軋んだ音を立て始め砂時計が反転しはじめる。

『ロクに子供達の面倒も見れなかった情け無い親ですがせめて>幸福<へ導く道しるべくらいにはならねばならないでしょう』

「まっ・・・」

ガクンと十字架も反転し

足が十字架から離れ、光の中に体が投げ出される。

『貴女は>歴史<が、>神<が生むべくして生まれた存在』

一方神父服の青年は闇の中へと沈んでいく。

「待って!!」

けれどレイスは微笑むだけで、その姿はすぐに闇に飲み込まれてくたった数十分の間に何度「待って」と叫んだだろうアークの人間というのは話を聞いていないのだろうか――

ゆっくり瞳を開くと、どこかの天井が視界に広がった。

「・・・」

時刻は夜のようだ。

「――、クロス・・・」

そして思い出す、倒れる前に光に消えた>彼<を。寝かされていたベッドから勢いよく起き上がるとベッドサイドで眠っているアリアの姿が視界に入った。傍に居てくれたのだろうか

毎度毎度倒れるなんて、本当に情けない。

けれど今は、それ以上に・・・

「やはり来るか」

「ゼノン・・・」

ベッドから降りて扉を開けると、待っていたとばかりにゼノンと鉢合わせた。

「だって、クロスが・・・!!」

「どこに行ったのかも分からないのに闇雲に探してどうする」

「じゃあ、あなたの力を貸し——」

「断る」

いつぞや似たようなやり取りをしたな、と思いつつリーマは眉を顰める。

「おまえしか視界に入っていないようなあの男が、おまえに>止めるなくと言ったんだ」

「・・・でも・・・!!」

「でももだっても無い、クロスが>完全体<の器ではないことはおまえも知っているのではないのか？

割れた花瓶を>元に戻す<ことができる機会は、今しかないということだ」

「・・・っ、クロスが・・・!!クロノスと・・・同じに、なっちゃったら、どうするの・・・」

リーマの瞳から溢れる涙。

彼が過去に勝つ保証は無いのだ

クロノスのように過去に飲み込まれてしまうかもしれない

なのに自分には何もできないのか？

神を宿していながらなんと無力なのか、もう幾度思ったかも分からない。

「いまは休め」

肩を押されて部屋に戻される。

ゼノンなりの気遣いなのは分かっているが、

今すぐにも部屋を飛び出して行きたかった――

――ぼたぼたと真つ赤な血が雪を染め上げていく。

白い服を真つ赤に染めて、ユーフォリアは剣を雪原に突いてよろめいた

「・・・思ったよりも・・・強かったな・・・」

「お互い様だろ」

かく言うクロスの服も、黒いからこそ分らないが傷だらけで大地に鮮血を刻んでいく。

「・・・おまえの覚悟と力・・・確かに受け取った・・・」

ユーフォリアは両手を広げ、微笑んだ。

「おまえに・・・全てを返し、今一度、>一つくに戻る」

「・・・ああ」

白銀の剣を握りなおし、ドツとユーフォリアの心臓に突き立てる

「過去に・・・負けるのは・・・赦さない・・・絶対に・・・それが、確かに存在し、た・・・片割れとして、最期に送る・・・言葉だ・・・」

「――」

闇の中、光になって散ったユーフォリアは

クロスの左胸に全て吸い込まれ

そして

いつきに

――走馬灯のように記憶が押し寄せてくる。

「う・・・あ・・・ッ」

頭が割れそうに痛い、両手で抱え込んでその場に崩れ落ちたその体その背から純白の翼が伸びる。

それはボロボロではなくて、美しい純白の双翼だった。

>単体<の、クロスⅡアークとしての意識は、そこで途切れた。

——俺は、この翼を、知っている。

金色の短めの髪に、水色と紫紺の瞳を持つ神父服の青年。
背には純白の双翼、この人物を、>俺<は知っている
クロスは眠るように、記憶の奔流の中に落ちていった——

「んー・・・」

幼い少年は、オープンの前に座り込んでそれをずっと眺めていた。
金色の短めの髪に、水色の瞳の少年。

チン、という音がして、オープンを慎重に開けて少年は熱を取りつつ
ケーキの出来栄をじっと見つめていた。

「おや、なかなか上手になったじゃないですか」

隣で昼食の支度をしていた>父<が、それを覗き込んで微笑む。

金色の短めの髪に水色と紫紺の瞳を持つ、青年

それが二人の父、レイスⅡアークだった。

「ほんとう！？やったあ！」

無邪気に笑うクロスに、レイスは苦笑した。

「けれどクロス、剣稽古のほうはまだまだです」

「う・・・剣、うまくつかえないんだもん」

「なにになに、なんのはなし？」

ててて、と外から走ってきたのは金色の髪に紫紺の瞳を持つ幼い少年。
年。

「貴方たちは二人一緒に丁度いいですね」

「？、なんで？とうさん、なんのはなし？」

「クロノスは剣ばかりで料理が出来ず、クロスは料理は出来ても剣がまだまだで

つまりあなたたちは二人で補い合って丁度いいのではないかという話です」

その言葉に二人はむー、と眉間に皺を寄せる。

「とうさんの基準はきびしすぎだよ・・・いたっ!」

クロノスが物申すと、レイスは笑顔ででこぴんをした。

「私は>メイズくのように優しくないですよ」

そう言いながら手際よく調理を進める父

「いいじゃないか、二人で一人だと思えば」

苦笑交じりに呟いて、4人で暮らすにしても豪勢な家に入ってきたのは

銀色の長い髪に赤い瞳の、>母く。

「奥さんは甘やかしすぎですよ」

「あ! かあさん! 今日はケーキ、うまく焼けたんだよ!」

ててて、と走っていった母に抱きつくクロス。

「そうか、それは楽しみだな偉いぞクロス、でもおまえは剣稽古もしなくてはダメだ」

「えー・・・」

「アーク家の人間たるもの、剣を扱えないのは恥でしかないぞ?」
しゃがんでクロスに目線を合わせ、母はくすくすと笑う。

頭を撫でてくれる母に、クロスは瞳を閉じて幸せそうな笑みを浮かべた。

「いつか守りたい者ができたときにも、無力を思い知るだけだしな」
「まもりたいもの?」

「ああ、そうだ。」

いつかおまえも誰かを守ることになるかもしれない、その時は強い男でいなければな」

「うん・・・?」

不思議そうに首を傾げるクロスに、メイズはもう一度苦笑した。

「とうさんー、おなかすいたよ」

「育ち盛りが二人も居ると大変ですね、作り甲斐があつていいですけど」

くすくすと笑いながら、自分の服を引っ張るクロノスを見下ろす父。

幸せな家庭の、幸せな一日。

それは永遠に続くものだ、子供なら誰しも思うのではないか。
「う……」

けれど、世の中にはそうではない子供も居るのだ。

夜、ベッドにもぐりこんだクロスは泣いていた。

突然やってくる不安

母と父が死んでしまふ、そんな不安

「クロス？」

不意に自室の扉が開いて、ドアの隙間から明かりが入ってくる。

「とうさん……」

「泣いているんですか？怪我をしたんじゃないですよ？」

傍まで歩いてきた父は酷く心配そうな顔をしていて

クロスは首を横に振った。

「つれてつちゃうんだ……」

「つれていく？」

「とうさんとかあさんを、赤い人くがつれてつちゃうんだ」

「――」

その言葉に、レイスは目を瞠った。

そして我が子に受け継がれてしまった力くに、顔を悲しみに歪める。

「とうさん、どこにもいかないよね？かあさんもクロノスも、ずっと一緒だよ？」

「大丈夫ですよ、ずっと一緒に居ます、だからもう眠りなさい」

優しく頭を撫でられると、なぜかすぐに眠たくなる。

「うん・・・ずっと、一緒・・・」

最後の一粒の涙が、頬を伝って落ちた。

だが>終焉<は、突然やって来た――

その日クロスは、剣稽古を終えて森の中を散策していた。

一応、木刀を持ったまま。

「やっぱり剣つてむずかしいや・・・」

まだ四歳のクロスにとって、剣は重く体力の消耗も激しく使い慣れない物。

いつもは木刀で稽古をしているが、たまに真剣を持つこともあった。

「あれ・・・?」

そんな時、普段自分と両親と兄しか居ない森の中に人影を見つけた
当然子供は好奇心が旺盛で、人影に向かって歩みを進める

好奇心と恐怖心の両方を抱きながら。

「・・・だれ?」

「・・・あら」

振り返ったその顔を見た瞬間、クロスの顔は強張った

ああ、この人は、>このヒト<は・・・。

薄い金色の緩くウェーブのかかった髪、そして

――>赤い瞳<。

「あ・・・」

「どうしたの坊や・・・?」

恐怖心がいつきに押し寄せてきて、クロスは後退り

けれど距離を埋めるように白いドレスの少女は一步步を進める。

「ああ・・・その瞳、>彼<に似た気配がするとは思ってたけれど、どうにも弱いと思ったら」

クロスと笑う少女の笑みが歪む。

「こないで!!」

距離を詰めてくる少女に恐怖を抱き、クロスは木刀を向けた。

だが、当然>彼女<が、こんなものに動じるはずもない。

「>大天使<が人間に堕ちるなんて、不愉快だわ

でもまあ、悪くないんじゃないかしら？」

「っ!!」

片手で木刀を握って、少女はもう片方の手で少年の顎を掴んだ。

「レイスの力を受け継いでいるようだし、>次代の大天使<に添えてあげるのも」

恐い。

何を言っているのかなんて当然幼いクロスには分からない。

「——でも、その>脆弱な肉体<は邪魔だわ」

とんと肩を押された瞬間、何が起きたのか分からなかった。ただ分かったのは、>心<が酷く遠くへ行ってしまったこと。

「クロス!!」

力なく、思考も無く、ただ周りの音を聞き、

それに応えるだけになってしまった少年の名を呼んだのは、>誰<だっただろうか。

水色と紫紺の色の違う瞳に、漆黒の神父服

>あのヒト<は>誰<だっただろうか？

「レイス、一足遅かったようね」

「エル!!クロスに何を・・・!!」

「貴方の>後継<にしてあげようとしただけよ、なにか問題があった？」

「・・・還しなさい、クロスの魂を・・・還せ!!」

レイスの背に純白の双翼が伸び、右手に光の槍を取る。

「レイス！クロス！——ッ!？」

後から走ってきた銀色の髪に赤い瞳の少女は、エルと呼ばれた少女を見て絶句した。

「なぜだ・・・なぜ、エルが・・・!？」

「メイズ、貴女はクロスを連れて逃げてください」

「・・・っ！来い！クロス!!」

手を引かれて、森の中を走る。

「かあさん!!クロス!!」

「クロロス、来い!!」

空いた手でクロノスの手を掴み、少女は森の中を走っていく。

「とうさんは!？かあさん!!とうさんは——」

「いいから走れ！後ろは振り向くな!!」

「フフフ・・・無駄よ？」

なぜ運命はかくも残酷なのか。

振り返れば右手を血で染めたエルが、立っていた。

「・・・クロロス」

腰にさしていた剣を抜いた母は、二人に背を向けてエルと相對する。

「後ろは振り向かず、クロスを連れて走れ」

「いやだ・・・いやだよ！かあさん!!」

「アークの血を継ぐ者だろう！怖気づくな!!」

振り返った母は、苦い微笑みを浮かべて言った。

「クロロス、クロス、おまえ達だけでも生き残るんだ」

——ああ、ほら、>赤いヒトくがつれていってしまっよ。

走った。

口の中に鉄錆の味が広がるほど走ったが
辿りついた先は無情にも崖の上だった。

「追いかけてこは終わりかしら？」

とんと背後にエルが舞い降り

クロノスは背後の崖の下に広がる湖を見下ろし

クロスを背後へ庇って、真剣を構える。

「あははははは！！兄弟愛だとも言うの！？人間もどきが！！」

「クロス・・・ごめんね、でもぼくは——」

どんつと体を突き飛ばされる。

体が宙に投げ出される感覚

そしてすぐに体が水に叩きつけられ

——クロノスの左胸から血飛沫が上がるのを水の中で見ていた——

（嫌だ・・・）

——とうさん、かあさん、クロノス・・・——

——ほら、>赤いヒトくがつれてしまった、みんな・・・

——脆弱であること、それが貴方の罪よ——

C14・P2「僕らは同じ罪を背負っていく」

ごぼごぼと気泡が水の上に向かっていく。

幼い少年の体はいつの間にか今まで見ていた>自分<と同じになり伸ばした黒い手袋をした手は光を反射する水面へ。

（嫌だよ、ずっと一緒だって言ったじゃないか・・・嘔吐き）

湖の底に足を着いたとき、目線の先に見知った神父服を見た。
そう、あれは――

（父さん？）

けれど青年はすぐに背を向けて歩き出してしまふ、闇の中へと――
（待って！）

急いで追いかけるけれど、水の中では上手く走れなくてその姿はすぐに闇の中へ消えていってしまう
そしてその瞬間、足を踏み外した

目下に広がるのは、ここよりさらに暗い、暗い水の中。

暗闇に水の波紋が広がる。

「なんのつもりだ、バルディエル・・・」

漆黒の剣を向けられ、>ユーフォリア<はじつと目の前の>兄<を見据えた。

「・・・おまえが居ると困るんだよ、だからしばらく眠っていてくれないか」

白に埋め尽くされた世界の大広間

足元をさらさらと水が流れ落ちていく。

「困る？」

「いい加減、僕の>本当の弟<を返してくれないか」

クロノスの表情は酷く辛そうで、けれど剣を構えたままだ

「僕はもう嫌なんだ、僕の・・・僕の>家族<を返せ!!」

漆黒の剣が白銀の剣を弾き、>俺<の体を切り裂く。

「っ・・・バルディエル・・・貴様・・・ッ!!」

「もうしばらく、水底で眠っていてよ・・・全てが整うまで」

体を突き飛ばされ、白い世界の底に広がる広大な湖に体が沈んでいく。

——クロノス？

恐らくこれは>ユーフォリア<の記憶だ。

落ちていく中見上げたクロノスは、>泣いていた<。

腕や足に幾つもの鎖が絡み、十字架に磔>はりつけ<にされる。

——>バルディエル<、裏切り者

——>クロノス<、一体何をしようとしているんだ？

同じであって同じではない二人の思考が重なった。

思考が闇に落ちていく。

そして

再びクロスの前に神父服の青年が現れる。

「——父さん？」

真つ暗な世界を一人歩いていく彼は、間違いなく記憶の中の父と一致した。

「待つてよ！なんで・・・!!」

なんでこの世界に居るの？

なんで立ち止まってくれないの？

なんで・・・

——はつきりしない視界の中

「・・・>あいつくまで死んだか・・・実感湧かねえな」

眠るクロスの横で、幼いクロノスと>叔父<が話していた。

「・・・クロスも眠りについて二年、起きるのかどうか」

シエルドの言葉に、クロノスは子供には似つかわしくない
今と大差ない動作で軽く肩をすくめた。

「>ユーフォリア<を封じてきたので、そろそろ起きるはずですよ」

？

（さっき斬られたとき、あれは時間枠で言えばこれより前の記憶なのか？）

「しかし、クロスが起きたとして一体どうすればいいんだ？

>心くを失くした状態で・・・心なんて直せるもんでも買ってこれるもんでもねえぞ？」

「そこなんですけど、きつとリーマ＝エルスレッド嬢ならできるんじゃないかなーっと」

「また突然だな、何してきやがった？」

「アハハ、なぐんにもしてないですよ？・・・いだっ！」

ぽかっ！と結構痛そうな音を立ててシエルドがクロノスの頭を叩く。

「無茶ばっかすんなって言うてんだろぅが」

「いたいなあ・・・」

不服そうにばやきながら、クロノスは眠っているクロスの手を握った。

「僕は>あいつくの下僕になるなんて冗談でも嫌だ

たとえ近い未来、クロスに殺されとしても

唯一再会できた弟を守りたいと思うのはおかしいですか？」

近くで見た紫紺の瞳は子供がするような瞳ではなかった。

「クロノス、一つ教えてやる」

「？」

「仮に誰かを助ける、守るとする、けどな・・・」

「一緒に良かったって言えなければ、救われた方は救われない」

「——大丈夫ですよ、クロノスはきっと僕を憎むだろうから」

「そんなこと、おまえの知ってる弟が望むと思ってるのか？」

「たとえ父親がどうしようもないクズ野郎でもおまえらの母親は俺の妹なんだぞ？」

「アハハ、父さんに関しては九割私怨じゃないですか叔父上」

——クロノス。

憎まれることを彼はわかっていた

それでいいと思っている

むしろ、そうでなくてはならない——

(・・・なるほど)

また暗い水の中に落ちていく

その中でクロノスは考えていた

(まだ何か裏で糸を引いているわけだ、ほんとに・・・>馬鹿兄<)
クロノスやリーマに恨まれ、殺されることを望む

そんな救いがクロノスにとって>救いくになると思っている

(馬鹿はぶん殴って目を醒まさせてやろう)

心の中で爽やかに微笑んで、兄をボコボコに殴ってやることを決意。
もし逆だったら、>おまえ<は>幸せ<になれるのか？

そんな簡単なことも分からないほど脳が壊れているんだ
テレビと同じ理論で殴れば直るかもしれない。

暗闇の中に、また神父服の人影を見つける。

立ち止まってくれないのはもういい加減理解した。
だから追いかけてようとしたのだが――

『クロス』

「――」

背後から聞こえた声に、足を止めた

振り返れば銀色の長い髪に赤い瞳の少女。

「……母さん……」

『もう、赦されてもいいじゃないか……。おまえは充分耐えた』

記憶の中と変らない、優しい母の微笑み。

『クロノスとおまえが殺し合う様なんて、私は見たくない』

「だけど、母さん……！！」

『そっだよクロス』

闇の中から見知った>兄<がゆっくりと姿を現す。

『僕だって君を殺したくなんて無い、君は違うのかい？僕を殺した
い？』

「クロノス……」

そんなわけが無い。

クロノスを殺したいからここまで来たわけではない。

『クロス、もう疲れただろう？一緒に行こう』

また四人で、>家族<で暮らそう？』

差し伸べられた母の手をじっと見つめる。

「……できないよ、俺は……。今の、俺は……」

先ほど兄をボコボコにしてやろうと決意したというのに
戦わなくていいと言われてしまえば脆い心は崩れてしまいそうだった。

記憶が確かなら、クロノスがエルについてるのは自分のせいだ
母と父が死んだのも、自分のせい。

『クロス、僕らより>彼女<が大切だとも言うのかい？』

顔を上げると、二人は酷く悲しそうな顔をしていた。

『リーマ嬢は家族でもなんでもないんだよ？それなのに、僕らより彼女が大事なの？』

「違う！！そうじゃない！！」

『じゃあ、なぜ>迷う<のさ？』

『迷うことなど無いだろう、クロス』

私達と共に行こう、それとも、エルスレッド家の姫のほうが大事か？』

「違う・・・違うよ、そんなんじゃない！！」

大事だとか、大事ではないとか

そんな簡単に測れることではないのだ。

——迷うのですか？——

再び背後から聞こえた声に振り返れば、そこには父が立っていた。

『クロス』

絶え間なく自分を呼ぶ声が聞こえる。

家族はもちろん大切だった、だけれど・・・>約束<した。
ずっと傍に居る、ずっと守り続ける。

——迷うことなどないでしょう？——

けれど彼女を選ぶことは、家族を・・・

——クロス、>真実の瞳<を受け継いだ者よ、迷うことはない——

「——？」

父も自分を責めるのだと思ったが
どうにも違う。

真っ直ぐに父の色の違う双眸を見れば、そこに迷いも偽りも感じられなかった。

——迷うことなどなにもないはずだ、クロス、貴方が>本当の家族
くならば——

ゆつくりと、背を向けていた母と兄へ視線を移す。

けれど

そこに居たのは>違ったく——

『あーあ、レイスのせいで台無しじゃない』

紅く焔のように揺らめく瞳

母の姿をしていた少女は——

「エル……」

『久しいわね、クロス「アーク」……あと少しで貴方も手に入るか
と思ったのに』

クロノスの姿をしていたモノは灰になって散った。

『本当に……レイス、貴方は最期という最期まで私に歯向かうの
ね?』

背後を見れば、父はまだそこに居た。

(え……?)

消えない、エルの創ったまやかしでもない
では……

「——父さん……?」

彼は何も答えず、ただクロスの瞳を真っ直ぐに見つめる。

『けれどねクロス「アーク」、私ならば本当に
兄と争わない未来を与えてあげられるわ、貴方はよく知っているで
しょう?』

「……」

——>違つ<

「・・・違つ」

思考すると同時に言葉は口から零れていた。

そつだ

よく思い出せば全てが>おかしい<。

瞳を閉じて、今までの記憶

小さなものも大きなものも様々な思い出の中から思い起こす

母は言つた

——『ああ、そつだ。

いつかおまえも誰かを守ることになるかもしれない、その時は強い男でいなければな』——

そんな母が、リーマを守ることを否定するようなことを言うだろう
か？

(違つ)

クロノスは言つた

——『僕は>あいつ<の下僕になるなんて冗談でも嫌だ
たとえ近い未来、クロスに殺されるとしても

唯一再会できた弟を守りたいと思うのはおかしいですか？』——

だから殴つて、目を覚まさせてやろうと思つた

そんな兄が、家族とリーマとどちらが大事ななどと聞くだろうか？

自分に殺されることを、覚悟しているあの馬鹿な兄が。
いや

馬鹿なのは、>自分<だろうか。

水色の瞳を開いてクロスは右手に白銀の剣を取つた

「エル、俺はおまえを・・・許さない!!」

暗闇を蹴って、白い服の少女

その腹に剣を突き刺す

『・・・まったく、貴方達は本当に・・・』

くすくすと笑いながら消滅したエル。

再び闇が世界を支配する。

振り返れば、父はまだそこに居た――

「とうさ・・・」

『クロス、大きくなりましたね』

微笑んだ父は今にも闇に吞まれてしまいそうなほど儚く
恐かった、消えてしまうのが。

「父さん・・・！」

『子供の面倒もロクに見れず、守りきることもできず』
暗闇を蹴って、父のもとへ走るけれど

距離は一向に縮まらないどころか、むしろ遠のいていく

「待って！父さん！！」

『不甲斐ない最低な父親かもしれませんが・・・安心しました』
違う

そんなこと・・・

「違う！！」

大声で叫べば、父は驚いたのか瞳を見開いた。

「違うよ、父さん・・・」

涙で視界が歪む

足を止めて、クロスは真っ直ぐに父の瞳を見つめて言う

「父さんは分かっていると思うけど、俺達は・・・家族が大好きな
んだよ」

『・・・』

きつと、どこまで走っても父との距離は縮まらない
なぜなら、自分と父は最早居る>世界<が違うから

『強くなりましたね、クロス』

微笑んだ父の体は、漆黒の神父服から闇に溶け始めていた。

『昔の貴方は泣き虫で、心配していたのに・・・杞憂だったようですよ
>彼女くに、感謝しなければなりません』

ゆつくりと、闇が父の姿を呑み込んでいく

「でも、父さん・・・俺に会えるなら・・・」

『クロノスはここまで来ることはできません、そしてあの子に私の声は届かない』

言おうと思ったことを先に言われてしまった

「そうだよ、父さんが俺に言われるまで会いに行かないわけない」
一寸瞳を閉じて

クロスは微笑んだ。

「俺達なら大丈夫だよ父さん、ありがとう・・・」

世界の境界を超えるなんて、いくら>大天使くだった父でも大変だったろう。

『さようなら、クロス・・・貴方達の幸福を祈っています』

「うん・・・」

消える間際に見た父は、昔のまま優しく微笑んでいた。

——ありがとう。

Chapter 15 - Period 1 「茨姫の悲劇」

日が昇り、少女は寝かされていたレイファリア城の客室から出る。結局、一睡もできなかった。

机にうつ伏せて眠っていたアリアは途中で起こし、別室で眠ってもらった

あの体勢でずっと眠っていたら辛いだろうと思ったのだが寝覚めが悪いのか夢現のアリアは別段なんでもないようだった。

「・・・」

そして結局、クロスは帰ってこなかった。

もう永遠に帰ってこないのではないか

最悪再び会う時には敵になっているのではないかそんな不安ばかりが心の内に渦巻いている。

「リーマ・・・」

ぽすんと姿を現したミストレスは、困ったような顔をしていたが

「きっとあの男は帰ってきますわ、だって、あのレイスの血を引いているのですもの」

「——あの人と、知り合いなの？」

十字架の上で会った、二人の父だという神父服の青年、レイス。

「先代の大天使ですもの、知っているに決まっていますわ」

それはもう神経が図太くて・・・死んだなんて、未だに信じられないくらいですわ」

「・・・そう」

「リーマ・・・」

沈鬱な表情のままの少女に、ミストレスが悲しげに眉を潜めたときだった——

カタカタとテーブルに置かれたカップや花瓶が震える。

「・・・なに？」

自分とよく似た気配を感じて、顔を上げた
死神の気配、ミストレスによく似た気配・・・

「まさか・・・」

バンツと扉を開けて階段を飛び降りて外へ向かう。
そして外に出た瞬間、一瞬意識が遠のきかけた。

「・・・」

「リーマ、無事でよかった」

>あれくは、なんだろうか

大通りに鎮座した巨大な犬・・・いや狼？の上に父の姿。

「父様・・・>それくは何ですか・・・？」

何もへったくれも銀色の毛並みの狼にしか見えないのだが。

「よっ・・・と」

トンツと石畳の上に飛び降りて、クロウは微笑んだ。

「僕の使い魔、アヌビスっていうんだ」

『主、この娘は？貴方と同じ気配がするが』

「話してなかった？僕の娘」

喋った、狼が喋った。

『なるほど、ミストレスを宿した契約者か』

狼の蒼い目に見下ろされて、居心地が悪い

というか、こんなファンタジック生命体（？）に遭遇するとは思わ
なかった。

飛び出して行ったリーマに続いて、ソウルやゼノン、アリアも外に
出てくる。

「陛下！」

ゼノンの声にクロウはにっこり笑った。

「やあ、久しぶり」

二階建ての家くらい大きい狼を前に、全員が複雑な表情を浮かべる。

「これは・・・歴史書に騙られているナイトメアの使い魔・・・ですか？」

歴史書に載っているのかとつっこみたかったがその前に、だ

「なぜ父様と・・・その、アヌビスと一緒に？」

「クロスⅡアークが離脱したようだから、ちょっと手伝おうかなと思つて

僕とナイトメアの>契約<はまだ続行しているからさ」なるほど。

ナイトメアはエルの破壊を求めている。ならば、クロウは応えなければならぬ。

「列車よりアヌビスのほうが速いしね、次はネジュラネシスだろう？ 乗りなよ」

「・・・乗って大丈夫なんですか・・・？」

恐る恐る近づくと、アヌビスはじつとリーマを見つめた。

『ミストレス、怖れる必要はない』

「・・・いや、やっぱり恐いわよ、ファンタジック生命体が目の前に突然出てきたら」

周りの店や家々など、完全に逃げる体勢でドアも窓も閉め切られている。

たまにカーテンの隙間から覗いている子供の気配がするが・・・叱られるのかすぐにその気配も消える。

『早く乗ったほうが良い、天使はいつ攻めてくるかも分からない』

銀狼は体勢を低くして、尻尾でぽすぽすと石畳を叩く。

「そうそう、だからみんな早くお乗りよ」

そう言つてクロウはひょいっと銀狼の首の上まで跳ぶ。

・・・どうにもこのファンタジック生命体とのフラグは折れないよ

うだ。

風のように過ぎていく景色、空は黄昏に染まり始めた。

「父様、リヴァールヴェールは大丈夫なんですか？」

銀狼の背の上、リーマが問うと

クロウは微笑んだ

「大丈夫だよ、ナイトメアの結界も張っているから」

やはり父は強い、自分より圧倒的に。

ぎゅ、と拳を握り締めて齒噛みする。

神をも超える力があれば、或いは父にも勝るのかもしれない。

けれども、ナイトメアに継ぐ＜最強＞と言われてきたミストレスを

リーマはまだ半分も使いこなせていない。

「リーマ、不謹慎かもしれないって分かっているけど

僕はリーマがミストレスと同化していなくて良かったと思ってる」

「？」

首を傾げるリーマに、クロウは微笑んで言葉を紡ぐ

「力は僕に劣るかもしれないけど、＜最期＞まで運命を共にしなくて済む」

「どういう意味、ですか？」

「きつと、この先リーマには今までの不幸を埋めるような幸福が待っているっていう意味」

悪戯っぽく笑って告げる父に、リーマはさらに首を傾げる。

「リーマまで死ぬ必要はない、死神と運命を共にするのは僕だけで充分だ。」

まあ、かくいう僕も充分すぎるほど幸せだけれどね」

つまりは、ミストレスと同化していたらリーマには＜死＞が待っていたということだろうか

変え様の無い＜絶対的な死＞が。

「父様、早死になんて許しませんよ？」

「分かっているよ、娘と妻を十二年も放置していたんだ、父として男として情けないからね」

父の言葉が死を暗示しているように聞こえて

許さないと言えば父は笑った。

「父様・・・」

父の黒い服の裾を握って、俯いたリーマは小さく問う

「・・・クロスは、帰って来ると思いますか？」

「帰ってこないなんて許さない、僕が居ないうちに一人娘を誑かしたんだから」

優しく頭を撫でてくれる手に、不安が溢れて零れそうになるのを耐える。

「・・・研究所に居た頃は・・・神を宿せば何もかも壊せると思っていた」

神を、自分を、環境を、世界を、全てを——破壊できる、と。

「でも・・・外の世界に出たら、守りたいものばかり増えて・・・」

「ぽたりと銀狼の毛に透明な雫が落ちる。」

「父様も、殺す気でいたのに——」

＜迷い＞の無かった過去の自分。

「それで・・・最期に、私はエルと共に亡ぶと思っていたのに——」
「こんなはずではなかった。」

リーマは、最強の・・・＜生きた殺戮兵器＞になるはずだったのだ

それが今、出会った全ての人々によりその運命は捻じ曲げられた

一度曲げられた運命が、多くの心や想いによって再び曲げられる。
「僕も同じだよ、最初の予定ではとくに死んでいるはずだった」
頬をするりと滑って、クロウの手がリーマの涙を拭う。

「でも周りがお節介とお人よしばかりで、僕の運命も変わった
だけど、＜人の想い＞というのも存外悪くないだろう？」

自分の手で涙を拭い、少女は頷いた。

人の想い、忘れていた心、穴の空いた心を塞いでくれたたくさんの
想い

まだ思い出せないことはある
捻じ曲げられた記憶もある

けれど今はつきりと分かるのは、過去の自分に無かったものが
今のリーマの内側には在るということ。

「＜あいつら＞ならきつと帰って来る

だからリーマ、君はあいつらを殴り飛ばす準備をしておいてあげれ
ばいいんだよ」

殴り飛ばせるように、この世界を守る

精神体では殴ることはおろか、会話さえできないから。

「はい」

微笑むリーマの一方

だいぶ離れたところに座っているアリアはただひたすらに俯いてい
た。

「……城に戻るのが恐ろしいか？」

ふとゼノンに声をかけられて、アリアは顔を少しばかり上げる。

「……おまえ、なんで知ってる」

小さく呟いたアリアに、ゼノンは軽く肩をすくめてみせた

「＜茨姫の悲劇＞は有名な話だ、探さずとも情報に引っかかる」

「……」

アリアは城でも周りに女しか置かない。

彼女に、＜茨姫＞に触れた男はその美しい手によって首が跳ぶ。
なぜか？

その理由は至つてありきたりで、そして、悲惨。

「・・・リーマが望むなら、私はどこへだって・・・行く」

「・・・そうか」

それ以上ゼノンは何も言わなかった。

二人のやり取りを眺めていたソウルだけが首を傾げる

＜茨姫の悲劇＞

そのタイトル自体は聞いたことがあるけれど

何があつたかまでは知らない。

ソウルが知っている情報は

ただアリアの母であつた王妃はアリアを産んですぐにく変死<した
ことくらいだ。

なぜ死んだのか、死因、そこまでは知らない。

茨姫の悲劇

彼女が内に抱えるものもまた暗く、救いの無い暗闇――

アヌビスに乗つてすぐ、あつという間にネジュラネシスに着いた。

空は黄昏に染まり、熱気が周囲に漂う。

「やつぱりいつ来ても暑いなあ・・・」

「そうですか？」

クロウは随分と着込んでいるからか、首元のマフラーを指で引つ張
った。

リーマは気温の変化に鈍感なため、そんなに暑さを感じないが

クロウとゼノン、出身地がレフィーリカの二人はここに居るだけで
辛そうだ

アリアは慣れているだろうし、ソウルもそんなに暑さを感じていな

いようだが。

「それはさておき、ここも素直に城に入れてくれるかどうか・・・」
「それ以前に父様、今はリヴァールヴェールの王なのに問題なんて起こしたら・・・」

マフラーから手を離して、ぱたぱたと手で扇ぎながら言うクロウに
リーマが思った言葉をそのまま伝えると

「それは大丈夫、僕には<魔眼>があるから」
「魔眼？」

首を傾げるリーマに、ゼノンが言葉を継ぐ

「ナイトメアの能力の一つだ、相手の思考を意のままに操れる」

「相手がただの人間ならね」

クロウの追加情報を受け取り

そんな能力まであるのかと思わず遠い目になりそうになる。

ナイトメアは一体どこまで万能の存在なのだろうか

いや、クロウはナイトメアと同化している、つまり<神>なのだからできるのだろうか。

「・・・行こう」

不意に、今まで後方に居たアリアが歩みを進める。

「大丈夫かい？アリア姫」

クロウの問いに足を止めたアリアは、俯いて再び歩き出す

「行くしか・・・ないんだろ」

そう言って。

——研究所に引き取られたのは、アリアにとってある種の<救い>でさえあった。

それまでの日々は、手術漬けの日々より地獄のようだったから。

<純潔>を失ったのは早かった

アリアは王子ではなく、<王女>だったから

<婿に入る>ことができない女など、この国ではゴミと同じだった
リヴァールヴェールに取り入る要素が無い<女>など
そう、人のカタチをした<ゴミ>

犯され、罵倒されるだけの、そんな毎日だった

最初はあつた感情も、どんどん消えていった

神と契約したわけでもなんでもない、ただ<自分を守るため>に感情が死んだ

だがそんな少女の前に白衣の悪魔が舞い降りた

代替品でもいい、最終的に<スクラップ>にされるのだとしても構わなかった

少女は迷わずその手を取った、この<淀んだ場所>から抜け出せるのなら

そして連れて行かれた先で、一人の少女に出会った

栗色の髪に新緑の瞳を持つ彼女はアリアにも友好的だった

他の被験体が全くとって良いほど感情を亡くしているにも関わらず

彼女は眩しいほど感情を持っていた

そんな彼女がアリアは恨めしかった。

彼女は名前をリーマ・エルスレッドと名乗った

それは忌まわしいリヴァールヴェール王家の姓

最初は、ただただその存在を拒絶していた

リーマは被験体の中でも栄誉ある<死神ミストレス>の被験体。

自分と同じ人間で女で、なぜこんなにも運命が違うのかと何度呪ったか分からない

アリアはこれといって特定の神と契約するための被験体ではなかった
使い捨ての<モルモット>としてやって来たのだ。

アリアはいつも彼女に罵詈雑言を返すか無視をしていた

悲しげに苦笑する彼女の隣には、いつもその幼馴染だという男が二人居た。

ミストレスの被験体で、人間にも恵まれて・・・
そこでアリアは思いついた

リーマを完膚無きまでに叩きのめしてやろうと。

そしてアリアはリーマと会話をするようになった

最初はただその心を痛めつけるために優しくしてやろうと思った

だけれど、彼女は純粹だった

純粹に「アリア」という存在を認め、「アリア」という「人間」と
会話をしてくれた。

それは存外心地よくて、楽しくて

報復しようという気持ちは数年で無くなっていったが
代わりに彼女を「独占したい」と思うようになった。

でも、彼女の隣にはいつも二人の男が居た。

アリアの「想い」は届くことなく

リーマはミストレスとの契約に成功し、代わりに記憶を失った

その後のリーマについてアリアはほとんど知らない

なぜなら、ネジュラネシスに送り返されてしまったから。

待っていたのは数年前と同じ日々だと思った、けれど・・・

押さえつけてくる男の力を、アリアは簡単に撥ね退けることができ
るようになっていた

今で言う「強化人間」の位置になっていたのだ

けれどリーマとはとても遠い位置

今のままでは隣に居られない、傍にさえ近づけない

「必要とされない」

願った、強く強く、力が欲しいと

そしてアリアの前に「守護神フィオラーレ」が降臨した

千の薔薇と穢れた血を対価に、アリアはフィオラーレと契約し――
――今に至る。

「アリア？」

城が見え始める頃、それまでずっと黙っていたアリアを心配してか
リーマが隣まで来て顔を覗き込んでいた。

「・・・大丈夫、なんでもない」

そんなリーマに笑みを返し、けれどその表情はまた沈む。

<力>を手に入れた、なのにリーマは<自分の物>にはならない
欲しいものはなんでも手に入れられるようになったのに
ただ一つ、<愛するもの>だけが手に入らない
望めば何にでも手が届くようになったはずなのに。
今は隣に居られるけれど、この先はどうだろう

この旅はいつか終わり、リーマはリヴァールヴェールが
それより遠いどこかに行ってしまう

その時、自分はまた孤独の空間に帰るのだろうか。

――そんなのは、嫌だ。

黒い感情が心の中で燦るけれど

時間は待ってなどくれずに王城まで辿り着く

「アリア王女・・・」

「退ける」

王女の姿を見ただけで兵士達の表情が強張る

一行は大人しく退けた兵士達の横を通り過ぎて城内に入っていく。

「ここは・・・何も無いのかしら？」

リーマが呟くとソウルが眉を顰めた。

「どうでしょう・・・<静か過ぎる>気がします」

そう言われればそんな気もする

初めて訪れた時はメイドの波に押されて城内を見るところではなかったが

今回はメイドどころか人一人居ない。

「・・・死人の匂いだ、一人どころじゃない」

不意にクロウが呟いた不穏な言葉に、全員が表情を変える。

この先には玉座の間しか無い。

刹那に響く女の悲鳴

静まり返った城内にはよく響き、リーマが先陣を切って走り扉を開けた

そこには――

「おや・・・エルスレッドの姫君じゃないか？」

薄い紫色の髪に青い瞳の男

その手には黒と血色が混じった剣。

「イレイン・・・」

アリアが名を呼ぶが、リーマは知らない名前だった

ただ、アリアとその男は容姿が似ていて

「アリアの実兄、次期国王のイレイン＝レグランドだ」

ゼノンの補足を得て彼がアリアの兄だと理解する。

しかしその男の周囲には

血と、死体。

「嫌な予感はいしたけど、まさかこんな展開になるとはね」

リーマの隣まで歩いてきたクロウが盛大に溜息を吐く。

「誰だ、おまえは？」

血に塗れて愉しそうに笑う青年はクロウが誰か分からないらしいつまり、少なくともく人間だ。

「皇国の王子、魔族の王子、そして花の都の姫君・・・と、ドブね

ずみが一匹か」

クロウをドブねずみとは・・・

命知らずだと思わず思ってしまうが、クロウは気にした風も無い。

「錚々たる面々じゃないか、一体ここに何の用だい？」

芝居がかった空気も好きではないが

何よりこの死体の山を築いた元凶だと思しきこの男は生理的に気に食わない。

「・・・この人達を殺したのはあんたで合ってるかしら？」

低いリーマの声に、イレインは笑った。

「そうだよ姫君、＜神＞が僕に＜力＞をくれたんだ」

「その力っていうのは、その＜魔剣＞でいいのかな？」

「なんだ、おまえは知っているのか」

リーマに向ける視線は優しく、クロウを見る目はゴミでも見るようなものだった

本当に本能から気に入らない男だと思ったがそれどころではない

「魔剣？」

魔剣と言えばクロノスが持っていた＜ダインスレイヴ＞しかリーマは知らない。

「まったくどうやって＜盗み出した＞のやら、まあ＜あの女＞なら造作も無いことか」

独り言のように呟いて、クロウはリーマに視線を移した。

「あれは＜魔剣レイヴアスティン＞、アーク家に伝わる＜禁忌の剣＞だよ」

「アーク家って・・・じゃあ、あれはヴァルゼドの？」

「そう、アークの血を引く者以外が持てばすぐに思考も心も乗っ取られてしまう危険物。」

九つの封印で封じられていて、それを解く鍵が無ければ手に入らないものなんだけど

・・・まあ、＜至高神＞には関係ないみたいだね」

至高神、つまりその物騒な危険物を危険人物に与えたのは・・・エル。

だとしても

「あなた、自分が誰を、何を殺しているか分かってるの？」

怒りが沸々と湧き上がってくる

唸るようなリーマの問いにイレインは左手の人差し指を頬に当てて考える仕草をした。

「何って、＜ゴミ＞だけど？」

「分かった、ぶん殴るわ！！」

もうこれは殴るしかない、そう思ったリーマを素早くアリアが制す
「リーマが殴るほどの相手じゃない、こいつは・・・この国は＜そ
ういう＞国だ」

国民は王族の奴隷、そして王族であろうと必要の無いものは＜ゴミ＞
よく知っている、嫌というほど。

「っ・・・！！力を手に入れるためならなんだってするっていうの
！？」

リーマの怒声に、いや、その言葉にイレインは眉を顰めた。

「姫君、君のように＜神＞を宿した者には分からないだろう

今まで言うことを聞くだけの玩具だったものが、突然自分より強い
力を得て報復をする

・・・ねえ、アリア？」

「・・・殺した理由は、それだけか？

綺麗事を言っな、おまえは＜殺したかった＞んだろ？＜母を殺した
>時のように」

話を振られたアリアは鼻で哂って言葉を返す

しかしその言葉に、リーマとソウルは瞳を見開く。

「おまえは本っ当に、嫌な女になったよアリア・・・昔は抗う力な
ど無いゴミだったくせに」

盛大に肩をすくめてみせる青年に、アリアは眉を寄せた
その時

ぱちぱちと手を叩く音が響く

「本当に、人間というのは欲深い生き物よねえ？」

イレインの背後から歩いてきた二人

クロノスと、エル。

「あんた達・・・!!」

リーマが声を荒げるのに対し微笑みで返して

エルは魔剣を握るイレインの手に小さな手を重ねる。

「調子はどうかしら？王子さま？」

「それはもう、万全ですくマイ・ロード」

今、マイ・ロードと言ったか

聞き間違いで無ければそう呼んだ。

「エル・・・どういうことよ」

少女が問うと、エルは長い髪を払ってくすりと笑う

「そのとおりの意味よ、この子は私のくお人形>になったの」

「なるほど、人間と人形のく境>が曖昧になっていると思えばそう
いうことか」

納得したようにクロウが呟く。

「あら・・・あなたも来ていたの」

「知っていたくせに白々しいよ」

さも知らなかったと言わんばかりのエルにクロウは盛大に溜息を吐
く。

「マイロード、あの男と知り合いなのですか？」

イレインの問いにエルは口元に手を当てて笑った。

「ええ、以前に私のお人形だったの・・・自我を持ってしまった手元を離れたけれど」

しかしどうやらこの状況を楽しんでいるのか、話す気は無いようだ。

「じゃあ王子さま、バルディエル、後はお願いね・・・」

イエス・マイロード

その単語が血の沼のようになった広間に木霊し

エルは薔薇の花弁になって消えた。

「・・・危なかったですね、クロヴィスさま」

こそつと小さく呟くソウルに、クロウは笑う

「言葉で伝えられても彼は信じないよ、今は僕の術中に居るからどうやらエルが話そうと話さなかうと結果は変わらないらしい。」

「ここまで来ちゃったんだねリーマ嬢」

同じようで違う魔剣を左手に取り、クロノスが晒う

「あんたには・・・絶対負けないって決めたから」

「ふうん？クロスもこっち側に来ちゃうかもしれないのに？」

そろそろ降参してマスターの玩具になったほうがいいんじゃない？」

「・・・」

クロノスの言葉に拳を握り締める

彼の言うことは現実になるかもしれない、けれど負けられない。

「はいはい、＜三流演技＞ご苦労様・・・ここは通してもらおうよクロノス」

右手に漆黒の大鎌を取るクロウを一瞥してクロノスは軽く肩をすくめてみせる

「嫌だなあ、僕の剣はあなた相手じゃ吸収されてしまうじゃないですかあ

だから、あなたの相手はこ・い・つ」

クロノスに突き飛ばされたイレインは心底不満そうな表情だったがすぐに愉悦を含んだ笑みを浮かべる

「僕はアリアを超える・・・下賤な女ごときに、この僕が劣るなんてありえないんだ」

レイヴアステインはすでにイレインの右手と同化し始め
紅い不気味な光を纏っていた。

「陛下、あいつの相手は私がします」

ふと、後方に居たゼノンがクロウの肩を押しつけてクロノスの前に歩み出る。

「・・・大丈夫？知っているだろうけどあの剣で斬られた傷は治らないよ」

「承知の上です」

水のように半透明の双剣を取り出し構えるゼノンにクロノスは笑みを深めた。

「へえ・・・ゼノン王子が僕の相手をしようって？まあ吊り合わないまでは言わないけど」

僕はそこの国の騎士団長なんかより剣技は秀でているほうだと思うよ？」

「おまえの技量は認めている

この世で剣技のみでおまえに勝つのはクロスだけだろう」

「知ってて挑むの？愚かだね・・・愚者は死ぬのが運命くさだめ
>だよ」

ダインスレイヴを取り出すクロノス

「ゼノン！」

リーマがゼノンの服の袖を掴んで制止するが、ゼノンはリーマを一瞥して頷いた。

「大丈夫だ、おまえはアリアについていてやれ」

何が大丈夫なものか

ダインスレイヴの邪気はクロスにしか浄化できないとリーマは知っている

そしてそのクロスは今ここに居ないのだ

「リーマ、ゼノンは言い出したら頑固だからこつちにおいで君も迎えに行つたくらいだから頑固なことは知ってるだろう?」
呆れたように言いながらクロウがリーマを引き寄せる

「アリア、おまえは役立たずだとばかり思っていたがエルスレッドの姫君を連れて来てくれるなんて、おまえも中々気が利くようになったじゃないか」

「リーマはおまえなんかに触れさせない」

アリアは右手に血色の槍斧を取り出して構え

「ほんとに・・・こういう輩が多いからエルスレッドの姫は苦労するんだろっね」

「いい迷惑だわ」

クロウの呟きに溜息を吐きながら、リーマも右手に漆黒の大鎌を取り出す。

「・・・大変ですね、エルスレッドというのも」

武器こそ無いものの、ソウルも臨戦態勢だ。

「みんな酷いんじゃない? 一人に四人がかりなんてヒーローのすることじゃないよ?」

クロノスが笑い、幾人もの天使が舞い降りる

「まあ、やっぱりこうなるよね・・・ソウル王子、君は僕と天使退治をしよう」

「え・・・あ・・・は、はい!」

予想通りだったのかクロウはソウルを引っ張って天使達の方へ向かう。

「リーマ、君はアリア嬢についてあげてね」

「・・・分かりました」

イレインという男は本当に受け付けられないがアリアの隣に立つ

「リーマ……」

「大丈夫よアリア、私も一緒に戦う……でも……」
あなたは大丈夫なの？

その問いを言う前に、察したのかアリアが答える。

「大丈夫……あの男は……殺すしかない」

実の兄であろうに、そこまでアリアが言い切る理由をリーマは知らない

ただ、アリアが深くイレインを憎んでいること

そしてイレインは人間を人間と思っていない、殺すことに躊躇いさえ無い

そのことだけは馬鹿でも分かる。

そして、五人の戦いは始まった――

C15・P2「茨姫の悲劇」

——その頃

クロスはく叔父>のもとを訪れていた。

いつものように執務室で書類と格闘している叔父は

クロスがやって来ても何食わぬ顔でまた書類にサインをしながら言葉

「元に戻ったんだな」

「・・・叔父上」

「もうく父上>じゃないのか、まあ仕方ねえよな・・・でも、くメイズ>もきつと喜ぶ」

漸く顔を上げた叔父は苦笑していた。

「その体には慣れたか？」

「まだ前線で戦うには支障が出そうです」

「そうか、お前なら真っ先にリーマのところに行くと思ったが」

「足手まといの男なんて最悪のポジションにはなりたくないの」

「まあそりゃそうだな」

そう、新しい肉体は二人別々だった力が一つになったために、まだ感覚を掴みきれないのだ。

治癒術はクロスの予想を超える早さで回復してしまい体に負担がかかり剣も体も軽すぎて上手く制御できない。

できることならすぐにでもリーマの元へ行きたかったが、行っても醜態を晒すだけだと分かっている

それに、クロスも知らない能力が幾つか追加されているようだ。

「・・・クロス、クロノスを止められるか？」

「勿論、あの馬鹿は無理矢理にでも目を覚まさせます」

「・・・そうか・・・なあ、今のおまえにはく未来>が視えるのか？」

「結末までは・・・でも、＜光＞が視えます」
一旦言葉を区切って、クロスは片目を手で覆う。

「強い光、けど・・・その代償に多くの命が散る
眩しすぎる光は全てを焼き尽くす、けれど＜闇＞がそれを阻み＜救
済＞へ導く

闇と交わった光は温かく、＜新たな世界＞を孕む・・・俺に視える
のはこれくらいです」

「リイリアと同じこと言うんだな」

つまり、アルトメイデンと同じ言葉。

「俺の力では比喩的なものしか見えませんが・・・

この世界が終わり新たな世界が生まれるのか、それとも・・・この
世界がリーマの存在によって＜更新＞されるのか」

「なるほど、な・・・どっちにしても＜現状維持＞じゃあないって
ことか」

シエルドは一旦ペンを置いて溜息を吐いた。

「おまえ達には＜重荷＞ばっか背負わせちまったな・・・おまえに
も、クロノスにも、リーマにも」

けれど、こうなることは大方予想もしていた。

誰かが世界を変えなければならぬ、シエルド達はその基礎を築い
ただけだ

いつかく人柱＞を立てなければならぬ、それが今だった。

「つつてもな、予想外のこともあったんだ」

「？」

リーマは殺戮の道に堕ちて行くと思っていたし、リイリアの軟禁は
続くと思っていたし、何よりクロウは死んでしまふと思っていた
彼がまだ正気を僅かであろうと保っていたことは＜奇跡＞に等しい、
それ以前に今、彼がこの世界に存在すること自体因果律に逆らっ
ている。

「リーマは、＜最後＞どうすっかな」

頭の後ろで腕を組んで伸びをする叔父の呟きに、クロスは苦笑を零す。

彼女はきつと最良の未来を選び取ってくれる、＜今のリーマ＞ならばきつと。死に場所を探していた彼女は闇から救われたのだから。

剣と剣がぶつかり合う音が大広間に響く、水のような剣と闇のような剣。

ゼノンは能力と剣を半々に使い分け、クロノスの攻撃を氷柱や水球で確実に弾いていく、それはいつそ見事なほどに。

クロノスとゼノンは五分の戦いを繰り返していた。

「ここまでできるとは、正直思ってたよ。能ある鷹は爪を隠すって本当なんだね」

「・・・おまえは一体何を望んでいる？」

魔剣を氷の壁で弾き、ゼノンは色の違う双眸を細めてクロノスの紫紺の瞳を見据える。

「・・・何、って？僕が望んでいるのは＜この世界の崩壊＞だけだよ、リーマ嬢に聞いてないの？」

「おまえの行動は妙だ、エルに従っているようにも見えるが＜違う＞、おまえは＜別の何か＞を目的として――」

ヒュツと魔剣の切っ先が喉元を掠り、薄っすらと紅が浮かぶ。

「五月蠅い、僕の目的なんて関係ない。実際僕は君達の目の前で人間を殺しているし、クロスとリーマ嬢を殺そうとした、＜僕と戦う理由＞はそれだけで充分だろ」

「フン、分かりやすい奴だ。まるで＜子供＞だな。＜本題＞に触れられては困る、だが＜私を殺すこともできない＞、＜表面は大天使

で居なければならぬ」

ゼノンの言葉に、クロノスは一寸口をつぐみ、けれどすぐに嘲笑を浮かべる。

「――僕は随分美化されたものだ、それじゃあまるで僕が君達の＜手助け＞をしているようじゃないか」

「違うと言えるか？ おまえは今の一閃で私の首を落とせたらう」

「・・・」

心底忌々しそうに眉根を寄せ、紫紺の瞳でゼノンを射るように睨み付けるも彼には効果など無い。

そんなこと、気にかけないでもらいたかった、敵だと思われるように振舞っていたつもりだし、実際自分＜クロノス＞は＜敵＞だ。

――敵、なのだ――

迷って欲しくない、だから、

「――」

罅迫り合いに持ち込み、クロノスは小声でゼノンにのみ聞こえるように小さく言葉を紡いだ。

律儀な彼は恐らく拒否しないだろう。

「・・・難儀だな、おまえは。いいだろう、＜私は＞黙っていてやる」

そして予想通り彼は苦笑を零してその言葉を受け入れた。

「感謝するよ」

魔剣を弾き飛ばし、ゼノンは珍しく感情を表に悲しそうに微笑んで剣を下げる。難儀な運命だ、本当に。

「ああ、痛いなあ、もう！」

そしてクロノスは剣を弾かれた衝撃で手首を傷めたとさも言いたげに大袈裟なく演技＞を再開し、左手をぶんぶんと振る。

「ちょおつと甘く見すぎてたかなあ」

「なんだ、大天使というのも存外弱いものだな」

今はその演技にのってやる、だがクロスもリーマもクロノスを放っておかないだろう、それでも＜抵抗＞するのならどうなるかは分か

らないが。

「ま、僕の仕事はここを守ることじゃないしく、<もう一人の魔剣使いサン>が頑張ってくれることに期待して撤退させてもらうよ」
ちらりと、リーマとアリア相手に戦っているイレインを一瞥してクロノスは面倒くさそうに踵を返す。

「じゃーねゼノン王子、首から腐らないことを祈つといてあげるよ」
いつぞやと同じように、クロノスは何枚かの羽を残して消えた。

本当に、難儀な男だ。

「まったく、みんな不器用だね。僕が言えたことではないけどさ」

「？」

そんな様子を眺めながら無限に湧き上がる天使を捌いていたクロウが苦笑と共に呟くのを、理解していないソウルは不思議そうに見上げる。

その刹那、ソウルの背後で紅が散った

「余所見は駄目だよソウル王子」

「え・・・あ・・・！」

気づかないうちに背後を取られていたのだろうが、ソウルの<影>が刃となって天使を切り裂いたようだ。

「すいません・・・」

ソウルはクロウのことをあまりよく知らない、クロウが失踪した十三年前と言えばソウルはまだこの世に居るか居ないか。ただ、母から話は聞いていた。

母は言っていた、<自分はあまり彼に好かれていない>と。

他には、メルヴィングが妹のように可愛がっていたリイリアを放つて失踪した<酷い男>だとか。でも、茶化すようにそう言う時、母は決まって悲しそうな顔をしていた。

酷い男、馬鹿な男、そう罵るように言いながらも、その言葉の中に悪意は感じられなかった。

「・・・君はさ、皇国に生まれたことを後悔している？」

「え？」

クロウの大鎌捌きと能力の使い方は見事なもので、ソウルが手を下すまでもなく天使は次々に灰へと変わっていく。

そんな中、クロウは視線だけをソウルに向けてそう問うた。

「皇国の皇子に生まれなければ、君はもつと＜自由＞に生きていられたろう？辛いことも人並みだったろうし、メルヴィングは死ななかつたろうし、＜契約者＞になんてならなかった」

「・・・それは」

それは、確かにそうだ。だが、運命はソウルをこの道へ導いた。

「・・・ほんとはさ、僕は君に＜そんな未来＞を与えてあげることだったできたんだ」

「？」

首を傾げるソウルにクロウは言葉を続ける

「ゼノンがレフィーリカに逃れるとき、一緒にメルヴィングも連れて行ってしまえば良かった、そうすれば君は幸せに暮らせたのかもしれない」

そうなのかもしれない、そうしたら両親と兄と幸せに暮らしていたのかもしれないけれど、

でも、なんとなくだけれど、それはきつと...

「それはきつと、母様が拒んだのではないですか？」

「メルヴィングが何か言っていた？」

記憶の中に埋もれていく母の面影を思い出しながら頷く

「母様はロー...断罪神ローレントリンドに導かれて世界の崩壊が始まる以前から旅をしていたと聞いています。」

母様は自分が死ぬことも承知の上だったのではないかと...、ローレントリンドの対価は＜最も愛する者の命＞ですし、

もし母様がレイファリアを捨てていたら、ローレントリンドと契約できる人間が居たのかどうかも定かではないですし...それに＜過程＞がどうであろうと母は自国を愛していました」

「…よく分かつてるんだね、少し安心したよ」

次々に灰に変わっていく天使達の中で、クロウは苦笑してソウルを一瞥し、そんなクロウを見上げてソウルは首を傾げる。

「でも…陛下は…母をあまり好いていなかったと聞いていますが」
「そうだよ、今も大嫌いだ」

「――」

ズキリと心臓が痛んだ、母は決して悪事のために動いたわけではないのに、レイファリアの人間にもレフィーリカの人間にも疎まれて…

「大嫌い、だよ。最期まで気に食わない人間だった。レフィーリカに来ればいい、人間の身でこれ以上何をするんだって<あの時>言ったのに」

我が強くてとうとう<最期まで有限実行>で死んでいった、そして言葉通り<君>という契約者を生み出した」

「？」

なんだかおかしい、嫌っていると言う割りにその言葉に悪意を感じない。

<あの時>というのはゼノンがレフィーリカに逃れた時のことだろうか？だとしたら、クロウはその時に母も共に逃がそうとしたことになるが、それに母が最期まで頷かなかった、と。

「口を開けば喧嘩になってしまっし、最期まであいつは僕を子ども扱いしていたし、普段はいい加減なくせにここぞというところでは尋常じゃなく頑固だし…」

少しだけ悲しそうな表情で、クロウは大鎌を振るいながら言葉を続ける

「ゼノンの誤解だけでも解いていけばいいものを、<責任>だとか訳の分からないことを言っつて結局何も言わず墓場まで持って行ってしまうっし。」

責任なんて他人が勝手に決めることなんて無視すればいいのに、むしろ普段一番<責任>と無縁なのは<メル>だったのに……

とりあえず僕はずっと嫌いだよ、君の母親が。蘇って弁解でもして

くれたら<嫌い>ではなくなるかもしれないけど」

なんとなく、だけれど。

クロヴィスはメルヴィングを本気で嫌っているわけではないのだろうと思った。彼はきつと母を救いたかったのだろうが、母は最期までそれを拒んだのだろう。

(…なんて、いうのかな)

頭の中で考えながら、横合いから斬りかかってくる天使の刃を避けてその心臓を抉る。

クロウの中でそれは、<勝ち逃げ>されたような気持ちなのだろうか。

母は最期までクロウの手を拒んで、更に死んでしまつて最早口を利くことすら叶わない。それが<救いたかった相手>ならどれほど歯痒いことだろうか。

全てソウルの推測にすぎないけれど、

「…陛下は、優しいですね」

苦笑と共にそう呟くと、クロウは不思議そうにソウルに視線を向けた。

「本音を言えば、僕は未だに分からないことばかりなんです…。母様の望みは<至高神の破壊>、だと思ふんですが…

もし、契約者として生きる道のほかに<幸せに暮らせる未来>が隣にあつたなら、僕はどちらを選んでいたんだろうと…正直、分からないです。

母様には生きていてほしかったし、<兄様>に疎まれる今を<幸せ>とは思えません」

ずっとずっと、<檻の中>に居た。

ソウルは<悪魔>の血を引く<忌み者>として扱われてきた、それでも母が居れば幸せだった。

地位なんて要らなかつた、母と一緒に生きていられるその時だけが唯一記憶に残る<幸せな時間>だった。

けれど母は死に、代わりに与えられたのは地位だった。それからの日々は辛いことばかりで、茨の中で過ごしているようで

いつの間にかソウルは周囲の感情に敏感になっていた。独り、ずっと母の面影を追って檻の中で膝を抱えていた。

どんなに優しくされても、その瞳の奥にある侮蔑や憎悪をずっと感じていた。いつの間にか優しさなんて信じられなくなっていた。

自分は誰にも必要となんてされなくて、邪魔で、無力で、——<何もできない>

ずっとそう思ってきた、そう思えば楽だった。自分には何もできないから何もなくていい、と。

だから、皇国にリーマがやって来た時、一番最初に彼女と敵対した時、<不思議>だった

ソウルは<契約者>だ。<だから必要>で、殺すわけにはいかないのだとしても、ソウルのために怒ってくれた人はリーマが<二番目>だ。

別に、ソウルがどれだけ銃で撃たれようと彼女には関係ないはずだ、けれど彼女は<生きている>のだと怒鳴った。

契約者として必要だから、と言われればそれ以上でも以下でもないのかもしれないけれど、少しだけ<嬉しかった>。

「……リーマさんも陛下もお優しいです」

「……そう」

場違いにも微笑んで言うソウルに、クロウも苦笑を零す。

<メルヴィング>、彼女は本当に有限実行だと再確認しながら。

紅い槍斧と漆黒の剣がぶつかり火花を散らす、

「アリア！おまえは自分の立場を勘違いしているようだな、僕に武器を向けるなんて！」

「黙れ！貴様の言葉など聞きたくも無い！」

「ハハッ！言う割には手が震えているようだが？」

「――」
アリアには一体何があったのだろうか、なぜそうまで怯えるのだろうか、なんて当然考えても分からない。

罅迫り合いになった二人の、イレインの背後に回りこんで大鎌を振りかぶるが

イレインはアリアの槍斧を弾き飛ばし、振り返りざまにリーマの大鎌を受け止める。

「姫君、貴女にこのような無粋な武器は似合わないよ？」

「気つ色悪いわねあんた！」

思わずぞわつとしてしまった、生理的に受け入れられない男だ。

悪態を返しながらも剣を弾き飛ばそうと試みるが、相手のほうが力が強く一旦後退し舌打ちをする

魔剣の影響か、エルが何かをしたのか、両方が……いずれにせよ厄介な敵。

距離を取ったリーマから反対側のアリアに視線を移し、青年は至極面倒くさそうに言う

「アリア、＜無駄＞なんだよ。おまえが何をしたって何も変わらない、い、

おまえが＜ゴミ＞で、婿に入ることできない女、＜役立たず＞で、あまつさえ＜人間の成りそこない＞だということは変わらないんだよ、分かるだろう？」

「――」

兄、などと認めたくは無い男の言葉にアリアは奥歯を噛み締めて槍斧を握る手に力を込める。

「僕はおまえの勝手を黙認してきたし、＜ゴミなりに＞も＜着飾らせてやっていたろう？その何に不満があった？」

正直、この男の言葉は心を蝕む。

ずっとなんとなく、永遠に続くと思っていたくあの頃＞を思い出す。

「僕のやっている事とおまえのやっている事は一体どう違う？同じ

<人殺し>だろう?」

分かっている、そんなこと、そんな、事――

思考が、心が闇に染まっていくような、空洞が空いたような虚しさと腹の中を這いずるような憎悪に心が吞まれていこうとした、時――

「違うわ」

凜とした少女の声が響いた。

「あんたさつき、ご立派にもく自分は人間>で<アリアは人間じゃない>って言ったわね、じゃあそれを<認める>とするわ

そこで……<私達>は<契約者>、<人間にすら成り損ねた存在>よけど殺すために生まれてきた私達と、<守るべきものを抱えて生まれてきた>あんたは立場が違う

そしてその守るべきものを殺しているあんたは、アリアとは比べられないくらいに<下衆野郎>よ」

リーマの言葉に顔を上げれば、彼女はアリアに、アリアだけに微笑んでいた。

「な……!」

イレインは一瞬余裕の表情を崩したが、すぐに左手で髪を掻き揚げて小さく溜息を吐く

「悲しいなあ……姫。しかし貴女はご存じないだろうがアリアも自分勝手に人間を殺していたよ?この国の民をね」

「そうらしいわね、じゃあく誰がそうさせた>のかお聞かせ願えるかしら?」

にこにこ作り物の笑みを浮かべて問うリーマに、ついにイレインは表情を崩した。

「っ……!優しくしてやれば、つけあがるなよ、<女の分際>で……!」

「アリアは女だから婿に入れない、だから価値が無い、なんて……笑わせるわね。

私はあんたみたいに気色の悪い男を選ぶほど目が腐っちゃいないわ

よ、＜男なのに役立たず＞なのね、なんの利用価値があるのかしら？
そうそう…アリアはね、私の＜親友＞なの、＜特別な人＞なのよ、
少なくとも……あんたなんかよりずっと大事で大切な子なの！」

最後の一言はだいぶ声のトーンを落として吐き捨てた、そして予想
通り相手が激昂し

「貴様アアア！！」

横薙ぎに斬りかかってくるのをリーマはひょいっと跳んで避け、同
時にその剣を軽く蹴ってアリアの傍まで跳ぶ

「——リーマ」

「大丈夫？アリア」

そつと手に手袋をしたリーマの手が触れ、伝わる低い体温にアリア
の瞳から一粒雫が零れ落ちた。

「？」

「泣かないの。大丈夫だから、ね？」

頬を伝うものが何か分からず、必死にごしごしと拭いているアリア
に苦笑してリーマがそつと涙を拭う

＜泣いている＞？

涙…なんて、何年…何十年ぶりだろうか、最後に流したのがいつだ
ったかさえ覚えていない。

「許さない、許さんぞ貴様ら！僕を馬鹿にして！！」

「つたくしつこい男ね！ナルシストで粘着って最悪よ！？——？」

剣を構えるイレインに対し

大鎌を手に立ち上がろうとするリーマの服を、軽く掴んだ。人間を
殺せば罰を受ける、なら…

「あいつは、あいつは私が殺す」

誰より大事で、何より愛している彼女の手にあんな男の血がつくのは
嫌だった。

「アリア——！」

リーマの声を振り切って、槍斧を握り直し、斬りかかって来る男に

向かって勢いをつけて槍斧を振りかぶる

上から切り下ろす形になったが、男はそれを魔剣で受け止め……しかし

「な、に……!？」

「これで終わりだ……!」

何もかも、これで——終わりだ。

槍斧は魔剣を押し折り、男の体を斜めに切り裂く。断末魔の音が響き渡り、それでも男は……床に倒れてなお魔剣に手を伸ばそうとする
「く、そ……こんな、こんなこと、あり……えない!僕が、こ、んな……女、ごときに……うぐ……!」

その手を踵で踏みつけて、アリアはもう一度槍斧を振り上げる

「あ、アリア、や、め——!」

「死ね」

叩きおろされた槍斧、しかし胸と腹の間に鈍痛が走った——

「——」

「お、まえも……道連れ、に……」

見れば、投げつけられた魔剣が体を貫通していた——

「アリア……!」

その後のことは、よく分からない、ただ最後に、悲鳴のようなリーマの声が聞こえた。

C15・P2「茨姫の悲劇」(後書き)

2011秋更新ラッシュ終了(・ω・)。ここでいっきに文章の感じが変わってるのは間が空いてるからです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0859m/>

ELYSION

2011年11月10日17時59分発行